

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第150集

森町睦実の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-1

善正庵遺跡 (第二東名取2、取3地点)

奥戸綿遺跡 (第二東名No.108地点)

戸綿殿ノ谷遺跡 (第二東名No.109地点)

鴨ノ前遺跡 (第二東名No.111地点)

鴨山古墳群・鴨山遺跡 (第二東名No.111地点)

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

日本道路公団 静岡建設局

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第150集

森町睦実の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-1

善正庵遺跡 (第二東名取2、取3地点)

奥戸綿遺跡 (第二東名No.108地点)

戸綿殿ノ谷遺跡 (第二東名No.109地点)

鴨ノ前遺跡 (第二東名No.111地点)

鴨山古墳群・鴨山遺跡 (第二東名No.111地点)

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

日本道路公団 静岡建設局



森町南部を西から望む



各遺跡の出土遺物

序

本書は、第二東名高速道路建設に伴って、20世紀のおわりから21世紀のはじめにかけて実施した、静岡県周智郡森町域の埋蔵文化財調査の記録、および町域の各遺跡の発掘調査報告書である。第二東名高速道路は森町の南部を東西に走り、いくつもの丘陵と谷を横断している。

森町は、弥生時代の墳墓・古墳群・中世墓・窯跡を中心に多くの遺跡が知られている。一方、調査する機会がないために、遺跡の存否が知られていない、もしくは正確に把握できていない場所も少なくはない。後世においても、多くの遺跡の存否を確認し、内容を把握するような機会は決して多くはないであろう。今回の発掘調査事業が、多くの遺跡を知ることができるだけでなく、各地の歴史、各時代の人々がいかに生きていたかを知り、そして将来に伝えることにつながる貴重な機会となると確信している。

森町睦実には、太田川の東岸から東にのびる谷がある。この谷部は、周辺と比べても発掘調査の機会が少ない地域であった。今回の調査では、その谷の南縁部の遺跡がいくつか発見・調査され、丘陵裾部や小谷部に、古代・中世の人々の生活跡をみる事ができた。この事によって、文献資料等によってしか知り得なかった古代・中世における睦実地域の様相が、より明確なものに近づき得ると考える。水田・畑・茶畑・山林と山裾の集落がとけ込んだ風景が、第二東名高速道路の建設などによって新しい環境に変わることになる。しかし、今回の調査をとおして、また今後の調査・研究の進展によって、より古き時代の古代・中世の睦実の風致も、鮮明になっていくものと期待する。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、日本道路公団静岡建設局、森町教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。また、現地作業、資料整理に関わった調査員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表す次第である。

平成16年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例 言

1. 本書は、森町域（以下、森地区）における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、下にあげた静岡県周智郡森町内の各遺跡の発掘調査報告書である。

善正庵遺跡（第二東名取2、取3地点）：睦実字善正庵
奥戸綿遺跡（第二東名No108地点）：睦実字奥戸綿
戸綿殿ノ谷遺跡（第二東名No109地点）：睦実字殿ノ谷
鴨ノ前遺跡（第二東名No111地点）：睦実字鴨ノ前
鴨山古墳群・鴨山遺跡（第二東名No111地点）：睦実字鴨山

2. 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位にて実施している。森地区では本書が1冊目であり、よって「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 森町-1」とした。

3. 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、日本道路公団静岡建設局の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、森町教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4. 各遺跡の確認調査・本調査および資料整理の期間は以下のとおりである。

善正庵遺跡	確認調査	平成12年1月～2月
	本調査	平成12年4月～5月
奥戸綿遺跡	確認調査	平成11年5月・12年1月
	本調査	平成12年5月～8月
戸綿殿ノ谷遺跡	確認調査	平成11年8月・12月
	本調査	平成13年1月～3月
鴨ノ前遺跡	確認調査	平成11年10月～11月
	本調査	平成12年1月～2月
鴨山古墳群・鴨山遺跡	確認調査	平成11年10月～11月
	本調査	平成11年12月～12年1月
各遺跡資料整理・本報告書作成		平成13年4月～14年3月、平成15年11月～16年3月

5. 調査体制は第1章に別記した。なお、本書に報告した遺跡の調査担当者は下記のとおりである。

下の遺跡に関わる確認調査	：竹原一人、児玉 卓、深田雅一
善正庵遺跡	本調査：長尾一男
奥戸綿遺跡	本調査：長尾一男
戸綿殿ノ谷遺跡	本調査：児玉 卓、佐藤 淳
鴨ノ前遺跡	本調査：児玉 卓、田村隆太郎
鴨山古墳群・鴨山遺跡	本調査：児玉 卓、田村隆太郎
各遺跡資料整理・本報告書作成	：長尾一男、田村隆太郎

6. 執筆は第1章第1節1を及川 司、他を田村隆太郎が行った。

7. 各遺跡における助言・協力者については各章文末に別記した。

8. 各調査で実施した委託事項および委託先は、各章文中に記した。

9. 現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真の撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は当研究所写真室が実施した。

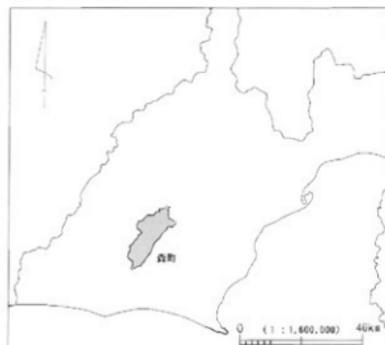
10. 金属製遺物のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
11. 各調査の概要は、当研究所・他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
12. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
13. 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

凡 例

本書の記述については、以下の基準に従っている。

1. 座標は、平面直角座標Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2. グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの1辺は10mとし、アルファベット（A～）と算用数字（1～）を用いてその位置を表示している。東西方向が西から1・2…、南北方向が南からA・B…と設定している。
3. 方位は、1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。
4. 本書で使用した遺構種類の表記は次のとおりである。遺構の番号は、遺構種類ごとの番号とし、調査区ごとには分けていない。なお、周溝墓・古墳の場合は固有に、もしくは下記とは別に○号周溝墓、○号墳と表記した。
 SB：竪穴住居跡 SP：小穴 SA：小穴列（柵） SF：土坑
 SD：溝状遺構 SR：自然流路 SX：不明遺構
5. 遺物番号は、挿図に掲載したものについて、種類・出土遺構・挿図の別に関わらずに遺跡ごとの通し番号を付している。
6. 本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。なお、土器の断面と識別の関係は、以下のとおりである。

磁 器
 陶 器
 須恵器
 その他



森町の位置

目次

巻頭函版／序／例言／凡例

第1章 総論	1
第1節 調査に至る経過	3
1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯	3
2. 現地調査の体制	5
第2節 森町の位置と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	8
第3節 確認調査	13
1. 確認調査の対象地点	13
2. 確認調査の方法と経過	15
3. 各地点の概要	17
第4節 本調査	32
1. 本調査の方法と経過	32
2. 本調査の概要	33
第5節 資料整理	36
1. 資料整理の体制	36
2. 資料整理の方法と経過	37
第2章 善正庵遺跡 第二東名取2、取3地点	39
第1節 位置と環境	41
1. 位置と地理的環境	41
2. 歴史的環境と調査歴	42
第2節 調査の方法と経過	43
1. 発掘調査の方法	43
2. 発掘調査の経過	44
3. 資料整理と報告書作成	44
第3節 調査の成果	45
1. 概要	45
2. 遺構と遺物	48
第4節 まとめ	55
第3章 奥戸綿遺跡 第二東名No108地点	57
第1節 位置と環境	59
1. 位置と地理的環境	59
2. 歴史的環境と調査歴	59
第2節 調査の方法と経過	60
1. 発掘調査の方法	60
2. 発掘調査の経過	61
3. 資料整理と報告書作成	61
第3節 調査の成果	62
1. 概要	62
2. 遺構と遺物	64
3. 出土遺物の数量	80
第4節 まとめ	82

第4章 戸締殿ノ谷遺跡 第二東名No.109地点	85
第1節 位置と環境	87
1. 位置と地理的環境	87
2. 歴史的環境と調査歴	87
第2節 調査の方法と経過	88
1. 発掘調査の方法	88
2. 発掘調査の経過	89
3. 資料整理と報告書作成	89
第3節 調査の成果	90
1. 概要	90
2. 遺構と遺物	92
3. 出土遺物の数量	99
第4節 まとめ	100
第5章 鴨ノ前遺跡 第二東名No.111地点	103
第1節 位置と環境	105
1. 位置と地理的環境	105
2. 歴史的環境と調査歴	106
第2節 調査の方法と経過	107
1. 発掘調査の方法	107
2. 発掘調査の経過	107
3. 資料整理と報告書作成	107
第3節 調査の成果	109
1. 概要	109
2. 弥生時代の遺構と遺物	112
3. 古代・中世の遺構と遺物	116
4. 出土遺物の数量	134
第4節 まとめ	136
第6章 鴨山古墳群・鴨山遺跡 第二東名No.111地点	141
第1節 位置と環境	143
1. 位置と地理的環境	143
2. 歴史的環境と調査歴	143
第2節 調査の方法と経過	144
1. 発掘調査の方法	144
2. 発掘調査の経過	144
3. 資料整理と報告書作成	144
第3節 調査の成果	146
1. 概要	146
2. 遺構と遺物	148
第4節 まとめ	155

図 版

抄 録

図版目次

巻頭図版

- 1 森町南部を西から望む
- 2 各遺跡の出土遺物

図版

善正庵遺跡

- 図版1 1 北西からの遠景
2 I区全景(西から)
- 図版2 1 II区全景(東から)
2 SF08・SF09遺物出土状況(北東から)
- 図版3 1 SF01(北から)
2 SF02(東から)
3 SF03(東から)
4 SF05(東から)
5 SF04(北東から)
6 SF06(東から)
- 図版4 SF09出土 壺
I区表様 壺
I区出土 かわらけ
I区出土 摺鉢

奥戸綿遺跡

- 図版5 1 調査区全景(北西から)
2 調査区北西部土層断面
3 枕列(西から)
- 図版6 1 SR01~SR14(南西から)
2 SP02~SP05(南東から)
3 SP06~SP09(東から)
- 図版7 1 SR01遺物出土状況(東から)
2 SR02遺物出土状況(北から)
3 SR01(東から)
4 SR02・SR03(北西から)
5 SR15(北西から)
6 SR08→SP01の切り合い関係
- 図版8 主要出土遺物
- 図版9 灰釉陶器・山茶碗(碗) 1
- 図版10 灰釉陶器・山茶碗(碗) 2
- 図版11 山茶碗(小碗)
山茶碗(墨青)
- 図版12 山茶碗(小皿)
- 図版13 大平鉢
瀬美産陶器
伊勢型鍋
- 図版14 青磁
白磁
銅鏡

戸綿殿ノ谷遺跡

- 図版15 1 北西からの遠景
2 調査区全景(北から)
- 図版16 1 小穴・土坑群(北から)
2 SR01(北西から)
- 図版17 SP23出土遺物
SR01出土遺物
包含層出土遺物-1
- 図版18 包含層出土遺物-2
- #### 鴨ノ前遺跡
- 図版19 1 東からの遠景
2 I区全景(北東から)
- 図版20 1 II区全景(北東から)
2 SF05土器棺墓検出状況(南東横から)
3 SF05土器棺墓検出状況(南東上から)
- 図版21 1 竪穴住居跡群(南東から)
2 SB01~SB03(南東から)
3 SB02竈石組(東から)
- 図版22 1 SB04・SB05(南東から)
2 SB06(東から)
- 図版23 1 II区南半部小穴群(北東から)
2 SP44遺物出土状況(南東から)
3 SP93遺物出土状況(南西から)
- 図版24 SF05土器棺(蓋)
SF05出土土器片
- 図版25 SF05土器棺(身)
台付甕接合部
包含層出土遺物
- 図版26 SD02出土土器片
竪穴住居跡出土遺物
小穴出土遺物
- 図版27 SX03出土遺物
包含層出土遺物-1
- 図版28 包含層出土遺物-2
- #### 鴨山古墳群・鴨山遺跡
- 図版29 1 北東上空からの遠景
2 北東からの遠景
- 図版30 1 調査区全景(東から)
2 I区全景(南西から)
3 II区全景(南西から)
- 図版31 1 1号墳(南西から)
2 1号周溝墓(南西から)
3 SD01遺物出土状況(東から)
4 SD01遺物出土状況(北西から)
- 図版32 出土遺物

挿 図 目 次

総論

第1図	森町の地質	6
第2図	森町南部の地形と大字	7
第3図	周辺の遺跡分布図	11
第4図	第二東名の路線と対象地点	14
第5図	各地点対象範囲1	18
第6図	各地点対象範囲2	20
第7図	各地点対象範囲3	22
第8図	各地点対象範囲4	23
第9図	各地点対象範囲5	25
第10図	各地点対象範囲6	30

善正庵遺跡

第11図	本遺跡の位置と周辺の遺跡	41
第12図	本調査範囲とグリッド配置	42
第13図	基本土層	45
第14図	I区遺構配置	46
第15図	II区遺構配置	47
第16図	SF01～SF07	49
第17図	SF08・SF09	51
第18図	SD01～SD05土層断面	53
第19図	出土遺物	54

奥戸橋遺跡

第20図	本遺跡の位置と周辺の遺跡	59
第21図	本調査範囲とグリッド配置	60
第22図	基本土層	62
第23図	遺構配置	63
第24図	SR01断面	65
第25図	SP02～SP09・SR01～SR12	66
第26図	SR01遺物出土状況	67
第27図	SR01出土遺物-1	69
第28図	SR01出土遺物-2	70
第29図	SR02遺物出土状況	71
第30図	SK02出土遺物	72
第31図	SR03～SR08出土遺物	73
第32図	SR15	74
第33図	SK15出土遺物	75
第34図	包含層出土遺物	77

戸橋殿ノ谷遺跡

第35図	本遺跡の位置と周辺の遺跡	87
第36図	本調査範囲とグリッド配置	88
第37図	遺構配置	91
第38図	調査区土層断面	91
第39図	小穴・土坑群およびSP23出土遺物	93
第40図	SF01・SF02	94
第41図	SR01	95
第42図	SR01出土遺物	95

第43図	包含層出土遺物	97
------	---------	----

鴨ノ前遺跡

第44図	本遺跡の位置と周辺の遺跡	105
第45図	本調査範囲とグリッド配置	108
第46図	遺構配置	111
第47図	調査区土層断面	111
第48図	SF05	112
第49図	SF05出土遺物	113
第50図	SD06および出土遺物	114
第51図	包含層出土遺物(弥生時代)	115
第52図	SB01・SB02・SB03	117
第53図	SB01出土遺物	117
第54図	SB04および出土遺物	118
第55図	SB05および出土遺物	119
第56図	SB06	120
第57図	SA01	122
第58図	SA02	123
第59図	SA03～SA09	124
第60図	SP44・SP03遺物出土状況	125
第61図	小穴出土遺物	125
第62図	SX01	127
第63図	SX02	127
第64図	SD01・SX03	128
第65図	SX03出土遺物	129
第66図	包含層出土遺物(古代・中世1)	131
第67図	包含層出土遺物(古代・中世2)	132
第68図	平安時代の竪穴住居跡例	137
第69図	吳茂宮(社)関連の碑に二例	138

鴨山古墳群・鴨山遺跡

第70図	本遺跡の位置と周辺の遺跡	143
第71図	本調査範囲とグリッド配置	145
第72図	遺構配置	147
第73図	鴨山1号墳および出土遺物	148
第74図	1号周溝墓および弥生時代の遺物	151
第75図	SD03・SD04・SF01	152
第76図	攪乱出土鉄器	153
第77図	攪乱出土土師器	154

図版目次

総論	
第1表 森地区現地調査の体制	5
第2表 周辺の遺跡一覧表	10
第3表 対象地点一覧表	14
第4表 確認調査実施期間	16
第5表 本調査実施期間	32
第6表 資料整理の体制（平成15年度まで）	36
善正庵遺跡	
第7表 小穴一覧表	48
第8表 遺物観察表	54
奥戸綿遺跡	
第9表 小穴一覧表	64
第10表 遺物観察表（土器）	78
第11表 遺物観察表（銅銭）	80
第12表 種類別土器片出土数	81
第13表 中近世陶器 種類別破片出土数	81
第14表 山茶碗 産地・部位・器種別破片出土数	81
第15表 山茶碗 産地・部位・器種別個体数算出	81
戸綿殿ノ谷遺跡	
第16表 小穴一覧表	93
第17表 遺物観察表	98
第18表 種類別土器片出土数の計数表	99
鴨ノ前遺跡	
第19表 小穴・土坑一覧表	121
第20表 遺物観察表	133
第21表 種類別土器片出土数の計数表	135
第22表 山茶碗 産地・部位・器種別個体の計数表	135
鴨山古墳群・鴨山遺跡	
第23表 遺物観察表（土器）	154
第24表 遺物観察表（鉄器）	154

写真目次

総論	
写真1 土器棺罩の実測 (Na113地点I期 文殊堂遺跡)	33
写真2 墳丘の検出 (Na121地点II期 林古墳群)	34
写真3 横穴墓の検出 (Na113地点I期 宇麻横穴群)	34
写真4 掘立柱建物跡の検出 (Na112地点 中屋敷遺跡)	35
写真5 土器の復元	37
写真6 土器の実測	37
写真7 台帳の作成	37
写真8 図面のトレース	37
善正庵遺跡	
写真9 善正庵池と南戸綿の谷を北東から望む (第二東名建設中)	43
鴨ノ前遺跡	
写真10 現存する南戸綿の加茂神社	139

第1章 総論



第1節 調査に至る経過

1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯

複雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付で日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所(平成6年2月設置)と県教育委員会文化課による「第二東名関

埋蔵文化財連絡調整会議¹が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公園静岡建設所は平成8年7月1口をもって、日本道路公園静岡建設局に改組されている。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公園静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo94地点、浜北市大平のNo136地点、同市四大地のNo137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地に於いて確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公園に対し、平成9年1月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付で日本道路公園静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打ち合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公園静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付で協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で、森町地域における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する21地点を調査対象にした。発掘調査の実施については、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所があたることとし、用地買収が進み、一部調査実施が可能となった平成9年度に、No114地点、No115地点、No118地点の確認調査から開始した。

2. 現地調査の体制

森町域（以下、森地区）の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、平成9～15年度に実施した。その体制は、第1表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）においては、平成11～13年度では本事業担当の課を設けて対応した。さらに、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多くの調査に工区単位で対応した。なお、森地区は掛川工区内の一地区である。

掛川工区内の掛川地区・森地区・豊岡地区の担当は、森町一宮に設置した森現地事務所を拠点として各現地調査を実施した。なお、各遺跡の調査担当者については、各報告書の例言にあげることにする。

また、現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正・整理・収納、出土遺物の注記・接合・復元・収納、遺構所見・遺跡概要の整理）については、森現地事務所にて、現地調査と並行して実施した（以下、基礎整理）。

各現地調査・基礎整理には第1表以外にも多くの者が参加した。

第1表 森地区現地調査の体制

		平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度
調査研究部	所長	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠
	副所長	池谷和三		山下 晃	山下 晃		飯田英夫	飯田英夫
	常務理事兼総務部長	三田村昌昭	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	桑田徳幸	桑田徳幸	桑田徳幸
	次長							鎌田英巳
	総務課長	初鹿野英治	杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
	総務係長		田中雅代					
	会計係長	杉田 哲	杉田 哲					
	副主任				鈴木秀幸	鈴木秀幸		
	主任			鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博
	部長	石垣英夫	石垣英夫		佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平
	次長	栗野克己		佐野五十三	及川 司	栗野克己 及川 司	栗野克己	栗野克己
	次長心得		佐野五十三				中嶋祐夫	中嶋祐夫
	担当課長	渡藤 治	遠藤喜和	及川 司	及川 司	及川 司	鎌原修二	足立順可
	工区主任		平野 徹	鎌原修二	加藤理文	加藤理文		
主任調査研究員	遠藤喜和	鎌原修二	長尾一男		松井文孝			
調査研究員	佐藤清隆	竹原一人	竹原一人	長尾一男	田村隆太郎	田村隆太郎	白鳥直樹	
	平野 徹	西田光男	西田光男	中村正宏			河合 敦	
	竹原一人	長尾一男	長尾一男	児玉 卓			小木 充	
	長尾一男	富樫孝志	深田雅一	横山哲之			田村隆太郎	
		木崎道昭	佐原哲之	佐藤 淳				
		梶栗良久	児玉 卓	田村隆太郎				
			梶栗良久					
			溝口彰喜					
			佐藤 淳					
			大谷宏治					
保存	主任調査研究員	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二				
処理	調査研究員	青木 修						

第2節 森町の位置と環境

1. 地理的環境

森町は、北緯34度50分・東経137度56分付近の静岡県西部に位置し、北側は同じ周智郡の春野町や川根町、東は掛川市、西は天竜市や豊岡村、南は袋井市に面している。総面積は133.84km²である。

静岡県西部は、南の太平洋側には平野部が広がり、北の内陸部は中部山岳地帯から続く山地・丘陵地となっている。森町は、両者にまたがる範囲を町域としている。すなわち、森町の北部は赤石山地から南にのびている山地・丘陵地であり、南部は太田川流域の平野部や一宮川流域の平野部が広がっている。

丘陵は、新生代古第三紀に海底で堆積した砂や泥で形成された層が、プレートの移動による地殻変動によって陸上に現れたものと言われており、泥岩・砂岩層や砂層によって形成されている。第二東名の路線は、丘陵地の南部に広がる掛川群層の砂層の分布範囲と泥岩層の分布範囲の境界あたりとなっている。

一方の平野部は、その泥岩層や砂層の土台の上に、太田川や一宮川を主とする各河川が運んだ土砂が、厚く堆積することによって形成されている、いわゆる沖積平野である（森町史編さん委員会1997）。

森町域の丘陵地、特に南部においては、大きく3つの丘陵に分けて捉えることができる。1つ目は、太田川の東側で、北の霊山や黒岩山から南西の袋井市春岡にのびる丘陵である。この丘陵の頂上筋が、町域の東境界となっている。東側には原野谷川が流れ、両河川に挟まれた南部では、丘陵の東西幅が1.5km前後となっている。2つ目は、太田川の流れる平野部と西側の一宮川が流れる平野部に挟まれた丘陵である。この丘陵は、八形山から南西の森町中川にのびる丘陵で、やはり南部では丘陵の東西幅が1km前後となっている。3つ目は、一宮川が流れる平野部の北に広がる丘陵である。この丘陵は、本宮山から南の一宮川流域にのびる丘陵で、町域の西境界となっている。この丘陵の西には敷



第1図 森町の地質

地川が流れ、さらにその西は磐田原台地へ続く丘陵地になっている。3つの丘陵とも、太田川や一宮川だけでなく、それらの支流や小支流の河川によっても侵食を受けている。したがって、特に平野部に面する丘陵斜面は急で、細長い尾根状の丘陵と幅の狭い谷部が連続する地形になっている。

平野部には、太田川や一宮川をはじめとする多くの河川が流れているが、これらは南の袋井市や磐田市域で合流し、太田川として太平洋に流れ出ている。森町の中央を流れ、また町域内で最も大きな河川である太田川は、平野部の東寄りを流れている。ただし、常にこの場所を流れていたとは

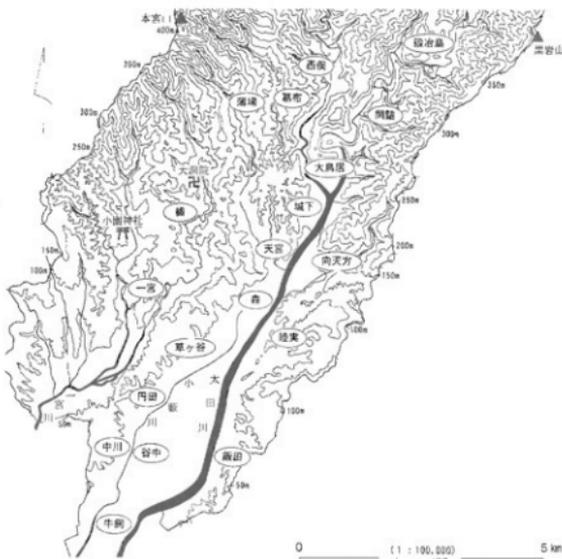
限らず、時には平野部の西側、現在小藪川が流れるところを太田川が流れていたこともあったと想定することもできる。

森町の大半は丘陵地で、多くはスギやヒノキの植林や自然林が占めている。ただし、丘陵地の南部はやわらかい砂層が分布するため、また気候上の都合もあり、広く茶畑に利用されている。平野部は水田が広がり、人家の多くは平野部の周縁、丘陵の裾や自然堤防上と思われる場所に立地している。

現在、天竜派名湖鉄道が森町を東西に横断しているが、古くから掛川から三ヶ日、さらに豊橋に至る東海道筋街道として森町を東西に横断する道が存在していた。また、南北方向には、「秋葉道」や「塩の道」と言われた道が存在していた。さらに、太田川は木材等の運搬に使用されていた。以上から、交通の要所となっていたと想定することができる（森町史編さん室他1999）。

森町の特徴の1つに、神社や寺院が比較的目につくことがあげられよう。一宮の小宮神社は、奈良時代の記録（『続日本後紀』）にもある古代より由緒ある神社として、現在も崇敬の対象となっている。また、森の石松の墓があることでも知られている大洞院は、遠江における曹洞宗の中心的存在の一つであった。神社や寺院、さらに秋に行われる森の祭り等が重んじられている町でもある。

古代・中世には、森町域は概ね遠江国周智郡に属し、荘や郷、もしくは公領によって区分されていたことがわかっている。『和名抄』によると、奈良時代においては、森町から袋井市北部までを遠江国周智郡とし、小山・山田・依智・大川・田碗の5つの郷に分かれていたようである。現在は、22の大字に分けられている（森町史編さん委員会1997、森町史編さん室他1999）。



第2図 森町南部の地形と大字

2. 歴史的環境

ここでは、森町域に所在する遺跡全体について、時代ごとに概観する。各遺跡調査に関わるより詳細な周辺の歴史的環境については、遺跡ごとの報告で記述することにする。

旧石器時代・縄文時代

森町では旧石器時代の遺跡は発見できていない。最も古い時期の遺跡は、天宮の天宮遺跡である。太田川西岸の河岸段丘上に立地し、縄文時代中期前葉の土器片が採集されている。

縄文時代の遺跡は、調査したものが少なく、多くは遺物が採集されたことで知られる遺跡である。丘陵に立地する場合が多く、分布は森町の南部に限らない。北部の山地でも遺跡は存在している。近年では、低地の遺跡も発見されている。飯田の坂田北遺跡は、太田川左岸の丘陵寄りの谷部に立地している。縄文時代後期の遺跡で、流路やクリ・クルミの根株等と、多量のドングリが残された貯蔵穴が発見された。木の実の保管・管理、アクスキ等の作業場所としての性格が考えられている（森町史編さん委員会1998）。縄文時代に限らず丘陵立地の遺跡が多いのは、発見されやすいことにも起因しているのかもしれない。今後、坂田北遺跡のような、低地の遺跡が発見される可能性もあると思われる。

弥生時代

北部の山地・丘陵地には、この時代の遺跡は発見されていない。稲作のため、山地での営みが途絶えたという考えが一般的ではある。ただし、明確な弥生時代の低地の遺跡もほとんどない。森町で、明確に弥生時代の遺跡として判断できるのは、南部の丘陵に立地する遺跡が大平である。また、多くは後期の遺跡である。広範囲の調査が比較的少ないことに起因するのかもしれないが、明確に弥生時代の水田や畑といった生産域が発見された調査事例はない。

中期の遺跡としては、飯田の西平子遺跡、向天方の中芝原遺跡、草ヶ谷の葛藩ヶ谷II遺跡、一宮の善千鳥遺跡、中川の井谷ノ谷遺跡がある。調査された井谷ノ谷遺跡や善千鳥遺跡では、土器棺墓が発見されている。また、中芝原遺跡出土の土器も、土器棺のものと推測されている。以上、中期の遺跡で性格がわかるものは、全て土器棺墓である。また、中期の遺物・遺構は各遺跡において主体的ではない。

後期の居住域が発見された遺跡としては、飯田の東平子遺跡や西平子遺跡、向天方の青木I遺跡や中芝原遺跡、中川の奥谷田I遺跡をあげることができる。西平子遺跡は、後期後半から古墳時代前期の集落跡で、比較的広い丘陵上平坦部に、建て替えを含めて20軒以上の堅穴住居跡が検出されている。一方、奥谷田I遺跡は、榎せ尾根に住居跡数軒が検出されている。比較的規模の大きい西平子遺跡の集落に対して、奥谷田I遺跡は小集落の様相を示すものと位置付けることができる（森町教育委員会1998）。

後期の墓域もいくつかあげることができる。向天方の青木I遺跡や中川の奥谷田I遺跡では、方形周溝墓が発見されている。一方、飯田の峯山台状墓や一宮の善千鳥遺跡では、周溝による区画と盛土による高まりをもつ墳丘墓が発見されている。峯山台状墓では、土器棺1基を含めて7基もの埋葬施設が設けられていた。その他、土壌墓や土器棺墓が発見されている遺跡も多い。

遺物の大半は弥生時代後期の土器であり、大井川から天竜川の地域に多く出土する菊川式土器が主体である。なお、円田の大城戸遺跡では、山陰系土器も出土している。金属器としては、飯田の如仲庵遺跡出土の銅剣6点などがあげられる。如仲庵遺跡の銅剣に伴う遺構の発見はなかったが、埋葬施設が存在した可能性が高い（森町史編さん委員会1998等）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は弥生時代と同様、南部の丘陵地に集中する。

前期（3～4世紀）の集落跡として、飯田の西平子遺跡で弥生時代から引き続く住居跡群が発見されている。一宮の七軒町遺跡では中期（5世紀）前半の土器が出土している。遺跡の性格は明らかでないが、丘陵の裾部に立地しており、集落跡の可能性も考えられる。飯田の如仲庵遺跡では、7世紀代の住居跡2軒が発見されている。以上、古墳時代の集落跡・居住域が発見された遺跡は少ない。

古墳時代の遺跡の大半は墓域、古墳・横穴墓である。森町では、中小円墳がその大半を占めるが、一宮の堤田古墳、円田の東園古墳、森の西脇1号墳の3基が、前方後円墳として確認されている。これらは一宮川と太田川に挟まれた丘陵に分散して位置する。築造時期を示す遺物の出土はないが、いずれも墳長40m以下の小規模墳であることから、中期（5世紀）末から後期（6世紀）の築造と想定されている。西脇1号墳は一部調査され、後円部から横穴式石室が確認されている（静岡県教育委員会2001）。

時期のわかる古墳の内、最も古いのは中期（5世紀）後半の古墳である。1928年に鏡と刀が出土したという中川の井谷ノ谷古墳群では、その後の調査で、2号墳が木棺直葬を埋葬施設とした5世紀末の円墳であることがわかっている。中川の奥谷田1遺跡では、5世紀後半の土器群と鉄斧・刀子が出土した木棺墓が発見されている。墳丘をもつ古墳以外の墓制として珍しい事例である。

草ヶ谷の菖蒲ヶ谷古墳群や飯田の崇信寺古墳群によると、6世紀前半の古墳にまで、木棺直葬の埋葬施設が採用されていることがわかる。陸奥の逆井塚古墳は直径20m程度の円墳と考えられ、独立的に立地している。土取り等によって破壊され、鏡、馬鐙や鈴杏葉等の馬具、鹿角装刀子、銅鏡、玉類が採集されている。6世紀前半代の古墳で、石材の存在が知られないことから、埋葬施設は木棺直葬か粘土槨であると考えられている。

後期の古墳に代表的な埋葬施設として、横穴式石室があげられる。森町で最も古い横穴式石室の古墳としては、飯田の崇信寺10号墳をあげることができる。崇信寺10号墳は、直径22mの円墳で、6世紀中葉の築造と考えられている。石室から各種武器や金銅装馬具等が出土している。

6世紀後半以降になると、横穴式石室の古墳は各地域に増える。天宮の山郷1号墳、橘の陸屋峠1号墳、飯田の院内乙墳・甲墳や本堂1号墳、草ヶ谷の菖蒲ヶ谷8号墳、円田の文殊堂古墳群、一宮の石仏ノ坪古墳等をあげることができる。院内乙墳では金銅装馬具や裝飾付大刀、院内甲墳では金銅装馬具や裝飾付大刀、文殊堂古墳群からは鏡や金銅装馬具が出土している。記録によると石仏ノ坪古墳からも金銅装馬具や裝飾付大刀が出土したようである。

7世紀中葉以降、8世紀前半まで横穴式石室の古墳の築造や追葬は続いていたことがわかっている。飯田の北谷田古墳群や日当古墳、森の円明寺古墳群や蓮華寺古墳群等、また以前より形成されてきた古墳群の中にも、この時期の古墳がみられる。ただし、豊富な副葬品をもつ古墳は認め難くなる。

一方、6世紀後半代からは横穴墓も展開する。一宮川流域や太田川の西側では、一宮の山下横穴群、岡海ノ横穴群、善千鳥横穴群、円田の久保ノ谷横穴群等の横穴群が知られている。太田川の東側では、特に飯田の地域で数十基の横穴墓が知られ、飯田の観音堂横穴群や谷口横穴群では、広い範囲が調査されている。6世紀末に契機となる横穴墓が築造され、7世紀前・中葉に築造が増大、範囲も拡大する。7世紀後半になると激減し、8世紀代に終焉する。追葬は7世紀後半に多くみられる。観音堂本堂1号横穴墓は7世紀中頃の築造で、裝飾付大刀や金銅装馬具が副葬されていた。

5世紀後半以降の古墳からは、土師器等とともに須恵器が出土する。多くは他地域から入手したものであろうが、森町にも須恵器を生産したであろう窯跡がある。森の森山古窯では、7世紀中頃の須恵器や窯壁片が散布している。観音堂横穴6号横穴や円明寺3号墳、菖蒲ヶ谷8号墳から出土した須恵器の中に似た製品があり、これらに供給したことが指摘される（森町史編さん委員会1998等）。

奈良時代

既述したとおり、古墳や横穴墓の築造・追葬は8世紀代まで続く。古墳時代の墓と明確に切り離せる存在ではないので、古墳時代の遺跡として既述したが、これらは奈良時代の一墓制として捉えることもできる。古墳や横穴墓以外での奈良時代の墓については、明確には知られていない。

奈良時代の遺跡は数が少ないものの、南部に集中することが指摘できる。一宮の西峠水戸ヶ谷東峠遺跡、谷中の寺ノ谷遺跡、向天方の中芝原遺跡では、奈良時代の須臾器が出土もしくは採集されている。ただし、明確な奈良時代の遺構は未発見で、遺跡の性格は明確ではない。いずれも丘陵上の遺跡であり、古墳が存在した可能性もある。門川の北垣遺跡は丘陵地ではあるものの、平地が広がっている。奈良時代の遺物が採集されており、奈良時代の集落遺跡が存在している可能性がある。明確な奈良時代の居住域としては、飯田の坂田北遺跡をあげることができる。太田川東岸の低地に立地し、発掘調査によって溝状遺構・土坑・杭列とともに5棟の獨立柱建物跡が発見されている。太田川を挟んだ西岸には門田の上川原遺跡が存在し、奈良時代の須臾器とともに陶馬が採集されている。

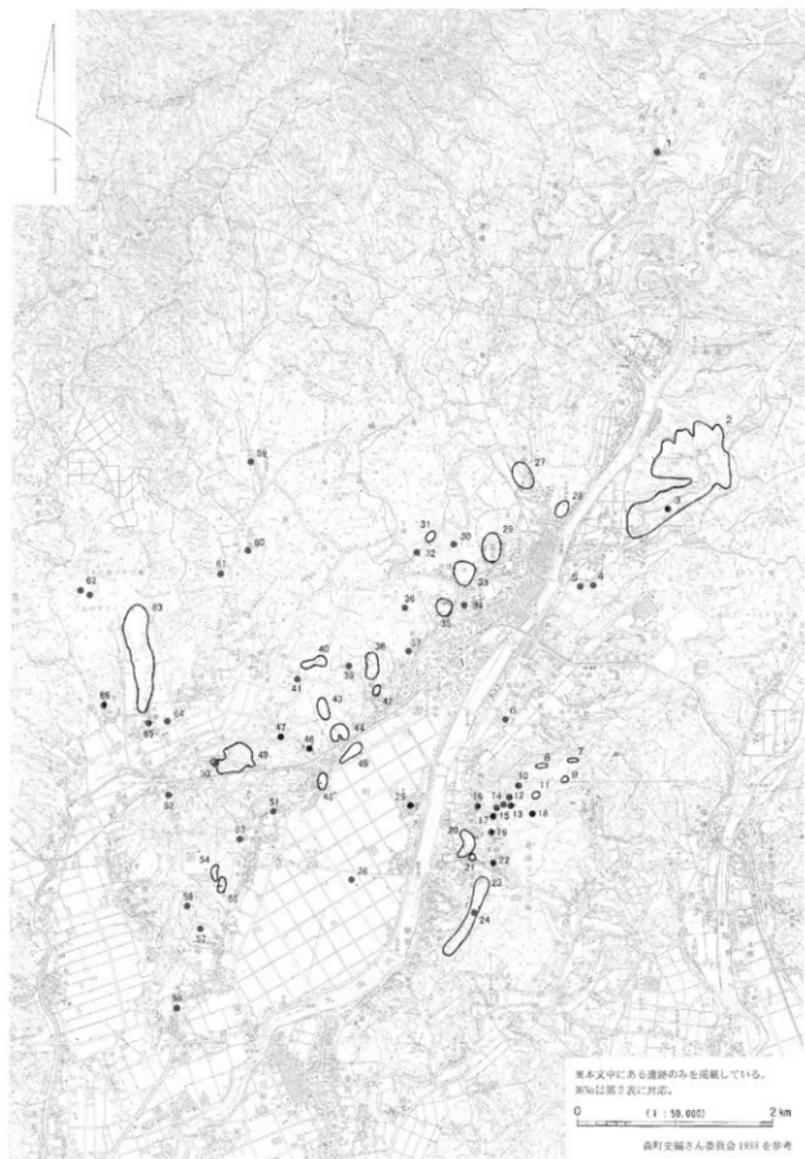
奈良時代の瓦が出土した遺跡は、2ヶ所知られている。太田川東岸、飯田北部の丘陵上には平戸廃寺が位置している。工事中の発見ではあったが、平城宮式を受け入れた布目瓦が出土しており、奈良時代

第2表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	八坂八幡神社中世墓	中世	34	大門遺跡	中世
2	天方城跡	戦国(16世紀)	35	四明寺古墳群	古墳、平安
3	中芝原遺跡	弥生、古墳、奈良	36	森山古墳	古墳(7世紀)
4	青木1遺跡	弥生~古墳	37	金谷前古窯	平安
5	青木2遺跡	弥生、中世	38	葛藤ヶ谷古墳群	古墳(6~7世紀)
6	逆井京塚古墳	古墳	39	萬蒲ヶ谷2遺跡	弥生、古墳
7	東平子遺跡	縄文~古墳	40	善千鳥遺跡	弥生、古墳
8	西平子遺跡	縄文~古墳	41	善千鳥横穴群	古墳
9	平戸廃寺	奈良	42	香勝寺遺跡	古墳~近世
10	本堂1号墳	古墳	43	文殊堂古墳群	古墳(6~7世紀)
11	北谷田古墳群	古墳	44	北垣遺跡	縄文~近世
12	観音寺本堂横穴群	古墳	45	円田大門遺跡	弥生~鎌倉
13	観音堂中世墓	鎌倉、室町	46	岩名栗遺跡	中世
14	観音堂横穴群	古墳、鎌倉~江戸	47	久保ノ谷横穴群	古墳後部
15	谷口横穴群	古墳、鎌倉	48	大城戸遺跡	弥生~近世
16	坂田北遺跡	縄文、奈良~鎌倉	49	十上山古跡	戦国
17	谷口中世墓	平安~鎌倉	50	堤田古墳	古墳
18	比呂尾経塚	平安、鎌倉	51	東国古墳	古墳(5~6世紀)
19	三反田遺跡	縄文、古代、中世	52	石仏ノ坪古墳	古墳
20	院内古墳群	古墳	53	寺ノ谷遺跡	古墳
21	如仲庵遺跡	弥生~近世	54	奥谷田1遺跡	弥生~古墳、奈良、鎌倉
22	日当古墳	古墳	55	奥谷田2遺跡	縄文、弥生、平安~江戸
23	崇信寺古墳群	古墳	56	井谷ノ谷古墳群	古墳
24	峯山台状墓	弥生~古墳	57	井谷ノ谷遺跡	弥生
25	上川原遺跡	古墳、奈良、平安	58	上ノ山遺跡	縄文~中世
26	赤目遺跡	戦国	59	小国神社経塚	平安、鎌倉(1158年)
27	山郷古墳群	古墳(6世紀)	60	御廟所遺跡	鎌倉
28	天宮遺跡	縄文中期~近世(鎌倉)	61	宮代稲荷下遺跡	鎌倉
29	蓮華寺古墳群	古墳	62	西峠水戸ヶ谷東峠遺跡	弥生~鎌倉
30	西島古窯	平安	63	片瀬城跡	縄文~中世
31	陣崎峠古墳群	古墳(6~7世紀)	64	網戸横穴群	古墳
32	陣屋峠古窯	奈良(8世紀)	65	七軒町遺跡	古墳
33	西島古墳群	古墳(6~7世紀)	66	山下横穴群	古墳(7世紀)

※本文中にある遺跡のみを掲載している。
※Noは第3表に対応。

資料提供：3人委員会(1988年参照)



第3図 周辺の遺跡分布図

前期の寺院が存在したことがわかっている。太田川西岸丘陵地には橋の陣屋峠古窯が位置している。かつては、窯跡が良好に残存していたという。奈良時代の須恵器・土師器とともに多くの瓦が出土・採集されている。遺物は平戸廃寺と同じ奈良時代前期のものであり、ここで生産された瓦が平戸廃寺に供給されたと考えられている（森町史編さん委員会1998等）。

平安時代以降

平安時代、特にその後半期になると、遺跡数が増加する。丘陵上・低地部に問わず遺跡は存在し、また南部に多くの遺跡が分布してはいるものの、北部にも遺跡が分布するようになる。しかし、大半の遺跡は、灰釉陶器や山茶碗をはじめとした平安時代後半から鎌倉時代の遺物が、採集もしくは遺構に伴わないで出土した遺跡である。よって、明確に性格がわかっている遺跡は決して多くはない。

確実に居住域とされる遺跡は知られていない。小谷部に立地する中川の奥谷田Ⅱ遺跡では、平安時代から鎌倉時代の遺物が主体的に出土し、溝状遺構等が発見されている。同じく小谷部に立地する向天方の青木Ⅱ遺跡でも、平安時代から鎌倉時代の遺物と小穴群等の遺構が発見されている。広い平坦部をもつ段丘上に立地する草ヶ谷の香勝寺遺跡では、中世の塚や15世紀頃の堀が発見されているほか、平安時代から鎌倉時代の遺物や小穴等の遺構が発見されている。これらは、根拠に欠けるものの、状況から平安時代から鎌倉時代の集落跡が想定される。他にも、集落跡が存在する可能性は十分にある。

墓や塚として、特に12世紀以降の遺跡がいくつか知られている。一宮の小園神社経塚、飯田の比丘尾経塚、谷口中世墓では12世紀から13世紀の遺物が出土している。さらに14世紀から15世紀においても、飯田の観音堂中世墓、一宮の御廟所遺跡で蔵骨器等が出土している。一方、古墳時代の横穴式石室や横穴墓を再利用した事例も、森の門明寺4号墳や飯田の観音堂横穴墓群で確認されている。その他、円田の岩名栗遺跡では集石墓、三倉の田能遺跡、円田の岩名栗遺跡、西俣の八坂八幡神社では、五輪塔等の中世の石塔が存在することが知られている。

丘陵上には、15・16世紀の山城跡や砦跡とされる遺跡もいくつか知られている。一宮の片瀬城跡では、調査によって中世等の遺物の出土とともに堀切等の存在がわかっている。一宮の十王山砦では、調査によって堀切等の存在は確認されているが、中世遺物の出土はない。向天方の天方城跡では、堀切や土塁が認められるほか、16世紀の古瀬戸の瓶子片等が採集されている。

各遺跡で出土もしくは採集される平安時代以降の遺物には、灰釉陶器と山茶碗が多い。太田川西岸、森の丘陵地では、7世紀頃の須恵器を生産したであろう森山古窯、奈良時代の瓦を生産したであろう陣屋峠古窯といった、窯業跡が知られているが、さらに山茶碗を生産したであろう窯跡も知られている。森の西脇古窯、金谷前古窯では、11世紀末から12世紀前半の山茶碗等と窯壁が採集され、山茶碗生産が行われていたことが知られている。

各遺跡で出土もしくは採集された遺物の中で、上記の他に12世紀から13世紀の青磁・白磁、16世紀の内耳鍋（牛飼の上ノ山遺跡）、戦国期の和鏡（飯田の赤日田遺跡）、三叉の鋤（円田の円田大門遺跡）や曲物・杭（飯田の三反田遺跡）といった木製品もみられる。それらの中でも、一宮の宮代稻荷下遺跡から出土した14世紀の灰釉唐草文四耳壺、森の大門遺跡から出土した7万枚以上の埋蔵銭は特に注目される（森町史編さん委員会1998等）。

第3節 確認調査

1. 確認調査の対象地点

(1) 位置と現況

第二東名の路線は、森町の南部を東西に横断する。森町域においては、計約7km前後の路線が建設されている。

太田川東の丘陵地では、その中で比較的大きな谷が存在する、陸奥の地域に路線が設定されている。この谷は、北東にのびる北戸綿の谷と、東にのびる南戸綿の谷に二分されているが、路線は南戸綿の谷の南縁に沿って設定されている。谷の南縁は、南側丘陵からのびる支丘陵と支谷が連続している。路線は、これらを次々と横断、太田川沿いの鶴山の丘陵も横断し、太田川に至る。横断する丘陵は複せ尾根地形を呈している。

太田川の西側には平野部が広がり、路線はその平野部を横断し、さらに西側の丘陵に至る。この太田川流域と一宮川流域に挟まれた丘陵地では、パーキングエリアが大電浜名湖鉄道田原駅の北側に設定されている。したがって、約0.4km四方にわたる広範囲が建設範囲となっている。多くは瘦せた丘陵と細長い谷による地形となっているが、それらの東側には、広い平野部をもつ段丘状の地形が存在している。

一宮川流域では、その北側に沿って東西に路線が設定されている。平野部に向かって南にのびている瘦せた丘陵と細長い谷が連続しており、路線はこれらを次々と東西に横断する。

各丘陵の地形は、ほぼ本来の形状が残っているとみられるが、一部に道路によって地形が削平されている部分が存在する。植林地や茶畑として利用されている部分が比較的多く、茶畑では若干の造成を想定することもできるが、大きな削平をみることはできない。

平野・谷部においては、建築物や道路等、大きく開発されている場所は少なく、水田や畑・宅地に利用されていた部分が多い。宅地においても、地下深くを掘った部分は多くはない。むしろ、田畑のために盛土造成を行った可能性が高い場所がいくつかある。

(2) 対象地点の選定

第二東名路線範囲を主とする工事範囲において、静岡県教育委員会の指導のもと、森町教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。その後、路線範囲の変更や側道等といった本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡についての再確認による対象地点の範囲の変更や対象地点の追加も、同様に行われた。最終的に、本線およびパーキングエリア建設範囲等で18地点、インターチェンジ（取付道路）建設範囲で3地点を数えることとなった。一部、特に太田川以東で谷部に範囲をもつ対象地点も存在するが、多くは丘陵上に範囲をもつ対象地点である。

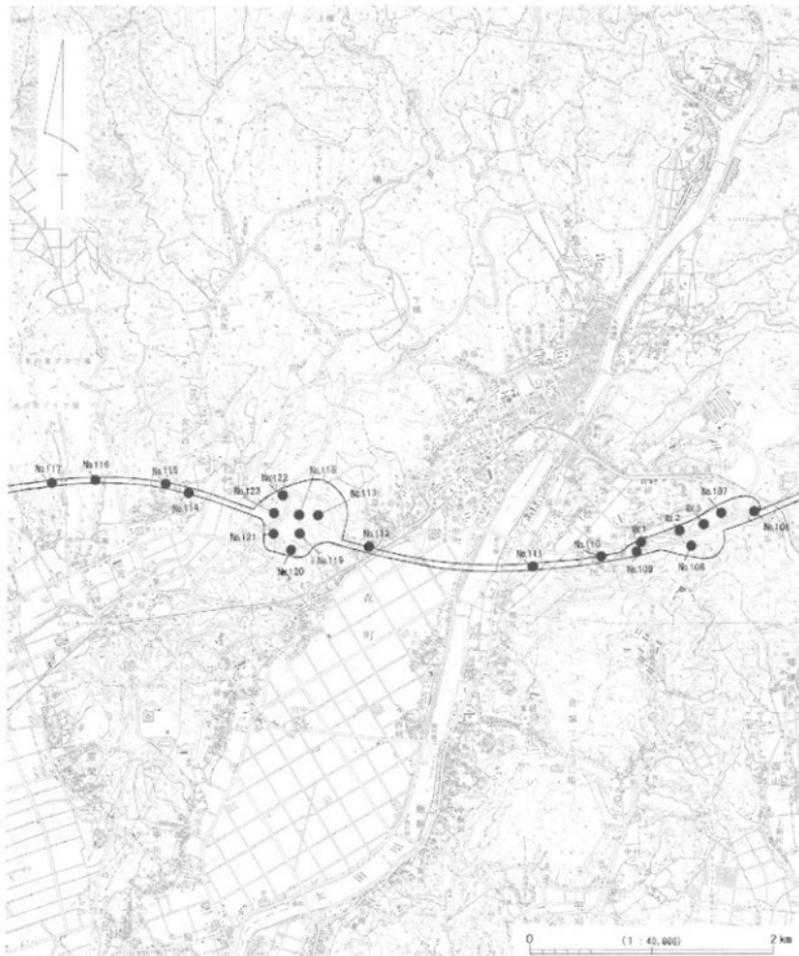
第3表に対象地点の一覧を示した。周辺の発掘調査や分布調査・遺物の採集によって周知の遺跡となっていた地点は8地点（10遺跡）ある。残りの13地点は、周知の遺跡のなかった場所ではあるが、踏査や周辺環境等の検討の結果、遺跡の存否を含めて確認調査の必要があるとしたところである。

前節で述べたとおり、森町の丘陵地では、古墳群や弥生時代の墓域をはじめとする各種の遺跡が多く知られている。よって、周知の遺跡となっていない場所においても、特に丘陵上の場合の多くは確認調査の対象地点とした。

第3表 対象地点一覧表

対象地点	対応する遺跡※	対象地点	対応する遺跡※	対象地点	対応する遺跡※	対象地点	対応する遺跡※
No106地点	なし	No109地点	なし	No113地点	宇留塚火葬	No119地点	なし
No107地点	なし	No110地点	なし	No114地点	なし	No120地点	なし
取付道路1	なし	No111地点	稲山古墳群	No115地点	網田山古墳群	No121地点	なし
取付道路2	なし	No112地点	中屋敷遺跡	No116地点	片瀬成	No122地点	なし
取付道路3	なし	No113地点	北川遺跡	No117地点	合羽ヶ谷遺跡	No123地点	林古墳群
No108地点	奥戸峠遺跡	No113地点	文殊堂古墳群	No118地点	なし		

※ 現地調査前の既知の遺跡。森町史編さん委員会1998を参考。



第4図 第二案名の路線と対象地点

2. 確認調査の方法と経過

(1) 調査の方法

現地調査の開始にあたっては、まず駐車場や作業員棟等を設置した。作業員棟は、現地の状況に合わせて、ブナハブ、コンテナハウス、テントのいずれかを設置した。また、対象範囲を確認し、調査区を設定した。調査区は、遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、可能な限り対象範囲全域に至るような設定に努めた。ただし、丘陵地の急斜面部においては、横穴墓や竪穴等の存在が想定できない限りは、作業の安全上を考慮して調査区の設定を避けた。また、調査区には、トレンチとテストピットを使用した。トレンチの方が得られる情報量が多いと判断し、トレンチを基本にして多用した。また、遺跡の把握が難しい場合には、調査途中にて調査区を拡張した。

調査区の掘削は、表土から人力で実施する方法と、遺構にかかる可能性のある土層まで重機で掘削し、その後は人力で掘削を実施する方法と、場所によって異なる方法をとった。特に丘陵上においては、重機が入ることのできない場所が多く、また、重機が入ることでも古墳等が壊される可能性のある場所が多いため、前者の方法によって掘削した。一方、谷部等の平地では、比較的容易に重機が入ることができ、また表土や造成盛土が厚いと考えられたため、後者の方法で掘削した。遺物包含層の掘削や遺構を探索する作業は、人力によって実施した。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、必要な記録を実施した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、土層の把握よりも遺構の有無確認に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるのか、根痕や攪乱・微地形等であるのか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げて検出し、判断に努めた。現地によっては、その判断が遺跡の有無決定に直結する場合があった。特にその場合には、部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとまって出土した遺物や土器棺・炭骨器のような遺構の性格を持つものについては、本調査をすることを前提として、出土位置に残したままにした。

以上の方法によって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図等は、全体図は1/100、土層断面もしくは柱状図は1/20を基本とし、必要と判断した遺構図等は1/20もしくは1/10で作成した。なお、測量基準杭は、第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国土座標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用い、必要に応じて、35mm判や6×7判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点や部分の事情に合わせて行った。埋め戻し作業は、調査区の掘削と同様、重機が入らない場所や重機が入ることでも遺構が壊れる場所は人力で行い、その他の場合は重機によって実施した。

3. 各地点の概要

(1) No 106 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町睦実字杭瀬ヶ谷から掛川市幡鎌にまたがって位置する。丘陵地に立地し、西には太田川流域から東にのびる南戸綿の谷、東には原野谷川流域から北西にのびる板ヶ谷の谷が存在している。東西それぞれの谷の最奥部にあたる丘陵で、痩せた尾根になっている。現状では、道路によって独立丘陵状になっているが、本来の地形は南北の丘陵とつながる。

丘陵の東斜面は茶畑になっていた。ある程度の造成は行われたとみられるが、大きな地形改変を認めることはできなかった。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

尾根上では、表上下に泥岩礫を含む黄色層（基盤層）を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

斜面部では、丘陵南東斜面の一部において、小谷地形とそこに堆積した黒色土を確認した。この小谷地形は西から東へ下り、丘陵筋に対して斜め方向にのびていると判断することができる。

小谷地形内の堆積層から、弥生時代から古墳時代の土器片が数点出土した。ただし、出土量は非常に少なく、周囲より流入した極少量の遺物と判断することができる。

小谷部以外の遺物の出土はなく、また遺構の発見は全くなかった。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

(2) No 107 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町睦実字善正庵に位置する。南戸綿の谷の最奥部、その丘陵の西斜面にあたる。この斜面の下方、すなわち西側には、善正庵池が存在する。大半は茶畑として利用されていた。しかし、現況観察で大きな地形改変や攪乱を認めることはできなかった。

本地点の北隣では、弥生土器片・須恵器片が採取された善正庵遺跡が周知されていた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

表土・攪乱層の直下に、黄灰色・灰褐色といった粘質土や粘土層を確認した。これらは、丘陵の基盤層もしくは斜面堆積層と判断することができる。いずれにしても遺物の出土はなかった。

丘陵南西斜面の一部、比較的緩斜面となる部分では、自然地形の谷もしくは窪地を確認し、暗褐色粘質土層の堆積を確認することができた。しかし、ここからの出土遺物もなかった。

以上、全域において遺物の出土はなく、遺構も確認できなかった。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。よって、本地点対象範囲における善正庵遺跡の広がり認められなかった。

(3) 取付道路3地点

位置・立地と現況

本地点は森町跡実字善正庵、南戸綿の谷の周縁丘陵地に位置する。本来は、道路を挟んだ南側の丘陵とつながっており、本地点はその北斜面にあたる。北側の谷部には善正庵池が存在し、連結している東西の丘陵がこの池を囲っている。本地点範囲の大半は、茶畑であった。ただ現況観察では、さほど大きな地形改変や擾乱を予測することはできなかった。

善正庵池を挟んだ対岸には周知の善正庵遺跡が存在していた。しかし、詳細は明らかでなかった。本地点にまで遺跡範囲が広がる可能性も考えられた。

調査方法と確認状況

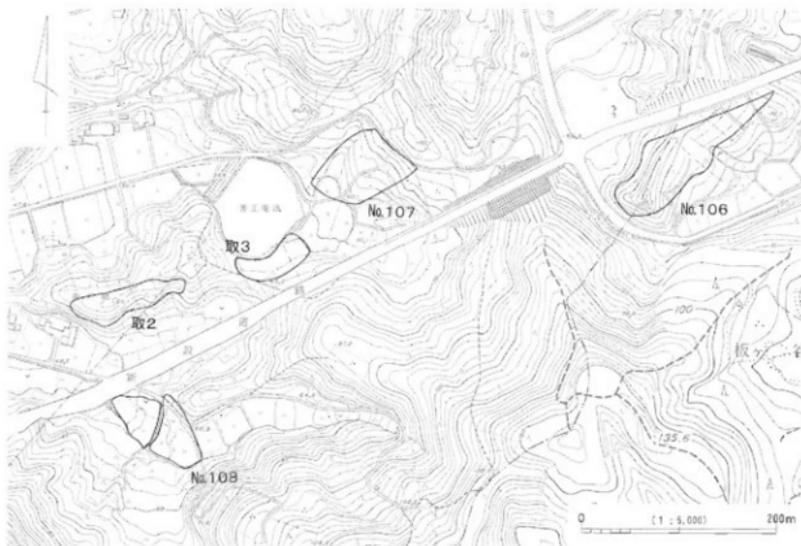
調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

斜面上部では、表土や擾乱層直下に黄色粘質土や砂礫層等の基盤層を確認した。一方の北斜面下方では、暗灰色粘質土等の堆積もみられた。ただし、遺物が多量に出土することはなかった。

本地点東半部では、谷地形が盛土によって埋められていた状況を確認した。また、遺構・遺物の発見はなかった。一方の西半部では、溝状遺構や小穴が確認された。さらに、その周辺から中近世の土器片が出土した。

結果

本地点範囲の西半斜面部で遺跡の存在を確認することができた。一方、東半部では遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。以上のように、対象範囲内における善正庵遺跡の存在とその範囲を確認することができた。



第5図 各地点対象範囲1

(4) 取付道路2地点

位置・立地と現況

本地点は森町陸実字奥戸綿に位置する。南戸綿の谷は、奥で南北に二叉に分かれている。本地点は、その二叉の谷に挟まれた丘陵に立地し、丘陵尾根上から南斜面にかけた部分を範囲とする。丘陵は一部が茶畑に利用されていたが、大きな地形改変や撈乱を現況観察で判断することはできなかった。

善正庵池を挟んだ対岸には周知の善正庵遺跡が存在していた。しかし、詳細は明らかでなかった。本地点にまで遺跡範囲が広がる可能性も考えられた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

大半においては、表土や撈乱層の直下に黄色粘質土を確認し、堆積層や遺物包含層と認識できる土層は確認できなかった。遺構は、土坑や小穴・溝状遺構を、丘陵尾根上を中心とした部分で確認した。また、その部分や周辺から土器の小破片が数点出土した。時期が詳細にわかる遺物はなかったが、古代から中世の遺物が含まれていることは間違いないと判断することができた。

結果

丘陵尾根上を中心に遺跡が存在していることを確認することができた。よって、対象範囲内でも丘陵尾根上を中心とする、善正庵遺跡の存在とその範囲を確認することができた。

(5) No108地点

位置・立地と現況

本地点は、森町陸実字奥戸綿に位置し、南戸綿の谷の南側丘陵地における一叉谷に立地している。本地点の範囲は谷の東縁にあたり、痩せた丘陵の裾部にあたるとしてもよい。全体的に水田として利用されていることから、谷地形を埋めるなどといった造成が行われていると判断された。

この対象範囲は、周知されていた奥戸綿遺跡の範囲を含んでいた。発掘調査が行われたことはなかったが、山茶碗片が表面採集されている。

調査方法と確認状況

トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

まず、谷地形を埋めて造成していることが確認できた。表土とその造成土の直下においては、ほぼ全域で灰色粘質土層の堆積を確認した。本来の地形は、谷中央に向かって低くなるもので、灰色粘質土層の堆積も谷中央に向かって厚くなっていた。また、対象範囲東部を中心に中世土器片が出土した。

灰色粘質土層直下には、黄色粘質土・灰色粘土・青灰色粘質土等、場所によって異なる土層を確認した。一部をさらに掘り下げていったところ、これら土層も基盤層ではなく堆積した土層であると判断することができた。ただし、遺構はこれらの土層の上面においてのみ確認することができ、また遺物出土は、表土・造成土・灰色粘質土層に限られた。すなわち、深い谷がある程度堆積で埋まった後、遺構が形成されたと判断することができる。遺構覆土からも、中世遺物の出土があった。

結果

遺構の検出範囲と遺物の集中度から、本地点対象範囲の東部を中心とした範囲に遺跡の存在をみるることができた。また、遺物包含層の存在も確認できた。以上、対象範囲内における奥戸綿遺跡の存在とその範囲を確認することができた。

(6) No109地点

位置・立地と現況

本地点は、森町陸奥字殿ノ谷に位置し、南戸綿の谷の南側丘陵地における一支谷に立地している。谷には比較的広い平坦部が存在し、特に対象範囲北半部の傾斜はほとんど感じられない。南半部、谷の奥にあたる部分は段造成され、本来の微地形までみることは難しい。さらに、東に派生する支谷部分も同じく段造成されているため、本来の地形をみることはできない。大半は宅地や畑等に利用されていた。特に段造成が各所でみられ、ある程度の地形改変をみる事ができた。

周知の遺跡は本地点対象範囲に含まれていなかった。しかし、「殿ノ谷」という地名と周辺の歴史的環境から、中世の戸綿藤原氏の居館があった可能性が考えられていた場所であった。なお、本地点より南の丘陵上には、堀切が存在しているという。

調査方法と確認状況

対象範囲北半部の広い平坦部はテストピット、その他はトレンチによる調査を行った。なお、4次に分けて確認調査を実施している。

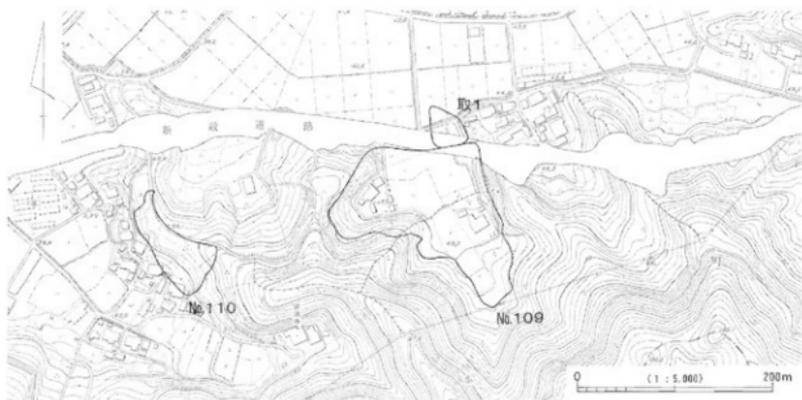
丘陵上や斜面中腹では、表土直下に基盤層となる泥岩礫を多く含む黄色粘質土層を確認した。いずれにおいても、遺物・遺構の発見はなかった。

谷部最奥部中央においても表土直下に基盤層を確認した。古代から中世の土器片が表土から少数出土した。また、その東西に谷地形を確認することができたが、東側の谷部において、古代・中世の遺物と小穴を中心とした遺構の発見があった。

以上の他においては、表土や攪乱・盛土層直下に青灰色や黒色の粘質土、泥岩礫を多く含む黄色粘質土等が厚く堆積した状況を確認することができた。これら谷部の堆積は、丘陵からの崩落や自然流路の形成を経ており、単純な状況ではない。ただ、いずれにしても遺物・遺構の発見はなかった。

結 果

本地点対象範囲のなかで、谷部奥寄りの東半に遺跡の存在を確認することができた。なお、この遺跡は、現在、戸綿殿ノ谷遺跡として周知されている。



第6図 各地点対象範囲2

(7) 取付道路1地点

位置・立地と現況

本地点は、森町睦実宇戸綿に位置する。南戸綿の谷の南側丘陵地は、いくつかの瘦せた丘陵と支谷が連続しており、本地点はその一支谷の入口付近東半部に立地している。北部は水田、中央は畑、南部は道路となっていた。道路となっている南部の調査は、北部と中央部の状況のみを、その必要性を判断することとした。なお、谷地形を埋めるといった盛土造成が行われている可能性もあった。

周知の遺跡は含まれていないが、近接するNo.109地点と同様の理由から遺跡が存在する可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

現況道路部分等を避けて、トレンチによる調査を行った。

表土と造成による盛土の直下に、青灰色粘質土層や暗灰色粘質土層がみられた。さらに、一部においてより下層までの掘り下げを行った。現在平坦部となっている地形は造成によるものではあるが、それ以前より谷部が堆積によって埋まっていった状況を確認することができた。

北部においては遺構・遺物の発見は全くなかった。中央部においても、遺構の発見は皆無であり、古代から中世の土器片が数点出土しただけであった。谷地形に堆積するなかで、極少量の遺物が流入したと判断することができる。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

(8) No.110地点

位置・立地と現況

本地点は、森町睦実宇戸綿之内に位置し、南戸綿の谷の南側丘陵から派生する、瘦せた丘陵上に立地している。尾根上に沿って簡易な道路があり、一部地形が削平されていた。また、多くが茶畑に利用されていた。

本地点のある丘陵上のより先端部分は、ツボノヤ遺跡として既に周知の遺跡となっていた。須恵器・灰釉陶器片が採集された奈良・平安時代の遺跡であり、丘陵のより上部となる本地点対象範囲にまで遺跡範囲が広がる可能性も考えられていた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

表土直下に褐色土層や暗褐色土層がみられ、その下に明褐色粘質土層を確認した。前者は後者が崩落や草木に影響されて形成されたものと判断することができる。また、大きな地形改変は確認できず、本来も現況とほぼ同じ地形をしていたと判断することができる。

遺物は、表面採集された須恵器小片を含めてもほとんどなかった。丘陵のより上部から流入した可能性も高い。また、遺構は一切確認できなかった。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。ツボノヤ遺跡については、今回の調査結果によって、遺物が採集された丘陵先端部に限られた範囲の遺跡であると判断することができる。

(9) No 111地点

位置・立地と現況

本地点は、森町陸奥宇鴨山に位置する。太田川東岸には、その太田川と陸奥の谷に挟まれた河岸段丘列の丘陵がある。この南西先端部付近に存在する細長い独立丘陵に本地点が立地している。対象範囲は、丘陵尾根上から東側裾部分までである。尾根上に若干の山林が残されていたが、大半は茶畑に利用されていた。斜面では段造成された部分があり、ある程度の地形改変をみる事ができた。

本地点範囲でも尾根上部分は、周知されていた鴨山古墳群の範囲を含んでいた。しかし、確認調査開始時の現況観察で古墳の存在を認めることはできなかった。また、対象範囲より南の丘陵東斜面には、中世に加茂神社があったとされる場所がある。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンテによる調査を行った。

尾根上や斜面部では、表土・攪乱直下に泥岩礫を多く含む明黄色粘質土層を確認した。茶畑部分は造成されており、攪乱層から弥生土器・土師器の出土があったものの、遺構は確認できなかった。一方、

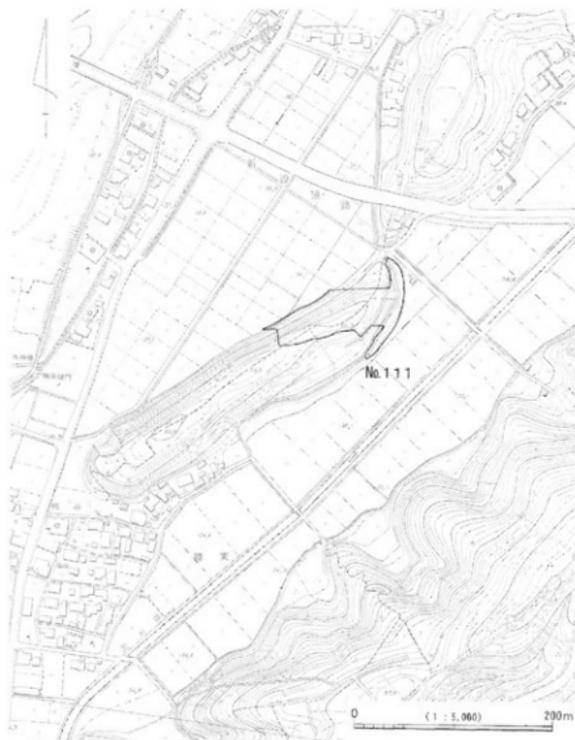
山林部分では、溝状の遺構を確認し、弥生土器・土師器が出土した。

丘陵裾部では、暗茶褐色土と黒褐色土の堆積がみられた。前者からは山茶碗を中心とした多くの遺物が出土した。また後者の黒褐色土層上面で、小穴等の遺構を確認することができた。

結果

尾根上では、残存状況が悪いものの、弥生～古墳時代の遺跡が存在していることを確認した。現在、この遺跡を鴨山遺跡・古墳群は鴨山古墳群としている。

一方、丘陵東裾部では、中世を中心とする遺跡を確認することができた。尾根上の遺跡とは時代・性格が異なるものと判断でき、現在、この遺跡は鴨ノ前遺跡として周知されている。



第7図 各地点対象範囲3

(10) No.112 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町草ヶ谷字中屋敷に位置する。太田川の流れる沖積平野の西側丘陵地は、覆せた丘陵と谷が連続している。本地点はそれらの内の一丘陵上、丘陵南先端の段丘上平坦部に立地している。周囲には宅地も多く、削平が認められる部分も少なくない。しかし、対象範囲東半部は果樹園、西半部は茶畑に利用されており、現況観察で対象範囲内に大きな地形改変を認めることはできなかった。

本地点の範囲は周知されていた中屋敷遺跡の範囲と重なっていた。この遺跡は、発掘調査歴こそなかったが、山茶碗やかわらけが採集されていた。

調査方法と確認状況

段丘上の広い平坦部を中心に、トレンチによる調査を行った。

大半において、表土・攪乱層直下に砂礫を多く含む明黄褐色砂質土層や、黄褐色粘質土層を確認した。果樹園であった南部は削平を強く受けていたが、他は地形の大きな改変をみることはできなかった。

遺構としては、東隅部分を除くほぼ全域で、溝状遺構や土坑・小穴等を確認することができた。これら遺構は、全て明黄褐色砂質土層や黄褐色粘質土層の上面で発見できた。遺物は、表土中や遺構内から多く出土した。中近世のかわらけが中心であったが、陶器等も含まれている。

北部の一部では、表土と黄褐色粘質土の間に褐色土層を確認したが、この土層からの遺物の出土は少なかった。堆積層であることは間違いないが、遺物包含層であるとして扱うのは難しいと判断される。

結果

本地点範囲のなかで、東縁部分を除くほぼ全域で、中世を中心とした遺跡が存在していると判断することができた。以上のように、本地点対象範囲内における中屋敷遺跡の存在と範囲を確認することができた。



第8図 各地点対象範囲4

(11) No.113 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町内田字北垣他に位置し、太田川流域沖積平野の西側丘陵地、その内の一支丘陵に立地している。覆せた丘陵尾根上および斜面部、さらに南先端部分の広い段丘上平坦面にわたる。丘陵の大半は山林、南先端段丘状部分は茶畑に利用されていた。南先端段丘上では、現況観察で茶畑造成による削平をみることができた。一方、山林であった丘陵尾根上およびその斜面では、大きな地形改変を観察することはできなかった。尾根上については、古墳の墳丘と判断できる高まりがいくつも認めることができ、盗掘坑を確認することができるものもあった。

尾根上の一部には6基の古墳分布と鏡・馬具・玉類といった出土遺物が知られている文殊堂古墳群が、その西斜面の一部には宇藤横穴群が、南先端段丘上には縄文時代から近世までの遺物が採集されている北垣遺跡が周知されていた。また、掘切等の若施設跡と考えられる部分も現況で観察できた。

調査方法と確認状況

尾根上および調査可能な斜面部、南先端段丘上を中心に、トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

丘陵部の大半では、表土直下に砂層や砂礫層を確認した。一部には、暗褐色砂質土の堆積も認められた。ほぼ全域に、古墳の盛土や溝溝をはじめとして、多くの溝や土坑等を確認することができた。また、古墳時代や弥生時代の土器等、多くの遺物の出土もあった。中近世の遺物の出土もあった。

丘陵東西斜面においては、いくつかの横穴墓の存在を確認した。

南先端段丘上では、大半の部分で表土直下に基盤の灰色砂層・黄色粘質土層を確認することができた。ただし、中央部では黒褐色土とその下層の茶褐色土層を確認した。中央部には谷部が存在し、基盤上にこれら土層が堆積したと判断できる。遺構は、小穴や土坑、溝状遺構等がほぼ全域で確認できた。これらは、灰色砂層・黄色粘質土層・茶褐色土層の上面で発見することができた。また、かわらけや中世陶器・須恵器等がほぼ全域で出土した。攪乱もあったが、遺跡を全壊させるようなものではなかった。

結果

文殊堂古墳群については、尾根上のほぼ全域にまで広がることが確認できた。また、弥生時代や中世の遺跡も同様に存在しており、これについては現在、文殊堂遺跡として周知されている。横穴墓については、尾根の東西斜面部で確認することができた。現在、尾根西側の横穴群は従来どおり宇藤横穴群として、東側の横穴群は天王ヶ谷横穴群として周知されている。南先端段丘上平根部に立地する北垣遺跡については、周知されていたとおりほぼ全域に広がることを確認することができた。以上、髯の根拠は得られなかったが、各古墳群・横穴群・遺跡の存在とその範囲を確認することができた。

(12) No.118地点

位置・立地と現況

本地点は、森町門田字藤小地名に位置し、太田川の流れる沖積平野の西側丘陵地、その内の一支谷の最奥部に立地する。谷は奥で二つに分かれる。北側の谷は茶畑に利用されていた。また、土塁によって池を造成した部分も認められた。

周知の遺跡はなかったが、長者屋敷の伝承がある場所で、屋敷・建物跡がある可能性も考えられた。

調査方法と確認状況

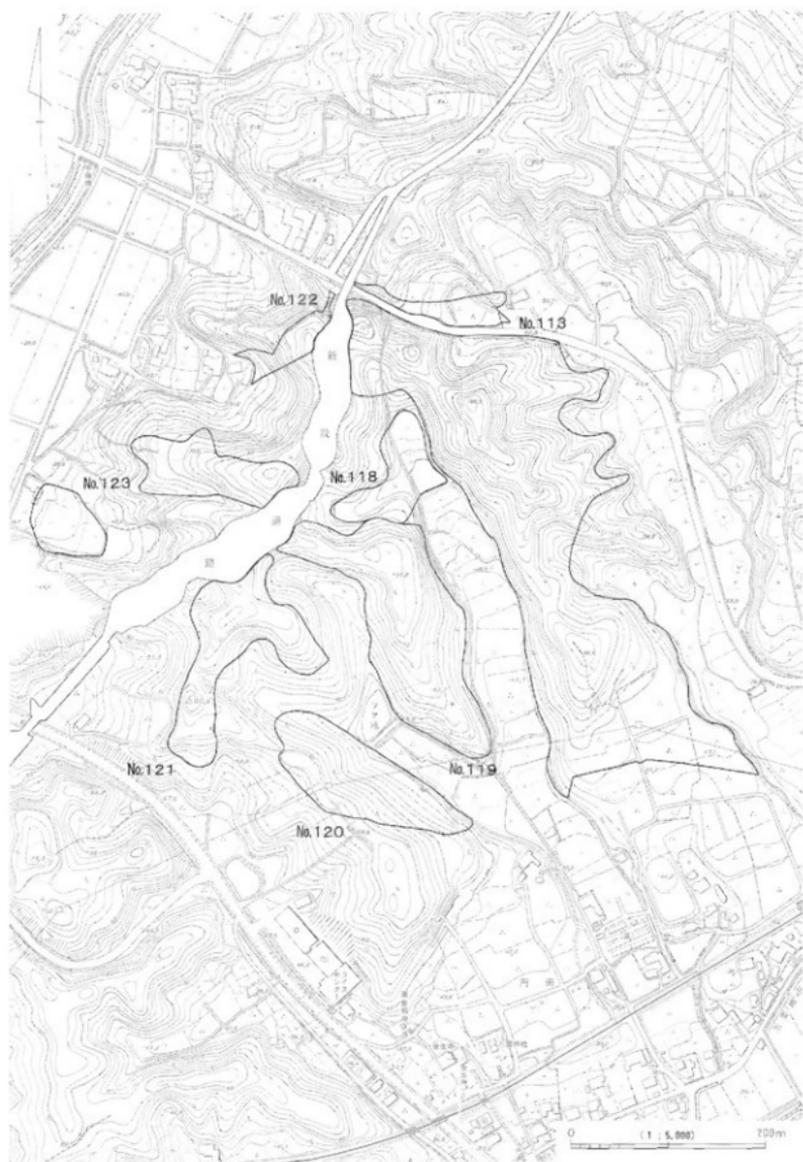
トレンチとテストピットを併用して調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

表土と厚い盛土の下で褐色や黒色・灰色といった砂質土、さらに下で黒色や灰色の粘質土層を確認した。これらは、谷部に堆積した土層と判断できる。

遺構は確認できなかった。遺物は、北側の谷の砂質土層から土器片1点、西側の谷からも砂質土層を中心に土器片20点程度が出土した。大半が近世のかわらけであったが、弥生土器・須恵器・中世陶器の小破片もあった。いずれにしても、層序と関係なくこれら小破片が散在して出土し、これら遺物が伴う遺跡が本地点に存在するという判断には至らなかった。また、土塁についても古い時代からのものであるという根拠を得ることはできなかった。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。



第9图 各地点对象範圍5

(13) No.119 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町田川字藤蓮台に位置する。太田川の流れる沖積平野の西側丘陵地、その一支丘陵上に立地している。丘陵先端部分は茶畑や墓地となり、地形改変も認められた。他は山林になっていた。

周知の遺跡ではなかったが、近世墓に混じて中世石塔の一部が現況観察で確認できたこと、また周辺丘陵上に古墳群や弥生時代墓域の遺跡が多いことから、遺跡が存在する可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

大半において、表土直下に砂層や砂礫層を確認した。地形改変については、現況観察によるもの以外に、丘陵先端部上で近世以降の墓地とそれに伴う造成を多く確認することができた。遺構としては、丘陵南半部尾根上で古墳の周溝を数箇所で見出し、またそれら周溝から、古墳時代の須恵器・土師器片が出土した。古代から中世の陶器片も同様に出土した。

結果

南半部の丘陵尾根上に古墳群・遺跡が存在していることが確認できた。対象範囲内における遺跡の存在と範囲を確認することができ、現在、この古墳群は宇藤蓮台古墳群として所知されている。また古墳以外については宇藤蓮台遺跡として所知されている。

(14) No.120 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町内田字名栗に位置する。太田川の流れる沖積平野の西側丘陵地帯、その一支丘陵に立地し、覆せた丘陵尾根上から東斜面を範囲としている。大半が山林で、大きな地形改変は認められなかった。なお、丘陵の西側は一部が削平されて茶畑になっていたが、ここは第二東名工事範囲外になる。

本地点と同じ丘陵の南先端部上には岩名栗古墳群が、同じ斜面には中世墓・石塔が発見されている岩名栗遺跡が位置する。本地点においても同様の遺跡が存在する可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

丘陵尾根上では、表土直下に黄色や灰色の砂層を確認した。斜面部では、その砂層上に黒褐色や暗褐色の砂質土層の堆積を確認した。なお、大きな攪乱や地形改変は認められなかった。

丘陵尾根上を中心に溝状遺構や土坑を確認した。また、遺構内やその周囲からは多くの弥生土器が出土した。弥生時代の土器棺墓も発見したことから、弥生時代の墓域が存在していると判断することができた。一方、古墳時代の遺物は出土しなかった。また、中世の遺構・遺物の発見もなかった。

結果

丘陵尾根上を中心に遺跡の存在を確認することができた。ただし、古墳群や中世墓の発見はなく、弥生時代の遺跡、特に墓域が展開していると判断することができた。以上、対象範囲内における遺跡の存在と範囲を確認することができた。現在、この遺跡はフケ遺跡として所知されている。

(15) No.1 2 1 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町一宮字林に位置する。太田川の流れる沖積平野と、一宮・伏間川流域の沖積平野に挟まれた丘陵地帯は、東西幅約1kmの範囲をもって、森町の森山・西脇から同町中川まで、南西にのびる。本地点は、この丘陵地の瘦せた中央尾根上に立地する。大半が山林になっており、現況で大きな地形改変を確認することはできなかった。ただし、本地点の北側で尾根筋が道路によって切断されていた。

周知の遺跡はなかったが、同一尾根上の北側には林古墳群の存在が知られていた。古墳や砦である可能性をもつ地形の起伏が現況観察され、古墳群等の遺跡が存在する可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

表土直下に褐色砂質土、さらにその下に黄色や灰色の砂層を確認した。砂質土は砂層が崩落や草木の影響を受けたものである。先述の道路部分以外の地形改変や大きな攪乱は認められなかった。

砂層上面において、溝状遺構を数ヶ所確認した。また、弥生土器や土師器片が出土した。特に地形の高まりに伴った溝状遺構については、古墳の周溝であると判断できる。ただ、丘陵幅が狭くなる部分や丘陵斜面下方、南東に派生する尾根では、遺構・遺物を確認することができなかった。

結果

丘陵幅の狭い部分と南東に派生する尾根を除く部分で、古墳群を含む弥生・古墳時代の遺跡の存在を認めることができた。以上、対象範囲内における遺跡の存在と範囲を確認することができ、現在、古墳群は林古墳群として、古墳群以外については林遺跡として周知されている。

(16) No.1 2 2 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町一宮字林に位置する。太田川の流れる沖積平野と、一宮・伏間川流域の沖積平野に挟まれた丘陵地帯の瘦せた中央尾根上に立地する。大半が山林になっており、現況観察で大きな地形改変や攪乱を認めることはできなかった。ただ、対象範囲の南東側においては、尾根筋に沿うように道路で削平されていた。本来は、同様の尾根筋が南に続いていたことがわかっており、一方、本地点の北側にある急斜面は本来の地形であり、後述のとおりこの斜面には横穴群が立地している。

周知の遺跡はないが、本地点から南に派生する丘陵尾根上には文殊堂古墳群が、本地点と同じ尾根の南西側には林古墳群が周知されていた。また、本地点にも古墳もしくは砦等の施設とも考えられる地形の起伏が現況観察で認めることができた。以上から、本地点にも古墳群等の遺跡が存在する可能性が考えられた。なお、本地点の北斜面には善千鳥横穴群が周知されているが、第二東名工事範囲外となる。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

表土直下に暗褐色等の砂質土、さらにその下に黄色や灰色の砂層や砂礫層を確認した。砂質土は砂層が崩落や草木の影響を受けたものと考えられる。道路部分以外に、地形改変や大きな攪乱は認められなかった。

丘陵尾根上の砂層上面で、溝状遺構を数ヶ所確認した。また、古墳の盛土と考えられる土層も一部で確認できた。遺構やその周辺から弥生土器や土師器片が出土したことから、発見された遺構が古墳の周溝もしくは弥生時代の遺構であると判断することができた。

結 果

丘陵尾根上を中心に、古墳群を含む弥生・古墳時代の遺跡の存在を確認することができた。以上、対象範囲内における遺跡の存在と範囲を確認することができ、現在、古墳群は林古墳群として、古墳群以外については林遺跡として周知されている。

(17) No.1 2 3 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町一宮字林に位置する。太田川の流れる沖積平野と一宮・伏間川流域の沖積平野に挟まれた丘陵地の中央尾根上から、その尾根から西に派生する支丘陵尾根上に立地する。痩せた丘陵部分がほとんどであるが、西に派生する支丘陵の西先端部上には、比較的広い平坦部が広がっている。また、この範囲と離れた南側谷部の西出口付近も対象範囲となっていた。

広い平坦部分の北半は茶畑に利用されていたが、他の丘陵上は山林であった。丘陵上の大きな地形改変や攪乱は、現況観察で認めることはできなかった。ただし、範囲の東側は道路で切断されていた。本来の中央尾根は南のNo.121地点の丘陵に続くものであったことがわかっている。また、北のNo.122地点とも同様に続くものであった。谷部は水田と茶畑に利用されており、谷部を埋める盛土造成が行われているとみることができた。

丘陵地の中央尾根上には、周知されていた林古墳群が立地していた。現況観察によっても、古墳と考えられる地形の起伏や盗掘坑を確認することができた。西に派生する丘陵の西端平坦部では、周囲の茶畑開墾時に中世石塔が多く出土したこと、また尼寺の伝承地でもあったことから、何らかの中世遺跡の存在が考えられた。谷部においては、中世以降の屋敷地であったとされる場所で、また山茶碗が採集されたことから、同様に遺跡が存在する可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

丘陵頂上筋および調査可能な斜面部と谷平坦部を中心に、トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

痩せ尾根上では、表土直下に黄色や灰色の砂層と砂礫層を確認した。道路以外の地形改変や大きな攪乱は認められなかった。砂層上層で遺構が確認でき、数ヶ所で溝状遺構を確認した。また、古墳の盛土や盗掘坑も確認し、さらに須恵器が周辺で出土した。以上、古墳の存在が明らかになった。また、弥生土器片も数点出土し、弥生時代の遺跡も存在していると想定することができる。

丘陵西先端の平坦部では、暗褐色土、さらに下層に黄色粘質土層を確認した。地形改変や大きな攪乱はなかった。暗褐色土中を中心に弥生時代や古墳時代、中世等の土器片が数点出土した。さらに、黄色粘質土層上層上で小穴等の遺構を確認した。

谷部では、表土・盛土層の直下に、谷部に堆積していった褐色・灰色・青灰色・黒色の砂質土や粘質土層を確認することができた。いずれにしても、遺構・遺物の発見はなかった。

結 果

痩せ尾根上については、ほぼ全域で周知の林古墳群の存在を確認することができた。また、弥生時代の遺跡も同様に存在することが確認できた。古墳以外については現在、林遺跡として周知されている。

西に派生する丘陵の西端平坦部においては、その全域で弥生～古墳時代および中世の遺跡の存在を確認することができた。これについては現在、弥生平遺跡として周知されている。

谷部については、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

(i8) No 1 1 4 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町一宮字綱掛に位置する。一宮・伏間川流域の北側丘陵では、南にのびる痩せ丘陵と細長い谷が連続している。本地点は、それらの中で東寄りの綱掛山丘陵、さらにそこから東に派生する支尾根上に立地する。東斜面は宅地等、西側も宅地や道路によって比較的大きな地形改変を観察することができた。他は、一部が畑等に利用されていたが、大きな地形改変や攪乱を観察することはできなかった。対象範囲は、道路や宅地となっている部分を除いた、地形改変のない部分に限られている。

周知の遺跡はないが、中世には35石の神領があったという山王権現社旧境内があった丘陵である。また対象範囲の南側では、開墾によって中世鏡1面・管玉6点等が発見されている。

調査方法と確認状況

丘陵頂上部および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

丘陵頂上部では、表土下に灰黄褐色砂質土・黄色砂層を確認した。灰黄褐色砂質土は、基盤の黄色砂層が崩落や草木の影響を受けたものである。また、基盤層までの攪乱を全体的に受けていることも確認した。遺構はもとより、遺物の発見もなかった。

斜面部では、黒褐色砂質土の堆積と、その下の基盤層である泥岩層を確認することができた。しかし、遺物・遺構の発見はなかった。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

(i9) No 1 1 5 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町一宮字谷澤に位置する。一宮・伏間川流域北側の丘陵地、中でも東寄りの丘陵上に立地している。基本的には痩せた丘陵で、斜面は急な部分が多い。ただし、頂上部には若干の平坦面が存在する部分もある。また、東西に派生する支尾根がいくつも存在し、それらを含めた範囲を対象としている。ほとんどが山林で、地形改変や大きな攪乱を現況で観察することはできなかった。

三叉に分かれる丘陵の東丘陵先端部上は、周知されていた綱掛山古墳群が分布していた。他の丘陵上においても、古墳群などの遺跡が存在する可能性が考えられた。明確ではないものの、古墳の可能性がある地形の起伏を観察することができた。

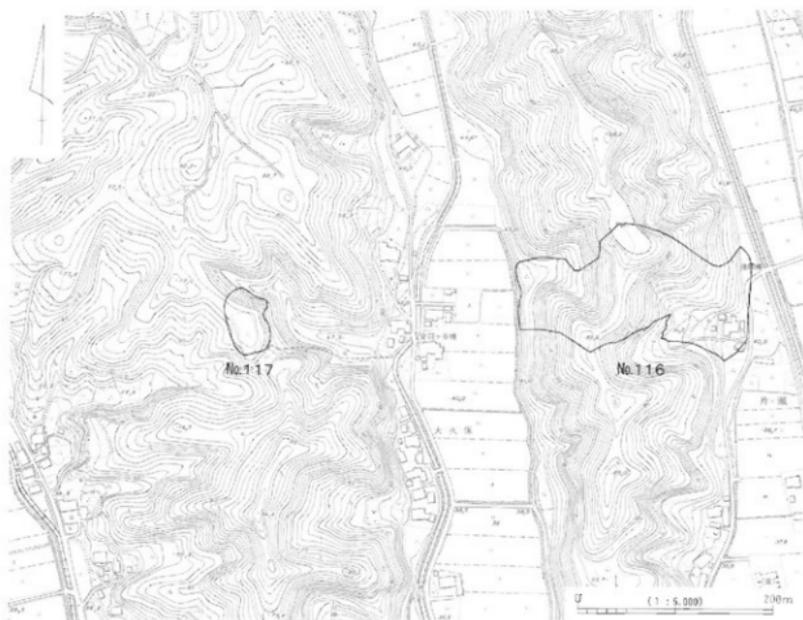
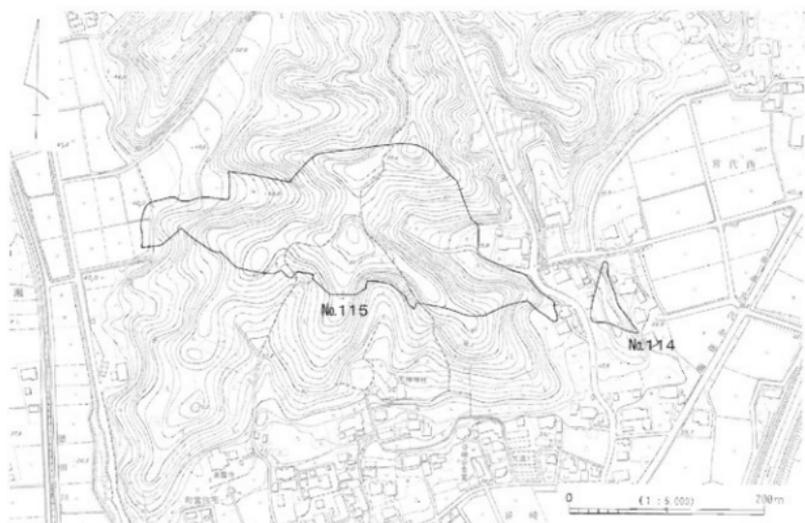
調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。なお、2次に分けて確認調査を実施している。

表土直下に、褐色や暗褐色土の砂質土層を確認した。さらにその下層で、基盤となる黄色砂質土層や基盤層の泥岩層を確認した。前者は基盤層が崩落や草木の影響を受けたものと判断できる。また、大きな地形改変や攪乱はなく、丘陵尾根上の各所において古墳2基、竪穴住居跡、溝、土坑、集石の存在を確認した。遺構およびその周辺からは、弥生土器や須恵器の出上があった。

結果

綱掛山古墳群は周知されていたものよりも広範囲に存在することが確認できた。また、古墳群として以外の遺跡が存在することも確認することができた。これについては現在、綱掛山遺跡として周知されている。以上、対象範囲内において、尾根上を中心とする遺跡の存在と範囲を確認することができた。



第10图 各地点对象範圍 6

(20) No 1 1 6 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町・宮字徳田に位置する。一宮・伏間川流域の北側丘陵地、その中央の支丘陵に立地する。痩せた丘陵で、斜面は急で崖の場所もある。ただし、頂上には若干の平坦面が存在する部分もある。東西への支尾根はほとんどない。大半は山林で、大きな地形改変は観察できなかった。

片瀬城跡は、第二東名建設に先立つ分布調査で発見・周知された。その後、本地点より北側で、森町教育委員会による開発に伴う発掘調査が行われた。中世城跡の各施設・遺物が発見された他、弥生時代の遺物も出土している。本地点にも細切状の地形が観察でき、城跡の範囲は本地点にまで広がるものとされていた。また、古墳等の可能性がある若干の高まりを観察することもできた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

表土直下に基盤となる黄・灰色の砂層や砂礫層、斜面部では泥岩層も確認した。溝・土坑・土器棺墓・竪穴住居跡等の遺構が尾根上を中心に確認された。遺物としては、中世土器も出土したが、弥生土器がより多く出土した。

結果

尾根上を中心に、弥生時代および中世の遺跡の存在がわかり、対象範囲内における遺跡の存在と範囲を確認することができた。中世の山城については周知されていた片瀬城跡の範囲とすることができる。一方、弥生時代を中心とした城跡以外の遺跡については、現在、片瀬遺跡として周知されている。

(21) No 1 1 7 地点

位置・立地と現況

本地点は、森町一宮字合羽ヶ谷に位置する。一宮・伏間川流域の北側丘陵地、その西寄りの支丘陵に立地する。東西に派生する支尾根が多く存在するが、本地点対象範囲は、支尾根が派生しない痩せた部分の頂上部にあたる。この頂上部には若干の平坦面が存在している。茶畑になっており、その影響を考えることはできたが、現況観察で大きな地形改変を認めることはできなかった。

周知されていた合羽ヶ谷遺跡の範囲と重なっていた。この遺跡では、弥生土器片が採集されていた。

調査方法と確認状況

丘陵頂上筋および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

表土・耕作土直下に赤灰色砂質土層、その下に基盤の灰色砂層を確認した。前者は、後者が草木の影響を受けたものと判断される。弥生土器もしくは土師器の破片が少数出土した。しかし、遺構の発見はなく、基盤層までの削平・攪乱を全体的に認めることができた。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

しかし、本来より合羽ヶ谷遺跡が存在しなかったという判断は難しい。丘陵尾根上で出土した土器片を、他の場所からの流入物であるとい概に考えることは難しい。また、全体に基盤層までの削平を受けていることが確認されており、破壊されたために遺構が発見できなかったと考えることもできる。同一丘陵の南北には尾根上平坦面が断続的に存在しており、遺跡の有無・範囲については、それらを含めた検討を要するところであろう。ただ、たとえ遺跡が本来存在していたとしても、今回の対象範囲においては、遺跡の残存をみることはできなかったということである。

2. 本調査の概要

各遺跡の調査結果の概要は以下のとおりである。太田川以東の陸奥の地域では、丘陵裾部の古代・中世集落跡、尾根上に残る弥生・古墳・平安時代の墓が調査された。太田川流域西側の丘陵地では、縄文～中近世まで断続する段丘上の集落跡、尾根斜面の横穴群、そして尾根上の弥生時代墓城・古墳群が調査された。一宮川流域北側の丘陵地でも、尾根上の古墳・弥生時代の墓が調査された他、縄文・弥生時代の集落跡等も調査されている。以下、時代ごとに発見された遺構・遺物を概観する。

縄文時代

この時代が主体となる遺跡はなかったが、各遺跡で様々な遺構・遺物が発見されている。

北垣遺跡 (No113地点) では、縄文時代中期の土器片の出土とともに、竪穴住居跡が発見されている。綱掛山遺跡 (No115地点) においても、石囲炉を伴う竪穴住居跡が発見されている。北垣遺跡は、全体に傾平された場所であるため、本来の住居跡数はわからないが、広い平坦部に形成された集落跡である。一方の綱掛山遺跡では、尾根上の狭い平坦部に形成された小規模集落であったと判断される。

弥助平遺跡 (No123地点) では、縄文土器片の出土の他に集石土坑が発見されている。文殊堂遺跡 (No113地点) と片瀬遺跡 (No116地点) では、痩せた丘陵尾根上で落し穴数基が発見されている。文殊堂遺跡では、縄文時代の遺物も出土している。

弥生時代

弥生時代中期から後期の土器棺墓や後期を中心とする方形周溝墓が、鴨ノ前遺跡 (No111地点)・鴨山遺跡 (No111地点)・フケ遺跡 (No120地点)・文殊堂遺跡 (No113地点)・林遺跡 (No121・122・123地点)・綱掛山遺跡 (No115地点)・片瀬遺跡 (No116地点) で発見されている。丘陵裾部で発見された鴨ノ前遺跡の土器棺墓を除く他は、痩せた丘陵上で発見されている。これらの中でも、フケ遺跡・文殊堂遺跡では、多くの周溝墓と土器棺墓を調査し、土器の出土の他に、埋葬施設からの銅鏃・銅削・鉄剣・鉄槍先・ガラス小玉の出土もあって注目に値する。

同じ痩せた丘陵上にあっても、綱掛山遺跡と片瀬遺跡では居住域の発見もあった。綱掛山遺跡では、先にあげた縄文住居跡と混じって弥生時代の竪穴住居跡も発見された。丘陵上の小集落であったと判断される。片瀬遺跡では、墓城となる後期後半より前、中期後半から後期前半の竪穴住居跡が多く発見されている。磨製石鏃の未製品の束が住居跡から出土しており、この集落における石鏃生産のあり方を復元できる貴重な資料になる。なお、この遺跡には濠も発見されており、居住域との関わりが注目される。

この他、北垣遺跡でも竪穴住居跡が発見されているが、年代を明確に示す遺物が出土していない。



写真1 土器棺墓の実測 (No113地点 文殊堂遺跡)

古墳時代

林遺跡 (No121地点) の周溝墓群からは、古墳時代前期の土器も出土し、この時期の墓が含まれると考えられる。中屋敷遺跡 (No112地点) の方形周溝からも前期の土器が出土している。破壊が著しく周溝墓か古墳かの判断は難しいが、この時期の墓であると判断することはできる。

文殊堂古墳群 (No113地点)・林古墳群 (No121・122・123地点)・宇藤蓮台古墳群 (No119地点) は、雙尾根根上の古墳群である。3つの古墳群は近接・連続する尾根上に立地し、一連の古墳群として把握することもできる。直径9～19mの円墳が計20基分布するが、内15基は中期後半を中心とし、他5基は6世紀後半～7世紀代の後期古墳であった。中期後半を中心とする古墳群では、各古墳の周溝から土師器や須恵器、さらに石製紡錘車も出土した古墳がある。また、6基で木棺直葬の埋葬施設が発見されている。副葬品の多くは武器類であるが、玉類を含むもの、鉄斧等の農具を含むもの、さらに文殊堂11号墳と林2号墳では短甲も副葬されていた。この短甲がまず注目されるが、古墳群のほぼ全体を調査しており、立地・墳丘・埋葬施設・副葬品・供献土器の各要素における特色・注目点は、ここで概説できる量ではない。

一方、6世紀後半以降の後期古墳においては、文殊堂1・3・5号墳・宇藤蓮台3号墳が横穴式石室、対して林5号墳が横穴式木室(木芯粘土室)を埋葬施設としていた。また、文殊堂古墳群のある丘陵の東西斜面では、70基弱の横穴墓で構成される宇藤横穴群・天王ヶ谷横穴群(共にNo113地点)の全体が調査され、古墳群と横穴群の形成が時間的に一部並行することがわかっている。様々な墓制が展開する場所の調査として重要な資料となり得る。なお数基の横穴墓では、人骨が比較的残り良く検出された。横穴系埋葬施設における埋葬方法の検討の上でも貴重な資料となる。

その他、駒山古墳群 (No111地点) では古墳の周溝と判断される遺構、綱掛山古墳群 (No115地点) では直径10m程度の円墳である1号墳と後期の横穴式石室墳である2号墳が調査されている。

以上のように古墳・墓が多く調査されている一方、居住域の発見は少なかった。弥勒平遺跡 (No123地点) や北垣遺跡 (No113地点) では、古墳時代の可能性が高い竪穴住居跡が発見されている。しかし、年代を明確に示すことのできる遺物の出土がなく、いつの住居跡であるかの判断は難しい。また、両遺跡とも全体に削平を受けており、集落全体像を知ることはできない。ただ、北垣遺跡の北側には文殊堂古墳群や宇藤・天王ヶ谷横穴群、弥勒平遺跡の東には林古墳群が隣接しており、周溝墓・古墳・横穴墓と並行する居住域であれば注目に値する。



写真2 墳丘の検出 (No121地点 林古墳群)



写真3 横穴墓の検出 (No113地点 宇藤横穴群)

奈良～鎌倉時代

一部の古墳・横穴墓では8世紀代までの遺葬が認められている。その他、北垣遺跡（No113地点）や戸籠殿ノ谷遺跡（No109地点）では、奈良時代の土器が出土している。明確に住居跡に伴うものはないが、当時の人々の営みがそこにあったことは明らかである。

平安・鎌倉時代では、多くの遺跡で遺構もしくは遺物が発見されている。丘陵尾根上の善正庵遺跡（取2・取3地点）・文殊堂遺跡（No113地点）・宇藤蓮台遺跡（No119地点）では、遺構の形状・規模や出土遺物から墓であると判断できる土坑が数基発見されている。同じく尾根上に立地する綱掛山遺跡（No115地点）や片瀬遺跡（No116地点）でも平安時代の土器が出土している。ただし、遺構に伴った出土ではない。段丘上に立地する中屋敷遺跡（No112地点）・北垣遺跡でも、平安・鎌倉時代の土器が多く出土している。ともに掘立柱建物跡が多く発見されており、当時の建物跡も含まれている可能性がある。奥戸籠遺跡（No108地点）・鴨ノ前遺跡（No111地点）の調査では、本書中の報告のとおり丘陵裾部に立地する平安・鎌倉時代の集落跡の存在が認められている。

室町時代以降

段丘上に立地する中屋敷遺跡（No112地点）や北垣遺跡（No113地点）では、掘立柱建物跡等の集落遺構とともに中近世の遺物も多く出土している。さらに、北垣遺跡では周囲に散在していた中世石塔との関連も考えられる。火葬墓群が発見されている。このように、北垣遺跡では居住域と墓域が同じ段丘上に存在したことになるが、その遺構分布をみると、山寄りに墓、平野寄りに建物群といったように範囲を分けているようである。一方、同じく広い平坦面をもつ弥勒平遺跡（No123地点）でも、古瀬戸陶器をはじめとする中世遺物が出土している。しかし、小穴等の遺構が発見されてはいるものの、掘立柱建物跡が存在していると判断することは難しく、また遺構に伴った中世遺物の出土がない。

片瀬城跡（No116地点）は、中世山城として周知の遺跡になっていた。しかし、鉄釘等の出土があった程度で、明確に中世山城であることを示す根拠は得られなかった。現況観察で掘切の可能性が考えられた部分についても、遺構の規模・形状が似つかわしくないという指摘もあり、また山城の年代を示す遺物も出土していないことから、当時の掘切であると明確に判断することが難しい。なお、山城となる以前、室町時代の陶器が伴った土坑が数基発見されている。鉄釘・銅銭が納められた小壺も出土しており、地鎮に伴うものである可能性が考えられる。

以上、東から西まで多くの遺跡を調査し、様々な時代の遺構・遺物の発見をみるようになった。中でも第二東名のパーキングエリアにあたる丘陵地では、そこに広がる古墳群・横穴群・弥生墓群を広範囲に調査することができ、短甲出土等の注目に値する発見とともに、各時代の墓域全体について迫り得るものになった。

その他、弥生時代集落跡や中世集落跡等といった各遺跡を、比較的広く調査することができ、それぞれ本地域にとって貴重な資料になると考える。



写真4 掘立柱建物跡の検出（No112地点 中屋敷遺跡）

第5節 資料整理

1. 資料整理の体制

本事業では、第1節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したことから多くの資料整理が必要になってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施することが物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することになった。

森地区の資料整理は、平成12年度末時点で豊岡地区の現地調査が全て終了、森地区も一部を除いて現地調査を終了できたことから、平成13年度から開始した。現在（平成16年3月時点）、森地区の資料整理は豊岡地区・森地区・掛川地区の一部として、袋井整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製遺物のクリーニングおよび保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

森地区の資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第6表のとおりである。

第6表 資料整理の体制（平成15年度まで）

		平成13年度	平成14年度	平成15年度	
総務部	所 長	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	
	副 所 長	山下 晃	飯田英夫	飯田英夫	
	常務理事兼総務部長	糸田徳幸	糸田徳幸	糸田徳幸	
	次 長			鎌田英巳	
	総務課長	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	
	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	
	担当	副主任	鈴木秀幸		
		主事		鈴木秋博	鈴木秋博
		部 長	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平
	調査研究部	次 長	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳
担当課長		及川 司	中嶋航夫	中嶋航夫	
保存処置室長		西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	
工区主任		加藤理文			
主任調査研究員		長尾一男			
調査研究員			大谷宏治	大谷宏治	田村隆太郎
			田村隆太郎	田村隆太郎	

2. 資料整理の方法と経過

例言2にも示したが、現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成していくことになった。また各地区の最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめたもの（総論）を掲載することになった。

以上により、森町における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「森町-1」として、総論と善正塚遺跡、奥戸綿遺跡、戸綿殿ノ谷遺跡、鴨ノ前遺跡、鴨山遺跡・古墳群の報告を掲載し、続く「森町-2」以降の報告書に残る遺跡の調査報告を掲載することとした。

報告書作成の前に、各現地調査の結果に基づいて必要な周知の埋蔵文化財包蔵地の追加登録や登録内容の変更が行われた。周知内容の変更等は、静岡県教育委員会および森町教育委員会によって行われたが、現地調査終了時から多少の時間が経過していた。そのため、変更以前に調査成果の一部を公表した場合が生じたが、その場合は当然、変更前の遺跡内容や古墳番号で公表している。本書および各遺跡の報告書においては、変更された遺跡名・遺跡範囲・古墳番号等に基づくこととし、これまで公表しているものとで相違がある場合は、本書および各遺跡の報告書をもって訂正することとする。変更内容の詳細は各遺跡の報告中で触れることにする。



写真5 土器の復元



写真6 土器の実測



写真7 台帳の作成



写真8 図面のトレース

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために森地区について一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すこととする。

本章（総論）に関しては、調査日報等の調査資料（書類）の整理、挿入図の作成、報告の執筆・編集といった資料整理および報告書作成作業を、平成13年4月～平成14年3月および平成15年11月～平成16年3月に実施した。「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」の全体的な体裁についての検討に時間を要したこと、森地区の現地調査の完全な終了が平成15年になったこと、さらに本書掲載以外の遺跡や森地区以外の遺跡の資料整理と並行したことから、作業は断続的に実施することになった。

本章執筆等にあって、次の方々に貴重な御助言とともに多くの御協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

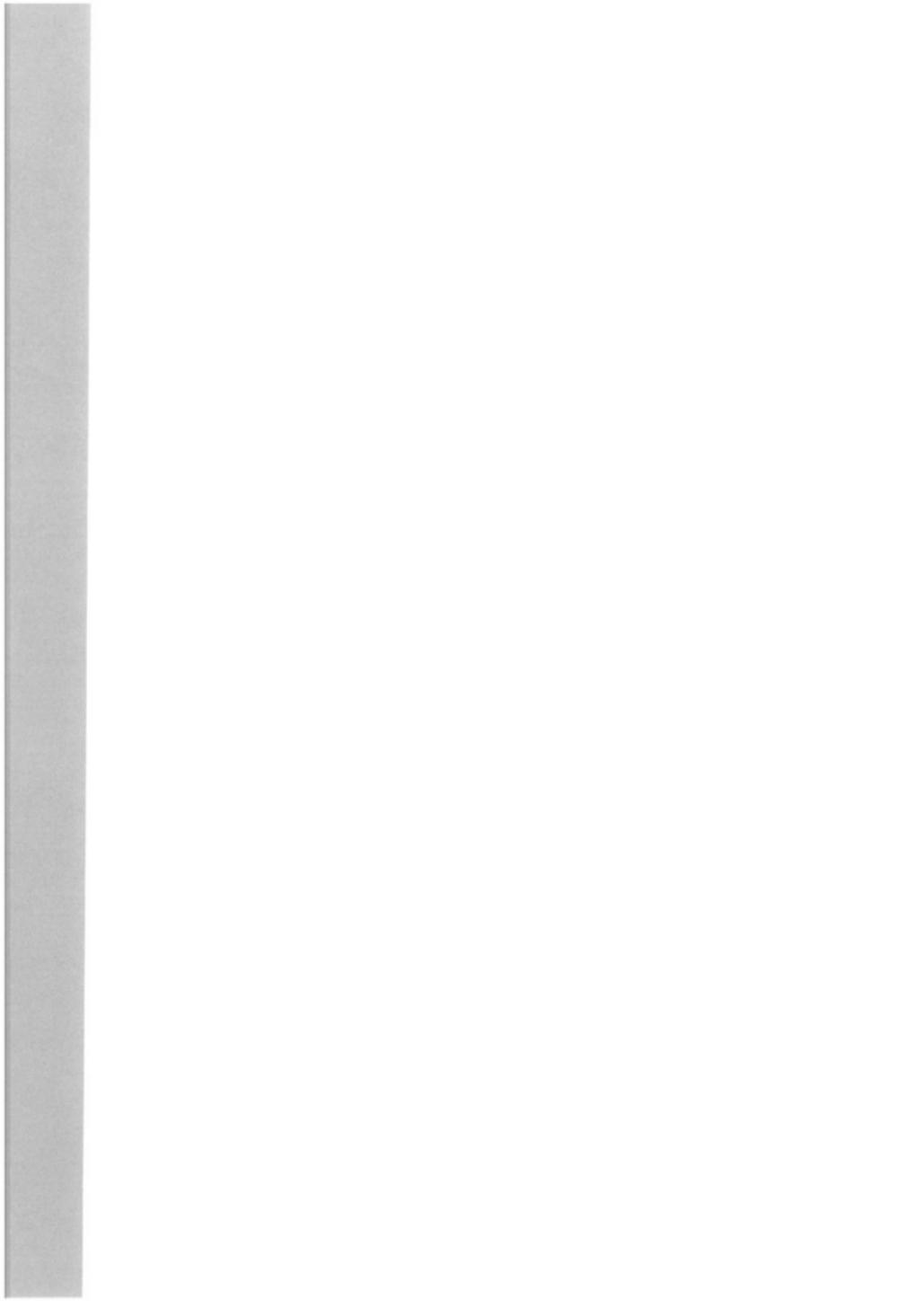
伊藤美鈴 北島恵介 廣川達麻

参 考 文 献

- 静岡県 1930 『静岡縣史』第1巻
静岡県 1931 『静岡縣史』第2巻
静岡県 1992 『静岡県史』資料編3
静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城館跡』
静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』
静岡県教育委員会 1989 『静岡県の窯業遺跡 本文編』
静岡県教育委員会 1989 『静岡県文化財地図Ⅱ－浜津市以西－』
静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳－資料編－』
静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳 個別報告編－』
日本楽器製造株式会社 1977 『日当古墳』
日本楽器製造株式会社 1979 『観音堂横穴群』
森町教育委員会 1996 『静岡県森町 飯田の遺跡』
森町教育委員会 1998 『奥谷田1遺跡・II遺跡』
森町史編さん委員会 1997 『森町史』通史編上巻
森町史編さん委員会 1998 『森町史』資料編「考古」
森町史編さん室・社会教育課文化振興係 1999 『図説 森町史』

第2章 善正庵遺跡

第二東名取2地点、取3地点



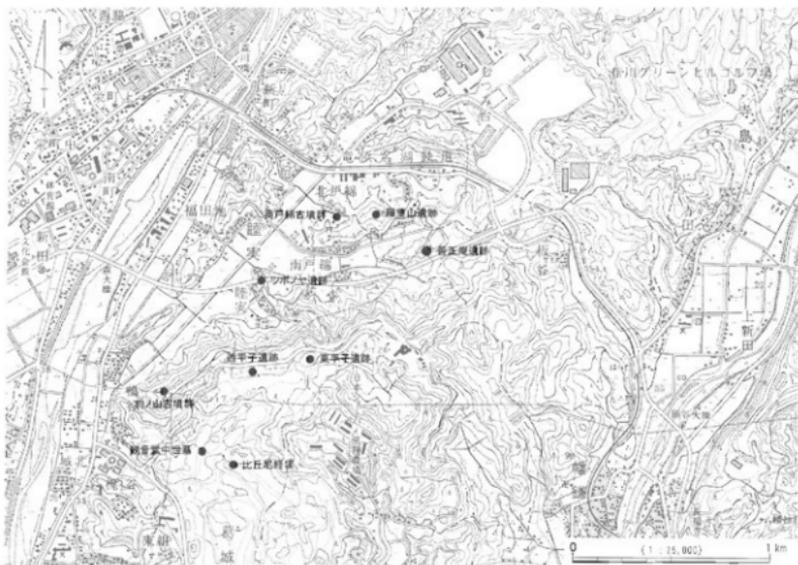
第1節 位置と環境

1. 位置と地理的環境

善正庵遺跡は森町南東部の太田川東岸、森町地実字善正庵609-1他に位置する(第11図)。森町域において、太田川東岸には森町向天方から袋井市春岡にのびる丘陵地がせまっている。陸地には、この丘陵地に挟まれた大きな谷が一つ存在する。この谷は南北2つの谷に分かれて、太田川流域から北東方向にのびている。南側(南戸綿)の谷は東に、北側(北戸綿)の谷は北東にのびている。

南戸綿の谷はその東端(最奥)部で、さらに二又に分かれている。その北側の谷の最奥には、善正庵池が存在している。善正庵遺跡は、この池を囲む丘陵斜面および南側の丘陵上に築囲している。善正庵池の南の丘陵は、南斜面が急であるのに対して、北斜面は比較的緩やかになっている。特に、善正庵池に面した部分は、最も緩やかな丘陵斜面になっている。また、この丘陵は全体的に瘦せ尾根の地形を呈しているが、その中でも、頂上部が極端に狭くなった部分と比較的広い平坦面をもつ部分がある。以上より、この丘陵の中でも、善正庵池に面した緩斜面と平坦な頂上部を中心に遺跡が立地していると想定することができ、逆に丘陵南斜面等には遺跡の存在は想定し難い。

善正庵遺跡は、その位置が南戸綿の谷の最奥部であることから、西に南戸綿の谷部を望むことができる程度で、見晴らしは決して良くはない。丘陵の大半は、茶畑に利用されていたが、大規模な遺成跡を観察することはできなかった。ほぼ、本来の地形を残していると考えることができた。



第11図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 歴史的環境と調査歴

善正庵池北側の丘陵は、本遺跡の丘陵より大きな丘陵であり、南戸綿の谷と北戸綿の谷に挟まれた位置にある。この丘陵では、弥生時代後期の土器が出土している藤重山遺跡、奥戸綿古墳群が位置している。藤重山遺跡出土土器には、口縁部～頸部のない大型壺があり、土器棺であったものと予想される(大橋1998)。古墳時代だけでなく、弥生時代にも墓域として利用された丘陵であったと判断できる。

南戸綿の谷の南側丘陵では、その頂上部に西平子遺跡・東平子遺跡・前ノ山古墳群等が位置している(森町教育委員会1996、伊藤1998)。西平子遺跡・東平子遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡が発見されている。さらに、そこから北に派生する支尾根上には、奈良～平安時代の土器が出土したツボノヤ遺跡が位置している(伊藤1998)。

以上、南戸綿の谷周辺では、広範囲を望むことができる丘陵頂上部には、弥生～古墳時代の遺跡・古墳群が多く存在していることがわかる。一方、比較的小さな丘陵や支尾根、見晴らしの良くない場所では、弥生・古墳時代の遺跡は比較的少ないが、奈良・平安時代の遺跡が発見される場合がある。

本遺跡は、森町教育委員会による踏査等によって発見された遺跡である。この踏査では、善正庵池の北東で弥生～古墳時代の土器片が発見されている(森町史編さん委員会1998)。立地地形からみると、広範囲に多くの遺構が形成された遺跡を想定することは難しく、少なくとも大集落が形成されるような地形は呈していない。本遺跡は、墓域として利用されるような痩せ尾根の丘陵に立地しており、また見晴らしの良くない点は、周辺の古墳群とも異なる。



第12図 本調査範囲とグリッド配置

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

本調査を実施した区域は、2ヶ所に分かれており、I区・II区として扱うこととした。I区は、善正庵池の南側の斜面にあたる。現況での標高は約60～65mを測る。II区は、I区と同じ善正庵池の南側丘陵に位置するが、丘陵上の東端寄りにあたる。現況での標高は約62～67mで、丘陵尾根上の比較的緩い傾斜の部分を中心とする。

確認調査の結果、丘陵の南斜面等では遺跡の広がりを確認することができなかった。一方、I・II区間の丘陵頂上部や北側斜面は、今回の確認調査を含めた対象範囲の外となり、遺跡が広がっている可能性も考えられる。丘陵頂上部の内で最も幅の広い部分是对象範囲外にあり、本遺跡の中心的な位置となっている可能性もある。

調査は、I区・II区を別々に実施した。ただし、調査の方法は、I・II区とも以下のとおりを実施している。

まず、調査区および作業道や作業員棟等を設置した後、重機による表土除去を行った。その後、平面的な遺構プランの検出を人力で行い、続いて遺構検出も人力で行った。遺構の検出に際しては、まず主軸直方向に土層帯を設けるかプランの半分を検出し、土層断面によって覆土の状況を観察・注記、土層断面を記録した。その上で、遺構全体の検出を行った。

遺構調査に際しては、まず座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭の設置を委託して実施した。グリッドは、2つの調査区にまたがるように設定した。遺構番号は、遺物出土遺構についてのみ遺構の種類に関わらず、発見順に付した。ただし本報告に際しては、全遺構に対して遺構種類別に新たな遺構番号を付した。遺物については、遺構内出土遺物は遺構ごと、遺構外出土遺物はグリッドごとに取り上げた。ただし、遺構外出土遺物は少ないため、本報告に際しては一括にした。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、設定したグリッドに沿って作成した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、6×7版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影等には、高所作業車を使用した。



写真9 善正庵池と南戸結の谷を北東から望む（第二東名建設中）

2. 発掘調査の経過

I 区

I 区は、平成12年4月13日に発掘調査を開始した。

4月13・14日に調査区を設定し、重機による表土除去を行った。続いて、現地作業員棟・駐車場・作業道を設置し、資器材等の準備を4月中に行った。基準点測量およびグリッド杭の打設は株式会社フジヤマに委託し、その現地作業を4月21日～24日に行った。

5月1日から人力による作業を開始した。まず、表土下に暗褐色土の堆積が確認されたため、この土層を掘削し、遺構プランの検出を行った。その後、遺構検出作業・遺物取り上げ・遺構の検討・記録作業を行った。遺構検出作業は5月10日までに終了し、5月11日に調査区全景写真の撮影、5月18日まで地形測量および遺構実測を行った。撤収・撤去も5月18日までに、現地作業を終了した。ただし、作業員棟はII区の調査に引き継いで使用することにした。

II 区

II 区は、平成12年5月10日に発掘調査を開始した。

5月10・11日に調査区を設定し、重機による表土除去を行った。包含層等の土層は確認できず、表土除去によって遺構検出面を検出することができた。以上の作業と並行して、作業道を設置し、資器材等の準備を行った。

5月12日から人力による作業を開始した。遺構プランの検出を開始し、随時、遺構検出作業・遺物取り上げ・遺構の検討・記録作業を行った。また、基準点測量およびグリッド杭の打設は株式会社フジヤマに委託し、その現地作業を5月18日～19日に行った。

遺構検出作業は5月24日までに終了し、5月25日に調査区全景写真の撮影、5月30日までに地形測量および遺構実測を行った。撤収・撤去も5月30日までに、現地の作業を終了した。

3. 資料整理と報告書作成

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成13年4月から、本書掲載中の他遺跡と同時に開始した。ただし、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査終了直後の基礎整理において、出土土器の洗浄・注記・接合・復元、遺構図・写真等といった現地調査の資料や出土遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理においては、遺構図の修正作業が中心になった。

続いて、土器の図化作業、図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は、4×5判（白黒ネガ・リバーサル）、6×7判（白黒ネガ・リバーサル）、35mm判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。

第3節 調査の成果

1. 概要

(1) 地 形

I区については、若干の攪乱部分も確認されたが、全体的には現況ときほど変わらない状況であり、本来の地形を検出することができた。ただし、調査区の北辺部、善正庵池側は大きく崩落しており、本来の地形が失われた状況が確認できた。

I区で検出した地形は、一様に広がる丘陵斜面の地形である。調査区東寄り、傾斜角約12°の斜面で、北側へ下がるにつれて緩やかになっている。また、調査区西寄り、東寄りに比べて若干緩やかな斜面になっている。

II区は、溝状の攪乱がみられた程度で、大きな地形変化や攪乱は認められなかった。厚く堆積した土層もなく、本来の地形は、概ね現況と同様の地形であったことが確認できた。

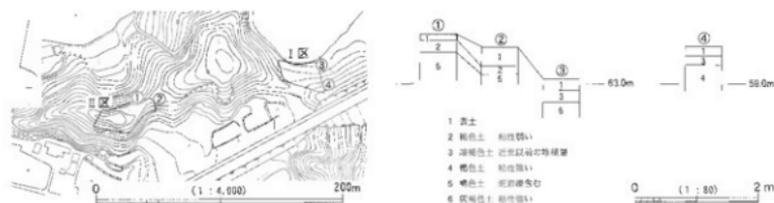
II区で検出した地形は、丘陵頂上筋の地形である。調査区西半部は東半部に比べて高く、また頂上の平坦面も比較的広くになっている。II区内で一番高く頂上部の広い部分は、西半部でも中央寄りにある。東半部は、緩やかに東へ下がる地形で、頂上平坦部も狭くなっていく。以上、調査区中央西寄りの比較的広く高い頂上部を中心として、東西に徐々に下がり、幅が狭くなる地形であると概述することができる。また、南北の丘陵斜面部は、急傾斜面になっている。

(2) 土 層

基本土層は、第13図のとおりである。

I区では、表土層（第13図第1層）直下が暗褐色土の堆積層（第13図第3層）となる。この堆積層からの遺物の出土はない。堆積の時期は判断できないが、堆積層の上層では遺構を検出することができなかった。よって、遺構検出面はこの堆積層よりも下になる。遺構検出面は、斜面上部では粘性の強い褐色土層の上面、斜面下部では灰褐色土層の上面となっている。

II区では、表土層（第13区第1層）と崩落や草木等の影響によって形成された土層（第13図第2層）の直下が、遺構検出面となる。遺構検出面は、粘性が強く泥岩礫を含む灰褐色土層となっている。遺物包含層・遺跡形成後の堆積層は認められない。



第13図 基本土層

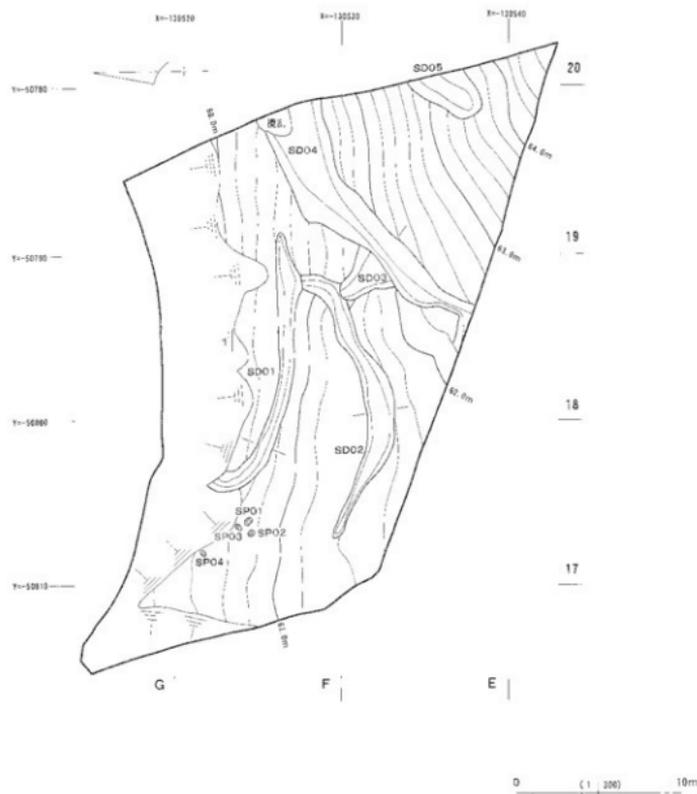
(3) 遺構・遺物の概要

検出された遺構は、I区では溝状遺構5条と小穴4基、II区では土坑9基である。

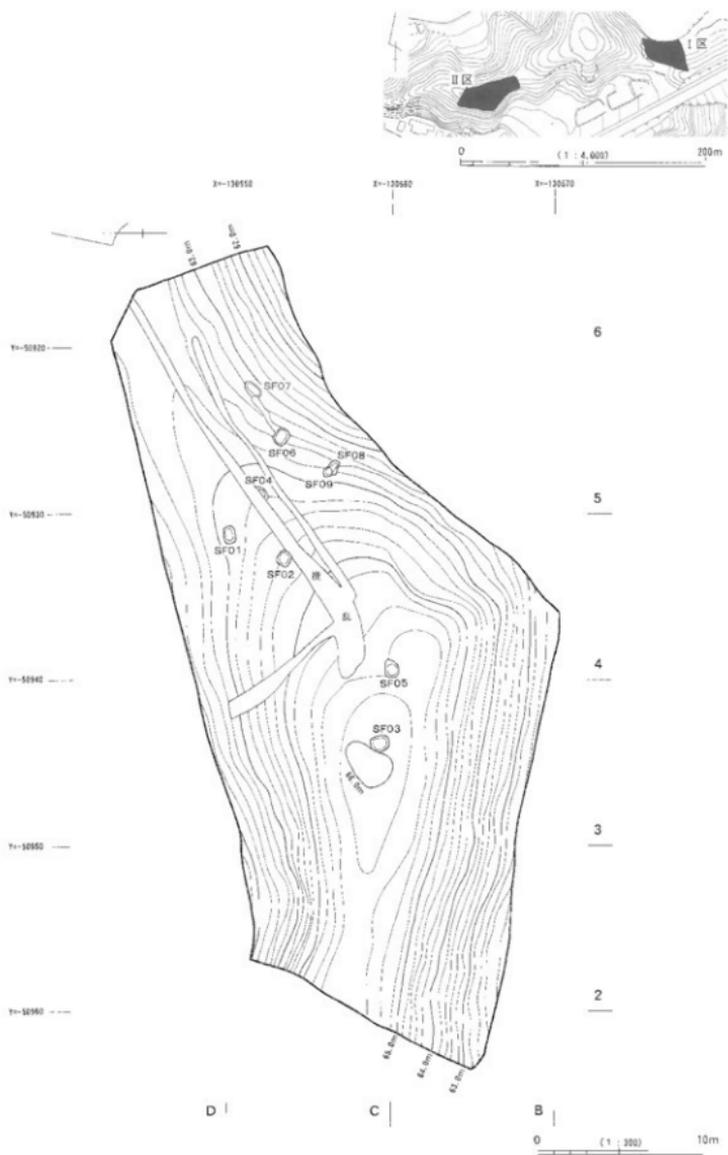
II区の土坑の内、SF09からは灰釉陶器が出土しており、遺構の形状等から土坑墓の可能性が高い。他の土坑も、遺構の形状や覆土から同様のものと考えられる。I区で検出した溝状遺構は、出土遺物がなく時期も性格も不明である。小穴にも時期・性格の判断できるものはない。

II区でも溝が確認されているが、近現代の器物が多く出土している。また、I区の溝状遺構と異なって直線的であり、畑等の区画溝である可能性が考えられる。よって、遺構としては扱わない。

出土遺物は、全体的に少ない。中世の陶器と土師質土器、近世以降の陶磁器やかわらけて占められるが、図化できない小破片が多く、時期等がわかる遺物は少ない。SF09出土の灰釉陶器やI区表面採集の壺が本遺跡出土遺物の中で古手の遺物であり、平安時代に位置付けできるものである。



第14図 I区遺構配置



第15图 I区遺構配置

2. 遺構と遺物

検出された遺構は先述のとおり、Ⅰ区では溝状遺構5条と小穴4基、Ⅱ区では土坑9基だけである。以下、Ⅰ区とⅡ区の区別に関係なく、遺構種類別に記述することにする。なお、遺構番号もⅠ区・Ⅱ区の区別に関係なく遺構種類別に連番を付している。

(1) 小 穴

小穴については、下の第7表のとおりである。いずれの小穴についても、時期・性格を明確にすることはできない。

第7表 小穴一覧表

遺構名	グリッド	平面形	最大径	検出面標高	底面標高	覆土	切り合い
SP01	F-17	楕円形	0.48m	60.73m	60.55m	暗褐色土層	なし
SP02	F-17	楕円形	0.35m	60.76m	60.54m	暗褐色土層	なし
SP03	F-17	楕円形	0.41m	60.68m	60.58m	暗褐色土層	なし
SP04	F-17	楕円形	0.32m	60.44m	60.37m	暗褐色土層	なし

(2) 土 坑

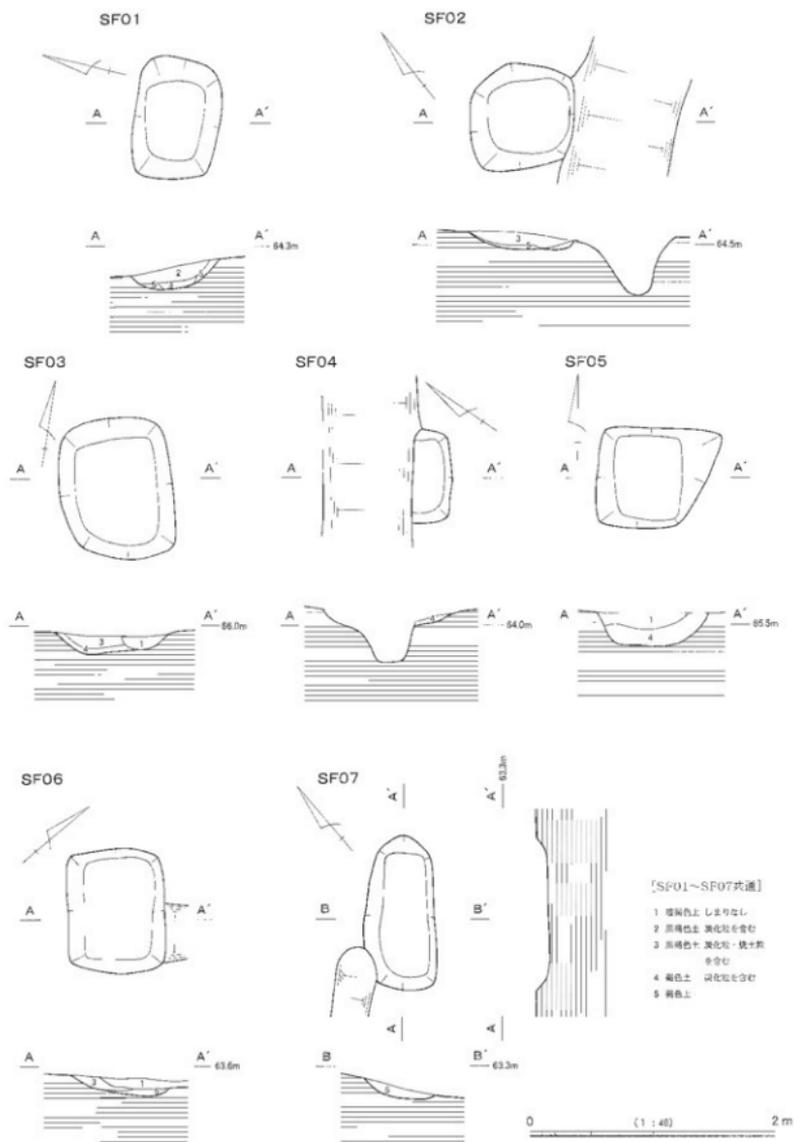
土坑は、計9基発見されたが、いずれもⅡ区の丘陵頂上部に位置している。平面形は長軸1m前後、短軸0.8m前後の平面長方形の土坑が多い。覆土は、黒褐色・暗褐色を基調とする層と、土坑の底や壁寄りに粘性の強い褐色土の層が確認でき、炭化粒や焼土粒を含む土坑が多い。以上のように共通点が多く、これら土坑は同様の時期・性格の遺構であると判断することができる。また、以上の特徴から埋葬遺構の可能性が高いと考えられるが、残存する埋葬骨はない。出土遺物も少ない。

SF09からは、10世紀後半に位置付けることができる灰釉陶器の碗が出土している。よって、9基の土坑は平安時代後期の遺構である可能性が高いと判断することができる。

S F 0 1 (第16図)

C-4グリッド北東隅の、検出面標高約64.2mに位置する。平面は長軸約0.97m、短軸約0.69mの長方形であり、長軸方向はN-約76°-Eを示す。深さは約0.24mを測る。覆土は大半が黒褐色土で、炭化粒や焼土粒を含む層である。ただし、下部の周縁壁寄りでは、粘性の強い褐色土が部分的に認められる。

上層から染付磁器片1、土師質土器片2、かわらけ片2が出土しているが、SF01に伴うものかは疑問である。



第16図 SF01~SF07

S F 0 2 (第16図)

C 4グリッド北東部の、検出面標高約64.6mに位置する。東端が掘乱で破壊されているが、平面は一辺約0.88mの方形であると復元できる。北東方向軸がN-約37° Eを示す。深さは約0.13mを測る。覆土は、大半が黒褐色土で、炭化粒・焼土粒を含む層である。ただし、周縁壁寄りから底にかけては、泥岩礫を含む褐色土が認められる。

出土遺物はない。

S F 0 3 (第16図)

C-3グリッド南辺中央の、検出面標高約66.0mに位置する。平面は長軸約1.17m、短軸約0.91mの長方形であり、長軸方向はN-約16°-Wを示す。深さは約0.17mを測る。覆土は、大半が黒褐色土で、炭化粒・焼土粒を含む層である。ただし、周縁壁寄りから底にかけては、泥岩礫を含む褐色土が認められる。

出土遺物はない。

S F 0 4 (第16図)

C-5グリッド北西部の、検出面標高約64.1mに位置する。北西部が掘乱で破壊されており、平面は尾根筋方向の軸で約0.77mを測る方形であるとはかわからない。残存部での深さは約0.10mを測る。残存部の覆土には、黒褐色土層と炭化粒を少量含んだ褐色土層が認められる。

出土遺物はない。

S F 0 5 (第16図)

B-4グリッド北西隅の、検出面標高約65.6mに位置する。平面形は長軸約0.83m、短軸約0.77mの長方形であり、長軸方向はほぼ南北を示す。ただし、東辺に関しては、底に対して上部が大きく張り出しており、検出面での北辺は約0.98mを測る。深さは約0.28mを測る。覆土は上層が暗褐色土層、下層が褐色土層である。褐色土層には炭化粒・焼土粒が比較的多く含まれており、他の土坑の覆土とは異なる状況を示す。

出土遺物はない。

S F 0 6 (第16図)

C 5グリッド中央部の、検出面標高約63.6mに位置する。平面は長軸約1.03m、短軸約0.77mの長方形であり、長軸方向はN-約49°-Wを示す。深さは約0.14mを測る。覆土は、大半が暗褐色土で、炭化粒・焼土粒を含む層である。ただし、底には泥岩礫を含む褐色土が認められる。

出土遺物はない。

S F 0 7 (第16図)

C-5グリッド北東部の、検出面標高約63.2mに位置する。平面は長軸約1.26m、短軸約0.58mの長楕円形であるが、底面は長方形を呈する。長軸方向はN-約40°-Eを示し、深さは約0.15mを測る。覆土は暗褐色土層である。炭化粒・焼土粒は含まず、褐色土層も認められなかった。

出土遺物はない。

S F 0 8 (第17図)

C-5グリッド南西部の、検出面標高約63.8mに位置する。西部がSF09に切られている。平面は長軸0.91m以上、短軸約0.73mの長楕円形であり、長軸方向はN-約43°-Wを示す。深さは約0.33mを測る。覆土は、大半が炭化粒を含む黒褐色土層であるが、壁寄りには褐色土が認められる。

出土遺物はない。

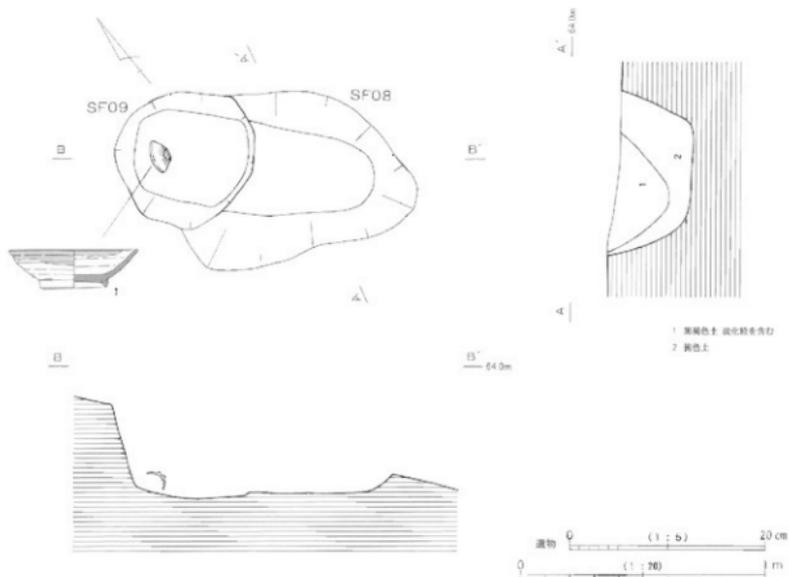
S F 0 9 (第17図)

C-5グリッド南西部の、検出面標高約63.9mに位置する。東部でSF08を切っている。平面は長軸約0.57m、短軸約0.54mの長方形であり、長軸方向はN-約42°-Wを示す。深さは約0.38mを測る。覆土は暗褐色土層であり、炭化粒・焼土粒を含む。ただし、SF01等と同様に、壁寄りには泥岩礫を含む褐色土が認められる。

遺物は、土師質土器片1、須恵器片1が上層から出土しているほか、灰軸陶器1点が下層の西端部で出土している。

遺物(第19図) 1は灰軸陶器の碗で、完形で出土している。漬掛けによる施釉が認められる。胎土から滑ヶ谷産のものとすることができるが、色調は若干赤味をおびる。体部は歪んでいる。器形から、10世紀後半頃(滑ヶ谷古窯跡群の灰軸陶器編年(松井1989)Ⅴ期-1)に位置付けることができる。

遺構に伴う遺物としては、上層出土遺物よりも、下層出土の灰軸陶器が評価できる。遺構の時期は、灰軸陶器の時期である10世紀後半以降ということになる。



第17図 SF08・SF09

(3) 溝状遺構

溝は、Ⅰ区・Ⅱ区ともに発見されている。Ⅱ区の溝は直線的であり、また近現代の器物が出土している。一方のⅠ区で発見された溝は、弧を描くような溝で、Ⅱ区の溝とは異なる形状を呈している。遺物の出土がなく時期が特定できないが、Ⅱ区の溝のように近現代の器物が出土することもなかった。以上より、Ⅰ区の溝はⅡ区の溝と異なる時期・性格のものである可能性が考えられ、Ⅰ区の溝を遺構として扱うことにする。

SD01 (第14・18図)

F-19グリッド西寄りの検出面標高約61.8mの位置から、等高線に沿って西へのびる。F-17グリッドまでのびると、北に曲がり、斜面下方に向かう。幅は、大半の部分で1.0m程度を測る。深さは、平均で約0.5mを測る。覆土は、上部が暗褐色土層、下部が褐色土層であるが、両者が混じり合う部分もある。

出土遺物はない。

SD02 (第14・18図)

F-18グリッド南東部にSD02の東端が位置しているが、この東端はSD01に切られている。SD02は、そこからF-17グリッド南西部にかけて、南(斜面上)方向に凸になる弧を描く。幅は一定ではなく、最大1.6mを測る。深さは、平均で約0.3mを測る。覆土は、暗褐色・褐色を基調とし、泥岩礫・炭化粒を部分的に含んでいる。

出土遺物はない。

SD03 (第14・18図)

E-18グリッド東寄りで、SD02とSD04を南北に結んでいるような溝である。北端はSD02に、南端はSD04に切られている。幅は南が3mを超え、北は1m以下と狭くなる。深さは、平均で約0.3mを測る。覆土は、暗褐色・褐色を基調とし、炭化粒を部分的に含んでいる。

出土遺物はない。

SD04 (第14・18図)

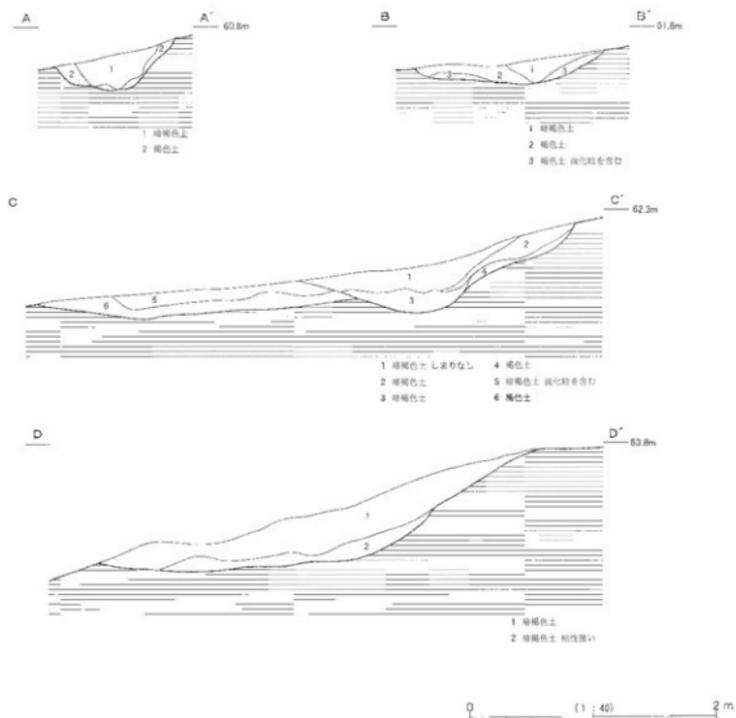
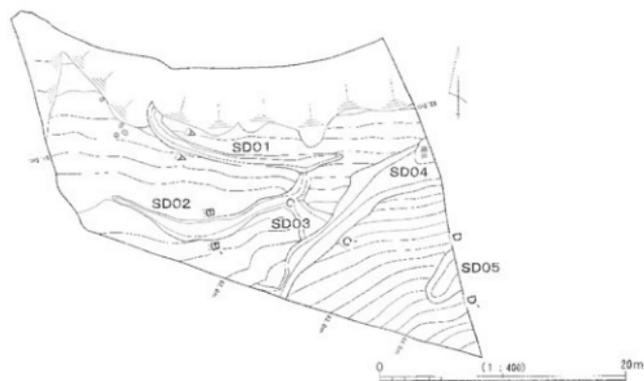
調査区東辺中央から調査区南辺中央にかけて、北(斜面上)方向に凸になる弧を描く。幅は一定ではなく、最大で約3.3mを測る。深さは、平均で約0.7mを測る。覆土は、暗褐色を基調とした土層で占められている。

出土遺物はない。

SD05 (第14・18図)

調査区東辺南寄りから、西方向へのびる溝である。幅は最大で約3.4mである。深さは、平均で約0.9mを測る。覆土は暗褐色を基調とした土層で占められている。

出土遺物はない。



第18図 SD01～SD05土層断面

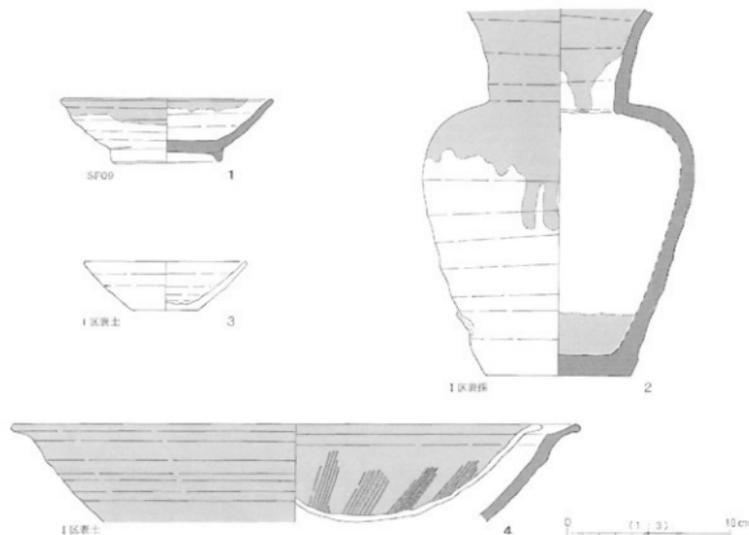
(4) 遺構外の出土遺物

遺構外の遺物として、表面採集や表土・攪乱から出土したものがある(第19図)。

2はI区で表面採集された陶器の壺である。胎土・色調の特徴では、渥美産のものと近似している。軸葉が口縁部へ肩にかけておられ、底部内面にも厚く溜まっている。胴部上半部の内面は焼成のためか、赤味を帯びている。胴部下半部の外面は、調整の粗雑な部分もみられる。口縁部が欠損しているが、形状等から12世紀代に位置付けることができる。壺の中には、自然流入土が入っていただけである。

3はC-3グリッドの表土から出土したかわらけで、ロクロ成形によってつくられている。4はC-2グリッドの表土から出土した志戸呂産の陶器で、擂鉢である。形態的特徴から、3・4とも近世の遺物で、3が17世紀前半頃、4が18世紀代に位置付けることができる。

出土土器片は総計約90点を数え、1区が約3分の2を占める。中近世の陶磁器やかわらけが主である。山茶碗片は9点あるが、全て渥美・湖西産の碗である。他の中近世陶磁器には様々な種類が含まれているが、小破片で時期の選別の難しいものばかりである。



第19図 出土遺物

第8表 遺物観察表

番号	検出 番号	区	遺構 層位	種別	産地	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調	備考	
1	19	4	II	SF09	灰軸 陶器	清ヶ谷	碗	全体	100	4.0	13.1	13.1	6.3	良好	暗茶褐色	横掛け軸 重ね焼き痕
2	19	4	I	表採	陶器	渥美?	壺	胴部 底部	90		16.7		9.0	良好	灰色	内外面に触あり
3	19	4	I	表土	かわ らけ			全体	40	3.0	(10.0)	(10.0)	3.9	良好	茶褐色	ロクロ成形
4	19	4	I	表土	陶器	志戸呂	擂鉢	口 ～ 胴部	15		(24.8)	(34.8)		良好	赤褐色	

()内の数値は推定値

第4節 まとめ

1 奈良時代以前

土師器片や須恵器片が出土しているが、小破片で、出土量も少ない。周囲から流入した可能性も考えることができ、この時期は本遺跡の主体時期とはなり得ない。

2 平安時代

Ⅱ区では、土坑が9基発見されている。9基の土坑は、概ね規模・形態・覆土の特徴が近似しており、同様の時期・性格を帯びた遺構と判断できる。SF09からは10世紀後半に位置付けることができる灰釉陶器の碗が出土している。9基の土坑は、以下に述べるとおり、その形状や覆土の特徴から埋葬遺構である可能性が高いと考えたい。また埋葬の時期は、SF09出土遺物から概ね10～11世紀代の範囲内にあたと考えたい。

土坑は全て平面方形を呈しており、その規模は長軸でも1.3mを超えるものはない。比較的狭い丘陵上という立地、さらに居住や生産に関わる遺構が発見されていないことを考慮すれば、9基の土坑は埋葬に関わる遺構である可能性が高いと判断することができる。しかし、成人を伸展葬で埋葬するには規模が小さい。底面や壁面に被熱跡がないものの、覆土に炭化粒や焼土粒が含まれていることを評価すれば、火葬場で火葬された骨を埋葬した可能性も考えることができる。

陸奥地域での古代・中世墓の調査事例はない。森町飯田の丘陵地では、12世紀後半から13世紀後葉にかけて経典を埋納したと考えられる比丘尼経塚（足立1998）の他、12世紀後半から13世紀前葉の谷口中世墓（森町教育委員会1996）等の中世墓も知られている。ただし、12世紀以降の墓域の調査事例が多いのと比較すると、11世紀代の墓域の事例は極端に少ない。

磐田市住吉遺跡（磐田市教育委員会1993）では、中世集石墓の他に平安時代の土坑墓群が調査されている。本遺跡の土坑墓と異なる点として、丘陵裾部に立地する点、土坑の規模がより大きい点、出土遺物（副葬品）に灰釉陶器の碗の他、土師器の碗・甕が含まれるものがある点があげられる。しかし、平面形が長方形を呈している点、底面・壁面に被熱跡がないものの覆土に焼土が混入している点は、本遺跡の土坑と共通している。住吉遺跡の調査報告では、これを一の谷中世墳墓群以前の遠江国府に関連した墓地として位置付け、断定的ではないものの火葬を採用した墓地であることを示唆している。

火葬については、古代では上位階層で採用される葬法であり、下層庶民にまで採用されるのは中世の段階であると考えられている（藤澤1997）。静岡県内では住吉遺跡の他に、志太郡御推定地近くの内瀬戸火葬墓群がよく知られているところであろう。

本遺跡の名称にもなっている「善正庵」については、「戸緯十六代九峯満教殿七十二才ニテ法名ヲ受ク、九峯院殿圓山善照大禪定門庵ヲ結ビ閑居ス。故ニ善照庵ト号ス。」と、1826（文政9）年の「戸緯親白九峯傳記」に記されている。そこには、戸緯九峯氏が古墳時代後期に都から派遣されてきたことについても記されている。しかし、伝記という文書の性格上、事実であるとは限らない。本遺跡では、古代の上位階層者が埋葬されたとする明確な根拠を示すことは難しい。火葬に伴う埋葬遺構とは別に、屈葬による土葬の可能性等も考えておかなければならない。当時の墓制・葬制や陸奥地域についての新たな調査事例や詳細な検討・研究によって、本遺跡の評価についても再検討の対象となれば幸いである。

なお、Ⅱ区は表土直下が遺構検出面であり、崩落等によって土坑の上部構造は知ることができない。

Ⅰ区では、平安時代の遺構は発見されていない。ただし、12世紀代に位置付けることができる灰釉陶器の甕が表面採集されている。大きな地形変化がないにもかかわらず、Ⅰ区から平安時代の遺構の発見

がなかったことを考えれば、周辺域から流入した遺物と考えることができる。先述のとおり、本遺跡の丘陵に人が居住できる空間があったとは想定し難い。すなわち、経塚が墓域に伴っていた壙である可能性が考え易い。仮に、発見された壙が埋葬に伴うものであったならば、Ⅱ区の土坑墓に続き、12世紀代にも墓域としてこの丘陵が利用されたと判断することが可能になる。また、経塚に関連する遺物であったとしても、この丘陵が霊地として特別に意識されていた可能性は高くなる。

もちろん、これは壙が本遺跡に伴うものであるという仮定、さらに経塚もしくは埋葬に伴う壙であるという仮定の上で成立する評価である。今後の発見・調査事例や、詳細な検討によって否定される可能性もあることは、十分に承知しておかなければならない。

3 鎌倉時代以降

山茶碗や土師質土器、その他の中世遺物の破片も出土している。ただし、鎌倉時代や室町時代の遺構の発見はなかった。すなわち、鎌倉時代以降の遺跡が存在するという確証を得ることはできない。

Ⅰ区の出土遺物には17～18世紀のものが目立ち、溝状遺構はその頃のものととも考えられる。しかし、溝状遺構に伴う遺物はない。また、畑等の区画溝とも考えられるが、性格を特定する根拠もない。

4 結 語

以上、本遺跡は平安時代後半を主とする遺跡であると把握することができる。遺跡の範囲については、第2節1でも触れたように、またⅠ区で他から流入・移入したと判断できる灰釉陶器の壙が表面採集できたことから、第二東名路線外に及ぶと考えることができる。

調査した遺構・遺物は少なく、検討も十分であるとはいえない。ただ、本遺跡は平安時代の墓域であり、当時の戸和田郷、もしくは森町飯田等を含む飯田荘において、谷奥のこの丘陵が墓域もしくは霊域として意識されていたと考えることは十分に可能であろう。

現地調査および本報告の作成に当たっては、次の方々には有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

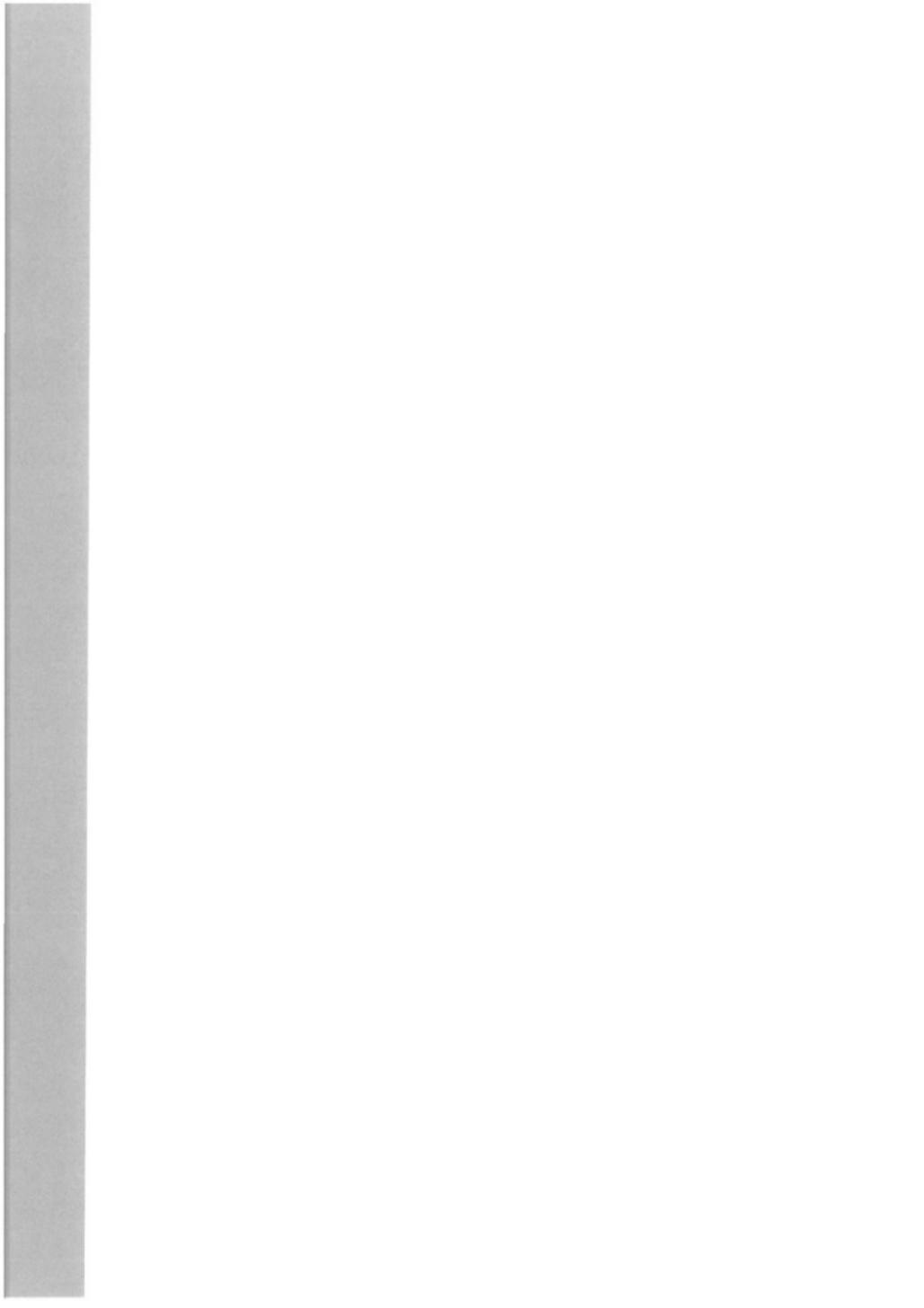
伊藤美鈴 北島恵介 柴田 聡 廣川達麻 松井 明

参 考 文 献

- 足立順司 1998 「古代末期の地方経塚-森町における二例」『森町史』資料編一考古 森町
伊藤美鈴 1998 「150 ツボノヤ遺跡」『156 前ノ山古墳群』『森町史』資料編一考古 森町
磐田市教育委員会 1993 「住吉遺跡発掘調査報告書」
大橋保夫 1998 「148 藤垂山遺跡」『149 奥戸古墳群』『森町史』資料編一考古 森町
中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真岡社
藤澤典彦 1997 「中世墓地の成立と終焉」 静岡県考古学会シンポジウム1996年度「静岡県における中世墓」 静岡県考古学会
松井 明 1989 「宮ノ古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡 (静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)』 静岡県教育委員会
森町教育委員会 1996 「静岡県森町 飯田の遺跡」
森町史編さん委員会 1998 「森町史」資料編一考古 森町

第3章 奥戸綿遺跡

第二東名No.108地点



第1節 位置と環境

1. 位置と地理的環境

奥戸綿遺跡は森町の南東部、森町陸実字奥戸綿550-1他に位置する。太田川東岸の丘陵地の中で、陸実地域には北東にのびる比較的大きな谷が存在する。この谷は、北東にのびる北戸綿の谷と、東にのびる南戸綿の谷に分かれている。

南戸綿の谷の南側丘陵には、いくつもの支丘陵と支谷が連続している。本遺跡は、その一支谷部に位置している。この支谷は北西に開く谷であるが、その中でも、さらに複雑な微地形をみることができる。谷は枝分かれしており、東方向にのびる谷がより長い。谷部であるために、見晴らし・風通し・日当たりは良くない。

谷の中央の一番低い谷筋には、小川が流れている。小川を挟んだ東西が緩やかな斜面になっており、小川以東は水田、小川以西は畑等に利用されていた。また、東に派生する狭い谷は水田に利用されていた。大きな地形改変を現況で認めることはできないが、谷底に埋め土を施して水田としている可能性を考慮することができた。

2. 歴史的環境と調査歴

本遺跡は、森町教育委員会の踏査で発見された遺跡である。その踏査では、古代・中世の土器片が発見されている。本遺跡の南側丘陵上では、弥生時代後期から古墳時代前期の東平子遺跡等（森町教育委員会1996）が知られているが、本遺跡とは隣接していない。本遺跡と同じ陸実の谷の南縁では、奈良・平安時代の遺物が出土したツボノヤ遺跡が知られている（伊藤1998）。しかし、性格はわかっていない。

陸実には、ツボノヤ遺跡を含めて丘陵上の遺跡が多く分布する。それに対して、谷部・低地部の遺跡は本遺跡や戸綿殿ノ谷遺跡（本書第4章）・鴨ノ前遺跡（本書第5章）がある程度である。本遺跡の発掘調査は今回が最初である。踏査時発見の遺物から古代・中世の遺跡である可能性は考えられたが、遺跡の詳細を知ることはできなかったに等しい。



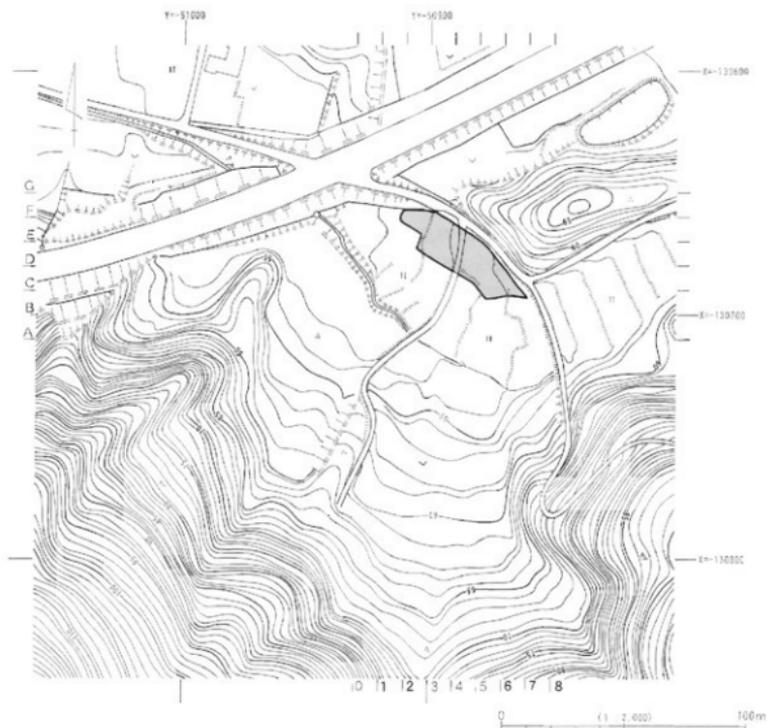
第20図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

本調査を実施した区域は、第21図のとおり谷の入口寄り東縁部にあたり、現況での標高は約52～54mを測る。調査区の南西側や谷部が北東に曲がる部分では、確認調査において遺跡の存在を確認することができなかった。谷筋中央の小川を挟んだ谷部西半については、確認調査を含めた今回の対象範囲の外であり、遺跡の有無については確認できていない。

調査は、最初に調査区および作業道や作業員棟等を設置した。その後、重機による表土除去を行った。続いて、遺構検出面までの掘削、平面的な遺構プランの検出を人力で行い、遺構検出も人力で行った。遺構の検出に際しては、プランの半分を検出し、土層断面によって覆土の状況を観察・注記した後、遺構全体の検出を行った。調査では自然流路が多く検出されたが、流路筋に直行する方向に土層帯を残し、



第21図 本調査範囲とグリッド配置

土層断面によって覆土の状況を観察・注記・記録した後、流路全体の検出を行った。

遺構調査に際しては、座標に合った10m方眼グリッドを設定し、グリッド杭設置を委託して実施した。遺構番号は、遺物出土遺構のみ遺構種類に関わらず、発見順に付した。ただし、本報告に際しては、全遺構に遺構種類別の新たな番号を付した。遺物は、遺構出土遺物は遺構ごと、包含層出土遺物はグリッドごとに取り上げた。ただし、出土遺物は少ないため、本報告では包含層出土遺物を一括にした。

現地記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、グリッドに沿って作成した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影には、6×7版(モノクロ)と35mm判(カラーリバーサル)を用い、作業工程撮影用に35mm判(カラーネガ)を使用した。また、全景写真撮影等には、高所作業車を使用した。

2. 発掘調査の経過

平成12年5月29日、発掘調査を開始した。

5月29日～6月2日に現地作業員棟・駐車場・作業道の設置、資器材等の準備、調査区の設定を実施した。最終的には調査区を分割することなく終了できたが、遺構検出作業までの作業はⅠ区(北西部)とⅡ区(南東部)に分割して作業を行っている。

Ⅰ区の遺構検出までの調査 Ⅰ区では、5月31日～6月8日に重機による表土除去と廃土の運搬、6月5日～8日に人力による表土除去および遺構プランの検出を行った。引き続き、6月21日までに遺構検出作業とそれに伴う記録作業や遺物の取り上げを行った。

基準点測量・グリッド杭打設は株式会社フジヤマに委託し、その現地作業は6月14日に行った。

Ⅱ区の遺構検出までの調査 Ⅱ区では、6月16日～7月6日および7月10日に重機による表土除去と廃土の運搬、6月26日～7月7日に人力による表土除去および遺構プランの検出を行った。引き続き、7月27日までに遺構検出作業とそれに伴う記録作業や遺物の取り上げを行った。

グリッド杭の打設は、Ⅰ区と同様に委託し、その現地作業を7月3日に行った。

遺構検出以降の調査 現地写真撮影と実測作業を7月31日～8月9日に行った。8月7日～10日に資器材の撤収および作業員棟の撤去等を行い、現地の作業を終了した。

3. 資料整理と報告書作成

本道跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成13年4月から、本書掲載中の他遺跡と同時に開始した。ただし、掛川上区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査終了直後の基礎整理で、出土土器の洗浄・注記・接合・復元、遺構図・写真等の調査資料や遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理では、遺構図の修正作業が中心になった。

続いて、土器の図化作業、図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は、4×5判(白黒ネガ・リバーサル)、6×7判(白黒ネガ・リバーサル)、35mm判(リバーサル)を用いて、当研究所写真室が実施した。

第3節 調査の成果

1. 概要

(1) 地形

谷の東縁には、派生する幅の狭い谷が1つあり、丘陵が南北に分かれている。調査区は、その北側丘陵の東端に而した丘陵裾部にあたる。

調査区内で検出された地形は、南東から北西に緩やかに下る地形である。よって、谷の東側丘陵裾部には、堆積による若干の緩斜面地の形成があったことがわかる。現況をみると、谷の西半にも緩斜面部が広がっているが、東半の方がより緩い斜面を形成していると推測することができる。

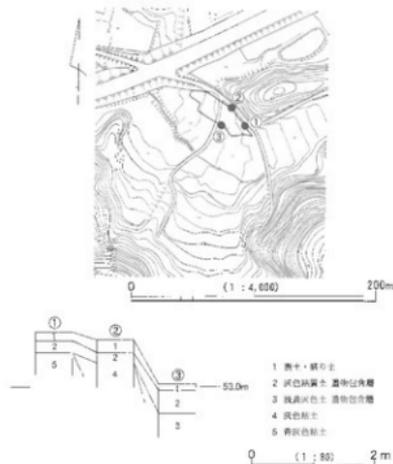
調査区の南西縁部では、急激に西に下る地形が確認されている。よって、遺跡形成以降、現況の小川よりも東寄りから急激に下る深い谷がつくられたことがわかる（杭列のある南半部は近現代の造成）。緩斜面部は東西幅約15mで、谷筋に平行して南北に長い範囲に広がる。なお、南西縁部では地形を検出するのに3m以上掘り下げる必要があり、また包含されている遺物はほとんどないことが確認調査でわかってきた。よって、地形を検出しないで調査を終了させている。

(2) 土層

基本土層は、第22図のとおりである。調査区の南西縁部では、表土下に盛土とその造成前の表土が確認できた（第22図第1層）。よって、第1節1で想定したとおり、谷の深い場所を埋めた盛土造成が行われていたことがわかる。

第1層の直下では、調査区の北縁と南西縁を除くほぼ全域で灰色粘質土層（第22図第2層）の堆積が確認できた。山茶碗等を包含している層であり、大部分ではこの下面が遺構検出面となる。ただし、谷の深部にあたる場所では、その下に少量の土器を包含する第22図第3層等の堆積も確認できており、多くの層の堆積によって谷の深部が埋まっていったことがわかる。

緩斜面部の遺構検出面を形成する土層は、東側丘陵に面する調査区北東縁では青灰色粘土層（第22図第5層）、谷の深部に面した部分では灰色粘土層（第22図第4層）である。これらに遺物の包含は認められない。また、岡土層は本来同一層であり、水流の関係で部分的に変色した可能性がある。いずれにしても、基盤層ではなく、遺跡形成前に谷に堆積した層であると考えることができる。

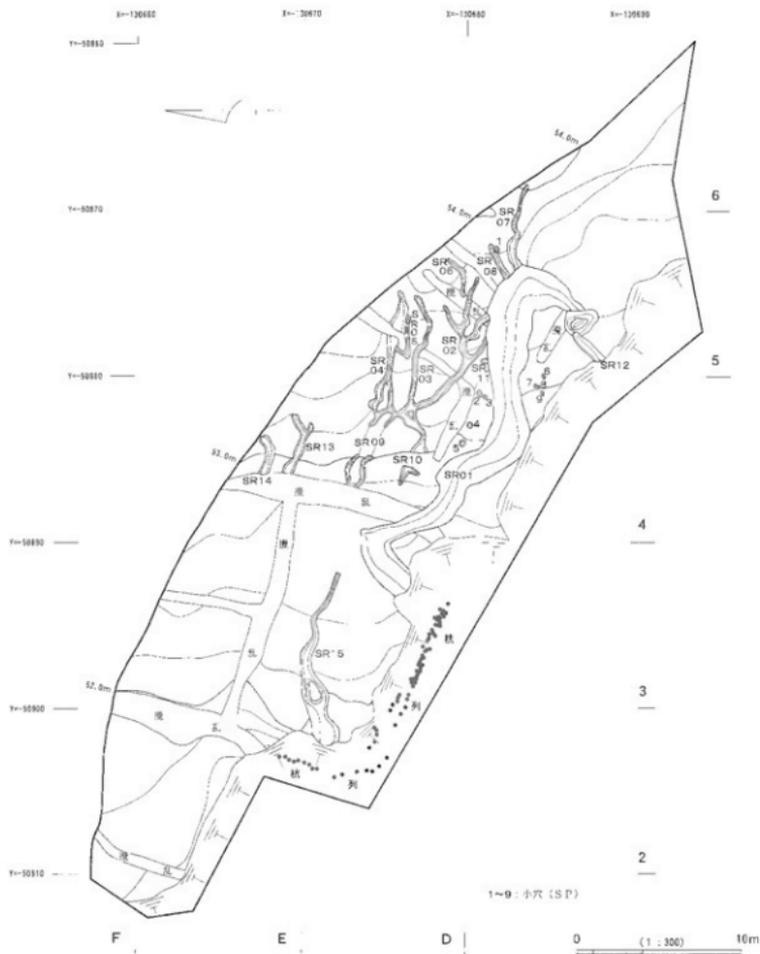


第22図 基本土層

(3) 遺構・遺物の概要

人為による遺構としては、小穴9基・杭列だけである。他に数条の溝も検出されたが、全て不定形の溝である。溝は人為によるものではなく、自然流路であると判断できる。

出土遺物には、弥生土器、灰釉陶器、山茶碗等の中世陶器、磁器、土師質土器、銅銭がある。圧倒的に山茶碗が多く、本遺跡の主体時期をそこに求めることができる。



第23図 遺構配置

2. 遺構と遺物

ここでは、人為による遺構である小穴9基と杭列の他に、調査区のほぼ全域で検出された自然流路も遺構として扱うことにする。さらに、包含層から出土した遺物も比較的多くあり、これについても本項の最後にふれることにする。

(1) 小 穴

各小穴については、下の第9表のとおりである。小穴に伴う出土遺物はないが、SP01はSR08より新しく、鎌倉時代以降の遺構であると判断することができる。

SP01を除く小穴は、SR01を挟んだ南北2ヶ所に集中している。よって、SR01と関係する施設があった可能性も考えることもできる。ただ、規則的に配置された状態で検出することはできず、柱痕等といった小穴の性格を判断することのできる情報を得ることもできなかった。柱穴であるとするには浅く、0.3mを越す深さの小穴はない。

小穴の時期を示す出土遺物はない。先述した検出状況や覆土を考慮しても、小穴の時期は中世（鎌倉時代）以降とすることしかできない。

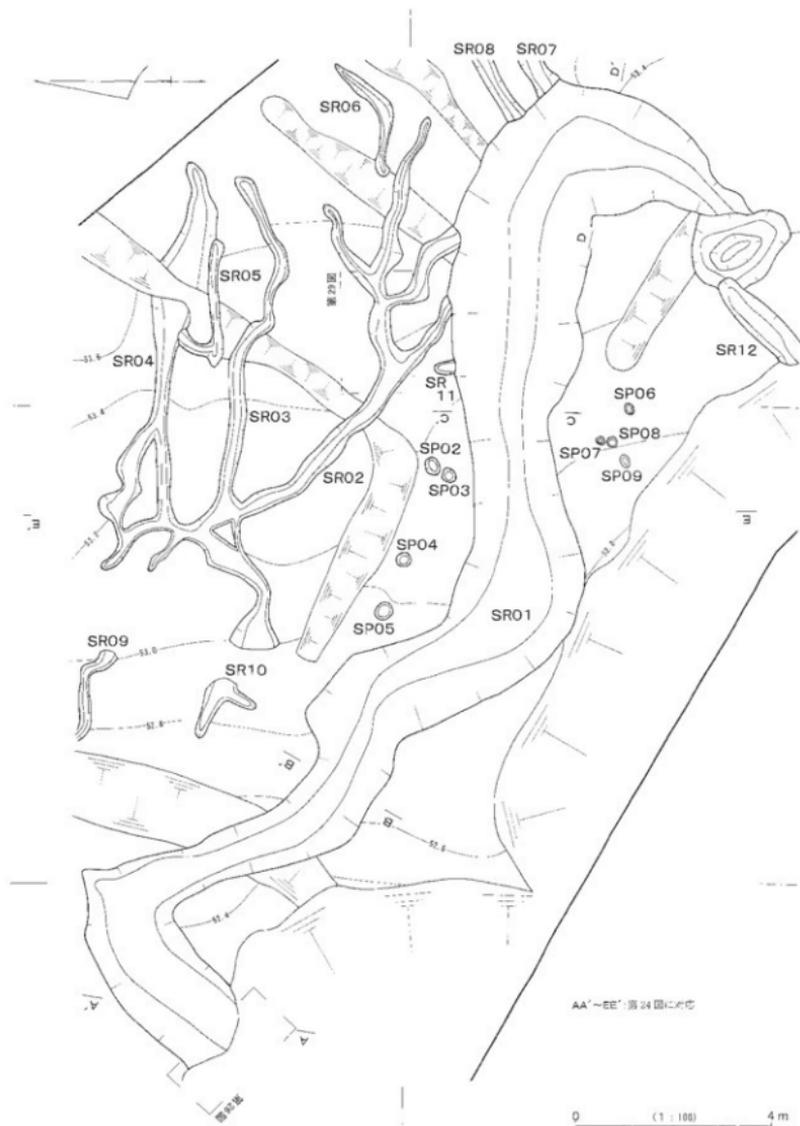
第9表 小穴一覧表

遺構名	グリッド	平面形	最大径	検出面標高	底面標高	覆土	切り合い
SP01	C-5	円形	0.32m	53.83m	53.79m	暗灰色土層	SR08より新
SP02	C-4	楕円形	0.34m	53.12m	52.85m	暗灰色土層	なし
SP03	C-4	円形	0.31m	53.11m	52.94m	暗灰色土層	なし
SP04	C-4	円形	0.30m	53.05m	52.89m	暗灰色土層	なし
SP05	D-4	楕円形	0.38m	52.99m	52.76m	暗灰色土層	なし
SP06	C-4	楕円形	0.24m	53.02m	52.83m	暗灰色土層	なし
SP07	C-4	円形	0.19m	53.01m	52.96m	暗灰色土層	なし
SP08	C-4	円形	0.24m	53.00m	52.81m	暗灰色土層	なし
SP09	C-4	楕円形	0.24m	52.98m	52.88m	暗灰色土層	なし

(2) 杭 列

D-3グリッド南半中央からD-2グリッド東半中央、さらに屈折してE-2グリッド南東部にかけての総長約12.5m、合計71本の杭の列が検出されている。杭は概ね垂直に立ち、2列程度に並行した列をつくっている。杭の残存状況は非常に良好であり、杭の断面が直径8cm前後の円形を呈していることもわかる。ただし、杭は折られたものが多く、その長さは推測の域を出ない。

この杭列は、第22図第2層が失われて大きく削平された、調査区の南西縁の南半部に限って検出されている。また、周辺からは近現代の器物が出土している。よって、近代から現代の間に設けられた、護岸等を目的とした杭列であった可能性が高いと考えられる。



第25図 SP02~SP09・SR01~SR12

SR01 (第24図～第26図)

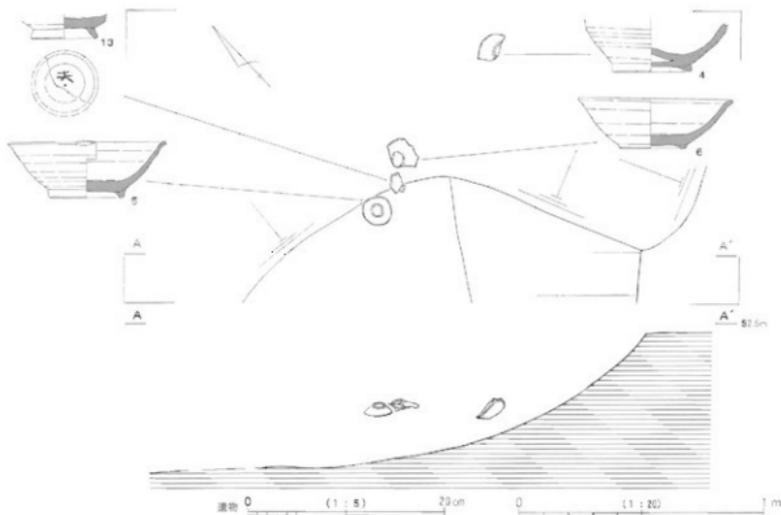
C-5グリッドからD-3グリッドにかけての自然流路である。大部分は溝状を呈しているが、流路の東端に土坑状を呈する部分がある。土坑状部分は長軸約2.1m、深さ約0.4mを測るが、不定形な形態を呈している。溝状部分と土坑状部分には先後関係が認められない。また、土器片が散在して出土する点も溝状部分と変わらない。溝状部分と土坑状部分は同時に併存していたと判断でき、ともに人為的なものと判断できないことから、同じSR01として扱う。

溝状部分は蛇行しており、総長約27mを測る。幅は0.7～2.7mで、一定していない。深さは、大部分では0.7m前後と一定している。しかし、東端部では浅くなり、土坑状部分と接する部分では深さ約0.1mになる。場所によって異なる断面形を呈し、壁面には凸凹が目立つ。底面にも、小さい凸凹が多少認められる。ただし、蛇行しながらも、底面は一定して南東から北西に下っている。その傾斜は、周辺地形と変わらない緩やかなものである。

SR01はSR12・SR07・SR08・SR02・SR11と接している。これらとの切り合い関係を土層等から認めることはできず、同時に併存していた可能性が高い。このことは、出土遺物の内容・編年的位置によっても裏付けることができる。また、これらの中にSR01より深く幅の広いものはない。

覆土は、上半が黒褐色や暗灰色土層、下半が暗灰色土の混じる灰色粘質土層である。上半の土層には、ラミナが観察でき、部分的に炭化粒を含んでいる。

出土遺物には土師質土器・須恵器・灰釉陶器・磁器・中世陶器等の破片があるが、圧倒的に山茶碗が多い。これらの遺物は散在して出土したものではあるが、西端部分と中央の南に張り出した部分から出土したものが多く、また、下半の灰色粘質土層からも遺物が出土しているが、上半の黒褐色・暗灰色土層から出土した遺物が多い。



第26図 SR01遺物出土状況

遺物 (第27図・第28図) 1～19・21は山茶碗の碗で、胎土等から12・21が知多産、他は渥美・湖西産のものであると判断することができる。多くは、自然釉の付着範囲やその他の痕跡によって、重ね焼きによって生産されたものであることがわかる。渥美・湖西産の碗の内、1～3・5・9が輪花碗であり、1～3には漬掛けによる施釉も認められる。7・8は小破片の為に輪花碗であるかはわからず、漬掛けによる施釉は認められる。完形の3では、4方向4ヶ所に輪花部を施し、3ヶ所に釉葉を漬けている。ただし、釉葉を漬けた場所は均等ではなく、一方に寄っている。1は完形ではないが、輪花部が均等に施されたのであれば、3ヶ所に施されたことがわかる。2・5・7～9は欠損部のために輪花部や漬掛けの方向はわからない。5には施釉が認められないが、小破片であり欠損部に施釉が存在する可能性もある。9も施釉が認められない破片であるが、約3分の1が残存しており施釉された可能性は低い。輪花部は、9だけが篋状工具による可能性があり、他は指押によるものである。1～3・7～10の器壁は比較的薄く、口縁部の外反が明瞭である。特に1や8は顕著である。4・6・11にも口縁部の外反が認められるが、器壁は厚い。高台は全て貼り付けによる。14の高台は、体部と異なる粘土を使用したためか、より黒味の強い色調になっている。高台の形状には、比較的高い高台(13)や比較的低くかつありとした高台(1・2・14)の他、低い高台やつぶれた高台もある。モミ痕がみられる高台がいくつかあるが、高台の形状との関連は認め難い。一方、高くしっかりした高台をもつ1・2・13・14に限って、底部裏面に糸切痕を残している。13の底部表面には、不明瞭だが墨書が観察できる。3・4・6にはススの付着、16・18にはスノコ痕が観察できる。知多産の碗では、12が器壁の厚い口縁部、21が低い高台をもつ底部である。21にはモミ痕の他に糸切痕も残されており、渥美・湖西産における高台の形状と糸切痕の関係とは合致しない。

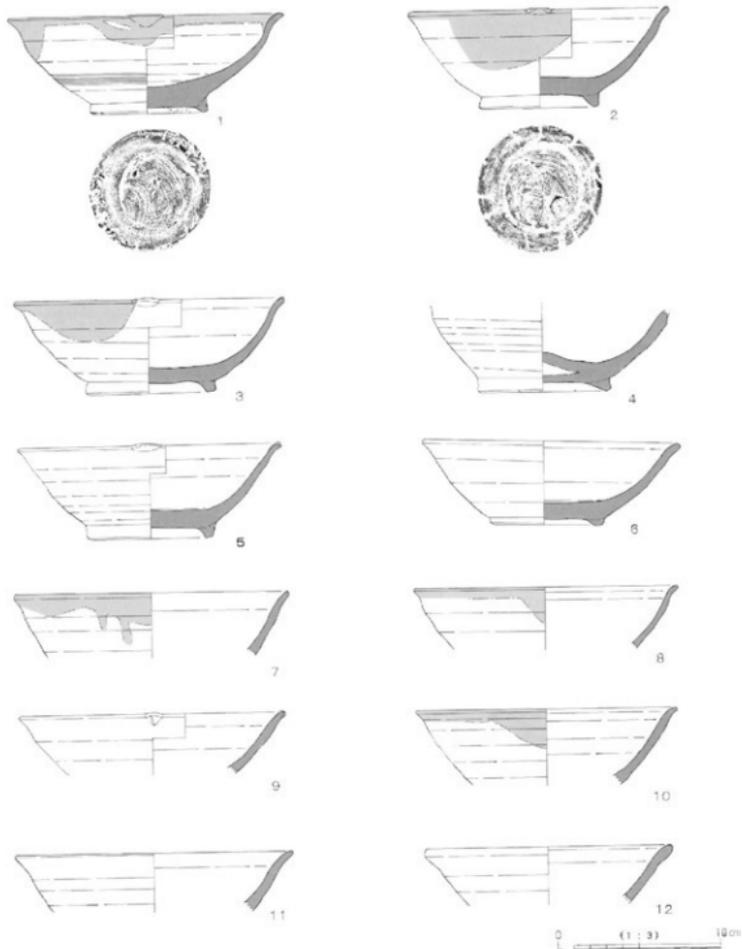
20・22～25は山茶碗の小碗で、胎土等から全て渥美・湖西産のものであると判断できる。22・23は口縁部の外反が明瞭であるのに対して、24・25はほとんど外反しない。また、前者の高台が幅広であるのに対して、後者の高台が幅狭で、より側面寄りに貼り付けられているという違いもある。23・25は、高台に体部と異なる粘土を使用したためか、高台がより青黒い色調になっている。この点は、口縁部や高台の形状との関連がない。26～29は山茶碗の小皿で、胎土等から全て渥美・湖西産のものであると判断できる。26は器壁が厚い点や糸切痕が残されている点等、27～29とは異なる点が目立つ。27～29は26に比べて薄手で、糸切痕がナデ調整で消されている。27だけが、28・29に比べて器が高い。

30は渥美産の甕で、格子目文の押印文が施されている。31は志戸呂産の大口茶碗で、全面に施釉が認められる。32は龍泉窯系の青磁の碗で、全面に光沢釉が認められる。内面には、蓮華の葉を横から見た文様が施されている。33も龍泉窯系の青磁の碗で、釉の光沢が強い。内面には、32とは異なる薔薇文が施されている。34は白磁皿の底部で、器形等の特徴から口禿の口縁部の皿と判断できる。平底の底部裏面を含めて全面に施釉が認められる。青味が有り光沢のない釉で、胎土には黒砂粒が含まれている。35は伊勢型鍋の「くの字」に外反する口縁部である。器壁が比較的厚く、口唇部に向かって薄くなる。口唇部では、内側への短い折り返しのみ認められる。摩滅が激しく、ナデ調整以外の調整は観察できない。

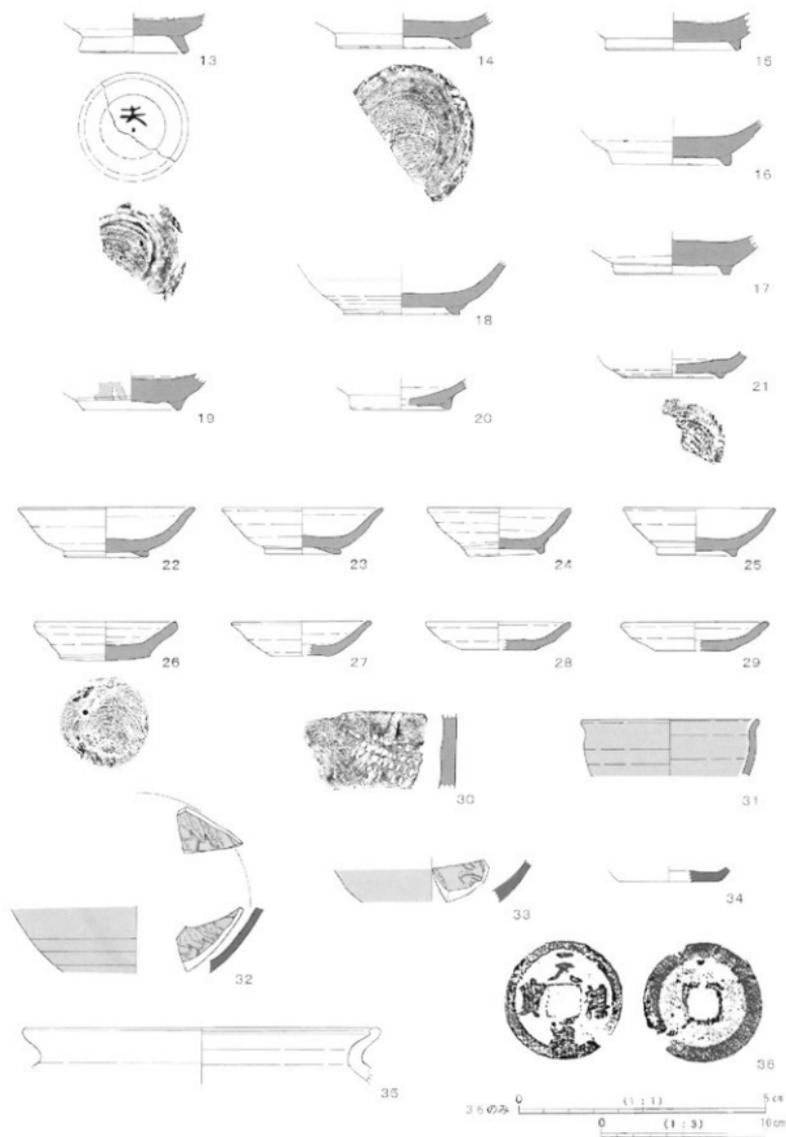
36は銅銭である。劣化が激しく詳細な観察は難しいが、「天祐通寶」の字が判読でき、真書体のものと判断した。よって、初鋳年1017年の北宋銭と考える。

31が火窯4～5段階(17世紀頃)の近世遺物である点を除けば、中世の遺物で占められていることがわかる。SK01については、出土遺物の生産時期ではなく、最終廃棄時期や廃棄後に流れ込む時期を考慮する必要がある。また、流路が存在していた期間も考慮しなければならない。山茶碗では、1・2・3・13・14・22・23等が12世紀前半(湖西古窯跡群の山茶碗編年(松井1989・1993)I期-1)に位置付けでき、6・19・26・28・29等が13世紀代(同左編年III期)に位置付けることができる。2点の知多産山茶碗は、13世紀代(赤羽・中野編年(中野1994)4型式)のものとして位置付けできる。山茶碗以外で

も35は11世紀代、30は12世紀代、32・33は12世紀中葉から13世紀初頭（大宰府編年（横田・森田1978）龍泉窯系青磁碗1類-2）前後に位置付けできる。36の銅銭についても大きな矛盾は生じない。遺物がどこから捨てられて、どこから流れてきたかを知ることはできない。以上から、SR01は概ね12世紀から13世紀には存在した自然流路であるという判断に留まらざるを得ない。なお、34は13世紀後半から14世紀代（大宰府編年（横田・森田1978）白磁皿IX類-1）に位置付けでき、他の中世出土遺物よりも時期的に下る。



第27図 SR01出土遺物-1



第28図 SR01出土遺物-2

SR12 (第25図)

Cー5グリッド南西部、SR01の土坑状部分から南西にのびる自然流路で、直線的な溝状を呈している。幅は0.6m以下、深さは0.2m以下である。大きな凸凹はなく、断面形も一定している。底面は、比較的緩く南西に下っている。

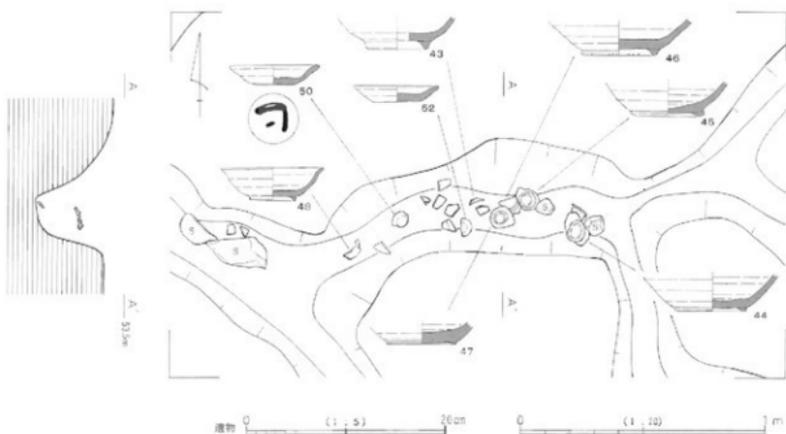
SR01との関係は、SR01で述べたように同時に併存していると判断できる。周辺地形の状況や多くの自然流路が北東から南西に下る点を考慮すると、浅いSR12から深いSR01へと水が流れていたとは考え難い。SR01の土坑状部分でオーバーフローした水が、SR01の溝状部分とSR12の双方に流れ出ていたと想定する方が妥当であると考えられる。覆土は、大半が黒褐色や暗灰色の土層で、下部や壁面寄りに暗灰色土の湿じる灰色粘質土層が観察できる。遺物の出土はない。

SR02～SR11・SR13・SR14 (第24図・第25図・第29図)

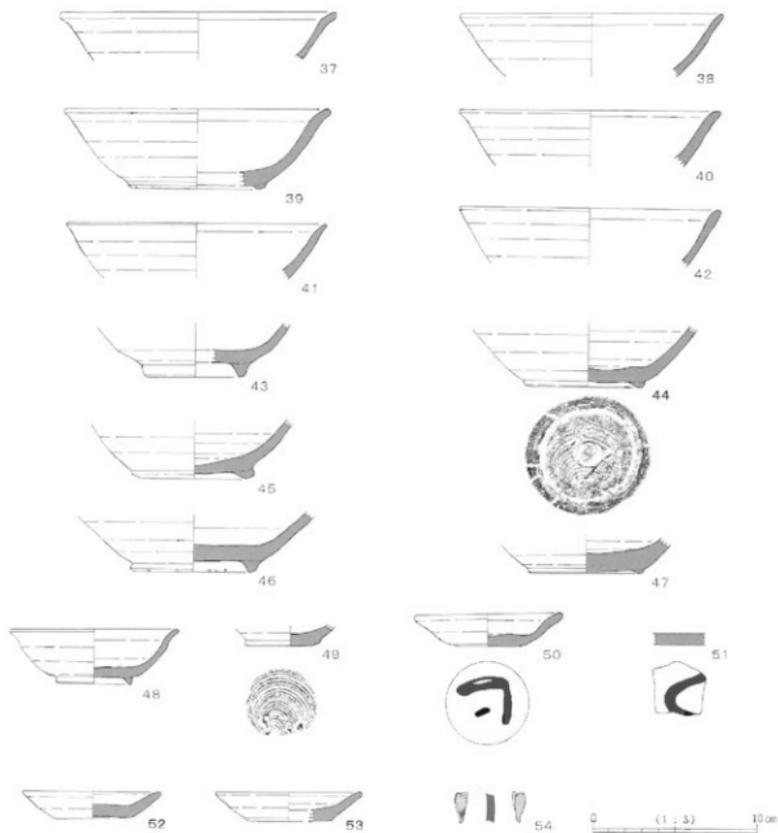
C～E-4～6グリッドで検出された内、SR01・SR12以外の自然流路である。全て蛇行する不定形の溝状を呈し、分岐・合流しながら入り組んだ状態で検出されている。断面形も一定ではない。基本的には北西に下っており、その方向に長い流路が目立つ。幅は、約1.1mと広い部分 (SR04) もあるが、大半は0.6m以下である。深さも0.2m以上を測る部分はなく、底面に大きな凸凹はない。流路の傾斜は周辺地形と変わらず緩やかで、蛇行している点も考慮すれば、急激な水の流れを想定することは難しい。SR01・SR12を含めた各々の流路の分岐・合流部分において、切り合い関係を認めることはできない。南西に下がる多くの小流路から、大きく深いSR01へと流れていた可能性が高い。

覆土は、大半が黒褐色や暗灰色の土層で、下部や壁面寄りに暗灰色土の湿じる灰色粘質土層が観察できている。黒褐色・暗灰色土層にはラミナが観察できる。

出土遺物には土師質土器、磁器、中世陶器等があるが、圧倒的に山茶碗が多い。これらは散在して出土している。出土量はSR02が圧倒的に多く、西寄りのSR09・SR10・SR13・SR14からの出土遺物はない。また、大半が黒褐色・暗灰色土層からの出土であり、灰色粘質土層から出土した遺物は少ない。



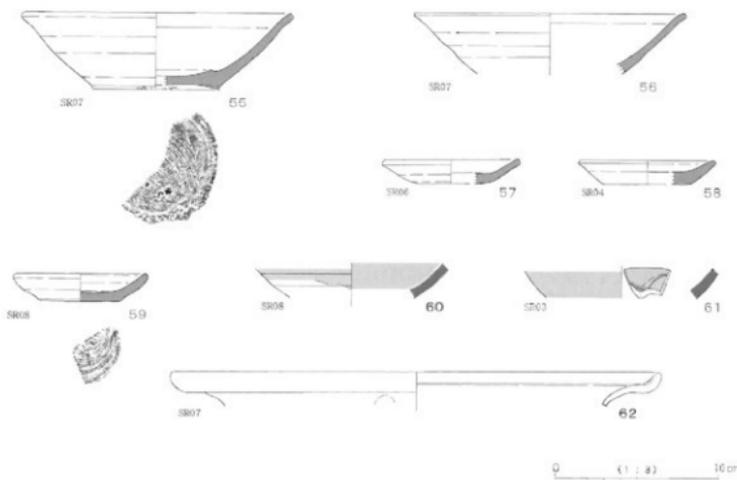
第29図 SR02遺物出土状況



第30図 SR02出土遺物

遺物 (SR02) (第30図) 37~47は山茶碗の碗で、胎土等から全て渥美・湖西産のものと判断できる。輪花碗や施釉がみられるものはない。37は口縁部の外反が明確で、器壁が薄い。他は、器壁が厚いものや口縁部の外反がほとんどみられないもので占められる。43の高台は比較的高くしっかりしているが、他は低い高台やつぶれた高台のものが目立つ。44の底部裏面には、糸切痕が残されている。39・46の高台にはモミ痕、42・47にはススの付着、45には重ね焼きの痕跡が観察できる。

48は山茶碗の小碗で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。口縁部は外反し、高台は比較的高い。内面に自然釉、外面にススの付着が観察できる。49~53は山茶碗の小皿で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。49の底部裏面には糸切痕が残されている。50・51の底部裏面には、記号文と判断できる墨書が認められる。全般的に器壁は厚く、器高は低い。54は器種不明の白磁片である。内面に片彫りによる文様とヘラ刻線による文様が認められる。外面には、図の左上隅に凸部がみられる。



第31図 SR03～SR08出土遺物

遺物 (SR03～SR08) (第31図) 55・56は山茶碗の碗である。55は胎土等から知多産のものと判断できる。器壁は厚く、口縁部の外反はわずかである。高台は低く、下端部にモミ痕が観察できる。底部裏面の糸切痕は残されている。56は胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。口縁部の外反がわずかである。57～59は山茶碗の小皿である。57・58は胎土から渥美・湖西産のものと判断でき、いずれも口縁部が外反しない。高さ約1.5cmのものである。59は胎土から知多産のものと判断できるが、やはり口縁部は外反せず、高さ約1.7cmと低い。ただし、59に限っては底部裏面の糸切痕が残されている。60は白磁碗の体部で、青味のある釉、黒砂粒を含む胎土のものである。61は龍泉窯系青磁碗の体部で、片彫りの刺花文が内面に施されている。62は伊勢型鍋の頭部～口縁部である。器壁は全体的に薄いが、外反する頭部から口唇部に向かっては厚くなっている。口唇部は内側への長い折り返しが認められ、内湾するように若干立ち上がる。全体に横方向のナデ調整が観察できる。ナデ調整で消されているが、胴部から頸部の変換部に指頭痕を観察することができる。

山茶碗の多くは13世紀代(湖西古窯跡群の山茶碗編年(松井1989・1993)Ⅲ期、赤羽・中野編年(中野1994)4・5型式)に位置付けできる。ただしSR02出土遺物には、43・48のように12世紀前半代(湖西古窯跡群の山茶碗編年(松井1989・1993)Ⅰ期-1)、37のように12世紀後半代(同上Ⅰ期-2)、38・49のように12世紀代(同上Ⅱ期)に位置付けできる渥美・湖西産の山茶碗も含まれる。62の伊勢型鍋は13世紀前半代に位置付けでき、山茶碗の時期と一致する。磁器では、61が12世紀中葉から13世紀初頭(大宰府編年(横田・森田1978)龍泉窯系青磁碗Ⅰ類-2)前後に位置付けできる。以上のように、SR01・02からは12～13世紀、SR03～SR07からは13世紀の遺物が出土している。しかし、SR01・02でも12世紀代より13世紀代の遺物が多い点、遺物は捨てられて流れ込んだものである点、各流路間に切り合い関係が認められない点を考慮すれば、SR01を含めた全ての自然流路が、12世紀から13世紀の間に同時併存していたとする判断が妥当と考える。

SR15 (第32図)

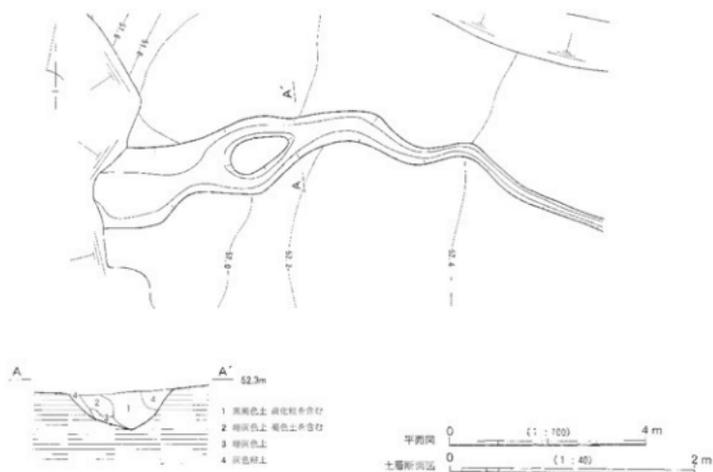
D-2グリッド北東部からD-3グリッド北東部にかけての自然流路である。蛇行する溝状を呈している。中央部には二叉に分かれ、中島ができていている部分がある。幅は東端で約0.2m、西端で約1.7mを測り、西にいくほど幅広になる。深さも東端で約0.1m、西端で約0.7mを測り、西にいくほど深くなる。底面は、大きな内門はなく、傾斜をもって西に下っている。他の流路よりも急傾斜に下っているのので、比較的急な水の流れがあったと想定することもできる。ただし、あくまでも蛇行する小流路である。平坦な微高地における緩やかな流れが、谷の深部に流れ出る場所で若干急な流れになるといった程度であると考えられる。

他の遺構との関係を直接的に探ることはできないが、出土遺物の内容や遺構の方向・形状から考えれば、SR09やSR10とつながっていた可能性は高い。

覆土は、大半が黒褐色や暗灰色の土層で、下部や壁面寄りに暗灰色土の混じる灰色粘質土層が観察できる。

出土遺物には土師質土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、磁器の破片がある。圧倒的に多いのは、山茶碗である。これらは散在して出土しているが、西端部からの出土が比較的多い。また、大半が黒褐色・暗灰色土層からの出土であり、灰色粘質土層から出土した遺物は少ない。

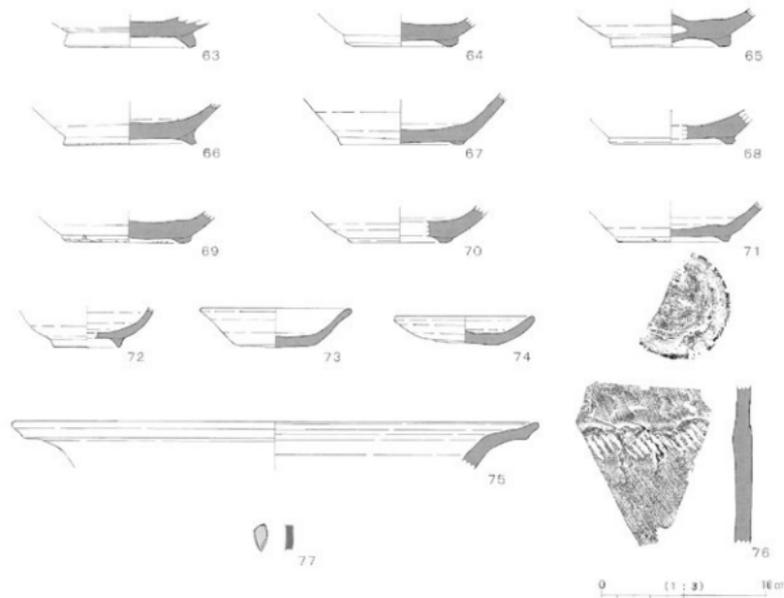
遺物 (第33図) 63は灰釉陶器の碗の底部である。胎土等から清ヶ谷産のものと判断できるが、焼成のためか内面の色調が黄色化している。外に開く断面台形の高台が付き、底部裏面の糸切痕は消されている。64~71は山茶碗の碗である。胎土等から64~70は瀬美・湖西産、71は知多産のものと判断できる。瀬美・湖西産のものは、全て器壁が厚く、底部裏面の糸切痕が消されている。高台には、比較的しっかりとしたもの(64・65)やつぶれたものがあり、様々な形状のものがある。ただし、概ね低い高台であるという点では全てに共通している。66・69の高台には、モミ痕が観察できる。65の底部内面には、重ね焼きの痕跡が観察できる。知多産である71は、底部裏面の糸切痕が残されているものの、高台は低く



第32図 SR15

下部にモミ痕が観察できる。底部は比較的薄い。72は山茶碗の小碗で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。73・74は山茶碗の小皿で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。形状は、73と74とで大きく異なる。73は器壁が薄く、口縁部が外反する。また、器高は約2.4cmと比較的高い。一方、74は器壁が厚く口縁部の外反はない。また、器高は約1.7cmと比較的低い。75・76は渥美産陶器の甕である。76には縦長格子目文の押印文が横方向に連続押印されている。77は青磁であるが、詳細はわからない。

63の灰釉陶器は11世紀末頃（清ヶ谷古窯跡群の灰釉陶器編年（松井1989）IV期-4）に位置付けることができる。山茶碗では、72が12世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）I期）、73や64・65が12世紀代末から13世紀初頭（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）II期）に位置付けできるものである。75・76の渥美産の甕は、12世紀代に位置付けることができる。しかし、山茶碗の大半が、13世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）III期、赤羽・中野編年（中野1994）4・5型式）に位置付けできるものである。なお、77の青磁については、時期を特定することはできない。以上のように、SR15においてもSR01・02等と同様に、出土遺物に時期的な幅が存在する。よって、SR15もSR01・02等と同様に、12～13世紀の中で存在した自然流路であるという判断が妥当と考える。



第33図 SR15出土遺物

(4) 遺構外の出土遺物

遺構以外から出土した遺物、すなわち包含層から出土した遺物は数百点を数える。種類としては、弥生土器、土師質土器、灰釉陶器、山茶碗、その他の陶器、磁器がある。表土・掘乱層からも若干の遺物の出土があるが、近現代のものが多く、

山茶碗 (第34図)

400点以上が出土している。しかし、図化した以外は小破片で、時期等を判断することはできない。

78～92は碗で、胎土から80が東遠江産、他は全て渥美・湖西産のものと判断できる。78・79だけが輪花碗で、漬掛け施釉が認められる。いずれの輪花部も指押によるものである。しかし、破片であるため、輪花部や釉薬を漬けた場所の数や配置を知ることはできない。器壁は薄く、口縁部は外反する。81～83も口縁部が外反するが、器壁は厚い。東遠江産の80は、口縁部の外反がないものの器壁が比較的薄い。高台は84・85が比較的高くしっかりしたものであるが、他は小さく低い高台やつぶれて低くなった高台をもつ。糸切痕は83・87・90に残されており、他では消されている。高台下端部のモミ痕は、86・87だけに観察できる。

93は小碗の底部で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。高台には体部と異なる粘土を使用したようで、より青黒い色調になっている。94～96は小皿で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。全て器壁が厚く、器高は1.7～1.8cm程度である。体部から口縁部に若干の外反がみられる点、底部の糸切痕が消されている点も共通する。しかし、96だけが口唇部を四角く仕上げている等、それぞれに異なる点も指摘できる。97は大平鉢で、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。高台はつぶれており、スノコ状痕も観察できる。また、高台の下端部と底部裏面は著しく摩滅している。

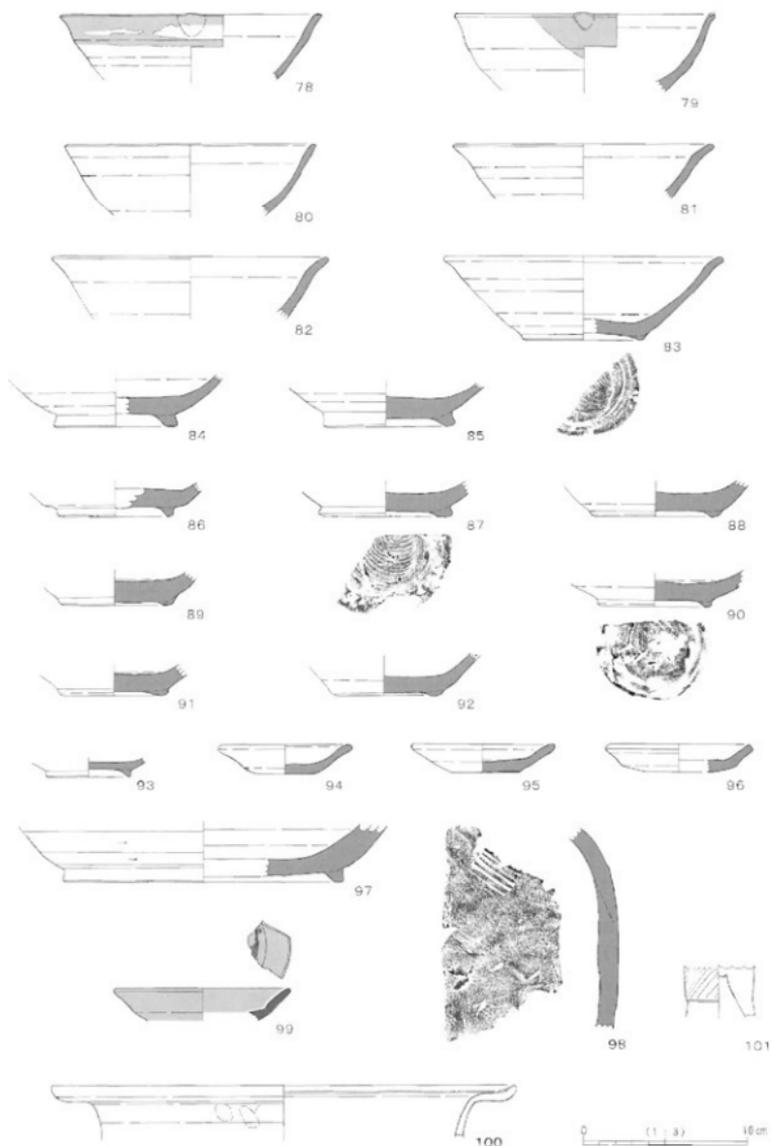
78・79は12世紀前半代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）I期-1）に位置付けることができ、84・85・93も12世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）I期）の中に位置付けることができる。他の渥美・湖西産の山茶碗は、13世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）III期）に位置付けることができる。東遠江産の80は12世紀末から13世紀初頭（金谷古窯跡群の山茶碗編年（松井1993）II期）に位置付けることができる。

その他 (第34図)

かわらけが200点程出土しているが、全て小破片で図化できない。他は極少ない出土量である。

98は渥美産陶器、壺の胴部である。縦長格子目文の押印文が施されている。99は同安窯系青磁の皿である。釉の光沢は強く、釉調はやや黄味のない灰白色を呈する。内面の見込みに櫛描の文様の一部が観察できる。100は伊勢型鍋の頸部～口縁部である。器壁は全体的に薄い、大きく外反する口縁部は厚くなっている。口唇部は内側への長い折り返し認められ、内湾するように若干立ち上がる。摩滅が著しいが、全体に横方向のナデ調整が観察できる。また、ナデ調整が消されているが、頸部に指頭痕を観察することができる。101は弥生土器、高杯の脚柱から接合部である。摩滅が著しく詳細な観察はできないが、幅広の突帯状部分があり斜方向の刺突を連続して施していることがわかる。

101だけが弥生土器であり、他とは大きく時代が異なる。98は12世紀代、99は12世紀中葉から13世紀初頭（大宰府編年（横田・森田1978）同安窯系青磁皿I期-1）前後、100は13世紀前半代に位置付けることができ、概ね出土山茶碗の時期の範囲に入る。この時期は自然流路の遺物群とも共通し、本道跡の主体が12世紀から13世紀にあることを明確に示す。



第34图 包含层出土遗物

番号	採位 番号	採層 番号	産地	産地	産地	産地	採存率 (%)	容積 (m ³)	容積 (m ³)	口径 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調	備考		
45	30	SR02	山形	新美・郡西	碗	体～ 底部	70				7.6	良好	白灰色	東ね焼き		
46	30	SR02	山形	新美・郡西	碗	体～ 底部	60				7.7	良好	淡青白灰色	モミ飯		
47	30	SR02	山形	新美・郡西	碗	底部	80				7.0	良好	灰褐色	内面にスス		
48	30	11	SR02	山形	新美・郡西	小碗	全体	65	3.4	10.4	10.4	4.7	良好	青白灰色	内面に自然釉 外面にスス	
49	30	SR02	山形	新美・郡西	小碗	底部	70				4.7	良好	外面：黄灰色 内面：白灰色	糸切飯		
50	30	11	SR02	山形	新美・郡西	小碗	全体	50	2.0	9.1	9.1	4.0	良好	暗灰色	墨塗	
51	30	11	SR02	山形	新美・郡西	小碗	底部	30					良好	青白灰色	墨塗	
52	30	12	SR02	山形	新美・郡西	小碗	全体	65	1.7	8.6	8.6	4.6	良好	淡青白灰色	口縁部に自然釉	
53	30	12	SR02	山形	新美・郡西	小碗	全体	40	1.8	(9.3)	(9.3)	(5.4)	良好	青白灰色		
54	30	14	SR02	白磁	寛島陶磁	不明	3						良好	素地：白色	青味灰白半透明釉	
55	31	9	SR07	山形	加多	碗	全体	40	4.7	(16.6)	(16.6)	7.5	良好	淡青灰色	糸切飯 モミ飯	
56	31	SR07	山形	新美・郡西	碗	口縁～ 体部	20			(16.4)	(16.9)		良好	外面：黄褐色 内面：青灰色	口縁部に自然釉	
57	31	12	SR08	山形	新美・郡西	小碗	全体	16	1.5	(8.4)	(8.4)	(4.2)	良好	白灰色	内面に自然釉	
58	31	SR04	山形	新美・郡西	小碗	全体	15	1.5	(8.4)	(8.4)	(5.3)	良好	白灰色			
59	31	12	SR08	山形	加多	小碗	全体	40	1.7	(8.2)	(8.2)	(5.0)	良好	淡青灰色	糸切飯	
60	31	14	SR08	白磁	寛島陶磁	碗	体部	5					良好	素地：白色	淡青味白色半透明釉	
61	31	14	SR03	青磁	熊鷹系	碗	体部	5					良好	素地：白灰色	青味灰緑色透明釉	
62	31	12	SR07	土曜土部		碗	口縁部	10		(30.0)	(30.0)		不良	外面：黄褐色 内面：茶褐色	伊勢型	
63	33	9	SR15	祝部 陶師	清ヶ谷	碗	底部	45				(5.0)	良好	外面：黄褐色 内面：黄褐色		
64	33	SR15	山形	新美・郡西	碗	底部	20				(6.3)	良好	淡青白灰色			
65	33	SR15	山形	新美・郡西	碗	底部	60				7.3	良好	淡青灰色	内面に自然釉 東ね焼き		
66	33	SR15	山形	新美・郡西	碗	底部	70				8.1	良好	暗灰色	モミ飯		
67	33	SR15	山形	新美・郡西	碗	体～ 底部	60				7.4	良好	外面：黄褐色 内面：淡青白灰色			
68	33	SR15	山形	新美・郡西	碗	底部	40				(7.7)	良好	淡青白灰色	内面に自然釉		
69	33	10	SR15	山形	新美・郡西	碗	底部	70				7.9	良好	灰色	モミ飯	
70	33	SR15	山形	新美・郡西	碗	体～ 底部	30				(6.4)	良好	青白灰色			
71	33	SR15	山形	加多	碗	体～ 底部	45				8.5	良好	淡青白灰色	糸切飯 モミ飯		
72	33	SR15	山形	新美・郡西	小碗	体～ 底部	40				(6.1)	良好	淡青灰色			
73	33	12	SR15	山形	新美・郡西	小碗	全体	40	2.4	(9.2)	(9.2)	4.8	良好	淡青灰色		
74	33	12	SR15	山形	新美・郡西	小碗	全体	100	1.7	8.6	8.6	3.7	良好	外面：淡青灰色 内面：黄褐色	口縁部に自然釉	
75	33	13	SR15	陶器	新美	堂	口縁部	5				(32.0)	良好	外面：青灰色 内面：明青灰色		
76	33	13	SR15	陶器	新美	堂	胴部	5					良好	外面：青灰色 内面：明青灰色		
77	33	14	SR15	青磁		不明	3						良好	素地：白灰色	淡青灰緑色透明釉	
78	34	10	包含層	山形	新美・郡西	輪花碗	口縁～ 体部	15		(16.0)	(16.0)		良好	淡青灰色	狭野付施	
79	34	10	包含層	山形	新美・郡西	輪花碗	口縁～ 体部	15		(16.0)	(16.0)		良好	淡青灰色	狭野付施 外面にスス	
80	34	10	包含層	山形	東通江 (倉行)		碗	口縁～ 体部	30		(15.3)	(15.3)		良好	暗青灰色	
81	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	口縁～ 体部	15			(16.0)	(16.0)		良好	外面：淡青灰色 内面：黄褐色	口縁部に自然釉	
82	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	口縁～ 体部	20			(17.0)	(17.0)		良好	青白灰色		
83	34	9	包含層	山形	新美・郡西	碗	全体	15	3.2	(17.1)	(17.1)	(2.4)	良好	淡青白灰色	糸切飯	
84	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	底部	40				(7.0)	良好	淡青灰色			
85	34	10	包含層	山形	新美・郡西	碗	底部	70				8.2	良好	暗灰色	内面に自然釉	
86	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	底部	30				(7.0)	良好	白灰色	モミ飯		
87	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	底部	30				(8.2)	良好	青白灰色	糸切飯 モミ飯		
88	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	底部	50				7.9	良好	灰色			
89	34	包含層	山形	新美・郡西	碗	底部	95				6.9	良好	灰色			

器種 番号	器種 番号	遺構 番号	遺構 層位	産地	器種	部位	残存率 (%)	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	焼成	色澤	備考
90	34		包含層	山茶碗	澗美・湖西	碗	底面	40				7.0	良好	淡灰褐色	糸切痕 内面自然跡
91	34		包含層	山茶碗	澗美・湖西	碗	底面	50				(6.6)	良好	暗灰色	
92	34		包含層	山茶碗	澗美・湖西	碗	縁・ 底面	80				6.6	良好	淡青白灰色	
93	31		包含層	山茶碗	澗美・湖西	小皿	底面	45				5.2	良好	暗青灰色	高台瓦粘土(濃青色)
94	34	12	包含層	山茶碗	澗美・湖西	小皿	全体	25	1.8	(8.2)	(8.7)	(3.6)	良好	淡青白灰色	口縁に自然跡 遺ね焼き痕
95	34	2	包含層	山茶碗	澗美・湖西	小皿	全体	55	1.7	(8.8)	(8.8)	4.2	良好	淡青白灰色	口縁部に自然跡
96	34		包含層	山茶碗	澗美・湖西	小皿	全体	29	1.7	(8.0)	(8.8)	(3.8)	良好	淡青白灰色	
97	34	13	包含層	山茶碗	澗美・湖西	鉢	底面	20				(17.2)	良好	暗青灰色	スノコ痕
98	34	13	包含層	陶器	澗美	甕	胴部	5					良好	外面：明青灰色 内面：黄灰色	
99	31	14	包含層	青磁	阿安原系	皿	口縁・ 外縁	15		(10.8)	(10.8)		良好	黄褐色	青灰白色透明斑跡
100	34	13	包含層	土師質土器		鉢	口縁部	10		(28.0)	(28.0)		良好	黄褐色	伊勢型
01	34		包含層	赤生土器		高杯	接合部	90					不良	黄褐色	

() 内の数値は変元値

第11表 遺物観察表(銅銭)

番号	時代 番号	遺構 番号	種別	銘名	書体	所在	初出年	直径 (mm)	内径 (mm)	重量 (g)	備考	
38	28	14	5801	銅銭	天福通寶	真書	北宋	1017	24.5	19.5	1.2	1.59

3. 出土遺物の数量

全出土遺物について種類別に数量を計測し、各遺構や遺跡の時期・特徴を探る資料として提示する。

第12表・第13表によると、圧倒的に山茶碗、とくに澗美・湖西産が多く出土している。次に多いのはかわらけである。伊勢型鍋の破片も数十点出土している。以上から、12世紀から13世紀が本遺跡の主体時期であることがわかる。近世以降の遺物も少なくないが、全て表土・盛土層からの出土である。

遺構別出土量を見ると、SR01が最も多く、SR02・SR15と続く。出土遺物の種別傾向は、SR06だけが遺跡全体と異なる。しかし、SR06は短小の流路であり、評価できる違いではないと考える。

第14表・第15表に山茶碗の破片数・個体数を示した。計測・算出方法は下記のとおりでである。

- 1 山茶碗を出土位置別・産地別・部位別に分類する。複数の部位にまたがる破片は、底部・口縁部・体部の順に優先とする。よって、完形遺物は底部として分類することになる。
- 2 口縁部は、碗・小碗・小皿・大平鉢に分類して破片数を数える。底部はさらに残存率を1/2以上・1/2・1/3・1/4・1/5・1/5以下に分けて数える。体部は、器種が判断できないものが多いため、器種に関わらず全破片を数える。
- 3 個体数を底部から算出する。残存率1/2以上は1片で1個体、1/2は2片で1個体、1/3は3片で1個体、1/4は4片で1個体、1/5は5片で1個体、1/5以下は個体算出に含めないこととする。これを合計して個体数とする。

山茶碗を産地別にみると、各器種とも澗美・湖西産が90%以上を占める。遺構別にみると、知多産や東遠江産における傾向の差はあるが、絶対数が少なく評価できるものではない。

なお、同じ方法によると、かわらけは3.82個体、他は全て1個体に満たなくなる。

第12表 種類別土器片出土数

	上層瓦上層			宗色器	灰地陶器	山 茶 碗				中近世	青磁	白磁	磁付	不明土器	合計
	伊勢編	かわらけ	その他			滑+谷	奈良瀬西	東濃江	知多						
SR01	2(1)	20(6)	15(5)	2(1)	3(1)	230(72)	11(3)	17(5)	14(4)	2(1)	14(3)			3(1)	320
SR02	16(7)	7(3)				186(65)	1(1)	4(2)	2(1)		1(1)				217
SR03	2(2)		3(4)			74(27)	1(1)	3(4)	1(1)	1(1)	1(1)				85
SR04	2(3)	2(3)	7(13)			47(16)									58
SR06	3(8)	11(28)	25(67)												39
SR07	12(25)	6(12)				26(53)			3(16)						49
SR08	2(13)	2(20)				8(53)			1(7)			1(7)			15
SR15	5(3)	8(4)		2(1)	3(2)	155(82)	5(3)	9(4)		1(1)					188
他	15(2)	197(252)	7(1)		1(0.1)	413(51)	13(2)	9(1)	73(10)	1(0.1)			11(1)	59(7)	799
合計	59(3)	254(151)	57(3)	4(0.1)	7(0.1)	1139(85)	31(2)	46(3)	90(3)	3(0.1)	3(0.1)		11(1)	62(3)	1770

※ ()内数字は各遺構出土土器片合計数を母数とした割合(%)

第13表 中近世陶器 種類別破片出土数

	奈良瀬陶器		青濃厚陶器		志戸産陶器		瀬戸産陶器			合計
	壺	鉢	壺	鉢	壺	鉢	壺	鉢	壺	
SR01	5(4)		7(50)						1(7)	14(100)
SR02			2(160)							2(100)
SR03				1(100)						1(100)
他	4(6)	14(19)	1(1)		8(11)		6(8)	5(7)	1(1)	34(47)
合計	12(13)	22(24)	1(1)		8(9)		6(7)	5(6)	1(1)	35(39)

※ ()内数字は各遺構出土土器片合計数を母数とした割合(%)

第14表 山茶碗 産地・部位・器種別破片出土数

	越美・湖内		尾西		大平鉢		白鉢		東濃江		知多		武部	小皿
	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗		
SR01	69	18	94	40	5	4								
SR02	74	9	89	11	1	11								
SR03	38	5	31											
SR04	20	7	16	4										
SR07	10	6	9											
SR08	3		5											
SR15	39	6	82	17	1	10								
遺構外	129	15	152	56	2	26	8	3	3	5	3	1	1	4
合計	382	66	499	170	9	52	8	3	3	12	10	3	1	2

第15表 山茶碗 産地・部位・器種別個体数算出

	越美・湖内		尾西		大平鉢		白鉢		東濃江		知多		武部	小皿
	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗		
SR01	11	1	2	2	3	19	3	1	1	1	2	1	1	1
SR02	4		1	1	1	4	1							
SR03														
SR04														
SR07														
SR08														
SR15			1	6		10								
遺構外	5	3	2	5	6	27	1	1	1	3	1	2	7	12
合計	20	4	6	14	12	64	4	3	1	9	5	2	8	10
個体数	20	2	2	3.5	2.4	0	4	1.5	0.2	0	9	2.5	0.3	2
個体小計	29.5					5.7					15.8			

	知 多		小皿
	碗	小碗	
SR01	~1/2	1/2	1/3
SR02			1/5
SR03			1/3
SR04			1/4
SR07			1/3
SR08			1/3
SR15			1/3
遺構外	1	1	1
合計	1	1	1
個体数	1	0.5	0.3
個体小計	2.6		0.5

個体数

	越美・湖内		尾西		大平鉢		白鉢	
	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗	碗	小碗
越美・湖内	30	6	16	1				
尾西	0	0	0	0				
知多	3							
合計	33	6	17	1				

※小数字は以下四捨五入

第4節 まとめ

1 遺跡の時期と性格

9基の小穴は、層位的に中世以降の遺構であることがわかる。しかし、詳細な時期やどのような目的に伴った遺構であるのかはわからない。一方、杭列については中世以前であるとは考え難い。表土や盛土からは近世や近現代の器物も出土しており、層位的に近現代の杭列である可能性が考えられる。以上、小穴と杭列から本遺跡の主体時期と性格を探ることは難しい。よって、包含層や自然流路から出土した遺物から考えざるを得ない。

出土遺物では、山茶碗が圧倒的に多い。山茶碗や他の遺物の多くは12～13世紀に位置付けできるものであり、特に13世紀のものが多くを占める。土器の使用や廃棄までの時期を考えると、12～13世紀の間に遺跡が形成されたとする程度が妥当であろう。

12～13世紀の可能性のある（人為による）遺構は小穴だけで、直接的に遺跡の性格を判断することは難しい。しかし、遺物の出土は、この周囲に人の営みがあったことを裏付けるものである。本遺跡からは山茶碗の他に伊勢型鍋も出土しており、生活の存在を想像させる。さらに、墓域・霊域を思わせるような壺等の出土がないことも考慮すれば、本遺跡出土遺物は霊域・墓域に伴うというより、居住生活による遺物と考えるのが妥当であろう。

以上から、本遺跡には12～13世紀の集落の存在を想定することができる。ただし、その集落がどこにあるのか、もしくはどこにあったのかということが問題になる。

2 集落跡の場所とその消滅

調査区の東の丘陵は、非常に狭い丘陵状地形である。しかし、以下の点を考慮すると、丘陵上に集落跡を求めることは難しい。

- ・周辺地域で、瘦せた小丘陵上の中世集落の存在は知られていない。
- ・丘陵上で遺物が表採されていない。
- ・丘陵の南北でも分布・確認調査を行ったが、遺物の転落は認められていない。
- ・調査区内でも、遺物の転落・流入があつてしかるべきSR13・SR14からの遺物の出土がない。

谷部は、現況地形と確認調査の結果から、その深部が東方向の谷奥から調査区の南まで下り、扇曲して北の谷口に向かっていることがわかる。今回の調査では、多くの自然流路が検出されており、以下のように入流の存在とその水量を考慮することができる。

多くの自然流路でラミナが観察でき、水流のあったことは容易に確認することができる。また流路の形状から、自然地形を反映して西南西の方向に流れる水流であったと判断することができる。さらに、調査区南西縁にあたる本流ともいふべき谷の深部、またそこに近いSR01やSR15の一部においては、幅・深さから多くの水量があったと考えることも可能である。特に谷の深部は、周辺丘陵からの雨水が集まる場所であり、かなりの水量を想定することができる。

地形は粘土層・粘質土層によって形成されており、決して固い地盤であったとはいえない。想像の域を出ないが、先述のような多くの水流によって地盤が削られていったと考えることができる。また、自然流路内の遺物出土状況は散在的なものであり、集落から運び込んで一定の場所に廃棄したというよりも、自然に流入してきた状況を示すと考えられる。以上から、水流で集落跡の遺構の多くが消失してしまい、遺物が流された可能性を十分に考えることができる。

このように、遺物が本調査区に流れつくような場所に集落があったと判断できる。そして、その場所としては、調査区内と谷奥の場所をあげることができる。

調査区内に集落跡があったとすれば、以下のように説明することができる。

丘陵裾の狭い緩斜面部に集落跡があったが、水流によって消失した。発見された数基の小穴のいくつかは、集落跡の残存であるかもしれない。

一方、谷奥の場所に集落跡があったとすれば、以下のように説明することができる。

水流等で谷奥の集落跡が消失し、土砂とともに遺物が流された。確認調査の結果では、谷奥で遺構・遺物は発見されていない。したがって、集落跡を遺物もろとも流し出す程の多量で急激な水流であったと考えられる。水流は、谷筋に沿って東方向から北方向に曲がるため、その内側すなわち調査区のあたりで流れが弱まる。そこに流されてきた遺物の多くは、さらに北へと流されることはなかったと考えられる。そして、調査区内の緩斜面部、そこに形成された小さく流れの弱い自然流路内等に残されることになった。

3 奥戸跡の集落の特徴

本遺跡の位置する森岡峠突の谷は、中世においては飯田荘に含まれ、吉川流域（太山川上流域）の上郷、飯田地域の下郷の間に挟まれた戸和田郷にあたる地域であったとされている。しかし、戸和田郷に位置する当時の集落についての資料、特に集落遺跡の調査資料は皆無に等しく、実際にどのような特徴・性格をもった集落があったのかを明示することは難しい。今回の調査でも、集落の存在は示すことができたが、集落跡を構成するような遺構が発見できていない。そこで、本遺跡の集落の特徴については、出土遺物の内容を中心にして探ることとする。

本遺跡では山茶碗の出土数が圧倒的に多く、土師質鍋や陶器壺甕類等といった他の種類の遺物は極少数の出土に限られている。また、輸入陶磁器の出土は少数ながらあるが、瀬戸美濃系施釉陶器の出土はない。以上のように、山茶碗が圧倒的に多いという出土遺物の組成は、決して他の遺跡と比べて特異な状況ではない（小野2000）。すなわち、本遺跡の集落は比較的多く存在していた、特別ではない集落であったと考えることができる。輸入陶磁器も出土しているが、多くの集落跡でも一定の出土があるので、この考えを覆すものとはならない。さらに、山茶碗の器種構成についても、多くの集落跡とさほど変わらない傾向を示している。

しかし、第30図54の白磁小破片だけは外面にも文様が施されており、輸入陶磁器の中でも、碗・皿より威信財的意味の強い器種（小野2000）である可能性がある。もしそうであれば、本遺跡がその器物を入手できるだけの社会的背景も持ち備えていたと考えることができる。先述のとおり、本遺跡の集落は地位の高い人々の集落、もしくは特異な性格をもった集落であったとは判断できない。しかし、同一集落内の全ての者が、同じ社会的地位や社会的背景を持っていたと考えるのも不自然であろう。同一集落内において、輸入陶磁器を入手できた者、その中でも碗・皿ではない特殊な器物を入手できた者が、一部に存在していたとしても不思議ではない。

出土遺物の多くを占める山茶碗についてみると、9割以上が瀬美・湖西産のものである。一方、東遠江産や知多産の山茶碗は、13世紀代に生産されたものが少数出土している程度である。本遺跡の集落では、13世紀代に生産された東遠江産・知多産の山茶碗も若干入手しているが、基本的には瀬美・湖西産の山茶碗を主体として入手していたと考えられる。

また、碗：小碗・小皿の比率をみると、瀬美・湖西産が約3：2、東遠江産が約1：3、知多産が約5：1であり、産地別に異なる傾向を示している。同じ山茶碗であっても、本遺跡に至るまでの流通構造等の結果として、産地によって入手できる器の種類が異なっていたと指摘することができる。

確かに、集落跡を構成する遺構の発見がなかった本遺跡の集落の姿は、詳細に復元することが困難である。しかし、出土遺物から、比較的多く存在した内の一集落であった可能性を指摘することができた。また、集落の性格・特徴と直接関係するとは限らないが、集落を巡る流通等の社会の一端を示す資料と成り得ることも指摘できた。

以上は、確実性に欠けることを省みないで述べてきた内容であり、全てが正当に評価できるとは限らない。遺物についても、流路等に流れてきたものであり、その出土量が特別多いわけでもない。これを素直に検討材料にして良いものかについては不安が残る。しかし、かつての戸和田郷の中に小谷部の縁辺部、丘陵を背後にした微高地上の小規模な集落が存在していたことは明らかであると考えたい。陸奥地域や当時の集落についての今後の検討の際に、今回の調査資料も参考になれば幸いである。

現地調査および本報告の作成に当たっては、次の方々には有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

伊藤美鈴 北島恵介 柴田 稔 清水 尚 鈴木 有 廣川達麻 本田祐二 松井一明

参 考 文 献

- 伊藤美鈴 1998 「150 ツボノヤ遺跡」『森町史』資料編「考古 森町」
- 小野正敏 2000 「遠江の出土陶磁器組成の特徴—貿易陶磁を中心に—」『墳地城跡 総合調査報告書 資料編』 菊川町教育委員会
- 菊川町教育委員会 2000 「墳地城跡 総合調査報告書 資料編」
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清々谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県内の窯業遺跡 (静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)』 静岡県教育委員会
- 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 「矢崎遺跡II」
- 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生虎地」における編年について」『全国シンポジウム『中世常滑焼をおいて』資料集』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 森町教育委員会 1996 「静岡県森町 飯田の遺跡」
- 森町史編さん委員会 1997 「森町史 通史編上巻 森町」
- 森町史編さん委員会 1998 「森町史」資料編「考古 森町」
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

第4章 戸綿殿ノ谷遺跡

第二東名No.109地点



第1節 位置と環境

1. 位置と地理的環境

戸綿殿ノ谷遺跡は森町の南東部、森町陸実字殿ノ谷433他に位置する。森町域において、太田川東岸には丘陵地が続いている。その中で、陸実地域には北東にのびる比較的大きな谷が存在している。この谷は、北東にのびる北戸綿の谷と、東にのびる南戸綿の谷に分かれている。

南戸綿の谷の南側丘陵には、いくつもの支丘陵と支谷が連続している。本遺跡は、その一支谷の中に位置している。北に開く小さな谷の最奥部に立地しており、東西と南側には丘陵が迫っている。見晴らし・風通し・日当たりは良くない。

現地形では、谷筋中央を境にして、その東が高く、西が低くなっていた。ただし、段状に地形が改変され、畑や家屋に使用されていたことから、本来の地形とは異なるものと考えられた。

2. 歴史的環境と調査歴

本遺跡の南側丘陵上には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡が調査された西平子遺跡・東平子遺跡が立地する（森町教育委員会1996）。一方、西側の丘陵の尾根先端（北）部には、奈良・平安時代の遺物が採集されたツボノヤ遺跡が立地する（伊藤1998）。ツボノヤ遺跡が立地する丘陵の西側の谷部には宗源寺があり、古墳時代後期に屯倉を設けるための首として派遣されたという戸綿九峯師重の慰霊碑がある。

本遺跡については、「殿ノ谷」という地名から、先述した戸綿九峯氏もしくは中世武士である藤原通国の居館があったとも考えられている（大隅1997）。しかし、本遺跡の発掘調査は今回が最初である。

なお、これら歴史的環境については第4節の中でもふれる。



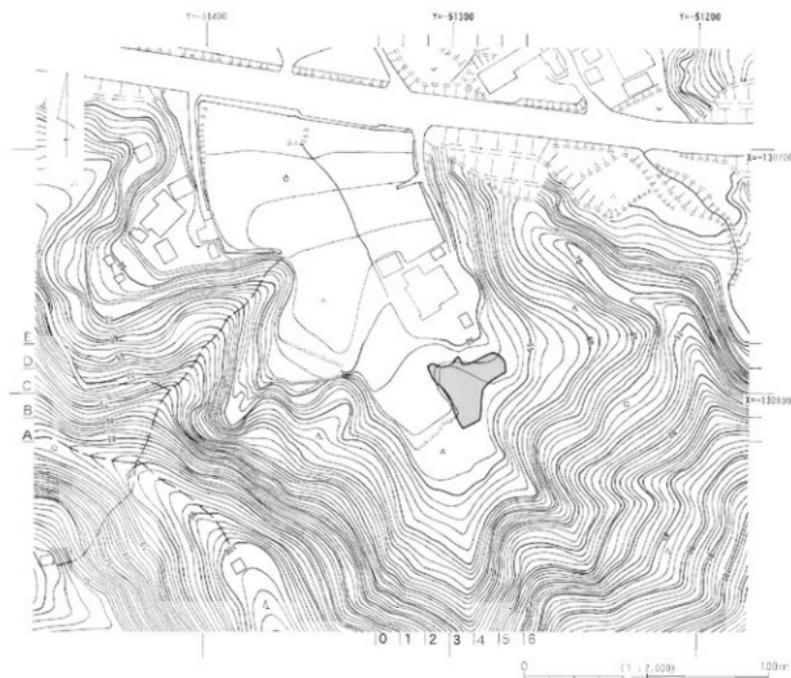
第35図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

本調査を実施した区域は、第36図のとおり、現況で標高約50～54mを測る谷奥の東半部にあたる。同じ谷奥の西半部については、確認調査で遺跡の存在を確認することができなかった。本調査区の北側に広がる平坦地でも、いくつかの自然流路がみられたにすぎず、遺跡の広がり認められなかった。調査区の北側には、両側丘陵急斜面との間に緩斜面部が若干存在する。遺跡が広がる可能性もあるが、今回の確認調査を含めた調査対象の外であり、確認できていない。

調査は、まず調査区および作業道や作業員棟等を設置した後、重機による表土除去を行った。その後、遺構検出面までの掘削、平面的な遺構プランの検出を人力で行い、続いて遺構検出も人力で行った。遺構の検出に際しては、まず主軸直行方向に土層帯を設けるかプランの半分を検出し、土層断面によって覆土の状況を観察・注記、土坑は土層断面を記録した後、遺構全体の検出を行った。調査区東半に検出された各地形については、谷筋に直行させた東西の土層帯を設定し、包含層および遺構検出面を観察・



第36図 本調査範囲とグリッド配置

検討・記録しながら重機および人力で掘削・検出作業を行った。

遺構調査に際しては、まず座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭の設置を委託して実施した。遺構番号は、遺物出土遺構についての遺構の種類に関わらず、発見順に付した。ただし本報告に際しては、全遺構に対して遺構種類別に新たな遺構番号を付した。遺物については、遺構内出土遺物は遺構ごと、包含層出土遺物はグリッドごとに取り上げた。ただし、包含層出土遺物は少なく、またC-3・4グリッドに集中するため、本報告に際しては一括にした。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、設定したグリッドに沿って作成した。遺構・景観等の現地記録写真の撮影は、6×7版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影等には、高所作業車を使用した。

2. 発掘調査の経過

平成13年1月10日、発掘調査を開始した。

1月初旬に現地作業員棟・駐車場・作業道を設置し、資器材等を準備した。その後、調査区を設定して、重機による表土除去を開始した。続いて、人力による表土除去および遺構プランの検出を1月末まで行った。基準点測量およびグリッド杭の打設は朝日航洋株式会社に委託し、その現地作業を1月22日に行った。

2月にかけて、遺構検出や遺物取り上げ作業とともに、東半部で発見した谷の検出作業を開始した。谷地形の堆積層は、平面的な精査と土層帯による検討・記録を行いながら、遺構検出面までの掘削を実施した。中世以前の遺物が出土しない土層（第38図2層）は重機、遺物包含層（第38図3～7層）は人力で掘削した。続けて、それらの下面で発見した遺構の検出を人力で行った。

現地写真撮影と実測作業を2月21日～3月2日に行った。3月中に資器材の撤収および作業員棟の撤去等を行い、3月2日に現地作業を終了した。

3. 資料整理と報告書作成

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成13年4月から本書掲載中の他の遺跡と同時に開始した。ただし、掛川工区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、さらには他の現地調査の実施と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査終了直後の基礎整理で、出土土器の洗浄・注記・接合・復元、遺構図・写真等の調査資料や遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理では、遺構図の修正作業が中心になった。

続いて、土器の図化作業、図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は、4×5判（白黒ネガ・リバーサル）、6×7判（白黒ネガ・リバーサル）、35mm判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。

第3節 調査の成果

1. 概要

(1) 地形

現況では、谷の奥（南）部が北側平坦地よりも一段高い台地状になっており、その上部は平坦になっていた。しかし、検出した地形は、調査区東半部が南北にのびる浅い谷、西半部が比較的低い丘陵状地形である。すなわち、調査区内の本来の地形は、現況の地形とは異なったものであり、何らかの人為的な造成等があったと判断することができる。

調査区西半の丘陵状地形の頂上は、平坦になっている。ただし、この平坦部分は表土直下で検出したものである。また、この平坦頂上部では遺構・遺物が発見できなかった。すなわち、後世の地形改変の結果として、丘陵状地形の頂上が平坦になっていると判断することができる。

谷部についても、人為的に平坦地にされていることがわかった。丘陵状地形を削平するとともに、谷部を埋めて平坦地を造成したと想定することができる。

以上より、地形改変以前の本来の地形は、谷の中央に比較的低い丘陵状の地形が北に向かったのび、その東西両側が谷地形になると復元することができる。調査区東半の谷は、東の丘陵縁が最深部になっており、その最深部には溝状の自然流路（SR01）が形成されている。調査区西半の丘陵状地形は、地形改変後の状況のみをみることはできないため、どれ程の高さで、どれ程の平坦部が頂上にあったかは推測の域を出ない。なお、周辺地形図（第36図）をみると、この微地形が南側丘陵地の微地形から連続するものであることがわかる。

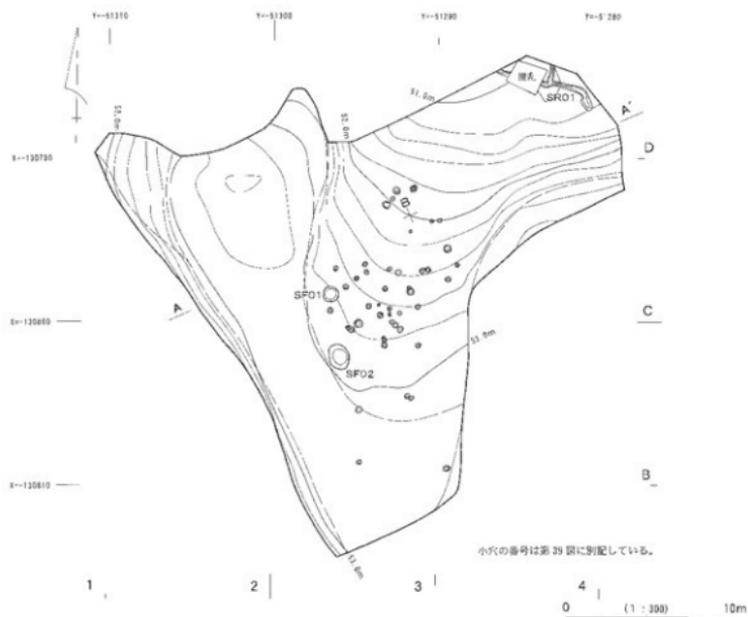
(2) 土層

基本土層は、第38図のとおりである。調査区西半では、削平を受けているため、表土直下が基盤層である黄白色泥岩層（第38図第10層）になっている。調査区東半の谷部では、表土の下に黄褐色を基調とした土層（第38図第2～4層）、さらにその下に暗褐色や黒褐色を基調とした粘質土層（第38図第5～7層）が観察できる。第2～4層は、近世以降の陶磁器等を多く包含している。また、調査区西半の基盤層（第10層）と類似した黄白色泥岩礫を多量に含んでいる。したがって、近現代に調査区西半部を削平して谷を埋めた土層であると考えられることができる。第5～7層は、散在的に遺物を包含しているが、全て中世以前の遺物である。水流の関係で青色化している層や多少の泥岩礫を含む層もあるが、堆積層であると判断できる。

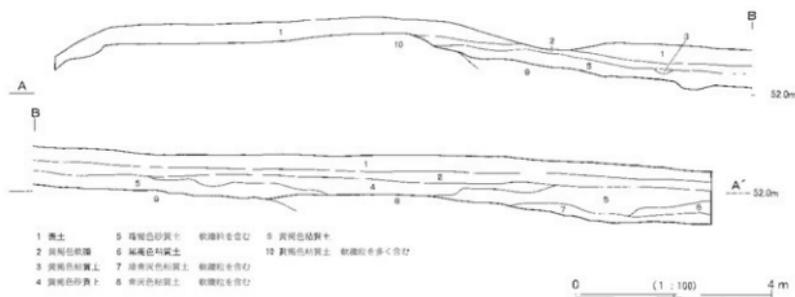
調査区東半（谷部）の遺構検出面は、第1～7層の下面であり、泥岩を多く含む暗黄褐色粘質土層の上面になる。これは、西半部の遺構検出面と同じ土層上ではない。よって、調査区東半部には北に下る深い谷が存在し、ある程度の堆積によって浅くなった後に遺跡が形成されたことがわかる。なお、谷の最深部となる調査区の東縁部になると、遺構面が暗青褐色粘質土層の上面となる。

(3) 遺構・遺物の概要

検出遺構は、小穴45基と土坑2基である。小穴は建物の柱穴である可能性もあるが、具体的に建物を復元することはできない。土坑の性格もわからない。土坑・小穴の出土遺物は小破片数点であり、時期を特定することは難しい。その他、自然流路が検出されている。



第37図 遺構配置



第38図 調査区土層断面

2. 遺構と遺物

検出遺構は、小穴45基、土坑2基である。その他、自然流路（SR01）が検出されており、これも本項で扱う。これら遺構の分布は、谷部に集中している。

(1) 小穴

柱穴であったものも含まれているであろうが、具体的に建物等を復元することはできない。また、柱穴であるか否かを、全てに求めることも困難である。小穴は、全てが谷地形で検出されている。とくに、B-3グリッド北東部からC-3グリッド南東部、谷部のそれほど下らない斜面部に集中している。出土遺物のあった小穴は次の3基である。

SP10（第39図、第16表）

C-3グリッド南東部の、検出面標高約52.4mに位置する。平面は直径約0.35mの円形、深さは約0.3mである。覆土は暗褐色土層で、下部に泥岩礫を少量含む。土器片1点だけが、覆土中層から出土している。小破片で摩滅も激しく、器種等の判断はできない。砂粒が比較的多く含まれる胎土であり、古墳・奈良時代の土師器である可能性が高い。

SP23（第39図、第16表）

C-3グリッド南東部の、検出面標高約52.6mに位置する。平面は直径約0.3mの円形、深さは約0.35mである。覆土は暗褐色土層である。土師器の小破片1点だけが、覆土中層から出土している。

遺物 1は台付甕の台部の裾にあたる破片である。小破片で摩滅も激しいため、図化した以上の形状の復元・調整の観察は難しい。裾端部内面に折り返しが確認できる。古墳時代以降のものであるが、詳細な時期を明確にすることは難しい。

SP39（第39図、第16表）

B-3グリッド北部の、検出面標高約52.8mに位置する。平面は直径約0.3mの円形、深さは約0.15mである。覆土は暗褐色土層で、上部に泥岩礫を少量含む。陶器1点だけが、覆土中層から出土している。小破片で器種等は不明である。中世以降の遺物と判断できるが、それ以上の特定はできない。

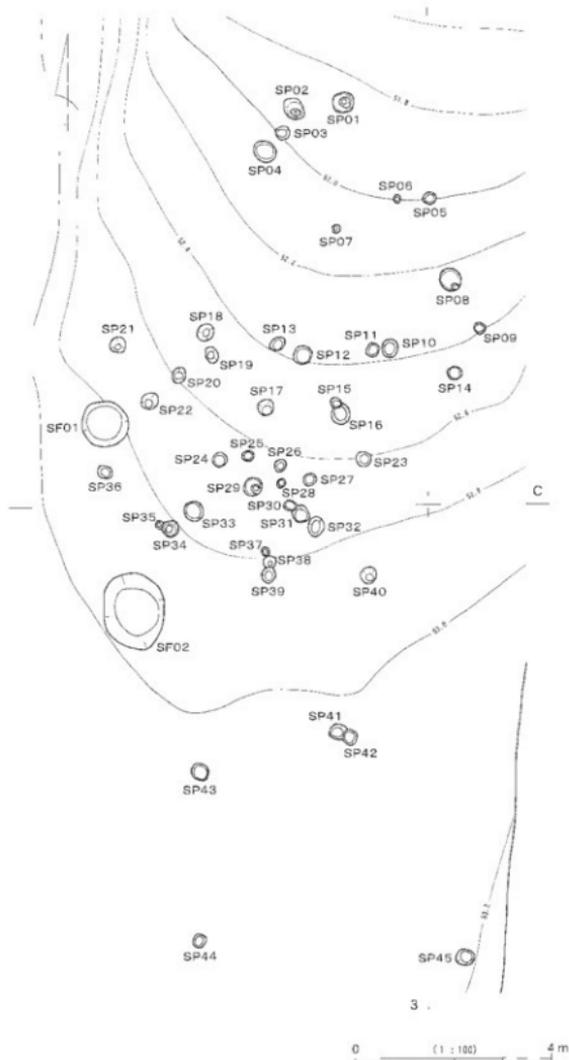
小穴からの出土遺物は、全て小破片である。また、出土位置は覆土中・上層であり、これら出土遺物が直接的に遺構の時期を示すとは考え難い。

小穴の覆土は、全て暗褐色か黒褐色の土層である。出土遺物との関連をみることは難しいが、基本土層（本節1・3、第4節1）と覆土との対応で、小穴の時期をある程度まで求めることはできる。基本土層では、暗褐色土・黒褐色土とも中世以前のものである。とくに、黒褐色土の方が古く、古墳時代終末期～奈良時代のものである可能性が高いと考えられる。しかし、それ以上の時期の特定を、積極的に行うことはできない。いずれにしても、何を目的とした小穴であるのか、もしくはどのような建物の柱穴であったのかを説明できる小穴はない。

第16表 小穴一覧表

遺構名	標高(遺構頂)	遺構底高	備考
SP01	51.34	51.81	
SP02	52.00	51.79	
SP03	52.05	51.79	
SP04	52.13	51.96	
SP05	52.04	51.90	
SP06	52.03	51.87	
SP07	52.12	52.00	
SP08	52.27	52.14	
SP09	52.42	52.18	
SP10	52.40	52.09	土器片
SP11	52.45	52.22	
SP12	52.40	52.15	
SP13	52.40	52.11	
SP14	52.51	52.15	
SP15	52.50	52.25	SP18より新
SP16	52.50	52.25	SP13より古
SP17	52.50	52.27	
SP18	52.50	52.23	
SP19	52.50	52.13	
SP20	52.60	52.37	
SP21	52.70	52.47	
SP22	52.70	52.25	
SP23	52.69	52.33	土器片(下段)
SP24	52.70	52.49	
SP25	52.60	52.37	
SP26	52.60	52.32	
SP27	52.60	52.48	
SP28	52.60	52.34	
SP29	52.80	52.47	
SP30	52.70	52.36	SP15より新
SP31	52.70	52.46	SP20より古
SP32	52.80	52.35	
SP33	52.79	52.37	
SP34	52.81	52.33	SP32より新
SP35	52.83	52.49	SP31より古
SP36	52.89	52.49	
SP37	52.79	52.44	
SP38	52.81	52.41	SP39より古
SP39	52.83	52.44	土器片
SP40	52.89	52.31	SP28より新
SP41	52.88	52.36	SP24より古
SP42	53.09	52.35	SP31より古
SP43	53.05	52.30	
SP44	53.15	52.50	
SP45	53.29	52.52	

標高の単位：m



第39図 小穴・土坑群およびSP23出土遺物

(2) 土 坑

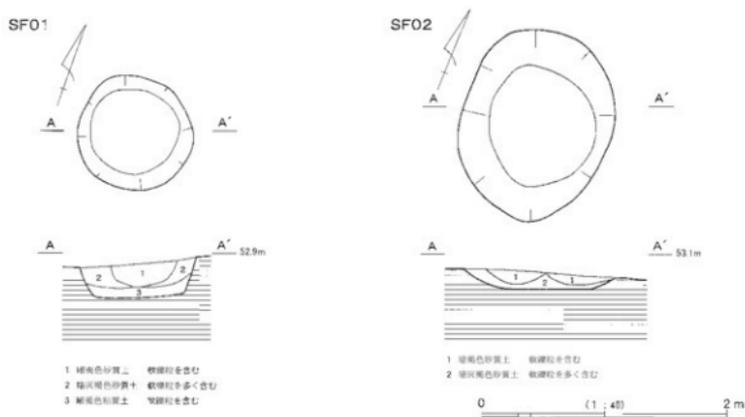
S F 0 1 (第40図)

C-3グリッド南部の、検出面標高約53.1mに位置する。平面は直径約0.95mの円形で、深さは約0.55mを測る。覆土は暗褐色を基調とした土層であり、上部は砂質、下部は粘質が強く泥岩礫を含む。出土遺物はなく、遺構の時期・性格を明確にすることはできない。

S F 0 2 (第40図)

B-3グリッド北部の、検出面標高約53.0mに位置する。平面は長軸約1.6m、短軸約1.2mの楕円形で、長軸はほぼ南北方向である。深さは約0.20mを測る。覆土は褐色砂質土で、下部に泥岩礫を含む。出土遺物はない。

他の遺構と異なる褐色の覆土が特徴的である。基本土層（本節1・3、第4節）と比較すると、近世以降の可能性が高い。なおSF02の場所では、中世以前の堆積土（第38図第5～7層）を確認することができなかった。よって、他と同一面で検出されたものだが、先の判断は否定できない。



第40図 SF01・SF02

(3) 自然流路

D-4グリッド南西部、東丘陵寄りの谷地形の底面にSR01が位置する（第41図）。位置と方向、不定形な形状から、人為的な溝状遺構ではなく、谷底の小さな自然流路であると判断できる。

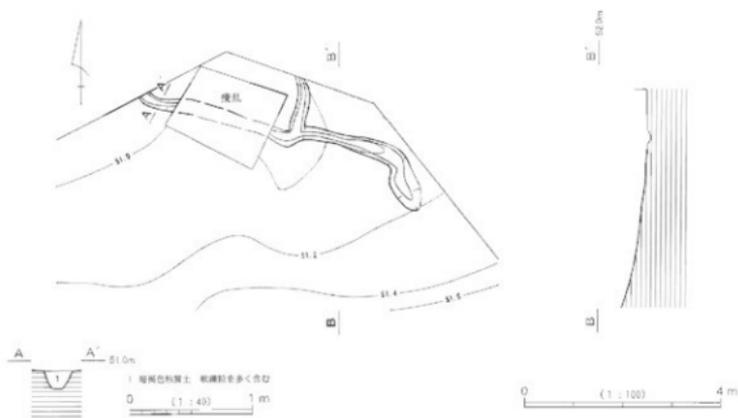
谷筋方向と同様、西北西にのびている。幅は0.2～0.6mで、長さ約6mを検出したが、さらに調査区外にのびていく。深さ平均約0.15mの流路は、検出した北西端で急激に深くなり、SR01自体が深い谷になっていくことがわかる。周辺の確認調査でも、この続きが確認できている。また、この自然流路には、北東から合流する流路が存在している。形状等は同様である。

出土遺物には、土師器と須恵器の破片がある。これらは、自然流路内のほぼ全域から散在的に出土している。

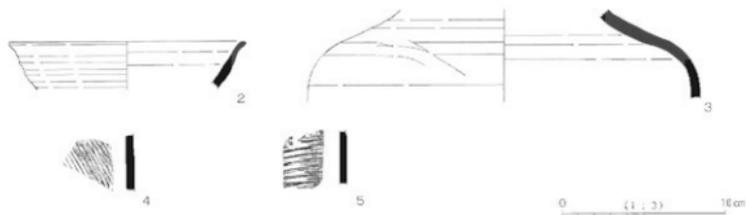
遺物（第42図） 土師器は全て小破片であり、器面も激しく摩滅している。器壁は0.5cm前後、胎土には砂粒が多く含まれている。

2は須恵器の杯もしくは高杯の口縁部である。体部は僅かに内湾しながら立ち上がる。口縁は外反し、口唇部は丸く仕上げている。色調は青灰色、胎土に黒色粒が多くみられる。3は須恵器で、壺類の肩にあたる破片である。頸部径は12cm前後に復元でき、短頸もしくは広口壺である可能性が高い。肩は屈折せずに漲る。内外面ともに回転ヨコナデ調整が施されているが、外面の肩には、回転ヨコナデ調整の後に施された斜め方向のナデが観察できる。自然蝕が外面の肩から上部を中心に付着している。4・5は須恵器の甕等の胴部である。外面に平行タタキ麻が残されている。内面はナデ調整が施され、工具痕は消されている。

出土須恵器は、概ね7世紀後半から8世紀前半代に位置付けられよう。もちろん、全て同じ時期であるという根拠はない。また、全て小破片であり、これ以上の詳細な時期を特定することは難しい。土師器も小破片で占められており、遺構時期を確実に左右させるものがない。よって、SR01の年代は、須恵器による7世紀後半から8世紀前半代を大きく離れることはないと判断できる。



第41図 SR01



第42図 SR01出土遺物

(4) 遺構外の出土遺物

地形および包含層の概況は、本節1で既に述べた。ここでは、遺構および自然流路以外から出土した遺物を取り上げ、遺跡全体の時期的範囲と主体時期を探る材料となるものを提示する。

出土した遺物量は200点弱である。土師器、須恵器、山茶碗、かわらけ等が存在するが、破片が大半を占める。

土師器 (第43区)

60点弱出土している。ほとんどが小破片で、表面の摩滅も激しい。器種・部位のわかる破片は図化した2点だけである。縄文・弥生土器に特徴的な形状や文様はみられず、全て土師器と判断した。

27は土師器、甕の口縁部である。口唇部は内湾している。小破片で摩滅も激しいため、これ以上の詳細な観察・復元は不可能である。28は台付甕の台部裾の破片である。小破片で摩滅も激しいため、図化した以上の観察・復元は難しい。裾端部内面に折り返しを確認できる。

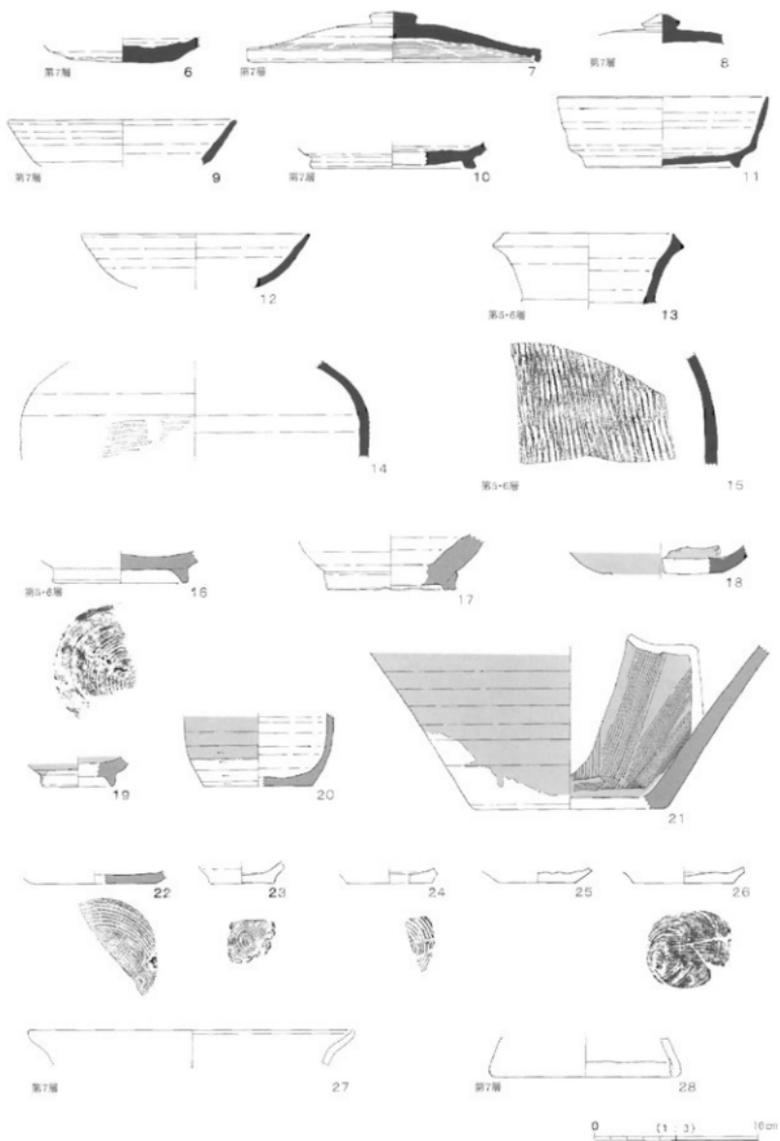
27は古墳時代後期以降の土師器、28も古墳時代以降の土師器である可能性が高いと判断することができる。

須恵器 (第43区)

50点弱出土している。主に杯蓋・つまみ付杯蓋・有台杯身・壺瓶類・甕が出土している。しかし、多くは器種も特定することができない。また、器種がわかっても図化できない破片が多い。

6は無台杯の底部である。底部裏面は未調整、他はロクロ回転によるナデ調整が施されている。7・8はつまみ付杯蓋である。7は扁平な擬宝珠形つまみが付き、器高は低い。外面ほぼ全面に自然釉が付着している。しかし、一部に重ね焼きの痕がみられ、その部分には自然釉が付着していない。8は高めの宝珠形つまみが付く。9～11は有台杯である。9は口縁～体部の破片である。傾きをもって短く立ち上がっており、11とは異なる器形を呈する。10は有台杯の底部である。高台は断面方形、全体的に器壁が厚い。焼成不良のためか、底部裏面が暗赤褐色を呈している。11も有台杯で、箱形を呈する。高台の断面は三角形もしくは爪形に近い。薄い器壁、良好な焼成など、10とは異なる特徴が目立つ。なお、8と胎土が近似しており、組み合わせる可能性がある。12は無蓋高杯の杯部等と考えられる。口唇部は丸く仕上げられている。焼成がやや甘い。13は瓶類の口縁部である。頸部の径や高さから平瓶か横瓶の可能性が高い。14は壺類の肩部である。肩が削折しない、球形に近い胴部であると復元できる。肩より下の外面には平行タタキ痕が残されている。15は甕の胴部である。外面に平行タタキ痕が残されている。内面はナデ調整が施され、工具痕が消されている。

器種の特定もできないものがあり、小破片が多いため詳細な時期を比定することは難しい。概してみると、7世紀後半から8世紀前半代に位置付けることができる。個体によっては詳細な時期についての差があるだろう。しかし、谷への堆積土中からの出土遺物であり、個体による時期差があっても、大きな矛盾にはならないと考える。



第43圖 包含層出土遺物

その他 (第43図)

山茶碗・灰袖陶器などの各種陶磁器は各数点、かわらけは70点程の破片が出土している。

16は山茶碗、泥炙・湖西産碗の底部である。高台は比較的しっかりとして外に開き、底部裏面に糸切痕が残されている。17は瀬戸産大平鉢の底部で、高台を有する。高台は体部下端に付く。高台の下端面はつぶれ、スノコ痕が観察できる。18は龍泉窯系青磁碗の体部の下半で、高台の際が一部に認められる。軸の光沢が強く、内面に片彫りの割花文の一部が認められる。輸入陶磁器はこの1点のみである。

19は志戸呂産陶器、碗類の底部である。焼成が甘かったためか、施釉が割れたようになっている。20は志戸呂産陶器の底部で、徳利に復元することができる。21は志戸呂産陶器、播鉢の体部～底部片である。内面の柵目は、確認できるもので最大13条を数える。22も志戸呂産陶器と考えられるが、器種は特定できない。底部裏面には糸切痕が残されている。また、外面に二次焼成が認められる。23～26はかわらけの底部であり、全てロクロ成形である。23・24の底部裏面には、糸切痕が残されている。

16は12世紀代(湖西古窯跡群の山茶碗編年(松井1989・1993)I期)に位置付けることができる。17は13世紀代に位置付けることができる。18は特定し難いが、12世紀中葉～13世紀初頭(大宰府編年(横田・森田1978)龍泉窯系青磁碗I類-4)の前後に位置付けることができる。20・21は、大宰府期の志戸呂産陶器であり、16世紀後半代に位置付けることができる。他については中世か近世か、時代を判断することもできない。

第17表 遺物観察表

番号	探検 番号	探検 層位	遺物 種別	産地	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調	備考
1	39	17	SPT2 土師器		台付窯	内面	15					不良	黄褐色	
2	42	17	S8A1 須恵器		杯	口縁部	10		(14.5)			良好	黄褐色 暗青灰色	外面に自然釉
3	42	17	S8A1 須恵器		碗	口縁部	15	(24.0)				良好	青白灰色	
4	42	17	S8A1 須恵器		碗	胴部	5					良好	黄褐色	
5	42	17	S8A1 須恵器		碗	胴部	5					良好	黄褐色	
6	43	17	第7層 須恵器		杯身	底面	29					不良	白灰褐色 白灰色	
7	43	17	第7層 須恵器		つまみ 付杯蓋	全体	70	3.2	(17.9)	(17.9)		良好	淡青白灰色	外面に自然釉
8	43	17	第7層 須恵器		つまみ 付杯蓋	天井部	20					良好	外面:黄褐色 内面:黄青灰色	
9	43	17	第7層 須恵器		杯身	口縁- 体部	5		(14.1)	(14.1)		良好	黄青灰色	
10	43	17	第7層 須恵器		杯身	底面	30				(16.1)	不良	黄青灰色	
11	43	17	包含層 須恵器		杯身	全体	20	4.4	(12.0)	(13.0)	(5.5)	良好	黄青灰色	
12	43	17	包含層 須恵器		杯身	杯部	10		(14.0)	(14.0)		不良	黄青灰色	
13	43	17	第5・6層 須恵器		碗	口縁- 胴部	15		(11.9)			良好	外面:灰褐色 内面:青白灰色	
14	43	17	包含層 須恵器		壺	胴部	15		(21.2)			良好	外面:青白灰色 内面:黄褐色	外面に自然釉
15	43	17	第5・6層 須恵器		碗	胴部	5					良好	灰褐色	
16	42	6	第5・9層 山茶碗	泥炙・湖西	碗	底面	20			(8.2)		良好	灰褐色	糸切痕
17	43	18	包含層 陶器	瀬戸	鉢	底面	40			(7.9)		良好	外面:青灰色 内面:灰褐色	スノコ痕
18	43	18	包含層 陶器	青磁 龍泉窯系	碗	体部	10					良好	黄褐色	暗灰色透明施釉
19	43	18	包含層 陶器	志戸呂	碗	底面	20			(4.5)		良好	黄褐色	内外面に施釉
20	43	18	包含層 陶器	志戸呂	徳利	胴部	40		(9.1)	(6.6)		良好	黄褐色	外施施釉
21	43	18	包含層 陶器	志戸呂	播鉢	体部- 底面	70			(12.1)		良好	黄褐色	
22	43	18	包含層 陶器	志戸呂?	不明	底面	50			(7.5)		良好	黄褐色	糸切痕 二次焼成
23	43	18	包含層 かわらけ		鉢部	40				(4.0)		良好	外面:黄褐色 内面:黄褐色	ロクロ成形 糸切痕
24	43	18	包含層 かわらけ		鉢部	15				(5.7)		良好	黄褐色	ロクロ成形 糸切痕
25	43	18	包含層 かわらけ		鉢部	40				(4.6)		良好	黄褐色	ロクロ成形
26	43	18	包含層 かわらけ		鉢部	30				(5.2)		良好	黄褐色	ロクロ成形 スノコ状痕
27	42	18	第7層 土師器		壺	口縁部	10		(19.8)			不良	黄褐色	
28	43	18	第7層 土師器		台付窯	体部	15			(11.9)		良好	黄褐色	

() 内の数値は器高

3. 出土遺物の数量

ここでは、遺跡の主体時期や性格を探るための資料として、出土全遺物の数量について示しておく。全出土土器は破片数で214点を数える（第18表）。なお、接合する破片もしくは同一個体と判断できる破片の数は数点に限られるため、破片数から導き出せる結果と個体数から導き出せる結果に大きな差異が生じない。よって、以下は破片数によってのみ述べることにする。

遺跡全体でみると、土師器、須恵器、かわらけの破片数が圧倒的に多い。すなわち、古墳時代終末から奈良時代の遺物と、中世から近世の遺物が多いことがわかる。よって、遺跡全体の遺物出土量からみると、2つの時代に本遺跡の主体時期があると考えることができる。

遺構（自然流路は除く）から出土した遺物は、先述してきたように非常に少ない。すなわち、直接的に本遺跡を構成する遺構の時代を特定することはできない。遺物の多くは、谷の埋没層からの出土である。そこで、層位ごとの出土遺物の種類をみることにする。

第1～4層からは、多時代にわたる遺物が出土しているが、中でも中近世の遺物が多く出土している。とくに、かわらけと山茶碗以外の中近世陶器の出土が、第1～4層に限られる点は注目できる。第5～7層では、土師器や古墳時代終末期から奈良時代の須恵器と、平安・鎌倉時代の灰釉陶器や山茶碗の破片が出土している。第1～4層で多く出土した近世の遺物は出土していない。さらに下層になる自然流路（SR01）の覆土からは、土師器と古墳時代終末期から奈良時代の須恵器の破片だけが出土している。近世・中世の遺物は出土していない。

以上から、多少の混在があるものの、下層ほど古い時代の遺物が出土し、新しい時代の遺物が出土しなくなるという、層位的に矛盾のない谷の埋没層と出土遺物の関係がみられる。SR01の覆土は古墳時代終末期から奈良時代、第5～7層は中世以前、第1～4層は近世以降の土層であると判断できる。

遺跡全体の出土量からでは、2つの時代に主体時期を求めることができる。しかし、第5～7層は中世以前による土層と判断でき、これら土層の下面で発見された多くの遺構に関しては、中世以前の遺構であると判断できる。また、中世以前の中でも古墳時代終末期から奈良時代の出土遺物が多いことを考慮すれば、遺跡の主体時期が古墳時代終末期から奈良時代にある可能性が高い。

出土灰釉陶器は、胎土等から清ヶ谷産のものと判断される。出土山茶碗は、胎土等から17（第43図）が瀬戸産のもので、16（第43図）を含めた他の破片は瀬美・湖西産のものと判断される。ただし、図化したもの以外に時期等の判断が可能な破片はない。その他の中近世陶器についても、図化した以外に、産地・時期・器種を明確にすることができる破片はない。

第18表 種類別土器片出土数の計数表

	土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	その他陶器	青磁	かわらけ	総数
第1～4層	24 (19)	15 (12)		1 (1)	14 (11)	1 (1)	70 (56)	125 (100)
第5～6層	4 (66)	1 (17)	1 (17)					6 (100)
第7層	40 (57)	29 (42)		1 (1)				70 (100)
SR01	5 (38)	8 (62)						13 (100)
遺跡全体	69 (32)	56 (26)	1 (1)	3 (2)	14 (6)	1 (1)	70 (32)	214 (100)

※（ ）内は総数を100とした割合

第4節 まとめ

1 遺構の時期

散在する土坑や小穴の時代・時期については、遺構内出土遺物が少なく、厳密に特定することはできない。しかし、層位との関連から、ある程度まで限定することはできる。

基本土層の第5層からは、第43図13・15・16の他、須恵器や山茶碗の破片が出土している。その中で、最新時期の遺物は16の山茶碗であり、12世紀代に位置付けられる。遺物の使用・廃棄時期を考慮すると、第5層の堆積は、概ね12～13世紀の可能性が高いと判断できる。

谷の最深部では、第5層の下に基本土層の第7層が堆積している。ここからは、7世紀後半～8世紀前半代に位置付けられる遺物が多く出土している。さらに、第7層の下面で自然流路（SR01）が発見され、7世紀後半～8世紀前半代の遺物に限って出土している。自然流路（SR01）があった時期は、7世紀後半～8世紀前半代であると判断できる。

SF02・SP41～45以外の小穴・土坑は、第5層下面で確認されている。したがって、第5層堆積時にはこれら遺構が存在しており、小穴・土坑の多くは12～13世紀以前につくられたと判断できる。谷の最深部では、第5層下面・第7層下面のいずれにおいても、遺構を発見することができなかった。よって、小穴・土坑の遺構群が自然流路（SR01）のあった時期に形成されたのか、SR01の埋没と第7層の堆積の後に形成されたのかについては判断し難い。

2 遺跡の時期と範囲

以上、多くの遺構は中世以前のものと判断できるが、それ以上に特定することはできない。しかし、遺構外の出土を含めた遺物を見ると、中世以前においては7世紀後半～8世紀前半代のものが多い。本遺跡の主体時期は、この7～8世紀前半代（古墳時代終末期から奈良時代）にあると考えられる。

確かに、本遺跡出土遺物の大半は谷部に流入して散在した状態で出土したものである。しかし、本遺跡へと遺物が流出してしまうような他の遺跡を確認することはできない。本遺跡以外の遺跡の存在に留意する必要が全くないわけではないが、むしろ、発見された遺構の中にこの時期のものがある可能性、さらに次で述べるように、本遺跡内でも他の場所に遺跡の中心が存在している可能性も考えておきたい。

横出遺構は、調査区西西部の低い丘陵状地形の東斜面（調査区東半谷部の西斜面）に集中している。丘陵状地形の頂上部は、削平のために遺構の有無・内容を知ることができない。しかし、本来の遺跡の中心がそこにあった可能性も考えることができる。一方、谷奥にあたる調査区の南には、丘陵の急斜面までの間に、いくつかの緩斜面の範囲が存在している。調査範囲外で確証は得られないが、ここに本遺跡の中心的位置がある可能性も考えることができる。いずれの場所も、調査区東半の谷部に遺物が流れ込んでもおかしくない場所であり、また両方の場所に遺跡が展開していた可能性も考えられる。

3 遺跡の性格

陸実地域や周辺地域で知られている7世紀末から8世紀代の遺跡としては、まず古墳群・横穴群があげられる。森町飯田では、北谷田古墳群・日当古墳・観音堂横穴群・谷口横穴群で、8世紀代にまで古墳や横穴墓をつくっていたことがわかっている（伊藤1998）。陸実地域でも、戸締古墳群や奥戸綿古墳群といった古墳群が知られており、詳細な時期を特定できる古墳はない（大橋1998）が、7世紀末から8世紀代に築造された古墳が存在する可能性も否定できない。以上の古墳群は丘陵上の高所、横穴群は

その斜面に立地する場合が多い。

古墳群・横穴群以外の遺跡としては、同じ陸奥のツボノヤ遺跡、飯田の平子鹿寺が知られている（伊藤1998）。平子鹿寺は陸奥の谷の南側丘陵上、その高所に立地する。古くからの伝承とともに奈良時代前期の布目瓦が出土しており、寺院があったことが確実視されている。一方、本遺跡の西側丘陵上に位置するツボノヤ遺跡では、奈良時代から平安時代の遺物が採集されている。比較的低くなった丘陵先端部に立地し、若干の平坦面をもった場所になっている。発掘調査歴がなく詳細はわからないが、周辺の古墳群等とは立地地形に異なる特徴をもっている。

本遺跡は小谷部に立地しており、見晴らしの良い場所ではない。調査区西半の丘陵状地形は、たとえ残存していたとしても大きな丘陵ではない。あくまで、小谷内の微地形としての丘陵状地形を呈していたと考えられる。以上の要素を考慮すると、小穴や土坑が発見されている本遺跡においては、古墳群等といった墓域ではなく、居住した場所であった可能性が高いと判断できる。なお、遺跡の性格や役割・施設を想定させるような出土遺物はない。

4 館跡の推定について

本遺跡の存在・性格を想定した考えがあることは第1節2でふれた。それは、本遺跡のある谷部から南側の丘陵上までを範囲とする小字名「殿ノ谷」を根拠とし、丘陵上か谷部、もしくは両方に居館があったのではないかとということである。また本地域については、古墳時代後期以降の戸綿九峯氏や中世（15世紀頃）の戸和田藤原氏のことが記録にあり、こうした者の居館である可能性まで考えられている。

「戸綿親白九峯傳記」という文書によると、古墳時代後期に屯倉を設けるため、都から戸綿の地に戸綿九峯師重が派遣されてきたという。ツボノヤ遺跡が立地する本遺跡の西側丘陵、そのさらに西側の谷部には宗源寺があり、そこに戸綿九峯師重の慰霊碑がある。そこにも、先述したものと同じ内容が記されている。そして、「殿ノ谷」には、その館があったと考えられているようである。

確かに、本遺跡の主体時期は7世紀後半から8世紀代である。古墳時代後期にあたる師重の時期ではないが、その系統を引く者の館があった可能性は全くないとはいえない。しかし、今回の調査で館跡であることを明確に示すような遺構・遺物は発見されていない。また、「戸綿親白九峯傳記」は1826（文政9）年に書かれた伝記であり、全て事実が記されているとは限らない。宗源寺の慰霊碑も現代のものであり、記されている内容は概ね伝記からのものである。この伝記自体に信憑性がない上、今回の発掘調査成果からその確証を得ることはできないのである。

1407（応永14）年、藤原通国が賀茂宮の宝前に鰐口を奉納したことが、掛川市願光寺所蔵鰐口銘によってわかっている。この戸和田藤原氏は、周辺地域を統治していた天方氏や山内氏と同じく、飯田荘に地頭として入部した山内首藤氏の流れをくんでいてと推測されている。そして、藤原氏は15世紀において飯田荘戸和田郷を統治していたとされている。しかし、藤原通国の後は、2代ほど経たず藤原通信・通種のことか、「円通松堂禅師語録」や通信が賀茂宮に奉納した鰐口によって知ることができただけである。戸和田藤原氏の系譜は、数代という短さで史上から姿を消してしまうのである。そのことは、原田荘にも壊滅的打撃を与えたとされる、北条早雲による遠州三郡（佐野・周智・山名）への侵略と無関係ではないと考えられている（大隈1997）。なお、鰐口等については第5章の鶴ノ前遺跡の報告でもふれる。

先述のとおり、地名「殿ノ谷」を根拠として本遺跡に居館跡があると考えられており、その居館は通国が構えたものともいわれている。この地の地形環境が居館に相応しいこと、通国による賀茂宮創建と同じ応永年間に再興され、通国が椏郡であったと考えられている宗源寺が、先述したとおり殿ノ谷遺跡の西隣の谷（堀ノ内）に現存していることも、推測させる要素になっている（大隈1997）。

15世紀代に限定することはできないが、中世遺物も少数出土している。先述のように、調査区西半の丘陵状地形が削平されていることや、調査対象外に遺跡が広がる可能性があることを考慮すれば、今回の調査結果だけで「中世居館」の存在を否定することはできない。しかし、現状で本遺跡の主体時期を15世紀頃とするのは非常に難しい。中世を主体とする遺跡、しかも居館跡が存在した確証を得ることはできない。

以上、「殿ノ谷」という地名等から想定される居館跡を、今回の調査成果から裏付けることは難しい。ただし、その大きな原因は、遺構・遺物が良好な状態で発見することができなかったことにある。逆に考えれば、居館跡の存在を否定することもできないのである。今回の調査からいえることは、本遺跡は森町陸奥において古代の人がいたことを示す遺跡であり、しかも丘陵上の寺や墓跡等ではなく、小さな谷部に居住・営んでいた可能性を示す遺跡として評価できるということである。

現地調査および本報告の作成に当たっては、次の方々に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

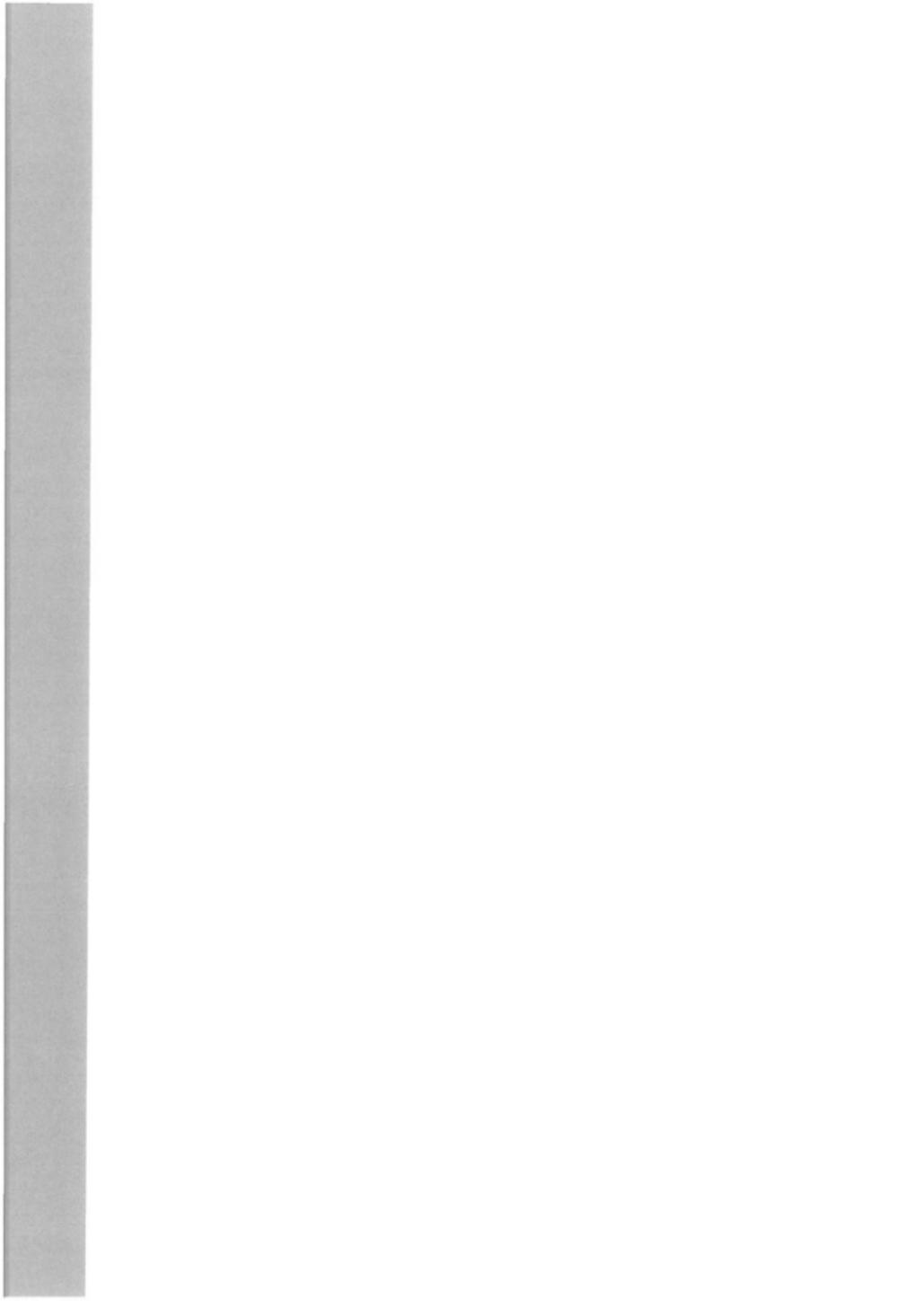
伊藤美鈴 北島恵介 柴田 稔 清水 尚 鈴木一有 廣川速麻 木田祐二
松井一明

参 考 文 献

- 伊藤美鈴 1998 「150 ツボノヤ遺跡」「152 平戸院寺」「158 北谷田古墳群」「164 観音堂横穴群」「169 谷口横穴群」「183 日当古墳」『森町史』資料編一考古 森町
- 大副信好 1997 「第3編 第5章 在地領主層とその城館」『森町史』通史編上巻 森町
- 大橋保夫 1998 「1142 戸編古墳群」「1149 奥戸編古墳群」『森町史』資料編一考古 森町
- 後藤建一 1989 「湖西古窯群の須恵器と窯構造」『静岡県内の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』静岡県教育委員会
- 静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城館跡』
- 鈴木敏明 2000 「古墳時代湖西窯編年の再構築に向けて。第1回東海土器研究会「須恵器生産の出現から消滅」発表要旨 東海土器研究会
- 中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真福社
- 費 元津 1997 「古代遠江の食器具」『静岡県考古学研究』29 静岡県考古学会
- 2000 「古代湖西窯編年の再構築」第1回東海土器研究会「須恵器生産の出現から消滅」発表要旨 東海土器研究会
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県内の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』 静岡県教育委員会
- 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
- 森町教育委員会 1996 『静岡県森町 飯田の遺跡』
- 森町史編さん委員会 1994 『森町史』資料編二古代・中世 森町
- 山村 宏・向坂剛二・平野和男 1966 「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯跡調査報告書』湖西町教育委員会
- 山村 宏 1969 「遠江の須恵器生産」『古代学研究』50 古代学研究会
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

第5章 鴨ノ前遺跡

第二東名No.111地点



2. 歴史的環境と調査歴

本遺跡は、本事業に伴う確認調査で発見された遺跡であり、今回が最初の発掘調査になる。弥生時代と中世の遺構・遺物が発見されているが、それぞれにおける周辺の遺跡は以下のとおりである。

弥生時代では、鴨山遺跡・逆井遺跡・藤重山遺跡等が周辺の遺跡としてあげられる。鴨山遺跡も本事業に伴って発掘調査され、本書中(第6章)に報告している。弥生時代後期の周溝墓の一部とされる遺構と遺物が発見されている。なお、ここには数基の古墳も分布している(鴨山古墳群)。藤重山遺跡では弥生時代後期的大型土壇などが採集されており、土器棺墓の存在する墓域であると推定されている(大橋1998)。逆井遺跡でも、縄文時代などに混じって弥生時代の遺物が採集されている(廣川1998)。

中世では、森町飯田に位置する12世紀末から13世紀初頭の比呂尼経塚(足立1998)、14・15世紀の観音堂中世墓(日本楽器製造株式会社1979、伊藤1998)が周辺の遺跡として知られている。しかし森町陸実では、ツボノヤ遺跡から奈良時代～平安時代(伊藤1998)、逆井遺跡から奈良時代～鎌倉時代の遺物が採集されている(廣川1998)程度で、詳細のわかる遺跡はない。なお、他の時代の遺跡を含めても、この地域での発掘調査事例は少ない。

森町では、丘陵上の遺跡が多いのに対して、本遺跡のような丘陵裾部や低地に立地する遺跡は非常に少ない。森町に所在する低地の遺跡としては、同じ太田川以東の森町飯田に位置し、森町教育委員会によって発掘調査された坂田北遺跡が注目される(廣川1998)。太田川が流れる東側に開口する谷に位置し、その谷の北側丘陵寄りに立地する遺跡である。調査では、水田面下数mの深さで縄文時代と奈良時代の遺構・遺物を発見している。本事業においては、森町陸実の比較的低い場所に立地する遺跡として、本遺跡と奥戸綿遺跡(本書第3章)・戸綿殿ノ谷遺跡(本書第4章)が発掘調査されている。しかし、この陸実の地域でも、多くの遺跡は丘陵上に立地する。

いくつかの文献(森町史編さん室ほか1999、大隈1997)をみると、鴨山丘陵にかつて賀茂宮(社)があったとされている。詳細は第4節でふれることとし、ここでは概要だけを記しておく。

本書第4章の戸綿殿ノ谷遺跡の報告でもふれたが、顯光寺(掛川市居尻)所蔵の鰐口には、戸和田郷を領有していた藤原通国がその鰐口を賀茂宮に寄進したとする銘がある。また、加茂神社(森町陸実南戸綿)所蔵の鰐口には、通国の子孫である藤原通信がその鰐口を賀茂三所大明神に寄進したとする銘がある。ともに15世紀のもので、当時において賀茂宮(社)が鎮座していたことがわかる。なお、本遺跡の北東1km弱の丘陵先端に加茂神社があり、これに比定できると判断されている。

賀茂宮が最初に設けられた年代等については、史料がなく明確にできない。先の文献によると、本地域は、平安時代においては白河・後鳥羽・後白河三代上皇の御起請地であって、後に皇室領荘園として伝領された地域であったようである。このような背景もあって、鴨山においては賀茂三社を勧請したとされている。また、小園神社(森町一宮所在)を中心とした「都うつし」が推進され、太田川を都の加茂川に見立て、本遺跡周辺域に加茂三社が配置されていたと考えられている。なお、鴨山丘陵の東側斜面中腹に平坦になった部分があり、そこに賀茂宮(社)があったという推定がある。

さらに、中世の軍事拠点として鴨山丘陵に砦が設けられたことも、先の文献で述べられている。鴨山砦や賀茂宮のあったとされる場所は、第二東名建設範囲より南に位置し、同じ丘陵でも今回の調査範囲にはあたらない。ただ、「鴨ノ前」という小字名から付けられた本遺跡の名称と対応するような状況が、調査によって認められる可能性も否定できない。客観的な調査成果の評価が必要であることはもちろんであるが、上記の点を全く無視することもできないであろう。

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

本調査の実施区域は、第45図のとおり丘陵東裾部の北半、標高約38mの部分である。丘陵の裾を巡る調査区で、南北に細長い。ただし、中央に大きな削平部分があり、調査区は北半部と南半部に分けられている（Ⅰ区とⅡ区）。確認調査によって、調査区の西の丘陵斜面と東の水田には遺跡が広がらないことがわかっている。一方、丘陵裾部が続く調査区の南北や、南西の丘陵斜面中腹にある平坦部については、関連する遺跡が存在する可能性もあるが、確認調査を含めて今回の対象範囲の外である。

調査は、調査区設定の後、重機で表土除去を行った。作業員棟等は、鴨山古墳群の本調査のものを引き継いだ。表土除去の後、遺構検出面までの掘削、遺構の平面プランの検出、続いて遺構検出を人力で行った。包含層の掘削や遺構の検出は、土層断面の観察・検討・記録の上で行った。

遺構調査に際して、座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭を鴨山古墳群のグリッド杭を使用して設置した。遺構番号は、遺物出土遺構についてのみ遺構の種類に関わらず、発見順に付した。ただし本報告に際しては、全遺構に対して遺構種類別に新たな遺構番号を付した。遺物は、遺構内出土物は遺構ごと、包含層出土物は層位・グリッドごとに取り上げた。ただし、包含層は単一層で、出土がC-12グリッドに集中するため、本報告では一括して報告する。

現地記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、グリッドに沿って作成した。現地記録写真の撮影は、6×7版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。また、全景写真撮影等に高所作業車を使用した。

2. 発掘調査の経過

平成12年1月13日、発掘調査を開始した。

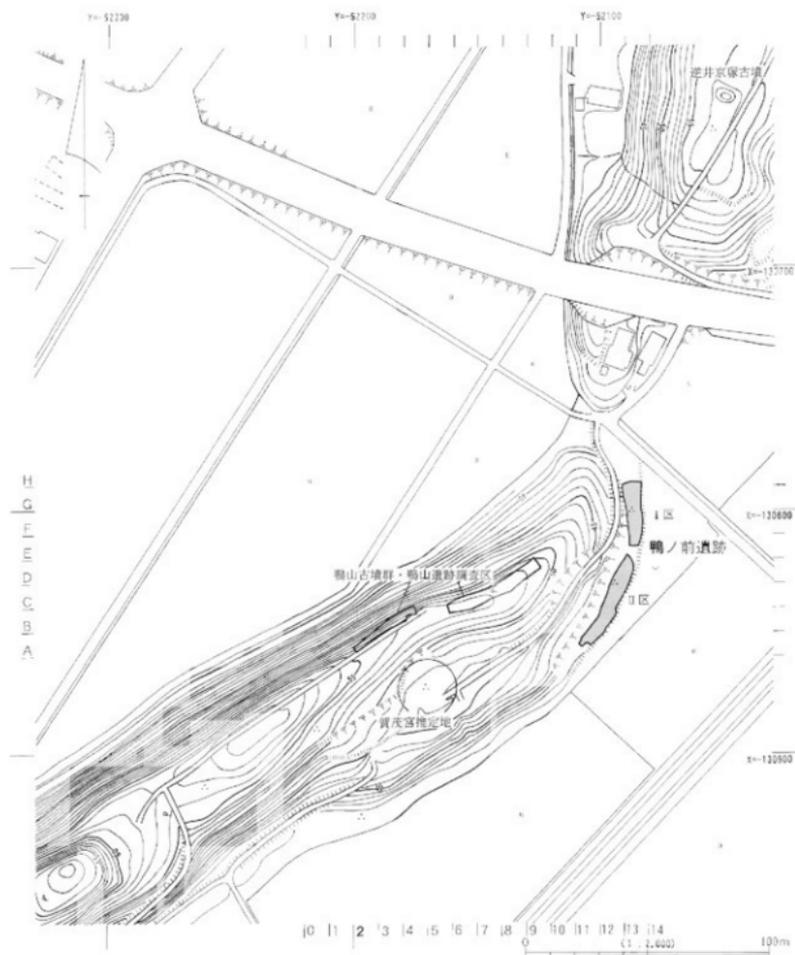
作業員棟等は鴨山古墳群の本調査から引き継いだ。まず、器材等の諸準備とともに調査区を設定し、重機による表土除去を開始した。続いて、1月18日から人力による包含層除去、遺構プランの検出、遺構検出、精査を随時行った。グリッド杭の打設は24日までに行い、引き続き遺物の取上げと実測等の記録作業を行った。

1月26日に高所作業車を使用して調査区の全景を撮影し、27日からは記録作業・遺構解体作業を行った。さらに、下層に遺跡が存在するかを確認するための掘り下げ作業を行った。下層には遺跡が存在しなかったため、2月1日には現地の作業を終了した。4日には作業員棟等の撤去も終了した。

3. 資料整理と報告書作成

本遺跡に関わる資料整理作業および報告書作成作業は、平成13年4月から本書掲載中の他遺跡と同時に開始した。ただし、掛川区内の他遺跡の資料整理・報告書作成作業、現地調査と重なることがあったため、その作業は断続的に実施していくことになった。

現地調査終了直後の基礎整理で、土器の洗浄・注記・接合・復元、図面・写真・遺物の台帳の作成を実施していた。よって、資料整理では遺構図の修正作業が中心になった。続いて、土器の図化作業、図面の編集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物写真撮影は、4×5判（白黒ネガ・リバーサル）、6×7判（白黒ネガ・リバーサル）、35mm判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。



第45図 本調査範囲とグリッド配置

第3節 調査の成果

1. 概要

(1) 地形

現況の地形が段造成されたものであることは明らかであった。したがって、発掘調査では現況と異なる地形が検出された。

丘陵寄りの狭い平坦面とそこから水田域にかけて下がる緩斜面が、I・II区それぞれに検出できた。平坦面は、土層断面（第47図）でもわかるように、斜面部を段造成によって造り変えたものと判断できる。また、I区とII区の間で緩斜面が分断されていたが、これも造成によるものと判断できる。よって、調査区における本来の地形は、比較的急な斜面から谷部の低平地に至る間の緩斜面部であり、その地形は丘陵裾に沿って巡っていたことがわかる。

ただし、検出された緩斜面部は、II区の北半部が広くより緩やかになっており、他は狭く傾斜が比較的急になっている。鶴山丘陵の東斜面に対して西斜面が崖のようになっていることを考慮すれば、丘陵西斜面に近づく調査区の北側方向へは、急な斜面へと変化していくものと判断できる。また、調査区の南側には丘陵東裾部が直線的に続いているが、調査区内での検出地形をみると、比較的広くより緩い斜面部が続いていく可能性は低い。むしろ、調査区内にだけ、もしくは断続的に緩斜面部が形成されているとみるのが妥当と考える。

調査区西側の丘陵寄りには、急な斜面が存在するため、緩斜面部が広がる余地は当然ない。一方、調査区東側の水田域側では、造成によって遺構面まで削平されており（第47図）、本来はもう少し緩斜面部が広がっていたと考えられる。しかし、確認調査の結果や周辺の地形から考えると、広大な緩斜面部は期待できない。

(2) 土層

基本土層は、第47図のとおりである。表土（第47図第1層）下では、ほぼ全域に暗褐色を基調とした黄色軟礫粒を含む土層（第47図第2層）を確認することができた。C-12グリッドでは、第2層中からの遺物の集中的な出土があり、第2層上面で検出されるべき遺構の存在も考えられた。しかし、平面・土層断面において遺構の有無とその検出面の検討を行ったが、第2層上面を検出面とする遺構は確認することができなかった。よって、調査は第2層を包含層とし、その下面で全遺構を検出することを基本にした。

遺構検出面（第47図第2層下面）では、場所によって異なる土層（第47図第3～6層）が確認できた。トレンチによって一部を掘り下げ、それら土層を断面で観察したところ、丘陵基盤層（第47図第6層）の上に第47図3～5層が堆積した状況を確認することができた。

黄色粘質土層（第47図第6層）が、丘陵を形成する基盤層である。この第6層の上面を断面でみると、当初の丘陵には緩斜面部はなく、急斜面をもって深い谷底に続くことがわかる。黒褐色を基調とした黄色軟礫粒を含む土層（第47図第3～5層）は、その上に堆積した土層である。第3～5層は若干の土質の違いと黄色軟礫粒の含有率によって分層したものであるが、基本的には連続して同様に堆積した土層

であると考えられる。そして、これらの土層の堆積を経ることによって、丘陵裾部の緩斜面部が形成されていることが確認できる。

(3) 遺構・遺物の概要

検出された遺構は竪穴住居跡5～6軒、小穴100基、土坑5基、溝状遺構6条、不明遺構3基である。また、出土遺物には弥生時代から中世までのものがある。

弥生時代の遺構・遺物の発見は、II区の南部に限られており、遺物の出土量も少ない。弥生時代の遺構と判断できるものは、土坑1基(SF05)と溝状遺構1条(SD06)だけである。SF05は土器棺墓である。一方、SD06は明確な性格を特定することができない。人為的な遺構ではない可能性も考えることができる。

古墳時代から奈良時代のものとしては、遺物が若干出土しているに過ぎない。さらに、それらは平安時代以降の遺物と混在して出土している。鶴山丘陵上には鶴山古墳群が立地しており(本書第6章)、そこから転落した遺物が混在した可能性が考えられる。

遺構・遺物の多くを占めるのは、以下にあげる平安時代から鎌倉時代のものである。

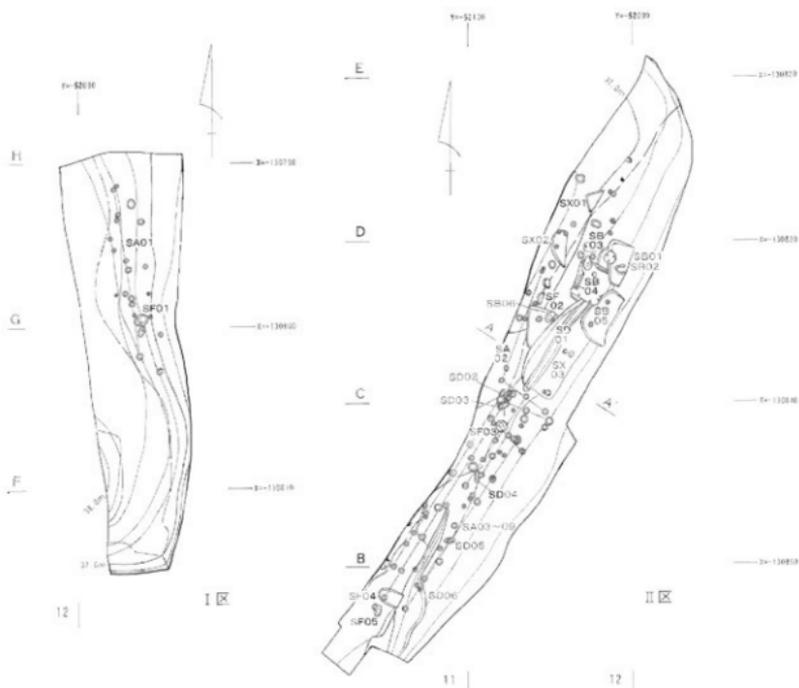
竪穴住居跡は5～6軒を検出した。それらは、C・D-12グリッドに集中する。斜面部で検出されており、また他の遺構と切り合っているため、壁体の全周を検出できたものはない。平面形をみると、方形のものが多い。規模は一辺2.0～3.5mと小型である。竈・柱穴・周壁溝が検出できたものもあるが、その有無や位置は一定ではない。灰釉陶器等が出土しており、概ね平安時代後期の遺構であると判断することができる。

小穴は100基を検出した。ほぼ全域で発見されているが、中でもB-11・12グリッドに多い。柱痕がわかるものや特に深いものはない。しかし、断面が2段になるものがあり、大半は柱穴であった可能性が高いと判断できる。ただし、掘立柱建物跡を想定することは難しい。小穴の列を抽出することはできるが、明確に梁と桁を抽出することはできない。今回の報告では、柱間が一定でない点、総長10mを超える列も抽出できる点から、柵(列)などがあつた可能性を評価した。なお、数基の小穴から山茶碗が出土しており、鎌倉時代の遺構であると判断することができる。

SX01・SX02は竪穴住居跡の可能性をもつ。しかし、残存状況が悪く、住居跡とする根拠が少ないために不明遺構とした。SX03については、SX01・02や竪穴住居跡に比べて規模が大きい。竪穴を伴う建物跡であったとしても、他の竪穴住居跡とは別の性格を伴っていた可能性が考えられる。また、SX03からは主に山茶碗が出土している。竪穴住居跡とは異なり、小穴と同じ鎌倉時代の遺構であると判断することができる。

遺物は、遺構からよりも包含層(第47図第2層)からの出土が多い。その中でも、C-12グリッドからの出土がとくに多い。このような遺物出土状況は、周辺からの自然な流入・混入ではなく、意図のある人為を示している可能性が高いと判断できる。

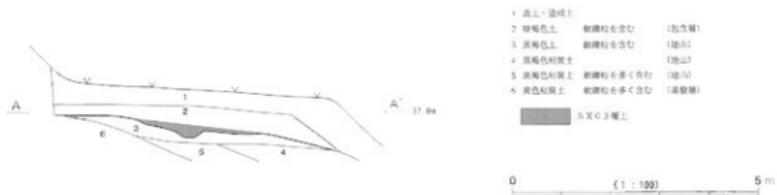
今回の調査では、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師質土器といった土器の破片が出土している。その中でも、平安時代から鎌倉時代の遺物、特に山茶碗の出土が大半を占めている。山茶碗の時期とほぼ同じ時期の遺物としては、白磁の破片が1点出土している。なお、灰釉陶器は竪穴住居跡からの出土に限られている。



○穴の番号は第17～第20図に記されている。



第46図 遺構配置



第47図 調査区土層断面

2. 弥生時代の遺構と遺物

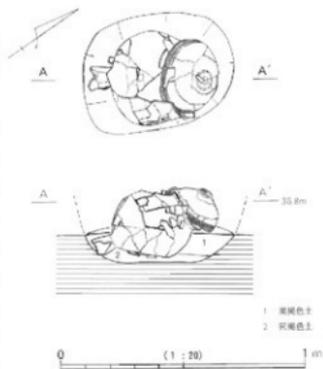
弥生時代の遺構は少なく、II区南部に限られる。また、弥生土器の出土もII区南部に限られる。

(1) 土器棺墓

SF05 (第48回)

A-11グリッド北部の、検出面標高約36.7mに位置する。平面はほぼ南北に長軸をもつ楕円形で、長軸約0.61m、短軸約0.47m、深さは約0.14mを測る。覆土は上部が黒褐色、下部が灰褐色土層で、下部の粘性が強い。

土器棺の身になる台付甕は、土坑の長軸方向に横倒しの状態で、口縁を北に向ける。胴部の欠損は、検出された上部に限られ、後世の破壊による可能性が高い。ただし、台部の東側の欠損は、検出した上部ではない。欠損部の破片が出土していないことから、本来より欠損した状態であったと考えられる。蓋には、壺の胴部下半だけを使用している。底部を上方向よりやや北に傾け、身(台付甕)の口縁と合わせ口にした状態にしている。天井部には穿孔が認められるが、割っただけで研磨等の跡はない。他に、土坑の底面から蓋と異なる壺の底部が出土している。



第48回 SF05

棺蓋(第49回1) 壺の胴部下半であり、図化した約2/3が残存している。胴部は肩の張らない下膨れの形状に復元できる。外面の最大径付近に横方向のハラミガキ調整、その上部に5本単位の櫛描斜格子状の施文が観察できる。下部は磨耗のために観察できない。内面は一部に板状工具による調整が観察できる。黒斑も観察できる。底部は上げ底状にしている。

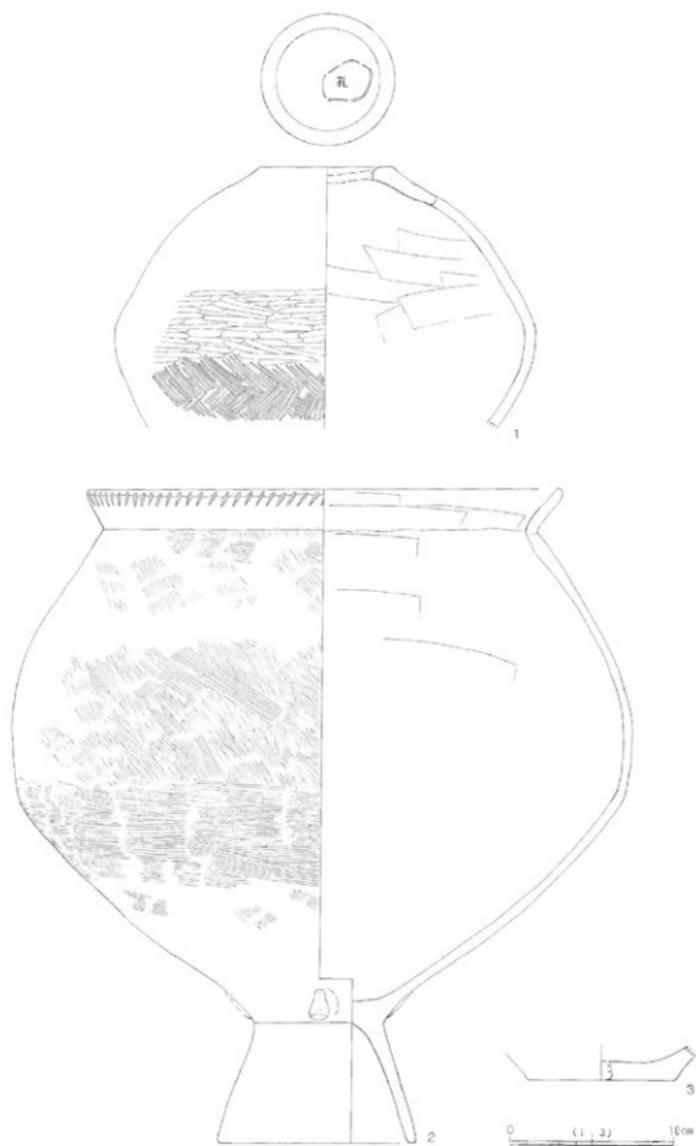
棺身(第49回2) 台付甕である。口縁部から胴部の約1/4と台部の2/3が欠損している。台部の裾は欠損しており、図より台部が高くなる可能性もある。胴部は上下半で製作段階が異なるようで、形状が明確に変化する。胴部下半はさほど内湾せず、台部との接合部から大きく外に開く。胴部上半は緩やかに内湾する。胴部～口縁部への屈曲は比較的明瞭である。台部はさほど内湾せずに裾へと広がる。

口縁部・胴部の外面のほぼ全体に、縦から斜め方向のハケ調整が認められる。ただし、強く張った胴部上下半境界付近だけは、横方向のハケ調整を施している。内面では、口縁部付近に横方向のハケ調整、それ以下に板状工具による調整が認められる。ハケ調整は8本単位の工具による。全体的に摩滅が激しく、その他の調整の観察は難しい。黒斑は胴部に認められる。

口唇部の外面には、0.5~1cm間隔で刻み目を施している。台部と胴部の接合部では、縦長二等辺三角形に近い形状の、貼付け文が確認できる。4方向に付けられたと復元することができるが、欠損や磨耗のため、全てを明確に観察することはできない。スズが胴部最大径付近の外面に付着している。

壺の底部(第49回3) SF05底面出土の壺の底部である。図化した範囲の約2/3の破片である。底部内面の中央に若干の高まりをもつが、外面は全く平坦である。調整等は摩滅のために観察できない。

1~3は、全て弥生土器である。壺の器形や櫛描文、台付甕の胴の張る器形や部分的な横方向のハケ調整等から判断すると、中期後半に比定することができる(岩本1995、佐藤1996)。



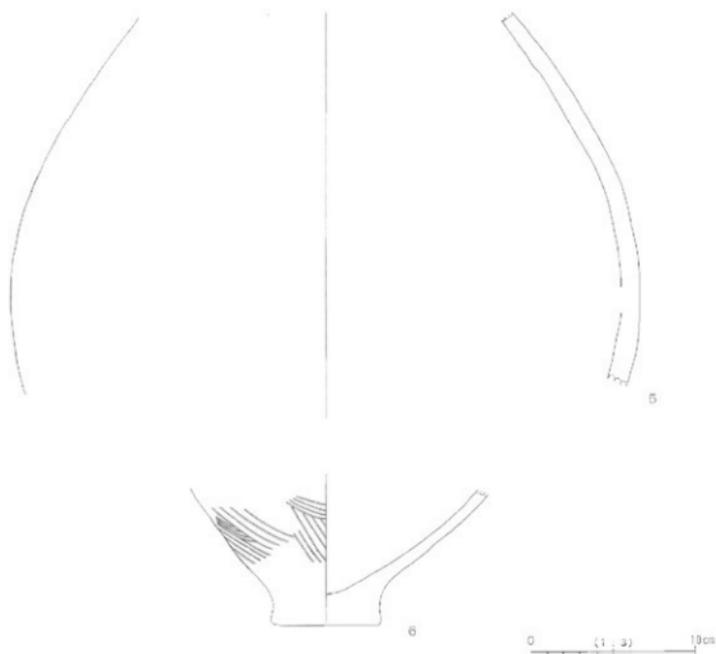
第49图 SF05出土遗物

(3) 遺構外の出土遺物

第51図にある2点だけである。ともにA-11グリッド北半部の第47図第2層からの出土である。

5は、壺の胴部であり、図化した範囲の約1/4が残存している。肩のあまり張らない下膨れの胴部であると復元できる。内外面とも摩滅が激しく、調整等は観察できない。6は、甕の底部と考えられる。胴部は直線的に開き、底部を突出させている。底部裏面は平坦であるが、内面の底にはほとんど平坦面をもたない。胴部の外面には4条単位の条痕状文が斜め方向に施されているが、明瞭ではない。突出する底部の側面には横方向のナデ調整が観察できる。内面の調整は観察し難いが、部分的に板状工具による調整が認められる。また、黒斑が目立つ。

器形の特徴から、5は弥生時代後期前半、6は弥生時代中期以前の土器であるとみることができる。ただし、いずれも部分的な資料であり確実視はできない。



第51図 包含層出土遺物（弥生時代）

発見された弥生時代の遺構・遺物を総じてみると、中期から後期前半を主としていることがわかる。遺構・遺物の発見がII区南部のA-11グリッドに限られ、数量も多くないことから、大きな弥生時代遺跡としては捉え難い。また、土器棺墓が発見されたことから、居住域や生産域ではなく、墓域であった可能性が高いと判断できる。

3. 古代・中世の遺構と遺物

本遺跡では、平安・鎌倉時代の遺構・遺物が多い。しかし、その遺構・遺物は、II区に集中して発見されている。なお、古墳・奈良時代の遺物も出土しているが、遺構に伴うものはほとんどない。包含層中でも、平安・鎌倉時代の遺物に混在するように出土している。

検出遺構には、竪穴住居跡5～6軒、小穴100基、土坑4基、溝状遺構5条、不明遺構3基がある。第3節1で述べたように、小穴には柱穴と考えられるものが多く、その配置から柵等のあった可能性が評価できる。しかし、この報告であげるような柵ではなく、別の柵列もしくは建物があった可能性も皆無ではない。なお、不明遺構には、竪穴住居跡である可能性をもつものが含まれている。

各遺構の時期については、遺構別の記述の中でふれる。なお、溝状遺構・土坑・不明遺構においては、遺構に伴う出土遺物が少なく、時期的根拠に欠けるものが多い。

(1) 竪穴住居跡

SB01・SB02 (第52図)

SB01はC-12グリッド北東部、検出面標高約36.8mに位置する。西にSB03、南西にSB04と重複し、いずれもSB01に切られている。東半部は削平されている。

SB01の覆土は、暗赤褐色を基調とし、黄色軟礫粒を含む土層である。平面形は、若干隅の丸い方形を呈する。南北約2.7m、東西1.55m以上を測り、西壁はN約3°-Eを示す。床面の平均標高は約36.6mで、ほぼ平坦である。貼り床のない直床式で、軟弱である。壁面は傾斜をもって立ち上がっている。周壁溝や柱穴は検出されていない。

SB01の中央部より南に寄った位置で、竈が検出されている。竈の多くは、後述するSB04・SB06のように、住居跡の壁体に接した位置で検出されている。したがって、この竈はSB01に伴うものではない可能性が考えられ、SB02とした。しかし、SB01および竈(SB02)の残存状況が悪く、また土層の判別が困難であった。よって、SB02の平面形や竈以外の諸施設は検出できなかった。竈の底面とSB01の床面が連続する高さにあることを考慮すると、SB01に伴う竈である可能性が全くないとはいえない。竈が壁体に接しないで検出された事例も、少ないながら確認できる。

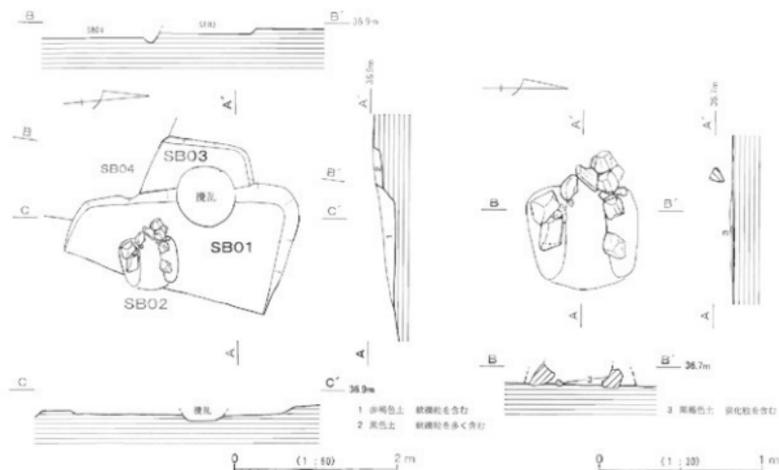
竈は、上部を中心に削平・破壊されている。残存部で全長約0.9m、幅約0.7mを測り、主軸はほぼ東西である。明瞭な炊口はなく、火床部の掘り込みも数cmである。袖は石を芯にして、粘性の強い暗褐色土を石の外側を中心に貼り付けてつくっている。調査では、袖の土と他の土の見分けが難しく、一部を認識するだけに留まった。しかし、袖の範囲は床面の変色によって図示したとおりに確認できた。煙道側の天井等に使用されていたであろう石が、崩落した状態で検出された。ただし、煙道は検出できなかった。竈の内部には焼土はなく、炭化粒を含む黒褐色土が堆積していた。

遺物は、第53図にある3点だけが出土している。全てSB01からの出土であり、7が床面直上、他は覆土上層からの出土である。

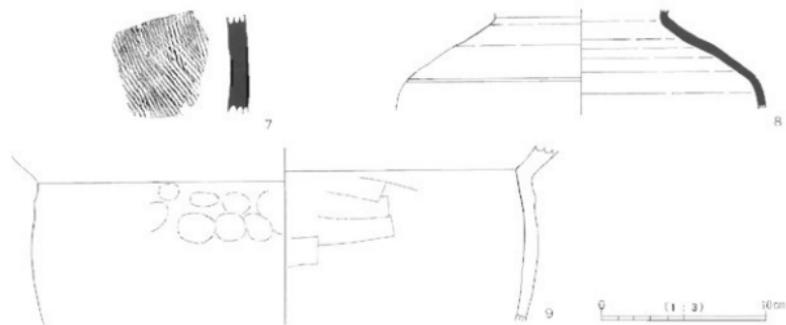
遺物(第53図) 9は七師質土器の清郷型甕である。内湾する胴部から直線的に外に開く口縁部にあたる部分で、図化した範囲の1/8以下の破片である。胎土は粗く砂粒を多く含む。口径は30cm以上に復元できる。胴部と口縁部の屈曲は明瞭である。外面では、指圧痕が観察できるだけで、その他の調整等は磨耗のために観察できない。内面には板状工具による横方向のナデ調整が認められる。7は須恵器甕

の胴部である。外面の平行タタキは残っているが、内面の工具痕はナデ調整で消されている。8は須恵器壺の肩にあたり、図示した約1/4の破片である。器壁は薄く均一である。頸部は径約10.5cmで、接合部の内面は屈折させずになだらかに仕上げている。頸から肩にかけては緩やかに下がり、最大径での肩の屈曲はない。肩の張った部分に浅く広めの瓦線が1条巡る。外面には自然釉が付着している。

9は平安時代の遺物で、10世紀後半から11世紀に位置付けできる。一方、7・8は古墳時代後期以降の遺物である。出土位置から、床面直上から出土した9の方がSB01の時期を示している可能性が高い。すなわち、10世紀後半から11世紀の竪穴住居跡と判断できる。



第52図 SB01・SB02・SB03



第53図 SB01出土遺物

SB03 (第52図)

C-12グリッド北東部、検出面の標高約36.8mに位置する。東でSB01、南でSB04と重複する。SB03はいずれにも切られている。

覆土は黒色を基調とした土層で、黄色軟礫粒を含んでいる。残存部から平面が方形を呈していることが分かる。しかし、規模は南北1.4m以上、東西0.7m以上であるとはかわからない。床面は直床式で、全体的に軟弱である。床面の標高は約36.75mで、若干西に下がる。周壁溝は残存部では認められない。また、竈や柱穴等も発見されなかった。

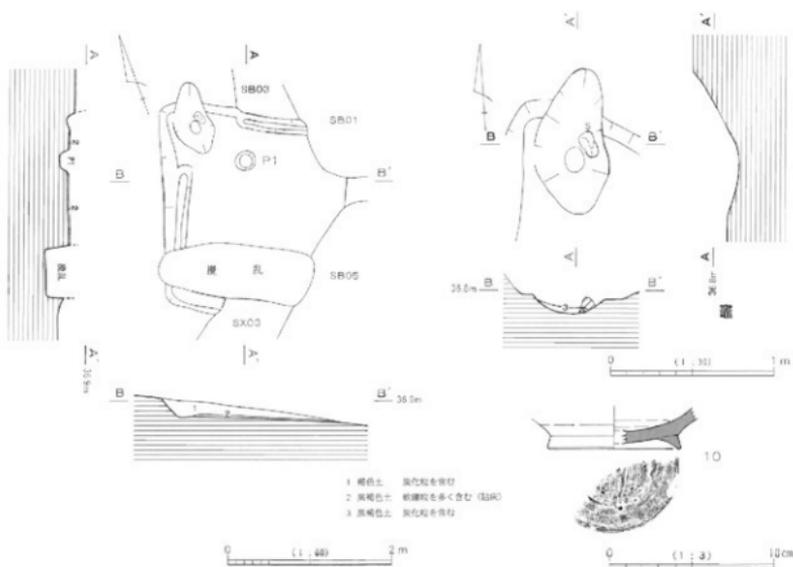
遺物は弥生土器・土師質土器数点が覆土上層から出土している。小破片で器種等はわからない。

SB04 (第54図)

C-12グリッド北東部、検出面の標高約36.9mに位置する。北東でSB03・SB01、南東でSB05・SX03と重複する。SB04はSB03を切り、SB01・SB05・SX03には切られている。南部は長楕円形の擾乱によって破壊され、東部は削平によって破壊されている。

覆土は褐色を基調とした土層で、黄色軟礫粒を含んでいる。平面形は方形を呈する。南北約2.55m、東西2.3m以上を測り、南北方向に主軸をとると主軸N 約26°Eを示す。床面は貼り床式であるが、軟弱である。床面の平均標高は約36.75mで、若干東に下がる。貼り土の厚さは全体的に約0.02mを測り、掘形の底面も床面と同様、平坦になっている。壁面は傾斜をもって立ち上がっている。周壁溝は北壁と西壁に検出されたが、北西隅の竈には至っていない。幅約0.2m、深さ約0.05mを測る。

主柱穴は北西部に1基検出された。径約0.25mの円形で、床面からの深さは約0.12mを測り、浅い。



第54図 SB04および出土遺物

竈は北壁の西寄りで検出された。裾は破壊されたためか、検出できなかった。残存部の全長約0.89m、幅約0.48m以上を測り、主軸はN-4°-Eである。貧弱な炊口が付き、火床部は床面から約0.07m掘り込んでいる。袖の一部となる拳大の石1個が、火床部掘形の北東斜面上で検出された。煙道は火床部より一定の傾斜で立ち上がり、壁面から約0.25m突き出る。煙道の軸は、東に曲がる。焼土はなく、炭化粒を含む黒褐色土が竈内に堆積していた。

遺物は灰釉陶器・山茶碗・粗い胎土で厚い土師質土器が、覆土中層から出土している。

遺物 (第54図) 10は灰釉陶器の甗で、図示した約1/2が残存している。胎土等から清々谷産のものと判断できる。高台は断面三角形で、外に若干開く。底部裏面には糸切痕、内面の底には直接重ねて焼いた痕跡が残る。

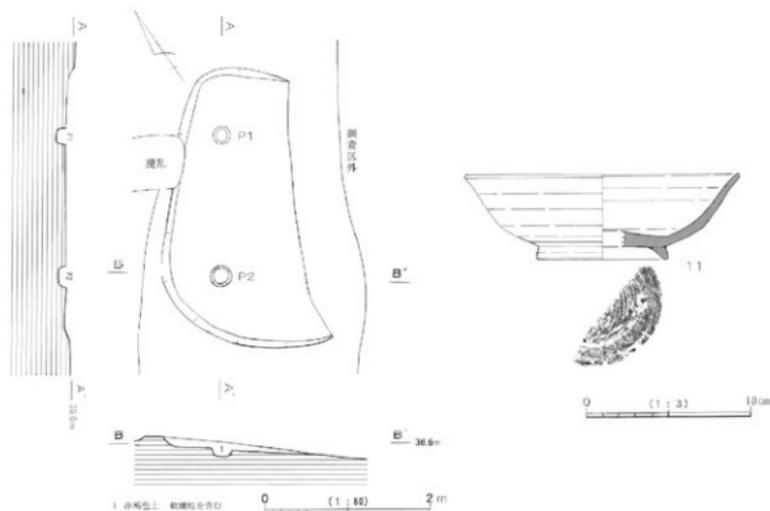
10は平安時代の遺物で、10世紀後半頃(清々谷古窯跡群の灰釉陶器編年(松井1989)Ⅳ期-1)に位置付けできる。ただし、覆土中層からの出土であり、SB04に伴うものかは安易に判断はできない。

SB05 (第55図)

C-12グリッド東部中央、検出面の標高約36.6mに位置する。北西でSB04、南西でSX03と重複している。SB05はSB04を切り、SX03には切られている。東部は削平により破壊されている。

覆土は暗赤褐色を基調とした土層で、黄色軟礫粒を含んでいる。平面形は、検出部分から隅の丸い方形であると復元できるが、他の竈穴住居跡よりも曲線的である。規模も南北約3.35m、東西2.25m以上を測り、他の竈穴住居跡より大きめである。主軸は南北方向にとるとN-約44°-Eを示す。床面は直床式で、全体的に軟弱である。床面の平均標高は約36.5mで、若干東に下がる。壁面は傾斜をもって立ち上がっている。周壁溝はない。竈もしくは炉は発見されなかった。

支柱穴は、西壁寄りの南北に2基検出された。2つの支柱穴間は約1.7mを測り、両穴を結ぶ線は、



第55図 SB05および出土遺物

住居全体の軸より西に振れる。北側のP1は径約0.2mの円形で、床面からの深さは約0.12mを測る。南側のP2は径約0.25mの円形で、床面からの深さは約0.1mを測る。いずれも浅い柱穴であるが、4本柱の竪穴住居であったと考えられる。

遺物は灰釉陶器・山茶碗・粗い胎土で厚い土師質土器の破片数点が、覆土の中層・上層から出土している。

遺物(第55図) 11は灰釉陶器の碗の破片である。胎土等から清ヶ谷産のものと判断できる。図示した約1/3が残存している。体部は下半の張りもなく、緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部は弱く外反する。高台は断面三角形で外に開く。ほぼ全体にナデ調整が観察できるが、底部裏面の糸切痕だけは残されている。

11は平安時代の遺物で、11世紀後半頃(清ヶ谷古窯跡群の灰釉陶器編年(松井1989)IV期-4)に位置付けできる。しかし、覆土中層からの出土であり、遺構に伴うものかは安易に判断はできない。

SB06(第56図)

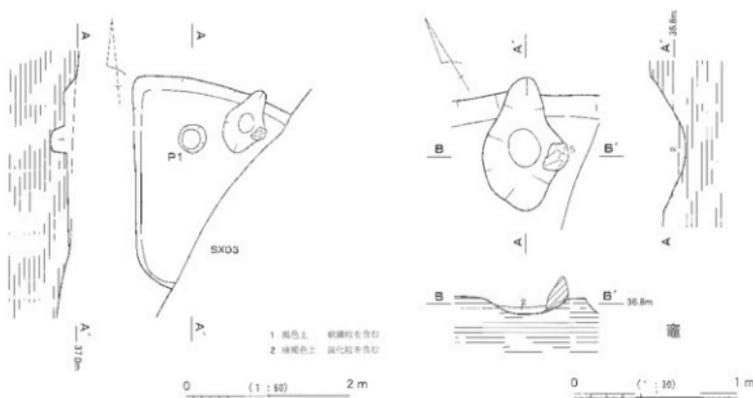
C-12グリッド中央部、検出面標高約37.0mに位置する。西でSX03と重複する。S303はSX03に切られている。

覆土は褐色を基調とした土層で、黄色軟礫粒を含んでいる。平面形は、検出部分から不整形であるが復元できる。南北約2.55m、東西3.2m以上を測り、南北方向に主軸をとると主軸N-約6°-Eを示す。床面は直床式で、全体的に軟弱である。床面の平均標高は約36.9mで、ほぼ平坦である。壁面は傾斜をもって立ち上がっている。周壁溝はない。

主柱穴は、北西部に1基検出された。径約0.35mの円形で、床面からの深さは約0.2mを測る。

竈は北壁の中央で検出された。竈は破壊されたためか、検出できなかった。残存部で全長約0.82m、幅約0.52m以上を測る。貧弱な炊口が付き、火床部は床面から約0.1m掘り込んでいる。袖の一部となる拳大の石1個を、火床部掘形の北東斜面で検出した。煙道は火床部より一定の傾斜で立ち上がり、壁面から約0.12mだけ突き出る。焼土はなく、炭化粒を含む暗褐色土が竈内に堆積していた。

遺物の出土はなかった。



第56図 SB06

(2) 小穴および柵 (小穴列)

小穴は100基を検出した。各小穴の概要は第57図～第61図、第19表を参照していただきたい。最大径は0.15～0.60mまでであるが、0.4m以上は少ない。深さは、0.02～0.45mまでであるが、0.2mを超えると少なくなる。本来の遺構面を考慮する必要もあるが、全体的には小さく浅い小穴群であると判断できる。覆土は4種類に分けられるが、切り合い関係や出土遺物とは対応していない。

第19表 小穴・土坑一覧表

遺構名	最大径	検出層 深高	覆土 深高	土層	切り合い	遺物	層	遺構名	最大径	検出層 深高	覆土 深高	土層	切り合い	遺物	層	
SP01	0.18	37.44	37.37	A				SP57	0.34	36.79	36.70	C			SA08	
SP02	0.22	37.52	37.32	A				SP58	0.27	36.77	36.65	C			SA07	
SP03	0.57	37.42	37.19	A			SA09	SP59	0.26	36.61	36.30	C			SA08	
SP04	0.31	37.20	37.05	A				SP60	0.22	35.47	36.11	A	SP61より古			
SP05	0.26	37.46	37.42	A	SP06より新		SA01	SP61	0.45	35.84	36.41	A	SP61より古		SA09	
SP06	0.27	37.47	37.44	A	SP05・7より古			SP62	0.33	35.30	36.11	A			SA09	
SP07	0.21	37.47	37.42	A	SP06より新			SP63	0.25	36.37	36.38	A			SA04	
SP08	0.22	37.56	37.29	B				SP64	0.24	36.42	36.28	A				
SP09	0.22	37.53	37.41	B				SP65	0.21	36.58	36.32	A				
SP10	0.29	37.41	37.28	B			SA01	SP66	0.37	36.55	36.42	A				
SP11	0.25	37.11	36.98	A				SP67	0.28	36.64	36.57	C			SA04	
SP12	0.34	37.39	37.27	B				SP68	0.32	36.72	36.52	C			SA06	
SP13	0.18	36.99	36.88	A				SP69	0.33	36.73	36.66	A			SA07	
SP14	0.20	37.53	37.44	B				SP70	0.40	35.73	36.69	A				
SP15	0.28	37.45	37.34	B				SP71	0.55	35.60	36.42	A	SP04より古			
SP16	0.34	37.36	37.21	B				SP72	0.43	35.54	36.05	C			SA03	
SP17	0.53	37.36	37.24	B			SA01	SP73	0.34	36.78	36.38	C		陶器片 かわらけ片	SA05	
SP18	0.18	37.01	36.97	A				SP74	0.32	35.76	36.50	A			SA04	
SP19	0.19	37.29	37.20	C			SA01	SP75	0.28	36.45	36.26	A				
SP20	0.26	36.90	36.44	B				SP76	0.49	36.58	36.44	A			SA09	
SP21	0.40	37.28	37.02	B				SP77	0.70	36.52	36.51	A				
SP22	0.36	37.18	36.95	C				SP78	0.18	36.84	36.60	A				
SP23	0.37	37.46	37.27	B			SA01	SP79	0.35	36.75	36.48	B				
SP24	0.28	37.66	36.89	D				SP80	0.42	36.78	36.82	C			SA07	
SP25	0.30	37.20	37.03	D				SP81	0.27	36.83	36.75	C				
SP26	0.22	36.95	36.99	B				SP82	0.24	36.85	36.77	C				
SP27	0.29	36.95	36.82	B				SP83	0.30	36.80	36.55	A			SA06	
SP28	0.24	36.90	36.76	A				SP84	0.19	36.89	36.75	A				
SP29	0.59	37.03	36.91	D				SP85	0.35	36.73	36.53	A				
SP30	0.34	36.83	36.72	C				SP86	0.25	36.66	36.50	C	SP05より古		SA09	
SP31	0.25	37.14	37.04	C				SP87	0.24	36.89	36.85	A			SA06	
SP32	0.22	37.25	37.18	D	SP02より新			SP88	0.34	36.81	36.70	B		第62図1	SA07	
SP33	0.18	37.18	37.14	C	SP02より新			SP89	0.24	35.71	36.54	A				
SP34	0.49	36.98	36.84	D				SP90	0.38	36.63	36.62	A			SA09	
SP35	0.32	36.92	36.83	C				SP91	0.29	35.83	36.63	A			SA05	
SP36	0.47	37.28	37.25	D				SP92	0.31	36.85	36.74	A			SA08	
SP37	0.18	37.28	37.20	A				SP93	0.29	36.06	36.81	A			第62図2	SA07
SP38	0.27	37.29	37.25	A			SA02	SP94	0.23	36.83	36.52	A	SP08より新			
SP39	0.50	37.24	37.20	D				SP95	0.31	36.62	36.49	A				
SP40	0.24	37.16	37.07	C				SP96	0.21	36.39	36.27	A	SP08より新			
SP41	0.23	37.09	37.01	C				SP97	0.19	35.78	36.21	A	SP08より新		SA09	
SP42	0.27	36.87	36.85	C			SA02	SP98	0.36	35.90	36.65	A	SP04より古		SA07	
SP43	0.32	37.06	36.93	A			SA02	SP99	0.28	35.74	36.17	A	SP08より新		SA09	
SP44	0.39	36.94	36.89	C			第62図14	SP100	0.31	36.94	36.84	A	SP05より新			
SP45	0.32	36.92	36.45	C			SA02・03									
SP46	0.37	35.55	36.44	A			SA02・04									
SP47	0.35	35.55	36.44	A			SA03									
SP48	0.42	36.82	36.55	C			SA07									
SP49	0.43	36.87	36.79	C			SA07・08									
SP50	0.30	36.82	36.48	C			SA07									
SP51	0.17	36.57	36.34	A												
SP52	0.28	36.53	36.45	C			SA05									
SP53	0.43	36.58	36.52	C												
SP54	0.46	36.45	36.31	A			山系礫片	SA05								
SP55	0.25	36.43	36.34	A												
SP56	0.16	36.54	36.46	D												

※土層

A : 赤褐色土層 黄色粒含む B : 暗褐色土層 黄色粒含む
C : 黒色土層 黄色粒含む D : 暗灰色土層 黄色粒含む

※最大径や検出層の平均値は2m

小穴の多くは、浅く小さい。しかし、鎌倉時代の遺物（主に山茶碗）が伴っている小穴や二段に検出できた小穴がある。鎌倉時代の遺構である可能性が高く、また何らかの柱穴であった可能性が高い。

この小穴の多くが、竪穴住居跡の残存した柱穴であるとは考え難い。竪穴住居跡が完全になくなる程の遺構面の崩壊・削平は想定し難い。また、本遺跡の竪穴住居跡の時代は平安時代までであり、鎌倉時代ではない。そこで、掘立建柱物跡の柱穴である可能性が考えられる。確かに、小穴の列を抽出することはできる。しかし、小穴間の距離は一定ではなく、桁と梁が抽出できるものがない。

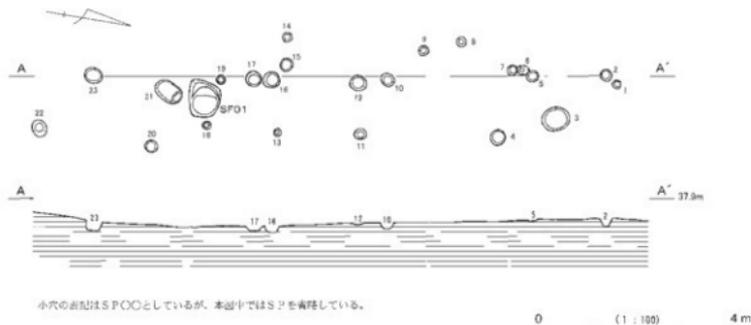
今回の報告では、この小穴（群）が柵（状施設）の柱穴である可能性を評価する。小さく浅い柱穴であることから、大きな重圧を支える必要や長い耐久性を求める必要がなかったと考えることもできる。さらに、10mを超える小穴列を設定することができる点、小穴列に直行する小穴列が設定できない点、小穴列を構成する各小穴の間隔が一定でない点を考慮すると、柵等の柱穴であった可能性が高いと考えることができる。

しかし、絶対的に決定付ける根拠はない。また、柵の柱穴であったとしても、今回設定した小穴列とは異なる可能性も全くないとはいえない。したがって、各小穴の遺構番号は、SA01～SA09という柵の番号とは関わらずに、小穴ごとの遺構番号（SP）を付している。

設定できた小穴列は、SA01～SA09の9列である。検出した地形の等高線にほぼ平行する長い小穴列と、ほぼ直行する短い小穴列がある。

等高線に平行する長い小穴列は、SA01・SA02・SA04・SA06・SA07・SA09の6列である。SA01はI区北半中央に位置する。SA02はII区中央、SX03の北西である調査区西壁寄りに位置する。それ以外は、II区南半部、SX03よりも南に位置する。地形（等高線）に合わせた小穴列であるから、当然、方位もSA01がN-約9°-W、SA02がN-20°-Eを示す一方、他はN-31~34°-Eと似た方向を示す。総長は、SA01：約10.3m、SA02：約7.2m、SA04：約6.6m、SA06：約12.1m、SA07：約14.7m、SA09：約12.3mである。SA02内の3基の小穴は、約3.2m間隔で等間隔に並ぶ。SA04・SA06・SA07・SA09では、間隔の長いものでSP69-SP80間（SA07）の約3.7m、短いものでSP87-SP91間（SA06）の約0.9mを測る。いずれの小穴列も一定間隔にならない。ただし、中でも1.4~2.0mを測る小穴間が比較的多い。

一方、等高線に直行する短い小穴列は、SA03・SA05・SA08の3列である。ただし、これらは小穴間が均等で、正確に一列に並ぶ3基以上の小穴の列を抽出したものである。条件を緩くすれば、さらに



第57図 SA01

多くの小穴列が抽出できる。3列の小穴列は、全てI区中央部のSX03南西隣に位置する。また、地形の等高線とほぼ直行させていることもあって、小穴列の方位もN-41°-64°-Wと比較的近い方向を示す。各小穴列の総長は2.8~3.3m、小穴間の距離は1.3~1.8mであり、厳密性には欠けるが、近似した寸法になっている。

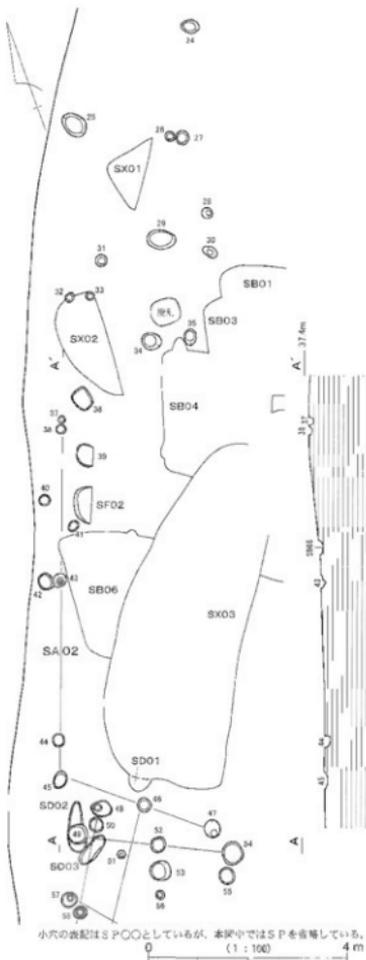
9列の全てが同時に併存していたとは限らない。残念ながら、切り合い関係や覆土・出土遺物を根拠にして、各小穴列の先後関係や同時併存の組み合わせを示すことはできない。ただし、SA02とSA03はSP45、SA03とSA04はSP46、SA06とSA05はSP49でつながる可能性がある。それぞれが同時に併存し、L字に折れ曲がる一連の帯であったと判断することもできる。また、SA04・06・07・09は並列する位置関係にあり、いずれかが同時に併存していたとすれば、何らかの意図の基に平行に配置していたと考えることもできる。

各小穴列を構成する小穴については、平面規模・深さ・底面の標高・覆土のいずれにおいても、一定ではない。それは、小穴列の異同に関係なく、認められる。段掘り状に検出できた小穴についても、小穴列の違いや列中の位置等との関連性を見出すことができない。

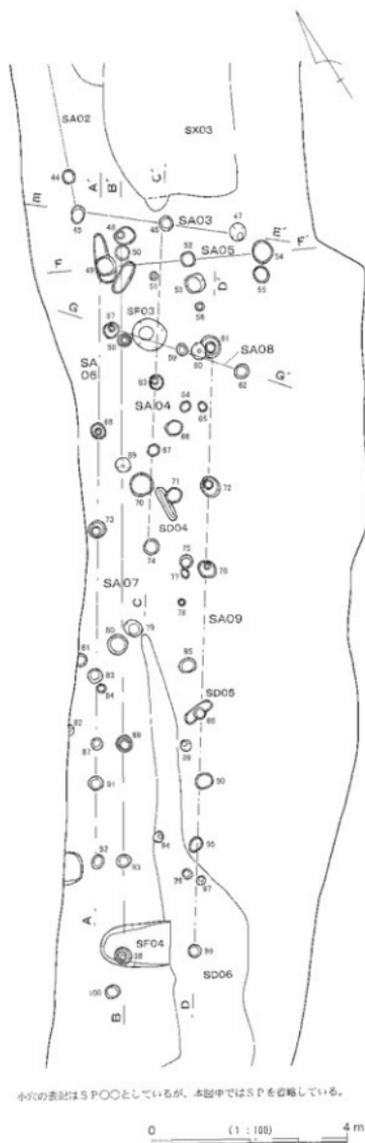
遺物の出土については、第19表のとおりである。遺物の出土があった小穴は、SA02・05・06・07内の小穴に限定される。出土遺物は、大半が鎌倉時代のものである。多くは破片が覆土中・上層から出土したものであるが、SP44とSP93では完形の山茶碗小皿が下層のやや壁体寄りから出土している。自然に入り込んだものではなく、柱を設置する時などに意図的に入れた可能性が高い。しかし、小穴列の違いや列中の位置との関連性については、特記すべき傾向がない。なお、柱を抜き取った痕跡は発見できていない。

SP54からは陶器が1点、覆土上層から出土している。鎌倉時代の山茶碗の小破片であるが、詳細な時期等は判断できない。また、上層からの出土であり、遺構に伴うものかも安易に判断できない。

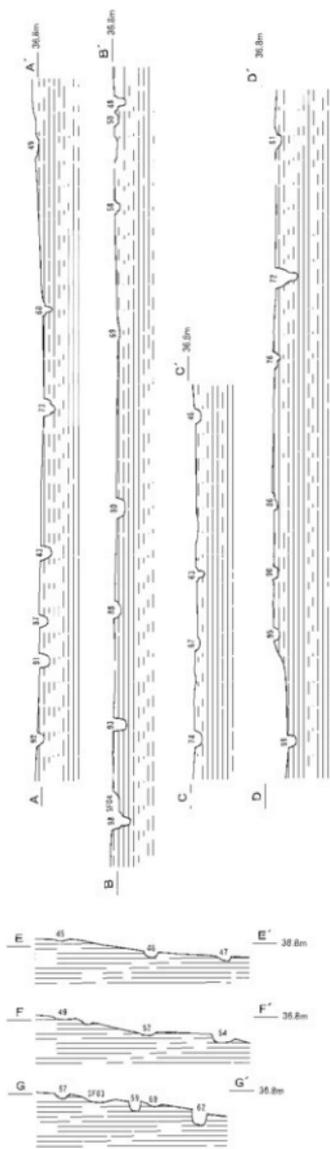
SP73からは陶器1点とかわかけ数点が上層で出土している。出土陶器は厚手であり、鉢等といった大型品の破片である。鎌倉時代のものであるが、小破片であるため詳細な時期は判断できない。また、覆土上層から出土したものであり、遺構に伴うものかも安易に判断できない。



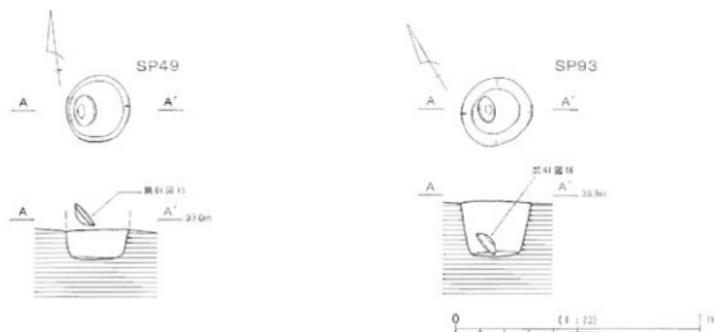
第58図 SA02



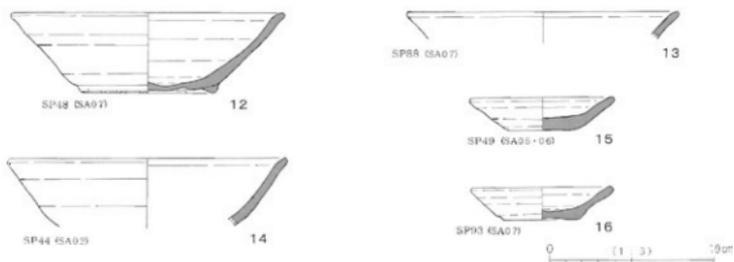
小穴の表記はS P O Oとしているが、本図中ではS P を省略している。



第59図 SA03～SA09



第60図 SP44・SP93遺物出土状況



第61図 小穴出土遺物

遺物(第61図) SP48出土の12は山茶碗の碗で、約1/2の破片である。胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。体部は下半の張りがほとんどなく、直線的に口縁部へと立ち上がる。口縁部の外反もわずかである。高台は、低い断面三角形の部分とその下端がつぶれた部分がある。高台の下端にはモミ痕が認められる。底部裏面を含めた全体にナデ調整が施されており、糸切痕は観察できない。また、底部の器壁が非常に薄くなっている。SP88出土の13は山茶碗の碗の口縁部で、図化した内の約1/10程度の小破片である。胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。口縁部の外反は非常に弱い。内面には自然釉が厚く付着している。SP44出土の14は山茶碗の碗の口縁部で、図化した内の約1/6が残存している。胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。12と比較すると、体部は緩やかに内湾しており、直線的な立ち上がりにはならない。ただし、口縁部の外反は12と同じく弱い。SP49出土の15は山茶碗の小皿で、完形品である。胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。体部から口縁部までは、非常に弱く外反しながら、ほぼ直線的に立ち上がっている。器壁は全体的に厚い。底部は比較的丁寧にナデ調整が施されている。SP93出土の16も、山茶碗の小皿の完形品である。胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。体部から口縁部までは、外反する部分もあるが、基本的には直線的に立ち上がっている。器壁は15より薄手の傾向にある。しかし、厚さは均一ではなく、とくに口縁部と底部周縁が厚くなっている。底部裏面のナデ調整は、15と比較すると粗雑である。

13は小破片であり、詳細な時期を特定することはできない。12・14・15・16は、いずれも13世紀前半代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）Ⅲ期-1）に位置付けることができる。

出土遺物の生産時期が、遺構の時期を直接示すとは限らない。しかし、小穴の出土遺物が13世紀前半代に限定されていることから、大きな差はないと考えたい。また、15・16は柱の設置に際して、柱穴（小穴）に埋められたものであると考えられる。小穴列（柵等の施設）は、13世紀前半代以降、概ね13世紀代のある一定期間に機能していたと考えられる。

（3）土 坑

土坑は、先述したSF05（弥生時代土器棺墓）を除いて、4基（SF01～04）を検出した。各土坑の概要は、第57図～第59図と第19表を参照していただきたい。SF01～04からは遺物が出土していない。さらに、SF01～03は他の遺構と切り合っていない。したがって、各土坑の時期を特定することはできない。切り合い関係のあるSF04についても、鎌倉時代のSP98を切っていることから、中世より新しいことがわかる程度である。また、各土坑の性格についても、判断する根拠がない。

（4）溝状遺構

溝状遺構は、先述したSD06を除いて5条を検出した。

SD01（第64図）

C-12グリッド中央部、検出面の標高約37.7mに位置する。SX03と重複し、SD01はSX03に切られている。SB04とも重複する位置にあるが、攪乱のために先後関係は判断できない。若干の弧を描きながら、南西から北東の方向へと伸びる。幅は0.72～0.45m、長さは約6.8m以上を測る。深さは約0.15mを測り、底面の標高は約36.6mでほぼ一定である。遺物の出土はない。

切り合い関係から、平安時代末から鎌倉時代のSX03より古い遺構であると判断できる。しかし、それ以上の詳細な時期を特定することはできない。SB05（平安時代の堅穴住居跡）の丘陵寄り位置しており、住居内への浸水防止の溝である可能性も考えられる。しかし、SB05以外の堅穴住居跡には同様の施設がない。ここでは、性格不明の単独の溝として扱う。

SD02・SD03・SD04・SD05

SD02～05の各溝状遺構の概要は、第57図～第59図も参照していただきたい。いずれもⅡ区南半部に位置する溝状遺構である。SD02とSD04は南北方向に長く、SD03とSD05は東西方向に長い。幅は0.4～0.2m、長さは1.05～0.65m、深さは0.05m前後である。いずれも、短く浅い形状を呈している。覆土は、全て黒色を基調とした土層である。

遺物の出土はなく、詳細な時期を特定することはできない。ただし、鎌倉時代の小穴と重複するものが多く、その切り合い関係からある程度の時期を判断することはできる（第19表参照）。また、覆土は一部の小穴の覆土（第19表の土層C）と共通しており、小穴（列）と大きく違わない時期の遺構であると考えられる。SD02～05は小穴が多く分布する範囲に位置し、しかも、小穴と重複もしくは近接して検出されている。このことを評価するならば、小穴（列）に関連する遺構であった可能性も考えられる。

(5) 不明遺構

SX01 (第62図)

D-12グリッド南東部、検出面の標高約37.0mに位置する。東部分が削平されている。

覆土は暗褐色を基調とした土層である。平面形は検出部分から方形に復元できる。北辺1.14m以上、西辺1.06m以上であり、南北方向に主軸をとると主軸N 約13°-Wを示す。深さは約0.05mを測り、底面は標高37.0mで水平である。壁は傾斜をもって立ち上がる。SP27がSX01に伴う柱穴である可能性もある。しかし、SX01内では柱穴を検出することができなかった。

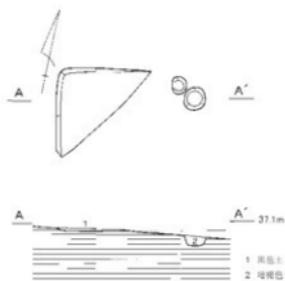
遺構の性格としては、その形状や周辺遺構の分布から竪穴住居跡である可能性が高い。しかし、貼り床・周壁溝・竈等は検出できず、明確な根拠が得られない。よって、ここでは不明遺構とした。また、出土遺物がないために、遺構の時期も特定できない。

SX02 (第63図)

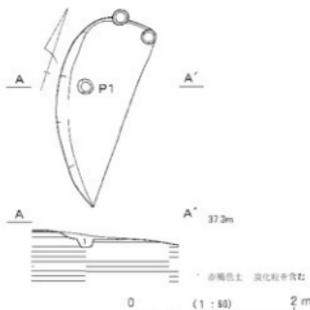
C 12グリッド北東部、検出面の標高約37.1mに位置する。東部分が削平されている。

覆土は暗褐色を基調とした土層であり、黄色軟礫粒を含む。平面形は隅丸方形もしくは楕円形であったと復元できる。南北2.3m以上、東西1.0m以上を測る。深さは約0.1mを測り、底面は標高37.1mで水平である。壁は傾斜をもって立ち上がる。西壁寄りの中央に小穴1基(P1)を検出している。P1は直径約0.18mの円形で、深さ約0.1mを測る。その位置から柱穴である可能性も考えられる。

遺構の性格としては、その形状や周辺遺構の分布、柱穴の可能性あるP1の存在から竪穴住居跡である可能性が高い。しかし、貼り床・周壁溝・竈等は検出できず、明確な根拠が得られない。よって、ここでは不明遺構とした。また、出土遺物がないために、遺構の時期も特定できない。



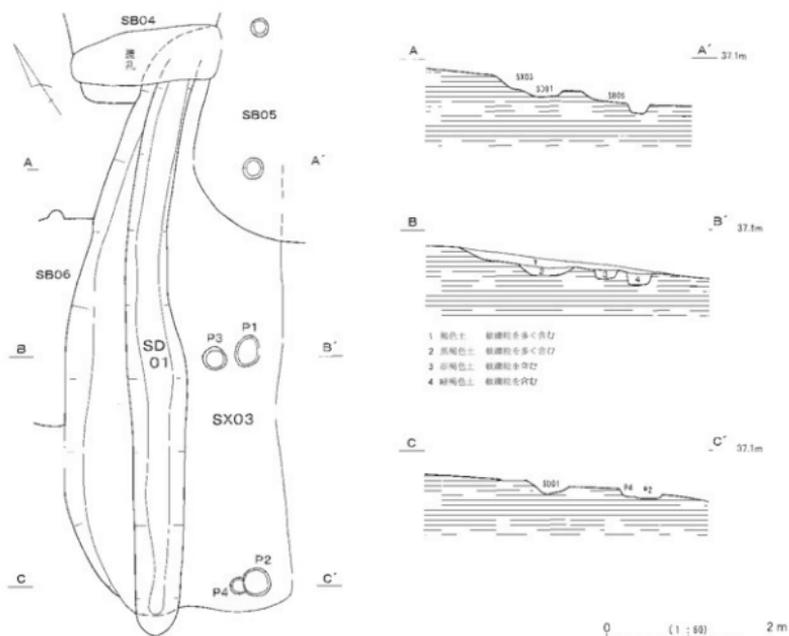
第62図 SX01



第63図 SX02

SX03 (第64図)

C-12グリッドの南半部、検出面の標高約36.8mに位置する。西でSB06、北東でSB04・SB05と重複する。いずれもSX03が切っている。さらに、中央でSD01と重複している。切り合い関係を認めるならば、SX03がSD01を切っていると判断できる。しかし、SX03内の施設としてSD01がつけられた可能性もある。東半部は削平を受けている。



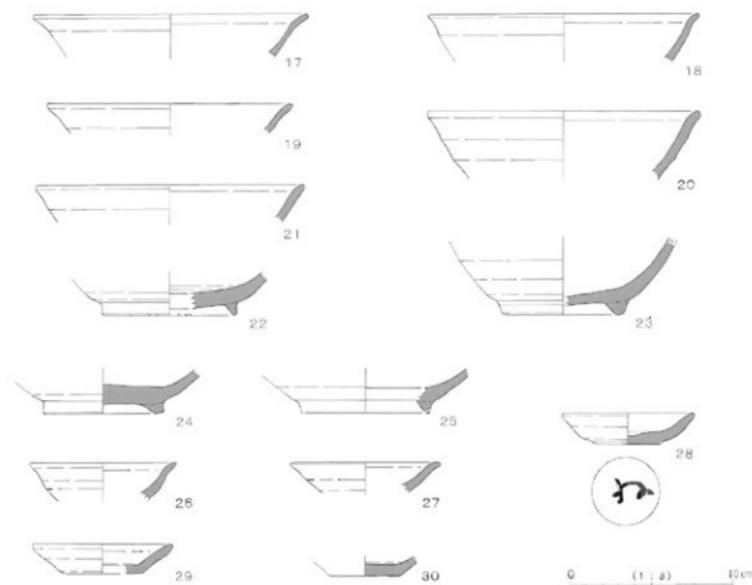
第64図 SD01・SX03

覆土は暗褐色を基調とし、黄色軟微粒を含む。平面形は、隅丸方形もしくは楕円形に復元することができる。しかし、これは東西対称であるという前提の上での復元であり、削平を受けている東半部が西半部と同じ形状を呈しているとは限らない。さらに、本来よりテラス状の遺構であって、斜面下方の東半部には壁体が巡らない可能性も考えられる。南北6.4m以上、東西2.8m以上を測り、南北方向に主軸をとると主軸N-約32°-Eを示す。底面の平均標高は約36.7mで、若干西に下がる。西側の壁面は傾斜をもって立ち上がっている。

柱穴の可能性をもつ小穴が、SX03の底面で4基検出できた。P1は直径約0.35mで深さ約0.15m、P2は直径約0.33mで深さ約0.06m、P3は直径約0.3mで深さ約0.1m、P4は直径約0.2mで深さ約0.08mを測る。南北に並ぶP1-P2間は約2.9mを測り、北のP1より南のP2の方が浅い。また、近接する2基の内、東のP1・P2よりも西のP3・P4の方が浅い。貼り床・周壁溝・竈もしくは炉等の施設は検出されなかった。

SX03は竪穴状の遺構であり、柱穴があることから、竪穴住居跡の可能性も考えることができる。しかし、SB01～06とは平面形・規模・柱穴の配置の上で異なる特徴をもつ。さらに、SX03では山茶碗が多く出土しており、SB01～06（平安時代）よりも後の時代（鎌倉時代）の遺構である可能性が高い。以上から、竪穴住居とは異なる機能・性格をもった遺構であると考えられる。

出土遺物は、山茶碗数十点・土師質土器数点、常滑座陶器1点で、第65図28以外は破片である。他の遺構よりも多くの遺物が出土している。また、後述する遺構外出土遺物においても、本遺構の周辺で出土したものが多し。なおSX03内で、場所や層位の上での出土量の偏りはない。



第65図 SX03出土遺物

遺物(第65図) 17～25は山茶碗の碗である。いずれも、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。23以外は、図示した内の1/2以下の破片である。17・18は、外反する口縁部と弱く内湾しながら立ち上がる体部の破片である。19も外反する口縁部である。一方、20・21は口縁部の外反が弱く、器壁が比較的厚い。22は、モミ痕の付く比較的しっかりした高台と下部で若干張る体部をもつ。23の高台も、潰れた部分がなく比較的高い。しかし、22の高台よりも幅広く断面に丸みをもつ。また、22よりも23の方が体部の下部の張りが弱い。24の高台は、幅広で22・23よりも低い。モミ痕は観察できないが、高台内側に砂の付着が認められる。なお22～24は、底部裏面にまでナデ調整が施されている。25は、幅が狭く三角形に近い断面の高台をもつ。しかし、胎土や焼成が悪いために磨耗が激しく、高台の下端部は消失している。26は山茶碗の小碗であり、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。内湾する体部と外反する口縁部をもつ。27～30は山茶碗の小皿である。いずれも、胎土等から渥美・湖西産のものと判断できる。27は外反する口縁部をもつ。28は完形品で、27よりも器壁が厚く、口縁部の外反が弱い。糸切位置の関係から、底部が数mm突出している。ナデ調整が施された底部裏面には、墨書が観察できる。「ね」に近い文字であるが、明確には判読できない。29は、口縁部が外反するというよりも、体部から口縁部まで全体的に弱く外反する形状を呈する。また、他に比べて器壁が薄い。30は底部の破片である。27～29と同様、底部裏面にもナデ調整が施されている。

17～19・22・23・26は12世紀代(湖西古窯跡群の山茶碗編年(松井1989・1993)I期)、20・21・28～30は13世紀代(同上III期)、24はその中間的な時期(同上II期)に位置付けることができる。先述の出土状況も考慮すれば、13世紀前後に、覆土の堆積とともに多くの器物が意図的に入れられた(廃棄等)と考えることもできる。

(6) 遺構外の出土遺物

包含層とした基本土層の第2層(第47区、第3節1を参照)中からも、山茶碗をはじめとする遺物が多く出土している。その中でも、SX03や竪穴住居跡が検出された範囲、特にSX03の検出された範囲に集中して出土している。一方、土層・下層による出土量の差はない。また、出土遺物の種類については、場所の違いや土層・下層によって異なることはない。

山茶碗 碗(第66図)

数十点の破片が出土しており、出土遺物の主体を占めている。図化したものは全て、胎土等から瀝美・湖西産のものと判断できる。

口縁部については、31・33等のように比較的強く外反するものから、40～42等のように外反の弱いものまでである。ただし、33の口縁部は極端に強く外反しており、他とは異なる系統のものと考えられる。なお、31・32は輪花碗の破片である。

体部については、多くが弱く内湾して立ち上がる形状を呈する。しかし、33だけが極端に強く内湾している。このことから、33と他との違いが明確にわかる。器壁については、31～34等のように比較的薄いものから、35・37～40等のように厚いものまで存在する。35には漬掛けによる施軸が観察できる。他には施軸が認められない。なお、自然軸の付着は35・40・41・45・51で、内面および口縁部外面を中心に認められる。また、33・34・39・45の内面もしくは外面には、ススが付着している。

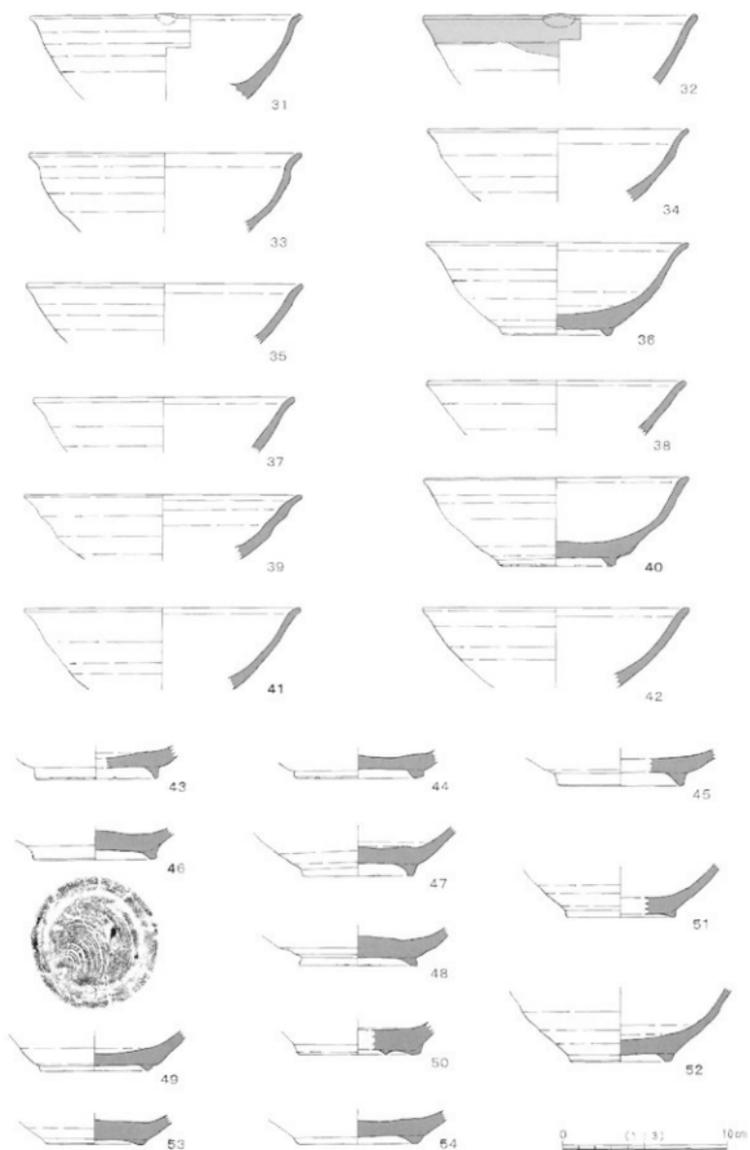
全ての底部には高台が付く。底部裏面の糸切痕は、46にだけ残されている。他はナデ調整が施されている。高台の形状は個体によって異なる。43・45等は、比較的角がしっかりとした幅の狭い高台が、均一に付く。31・44・46等は、幅広で低めの高台が均一に付く。36・47～54等には、下端面の一部分がつぶれた高台、場所によって幅が異なる高台、丸みを帯びた高台、低く貧弱な高台などが認められる。とくに、53は非常に低い高台をもつ。40・43・44・47～49では、高台下端面にモミ痕が付いている。50は、高台のために貼り付けた粘土が幅広で、その中央をナデ調整で凹ませて高台をつくっているために、底部裏面の中央の一部にも貼り付けた粘土が残されている。

以上、第2層(包含層)出土の山茶碗の碗は、瀝美・湖西産に限られているが、その器形の特徴には様々なものがある。口縁部では外反の強いものから弱いものまで、高台では様々な形状・特徴をもつものがある。漬掛けによる施軸や輪花部は、口縁部の外反が比較的強く、器壁の薄いものを中心に認められる。モミ痕や底部裏面の調整、ススの付着に関しては、器形等に関連せず認められる。なお、33は口縁部の外反がとくに強く、体部の内湾も他より強いという特徴が認められる。したがって、他の碗とは系統が異なると捉えることができる。

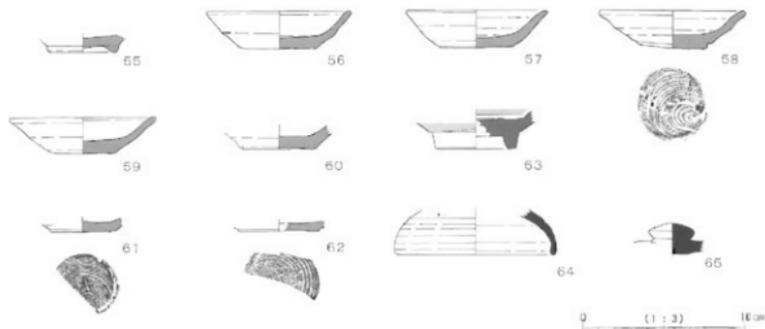
山茶碗 小碗・小皿(第67図)

小碗は1点出土している。55は底部の破片で、胎土等から瀝美・湖西産のものと判断することができる。高台は比較的低く、角も明瞭ではない。

小皿は、碗に次いで多く出土している。胎土等から61・62が東遠江産、他が瀝美・湖西産のものと判断できる。東遠江産の61・62は底部のみの破片であり、ともに糸切痕が残されている。瀝美・湖西産の56～60では、58にだけ糸切痕が残されている。他の底部裏面にはナデ調整が施されている。体部は弱く内湾、口縁部は弱く外反する傾向にある。56・57が深めの形状を呈する一方で、58・59は浅めの形状を呈する。



第66图 包含层出土遗物(古代·中世1)



第67図 包含層出土遺物（古代・中世2）

その他（第67図）

白磁は1点出土している。63は碗の底部であり、断面が台形の高台をもつ。高台の際から底部裏面までは露胎している。また、内面の見込み部分には、輪状に釉の掻取りが認められる。

須恵器は2点出土している。64はつまみの付かない杯蓋で、最大径は約10cmに復元できる。65は杯蓋の半球形つまみである。

山茶碗では、31・34・45・55等が12世紀代（湖西古窯跡群の山茶碗編年（松井1989・1993）I期）、36・39・56・57等が12世紀末から13世紀初め（同上II期）、40・42・49・54・59等が13世紀代（同上III期）に位置付けることができる。東遠江産と判断できる61・62は、底部だけの破片ではあるが、小皿であること等から13世紀代に位置付けることができる。以上の中でも、より古いものは31・32等で、12世紀前・中葉（同上1-1期）、より新しいものは51・53等で、13世紀末から14世紀に至る時期（同上III-2期）に位置付けることができる。以上から、約2世紀間の時期につくられた山茶碗が、第2層（包含層）から出土していることがわかる。

12世紀から13世紀の出土遺物としては、山茶碗の他に1点の白磁片をあげることができる。その63は、11世紀中葉から12世紀初頭（大宰府編年（横田・森田1978）白磁皿VIII類-2）に位置付けることができる。

64・65の須恵器は、7～8世紀代の遺物である。常滑産陶器は、器種・部位のわからない破片しか出土していない。しかし、胎土・色調から15世紀から16世紀のものである可能性が高い。土師質土器については、器種・部位・時期のいずれも判断できるものが全くない。

第2層（包含層）からは、山茶碗を中心とする遺物が出土している。その山茶碗は、概ね12世紀から13世紀のものである。一方、7・8世紀代の須恵器については2点に限られる。12世紀から13世紀の遺物が多く含まれる包含層に紛れ込んだ可能性が高いと判断できる。調査区の西の丘陵頂上には、古墳（鶴山1号墳）が存在していたことがわかっている。したがって、7・8世紀代の須恵器（64・65）については、本来は古墳に伴うものであり、後に丘陵裾にある本遺跡まで転落してきた可能性が高いと考えられる。15世紀から16世紀に位置付けできる常滑産の陶器も少数の出土であり、12世紀から13世紀の包含層に紛れ込んだ遺物である可能性が高いと判断できる。しかし、どのようにして本遺跡の第2層（包含層）に紛れ込んだのかはわからない。

4. 出土遺物の数量

ここでは、図化しなかった小破片も含めた全出土遺物について、各遺構の時期や特徴、さらには本遺跡の主体となる時期やその他の特徴について探ることのできる資料の一つとして、種類別の数量を計測して提示する。本遺跡の出土遺物は、遺構出土・包含層（第47図第2層）出土・表土および標乱出土に大別できるが、多くが包含層からの出土である。

まず、第21表に種類別の土器片出土数を示した。片断的に山茶碗の出土数が多い。それに続くのは、土師器等である。土師器等には、弥生時代の土器棺墓（第49図）・II区南部出土の弥生時代以前の土器（第50・51図）・SB01出土の清郷型甕（第53図）も含まれている。しかし、多くは丘陵上の鴨山古墳群から転落してきたと考えられる、土師器の小破片である。中近世の土師質土器では、包含層出土のかわらけが多い。灰釉陶器の6点は、全て竪穴住居跡出土の第54図10と第55図11の破片である。ともに清ヶ谷産のものと判断できる。その他の陶器では、詳細な時期等を特定できるものがない。しかし、全て常滑産の陶器であり、胎土等から15世紀から16世紀のものが多いと考えられる。

竪穴住居跡を中心とした平安時代については、出土遺物数自体が少ない。また、多くの集落遺跡で出土する遺物が出土しており、特筆すべき遺物はない。

一方、SX03や小穴を中心とした平安時代末から鎌倉時代（12世紀から13世紀）については、比較的多くの遺物が出土している。本書中で報告している奥戸館遺跡（本書第3章）と比較すると、両遺跡とも出土遺物の多くを山茶碗が占めるが、本遺跡の方がその占有率は高い。一方、本遺跡の方が土師質土器やその他の陶器の出土が少ない。以上のように、本遺跡の出土遺物には奥戸館遺跡の集落遺物群とは異なった特徴が認められる。本遺跡の鎌倉時代遺物の多くが、SX03とその上部の包含層で占められている点も考慮すれば、平安時代末から鎌倉時代における本遺跡の性格やSX03のもっていた機能がうかがえるのかもしれない。

出土数の大半を占める山茶碗の内訳は、第22表のとおりである。図化しなかったものは、極小さな破片であり、詳細な時期は特定し難い。図化したものをみる限りでは、小穴（柱穴）の出土遺物は13世紀代の山茶碗に限られ、一方、SX03および包含層出土遺物は12世紀前半から13世紀末に至る遺物が断絶なく存在していることがわかる。

第22表は、山茶碗の破片から器種・産地別の個体数を算出した表である。計測および個体数の算出方法については、矢崎遺跡の調査報告（静岡県埋蔵文化財調査研究所編2001b）にも詳しい。しかし、計測方法に若干異なる部分もあるので、奥戸館遺跡の報告同様に基本的な方法・手順だけは示しておく。なお、矢崎遺跡と異なる点は、破片計測における口縁部と体部の器種分類の方法（下記の2）だけである。よって、個体数の算出には影響ないと考える。

- 1 山茶碗を出土位置別・産地別・部位別に分類する。複数の部位にまたがる破片は、底部・口縁部・体部の順に優先とする。よって、完形遺物は底部として分類することになる。
- 2 口縁部は碗・小碗・小皿・大平鉢に分類して破片数を数える。底部はさらに残存率を1/2以上・1/2・1/3・1/4・1/5・1/5以下に分けて数える。体部は、器種が判断できないものが多いため、器種に関わらず全破片を数える。
- 3 個体数を底部から算出する。残存率1/2以上は1片で1個体、1/2は2片で1個体、1/3は3片で1個体、1/4は4片で1個体、1/5は5片で1個体、1/5以下は個体算出に含めないこととする。これを合計して個体数とする。

山茶碗の推定個体数を器種別にみると、碗：小碗・小皿の比率が概ね3：2になる。この点については、奥戸綿遺跡の出土山茶碗と大差がない。さらに、出土山茶碗の9割以上が濠美・湖西産で占められる点も、奥戸綿遺跡と同じである。しかし、知多産の破片が全く出土していない点は、奥戸綿遺跡とは異なる。また、東遠江産が13世紀代の小皿に限られる点も、奥戸綿遺跡とは異なっている。

奥戸綿遺跡と本遺跡は、ともに丘陵裾に立地する鎌倉時代を主体とする遺跡であるが、出土遺物の特徴・傾向には異なる点も認められる。すなわち、同じ様相を示す遺跡であるとは限らないことがわかる。ただし、出土遺物の総数は両遺跡とも多くはなく、先述した両遺跡の共通点や相違点が評価できるものであるとは限らない。ここでは、本遺跡の資料の一つとして提示するまでとする。

第21表 種類別土器片出土数の計数表

土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	その他陶器	白磁	かわらけ	近世磁器	総数
45(13)	9(2)	6(2)	240(70)	10(3)	1(1)	26(6)	2(1)	339(100)

第22表 山茶碗 産地・部位・器種別個体数の計数表

破片数

	碗				小碗		小皿		大平鉢		総数
	全体	口縁部	体部	底部	口縁	底部	全体	口縁	底部	体部	
濠美・湖西	1	89	91	28	1	1	6	12	8	1	238
東遠									2		2

底部片からの個体数算出

	山 茶 碗 (底 部)									東遠
	濠 美			湖 西			小 皿			
	碗	小碗	小皿	碗	小碗	小皿	碗	小碗	小皿	
	~1/2	1/2	1/3	1/5	~1/2	~1/2	1/2	1/5	1/2	
SH01	1									
SH03					1					
SH05						1				
SX03	1	1		3		1	2	1		
遺構外	9	4	2	2	1	4	1			2
合計	11	5	2	5	1	7	3	1		2
個体数	11	2.5	0.6	1	1	7	1.5	0.2		1
器種別個体計	15.1				1	8.7				1

推定個体数

	碗	小碗	小皿	大平鉢	総数
濠美・湖西	15	1	9	1	26
東遠			1		1
総数	15	1	10	1	27

※小数点以下四捨五入

第4節 まとめ

1 遺跡の時期と変遷

本遺跡の形成時期は、主に3つに大別して捉えることができる。

- ① 弥生時代中期後半～後期前半……………SF05（土器棺墓）
- ② 平安時代（10～11世紀）……………SB01～SB06（竪穴住居跡）
- ③ 平安時代末から鎌倉時代（12～13世紀）…………SX03（不明竪穴状遺構）、小穴（列）

①においては、土器棺墓が1基発見されている。一方、本遺跡の西の丘陵上に立地する鶴山遺跡では、弥生時代後期の周溝墓が発見されている。丘陵上の周溝墓と丘陵裾の土器棺墓という位置関係は、時期差による墓域の移動を示すのか、もしくは同一墓域における区別を示すのか、いずれにしても注視させられる。しかし、両遺跡とも弥生時代の遺構・遺物が多く発見・調査されたわけではない。本遺跡でも明確な遺構は土器棺墓1基に限られ、出土遺物も少ない。したがって、墓域の全体像は把握し難い。

②・③では、①よりも多くの遺構・遺物が発見されている。また、②と③の間には時間的断絶が少なく、連続的に変遷した可能性も考えられる。以下、この②・③の鶴ノ前遺跡について整理する。

2 平安時代（10～11世紀）の集落

竪穴住居跡の時期と特徴 竪穴住居跡は5～6軒（SX01・SX02も竪穴住居跡であるならば7～8軒）発見されている。SB01の床面直上からは清郷型の甕が出土しており、SB01に伴う遺物であると判断できる。また、SB04・SB05の覆土中層からは灰釉陶器が出土している。SB04・SB05に直接伴う遺物であるかは判断し難いが、本遺跡における灰釉陶器の出土はこの竪穴住居跡内に限られている。一方、鎌倉時代以降の山茶碗等も住居跡内から出土している。しかし、覆土上層から出土した小破片に限られ、遺構の時期を示すものとは考え難い。以上を考慮すると、SB01・SB04・SB05の時期は10世紀後半から11世紀の中にある可能性が高い。

その他の住居跡には、同様の時間的根拠がない。しかし、SB03・SB04→SB05・SB01・SB02という切り合い関係、遺構の特徴における共通性、位置的に集中している点を考慮すると、概ね同じ時期の住居跡であると考えられる。

竪穴住居跡はⅡ区北部のC-12グリッドに集中し、多くが切り合っている。また、各住居跡の残存状況は悪く、消失した住居跡があった可能性もある。よって、何軒の住居で構成される集落であったかは判断し難い。ただし、丘陵裾の狭い微高地上という立地と10～11世紀の出土遺物が少量である点を考慮すれば、居住域が大きく広がるとは考え難く、同時に存在していたのは数軒であったと判断できる。

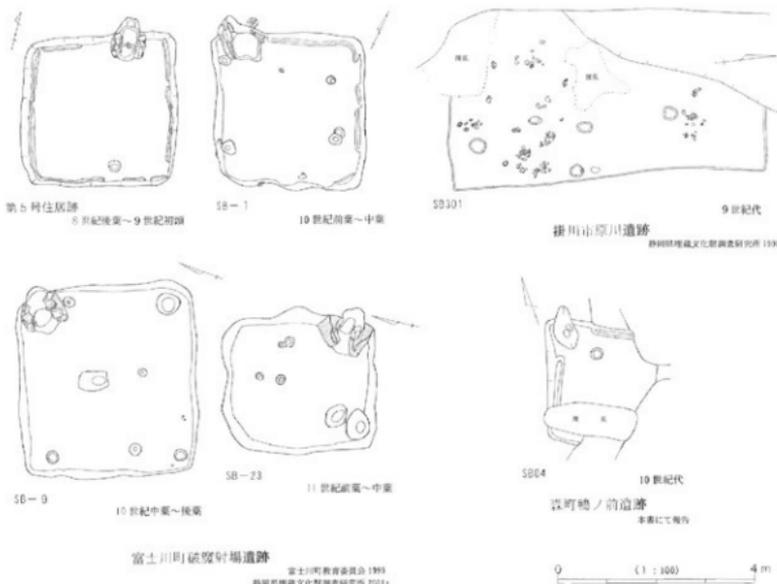
住居跡の形態・規模をみると、SB05だけは規模が大きく明確な方形を呈さない（SX02も竪穴住居跡であるならば方形を呈さない）が、概ね各住居跡とも近似した特徴をもつ。平面は約2.5m四方と小さい方形を呈し、軸を北方向に求めると東に傾く傾向にある。竪は3軒の住居跡で検出されている。SB04は北西隅、SB06は北辺中央に設けられているという違いはあるが、形状・規模等に大きな差異はない。さらに、軸の芯に石を使用するという共通点も認められる。柱穴や周壁溝は、有無の違いはあるが、いずれにしても貧弱である点で共通する。このように、検出された各住居跡は、時期だけでなく形状・構造上の特徴においても類似している。

以上から、10世紀後半から11世紀代の間、丘陵裾部に形成された微高地上の狭い範囲に、同じような竪穴住居が数軒建てていたことがわかる。そして、その住居を建て替えながら営みを続けていたと考えられる。

竪穴住居跡を主体とする集落について 竪穴住居跡を主体とする平安時代の集落跡は、富士川町破産射場遺跡、岡町浅間林遺跡、富士市東平遺跡、小山町上横山・横山遺跡、御殿場市永原追分遺跡、沼津市御幸町遺跡、同市東畑毛遺跡、三島市中島遺跡等、静岡県内でも駿河東部・伊豆で多く発見されている。破産射場遺跡では、8世紀後葉～9世紀初葉と10世紀前葉～11世紀中葉の竪穴住居跡が多く発見され、竪穴住居跡は10世紀以降に小型化・長方形化することが指摘されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001a）。本遺跡の竪穴住居跡も10～11世紀の遺構であり、やはり小型で竪が隅に寄るものがある。さらに、柱穴等が検出されない、もしくは非常に浅い点についても共通する。

一方、本遺跡の周辺地域では、平安時代の竪穴住居跡の発見例がほとんどない。中遠地域では、袋井市坂尻遺跡（袋井市教育委員会1985・1995）等、平安時代の集落跡の多くは掘立柱建物跡を主体としている。掛川市原川遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所1990）では、SB301という平安時代の竪穴住居跡が発見されている。しかし、集落の主体は掘立柱建物である。SB301については、規模の大きいことや出土遺物の様相から、厨房や食堂的な性格が考えられている。本遺跡の周辺地域では、竪穴住居が通常の居住施設として一般的であったとはいえない。よって、竪穴住居跡を主とする本遺跡の平安時代集落跡は、地域において特殊なものに思える。

ただし、平安時代の集落跡の調査、中でも丘陵裾部に立地する小規模集落跡の調査そのものが、決して多いわけではない。今回の調査成果だけで、特殊であることを具体的に論証することも難しい。ここでは、平安時代の集落にも様々な特徴・性格をもつものがあり、中遠地域では、掘立柱建物中心の多くの集落の他に、竪穴住居による丘陵裾の小集落もあった可能性を指摘しておく。



第68図 平安時代の竪穴住居跡例

3 平安時代末から鎌倉時代の鴨ノ前

小穴群について とくにⅡ区南半部からは、小穴が多く検出された。数基の小穴からは13世紀代の山茶碗が出土している。また、それら小穴と他の小穴とは、形状・覆土等の上で大きな違いを認めることができない。すなわち、小穴の多くは13世紀代の遺構であると考えられる。

小穴は、覆土や形状等から人為的な遺構であり、柱穴であった可能性が高いこと、さらにいくつかの小穴列が抽出できることを第3節で述べた。しかし、小穴列から建物の梁・桁の両方を抽出することはできない。さらに、小穴間が一定でない列が多いこと、本遺跡が掘立柱建物を作るのに都合の良い傾斜地に立地していることから、掘立柱建物跡の存在は認め難いと判断した。むしろ、柵等の柱穴列である可能性を評価し、本報告ではSA01～SA09の小穴列を抽出した。

もちろん、この評価が正しいと断言することはできない。掘立柱建物があった可能性も全く否定することはできない。また、柵であったとしても、抽出した全てが正しいかは別問題である。さらに、列自体に問題がないとしても、小穴間距離や深さが一定でない小穴列が多く、小穴の組み合わせについては根拠に乏しい。

不明遺構 (SX03) について SX03は竪穴状の遺構であり、柱穴が検出されていることから、上部構造をもつ人為的施設であったと判断できる。さらに、規模が大きいことや炉や竈がないこと等から、通常の竪穴住居跡ではないと判断できる。しかし、当初の機能や構造を具体的に示すことは難しい。

12～13世紀の遺物の大半は、Ⅱ区南半部の包含層 (第47回第2層) 中から出土している。中でも、SX03が位置する範囲に集中している。さらに、SX03の覆土中からも多く出土している。SX03の覆土からは、12世紀～13世紀までの遺物が混在し、多くが破損した状態で出土している。SX03の当初の機能はわからないが、少なくとも13世紀代には、廃棄場所としての機能があったと考えられる。なお、SX03の北西と南西を囲むような小穴列 (SA02とSA03・05) が抽出できており、SX03を意識して柵等が設定された可能性も考えることができる。

賀茂宮 (社) の想定 第1節2でも述べたが、鴨山丘陵にはかつて賀茂宮 (社) が存在していたと考えられている (森町史編さん室ほか1999、大隈1997)。賀茂宮 (社) に関連する資料としては、第69回にある鯛口二例をあげることができ、銘文・形態等から15世紀のものと考えられる (足立ほか1973・1974a・1974b)。当時 (15世紀) の飯田荘は、山内氏一族によって分割領有されていたとされている。この銘文からは、戸和田郷を領有していた藤原氏が、賀茂宮を再建し、大檀那・勧請主となっていたことがわかる。すなわち、15世紀において戸和田郷に賀茂宮 (社) が鎮座していたことがわかる。



第69回 賀茂宮 (社) 関連の鯛口二例

飯田荘は、12世紀に三代（白河・後鳥羽・後白河の三代上皇）御起請地として成立し、皇室領荘園として続いたことがわかっている。鎌倉時代には地頭を設置、山内首藤氏が補任している。15世紀においては、鯉口銘でわかるように藤原氏が飯田荘戸和郷を統治していた。この藤原氏は、山内首藤氏の系譜をひく武士身分である一方、在地領主の性格が強いものと考えられている（足立ほか1974a・1974b、大隈1997）。

賀茂社（加茂神社）は全国各地に存在するが、山城国の賀茂神社（賀茂別雷神社・賀茂御祖社）をその中心とする。その神官であった賀茂氏は、古代より皇室との関係が深く、各地に所領（荘園）をもっていたようである。「賀茂」が名に付く郷・村は各地に多く、現在も名残をみることができる。飯田荘においては、13世紀の史料から加保村が存在していたことがわかっている。「加保」は「賀茂」によるものと考えられ、賀茂社の神領との関連性をもつ地域であったと考えられる。さらに、現在の地名である「鴨谷」や「鴨岡」、本道跡名の「鴨ノ前」や本道跡西側の丘陵にあたる「鴨山」、これらの「鴨」は「加保」が音韻変換したものと推定されている（足立ほか1973・1974b）。

一方、平安時代には小園神社（森町一宮所在）を中心とした遠江の国神祀りも確立され、「都うつし」が推進されたとされている。そして、都を模倣した文化流入や都市づくりの中で、太田川を都の加茂（鴨）川に見立て、加茂三社を配置したということもいわれている（森町史編さん室他1999）。

本道跡より1km弱北東にある丘陵に加茂神社（写真10）が現存しており、そこに賀茂宮（社）が比定できるとされている。一方、本道跡西側の鴨山丘陵、その東斜面中腹に平坦部があり、先述した地名や位置等を根拠として、本来はそこにも賀茂宮（社）を配置していたとも考えられている（森町史編さん室他1999）。

調査成果と賀茂宮（社） 今回の調査範囲は、鴨山丘陵の賀茂宮（社）推定地から北東に下がった丘陵裾部にあたる。鎌倉時代（13世紀代）の小穴列（堀等）は、等高線に平行もしくは直行するように抽出されている。また、いくつかの小穴列（SA06・07・04とSA09）は平行している。以上のような小穴列から、丘陵中腹に賀茂宮（社）があったとするならば、宮（社）域の丘陵と谷平野との境界、もしくは宮（社）と谷部をつなぐ通路として堀等の施設があったと考えることができる。ただし、大きく強固な柱は想定し難い。いずれの施設であったとしても、簡易的なものであったと考えられる。

小穴列と併存していたものとして、廃棄場所となったSX03をあげるができる。ここの出土遺物群は、奥戸縮遺跡（第3章）の集落遺物群とは異なり、土師質土器（とくに鍋甕類）がない。通常の生活空間とは異なる場面で使用された器物の廃棄、もしくは通常生活からの廃棄ではあるが、何らかの意味をもって廃棄物が限定されたとも考えることもできる。本道跡からの出土遺物量は決して多くはなく、遺跡の性格や廃棄の背景は復元・特定し難い。しかし、本当に賀茂宮（社）があったとするならば、それを意識した廃棄があった可能性も考えることができる。

以上、平安時代末から鎌倉時代（12～13世紀）における鴨ノ前遺跡については、堀等や廃棄場所といった施設が想定できる。そして、本当に賀茂宮（社）が丘陵中腹に鎮座していたのであれば、それと関連する施設であったとも考えられる。ただし、堀があくまで小穴の列から抽出したものであること、賀茂宮の存在そのものが考古学的には立証できていないこと等から、確かな復元であるとはいえない。



写真10 現存する南戸郷の加茂神社

現地調査および本報告の作成に当たっては、次の方々に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

伊藤美鈴 北島忠介 佐藤由紀男 柴田 稔 清水 尚 鈴木一有 竹内直文 廣川達麻 本田祐二 松井一明

参 考 文 献

- 足立順司 1998 「古代末期の地方経路—森町における二例—」『森町史』資料編一考古 森町
- 足立順司・西尾昭功 1973 「遠江飯田庄加茂社銘の罫口二例(上)」『森町考古』5・6 森町考古学研究会
- 足立順司・西尾昭功 1974a 「遠江飯田庄加茂社銘の罫口二例(中)」『森町考古』7 森町考古学研究会
- 足立順司・西尾昭功 1974b 「遠江飯田庄加茂社銘の罫口二例(下)」『森町考古』8 森町考古学研究会
- 伊藤美鈴 1998 「150 ツボノヤ遺跡」「165 観音堂中世墓」『森町史』資料編一考古 森町
- 岩本 貴 1995 「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論文集』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大隅信好 1997 「第3編 第5章 在地領主層とその城館」『森町史』通史編上巻 森町
- 大橋保夫 1998 「148 藤原山遺跡」『森町史』資料編一考古 森町
- 小野正敏 2000 「遠江の出土陶磁器組成の特徴—貿易陶磁を中心に」『横地城跡 総合調査報告書 資料編』菊川町教育委員会
- 菊川町教育委員会 2000 「横地城跡 総合調査報告書 資料編」
- 後藤建一 1989 「湖西古窯群の須志器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)』静岡県教育委員会
- 佐藤由紀男 1996 「遠江・駿河(中期)「YAY!」弥生土器を語る会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990 「原川遺跡II」
- 2001a 「富士川S A関連遺跡 遺構編」
- 2001b 「矢崎遺跡II」
- 鈴木敏則 1996 「遠江・駿河(後期)「YAY!」弥生土器を語る会
- 2001 「湖西古窯群時代須志器編年の再構築」第1回東海土器研究会『須志器生産の出現から消滅』東海土器研究会
- 養 元洋 1997 「古代遠江の食器具」『静岡県考古学研究』29 静岡県考古学会
- 2000 「古代湖西窯編年の再構築」第1回東海土器研究会『須志器生産の出現から消滅』東海土器研究会
- 日本窯器製造株式会社 1979 「観音堂横穴古墳群」
- 廣川達麻 1998 「171 坂田北道跡」「143 逆井遺跡」『森町史』資料編一考古 森町
- 袋井市教育委員会 1985 「坂尻遺跡(一般国道1号線袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書)
- 1995 「坂尻遺跡(大和ハウス工業㈱中部工場内埋蔵文化財発掘調査報告書)
- 富士川町教育委員会 1999 「破魔射場遺跡」
- 松井一明 1980 「宮川古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須志器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)』静岡県教育委員会
- 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
- 森町教育委員会 1996 「静岡県森町 飯田の遺跡」
- 森町史編さん委員会 1994 「森町史」資料編二古代・中世 森町
- 森町史編さん室・社会教育課文化振興係 1999 「図説 森町史」森町
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

第6章 鴨山古墳群・鴨山遺跡

第二東名No.111地点



第1節 位置と環境

1. 位置と地理的環境

鴨山古墳群・鴨山遺跡は森町の南東部、太田川東岸の森町睦実字鴨山2306-1他に位置する。森町における太田川東岸には、丘陵地が広がり、広い平野部は存在していない。その中で、睦実の地域には大きな谷部が存在している。この谷は、太田川流域から北東方向と東方向の二手に分かれてのびている。

睦実の谷の北側丘陵は、北東の山地からのびてきたものである。この丘陵は、睦実の谷と太田川に挟まれており、南西に向かって細くなっていく。さらに、細くのびた丘陵の最先端（南西）では、南北に細長い独立丘陵状の地形が存在している（以下、鴨山丘陵）。本古墳群・遺跡は、この独立丘陵の上に立地している。

丘陵は、東斜面を中心に、広く茶畑に使用されていた。植林区域もあるが、調査対象範囲内においては、丘陵頂上筋に細長く存在していただけである。また、西斜面は太田川の侵食によって崖になっており、雑木林になっていた。古墳群・遺跡は丘陵尾根上に立地し、標高約49～69m、下の水田面からの比高約14～34mの部分にあたる。遺跡からの眺望は、西方向は太田川とそのさらに南西に広がる平野部を望むことが出来る。一方、東方向には睦実の谷と谷を挟んだ東側の丘陵が見渡せる。

2. 歴史的環境と調査歴

鴨山丘陵上には古墳群が立地し、3基の古墳が周知されていた。しかし、調査されたことはなかった。周辺丘陵上には、古墳時代後期の逆井京塚古墳や前ノ山古墳群等が分布している。とくに逆井京塚古墳は土取りに伴って鏡や馬具等が採集されており、豊富な副葬品を持つ6世紀前半代の古墳として注目されている（伊藤1998）。一方、弥生時代の遺跡もいくつか知られている。藤重山遺跡では、弥生時代後期の大型甕などの土器が採集されており、土器棺墓の存在する墓域であると推定されている（大橋1998）。逆井遺跡では、縄文～中世の遺物が採集されている（廣川1998）。本遺跡と谷を挟んだ西側丘陵の裾部には、大型始刃石斧が発見された堀ノ内遺跡が立地する。ただし、発掘調査された遺跡は少ない。なお、古代以降については鴨ノ前遺跡の報告（第5章）を参照していただきたい。



第70図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

本調査を実施した区域は、第71区のおり丘陵北半の頂上筋で、現況での標高約51～55mの部分である。本来の遺跡範囲は、丘陵頂上筋から東斜面に広がっていたと想定することができる。しかし、確認調査によって丘陵東斜面の全域が攪乱されていることがわかっている。よって、遺跡が存在していたとしても既に失われている。また、頂上筋の一部でも大きな攪乱がおよんだ部分があった。以上から、丘陵頂上筋に細長い調査区、しかも攪乱によって東西に分割された調査区（Ⅰ区とⅡ区）を設定することになった。なお、丘陵の南半部、今回の本調査区より南に続く丘陵頂上筋にも古墳・遺跡の範囲が広がる。しかし、確認調査を含めて今回の対象範囲の外になっている。

調査は、発掘器材搬入と調査区設定の後、重機で表土除去を行った。作業員等は確認調査のものを引き継いだ。表土除去の後、掘削および遺構平面プランの検出、さらに遺構検出を人力で行った。遺構検出は、断面による覆土の観察・注記、必要な記録の後、全体の検出を行った。

遺構調査は、まず座標に合わせた10m方眼のグリッドを設定し、グリッド杭設置を第二東名建設用の杭を使用して行った。遺構番号は、全てに対して遺構種類別に付した。遺物は、遺構内出土は遺構ごと、遺構外出土はグリッドごとに取上げた。なお、遺構外遺物はⅠ・Ⅱ区間の攪乱からの出土遺物しかない。

現地の記録図面は、地形測量を1/100、遺構図を1/20を基本とし、設定したグリッドに沿って作成した。遺構・景観などの現地記録写真の撮影は、6×7版（モノクロ）と35mm判（カラーリバーサル）を用いて行い、作業工程撮影用に35mm判（カラーネガ）を使用した。

2. 発掘調査の経過

平成11年12月1日、発掘調査を開始した。

12月1日に調査区の設定と重機による表土除去、2日に器材等の準備を行った。続いて、3～14日に人力掘削と遺構面の検出、平面的な遺構プランの検出、基準杭の設置を行った。その後、遺構の検出、精査を随時行なった。さらに、遺物の取上げと実測等記録作業も22日までに行なった。

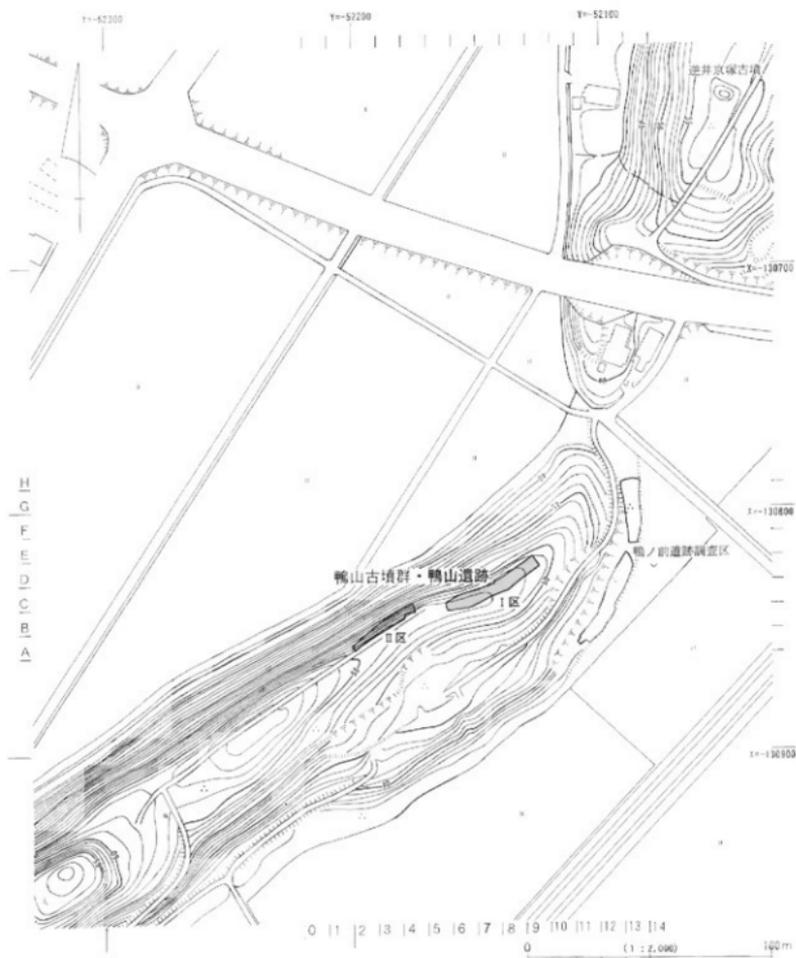
12月23日～平成12年1月5日は年越しのために作業を中断し、1月6日～11日に調査区全景の撮影、実測作業を行った。1月11日に現地作業を終了した。

3. 資料整理と報告書作成

本遺跡の資料整理作業および報告書作成作業は、平成13年4月から本書掲載中の他遺跡と同時に実施した。また、他の調査との重複期間があったため、断片的に作業を実施していくことになった。

現地調査終了直後の基礎整理で、土器の洗浄・注記・接合・復元、図面・写真・遺物の台帳の作成を実施していた。資料整理では、遺構図の修正作業から開始し、遺物の実測作業、遺構図・遺物図の編

集・トレース作業、遺物の写真撮影、報告の執筆を行なった。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物写真撮影は、4×5判（白黒ネガ・リバーサル）、6×7判（白黒ネガ・リバーサル）、35mm判（リバーサル）を用いて、当研究所写真室が実施した。また金属製品のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。



第71図 本調査範囲とグリッド配置

第3節 調査の成果

1. 概要

(1) 土層および地形

表土と若干の流土等を除去した段階で、遺構検出面となる泥岩層や泥岩礫を多量に含む黄色粘質土層を確認することができた。表土や流土に泥岩礫が多く含まれており、遺構検出面となる泥岩層や黄色粘質土層等は、全体的に荒らされてきたと判断することができる。人為的なものによるのか自然の風化等によるものなのかは判断としないが、調査区内で検出した泥岩層や黄色粘質土層の上面からも、荒らされていることが観察できた。

調査で検出された地形によると、丘陵尾根上の比較的平坦な部分は幅4m前後と狭い。その東側と北側については、確認調査でも把握できているとおり、茶畑等の造成によって大きく削平されている。一方、調査区の西側にも、崖のように急に下がる斜面が認められる。人為的な大きな造成ではなく、むしろ太田川による侵食や地滑り等によるものと考えられる。いずれにしても、遺構はそこでも破壊されており、遺跡形成時の地形は、検出された地形とは若干異なっていたと判断できる。

以上から、本来の地形は調査区の部分を丘陵尾根筋として、西は急斜面、東は徐々に斜面をもって下がる地形を成していたと確認できる。また、丘陵尾根筋の北端部にかけても徐々に下がっていく地形を成す。本来は、調査区の東側や北側の緩斜面部にも遺跡が広がり、西側にも若干広がっていたと判断されるが、現状からでは推測の域を出ない。

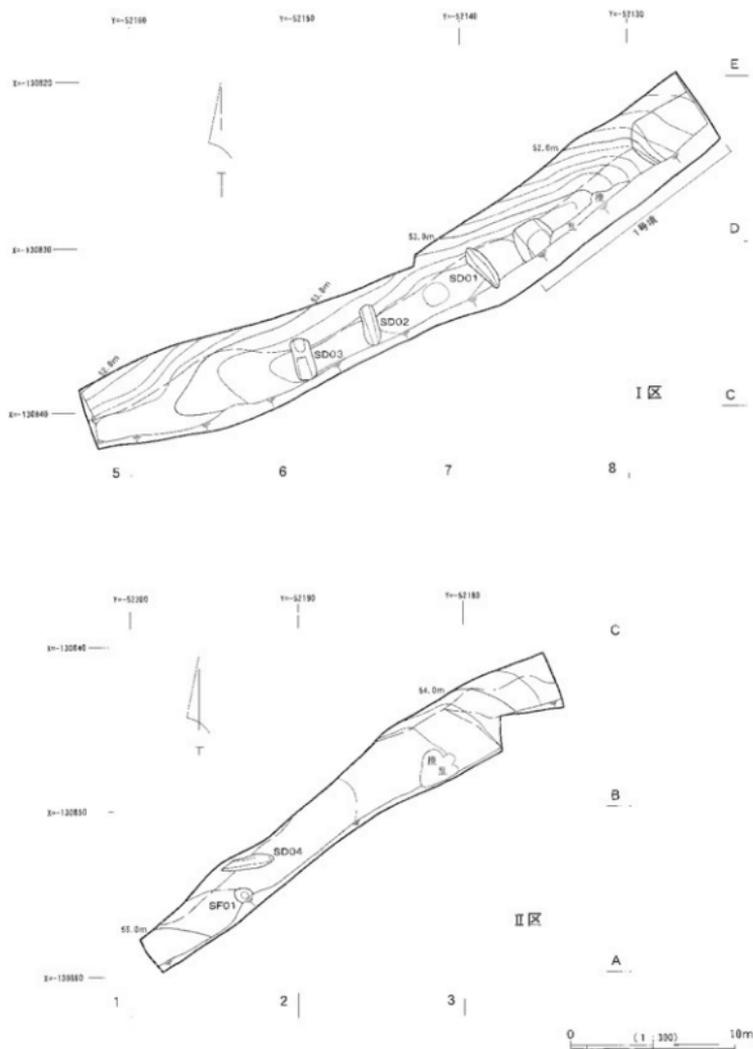
(2) 遺構・遺物の概要

鴨山古墳群については、今回の発掘調査前から周知されており、3基の古墳分布が示されていた。その分布によると、第二東名工事範囲よりも南側に2・3号墳、今回の調査区の北東部に1号墳が位置することになる。明確な墳丘や古墳の埋葬施設は発見できなかったが、1号墳があるとされる部分では、調査区北東端で段状に下がる部分、その約10m南西で溝が検出された。後述する弥生時代の溝状遺構よりも、竇形の形状を呈している。また、出土遺物の一部に古墳時代の土師器と判断できるものがあることから、これらが鴨山1号墳に関連するものであると判断できる。以上から、鴨山1号墳は墳丘が大きく削平され、埋葬施設は消滅していたが、かろうじて周溝の一部が残存していたということになる。なお、I区とII区の間にある攪乱からも土師器等が出土している。

上記の他に、溝状遺構4条と土坑1基が発見されている。SD01からは、弥生時代後期の土器が出土している。遺構の形状と出土遺物、さらに痩せた丘陵尾根上という立地から、周溝墓の溝であると判断できる(1号周溝墓)。他は、近現代の攪乱とは明らかに異なる覆土ではあるが、遺物の出土がなく、時代を特定することも困難である。ただし、SD02は遺構の形状がSD01と類似しており、その位置や溝の方向等からSD01に対応する1号周溝墓の溝であると判断することができる。

遺跡の残存状況が全体的に悪く、検出された遺構は本来の極小部分が残存したものである。完全に消滅した遺構も少なくないと考えられる。I・II区間での土師器等の出土は、その周辺部分にも古墳等があったことを示すものと判断できる。また、SD01から方形周溝墓が存在していたことを述べたが、周

溝墓は数基の群を成して検出される場合が多い。したがって、SD03等も周溝墓の一部分である可能性が考えられる。以上のように、本遺跡は弥生時代の方形周溝墓と古墳が主に展開していた遺跡であると判断することができる。



第72図 遺構配置

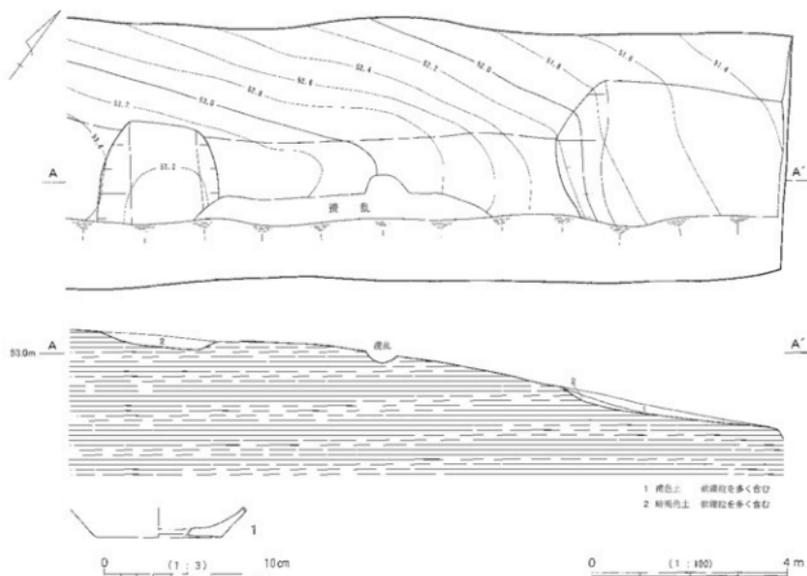
3. 遺構と遺物

(1) 鴨山1号墳

1 位置と立地 (第71・72図)

鴨山古墳群は、静岡県県の『地名表』に1979年から掲載されている。また、1998年刊行の『森町史』にも、本古墳群についての記述がある。『森町史』によると、鴨山古墳群には3基の古墳が分布していることがわかっている。その分布図によると、1号墳が今回の調査区に含まれることがわかる。鴨山1号墳は丘陵頂上部北先端に位置する、直径10m、高さ1mの円墳であるとされ、「すぐ近くに、第2東名道の標識がある。地名表作成のころは、墳丘の一部がミカン畑によって消滅していた。現在は破壊がさらに進行し、主体部に使用されたと考えられる石材が散乱している」と記述されている。

D-9グリッド北西部に地山整形部、D-8グリッド南部の検出面標高約53.4mに溝が検出された。遺跡の破壊が著しく、石材の散乱もなかったことから、古墳とは異なる遺構の可能性も考えることができる。しかし、両遺構間の中央は国家座標 $x = -130.832$ 、 $y = -52134.0$ で、丘陵頂上部の北東端に位置することから、これらの遺構が鴨山1号墳の一部であると判断した。尾根筋において北に下りかけた緩斜面部に立地し、本墳の北は急斜面になる。北西側・南東側も丘陵斜面になり、それほど広い平坦面・緩斜面に築いているというわけではない。



第73図 鴨山1号墳および出土遺物

2 墳丘と外部施設（第73図）

調査前においては、本墳は完全に削平・破壊を受けており、古墳と思われる痕跡は一切観察されなかった。また、調査によっても周溝の一部が検出できただけである。したがって、墳形は円墳か方墳のいずれかであり、特定はできない。円墳とすると直径約8.4mの墳丘で、周溝・整形部を含む全体の規模は直径14.0m以上になる。盛土は残存しておらず、葺石などの施設も検出されなかった。また、埋葬施設についても失われている。

検出された北東の地山整形部は幅約4.4m、南西周溝は幅が最大2.4mで深さは最大0.4mである。地山整形部は削平のために北東端が欠かれている。よって、南西周溝より幅広い周溝であった可能性もある。ただし、地形が北に下がること、南西周溝と比べて幅がかなり広いことから、溝状を呈さない地山整形部によって墳裾を造り出した可能性が高いと判断した。墳裾は北東が標高約51.9m、南西が標高約53.1mであり、丘陵地形に影響されるように北東に下がっている。墳丘側の傾斜は北東が45°前後、南西が35°前後を測る。南西周溝の外側の傾斜は22°前後である。

周溝の覆土は、軟礫を多く含む褐色を基調とした土層であり、自然堆積である。南西周溝の覆土中位から土器片が出土している。

3 埋葬施設（第73図）

墳丘部分の中央で、調査区東側の削平部の縁に長さ6m程の凹みが検出された。調査中は横穴式石室の残存とも考えられた。しかし、覆土は擾乱と変わらないもので、南西周溝とは切り合っていない。積極的に埋葬施設であると判断することは難しい。

4 出土遺物（第73図）

南西周溝から土器片が数点出土している。胎土に砂粒が多く含まれる黄褐色の土器片と、胎土に含まれる砂粒が少ない赤褐色の土器片とがある。後者は古墳時代の土師器であると判断できるが、前者は弥生土器である可能性もある。いずれにしても、覆土中位から出土した小破片であり、遺構の時期を決定することができない。なお、出土遺物に須恵器は含まれていない。

器種・部位が判断できるものは1だけである。1は壺や鉢の底部である。胎土には砂粒を多く含み、周辺の周溝墓等に伴った弥生土器である可能性もある。

5 古墳の時期

南西周溝からの出土遺物には、胎土等から弥生土器とは異なり、古墳時代の土師器と判断できる土器片がある。よって、古墳時代の遺構であると認めることはできる。しかし、出土遺物は小破片だけで、埋葬施設等の情報も得られないことから、詳細な時期を判断することは難しい。

周辺に分布する古墳・古墳群の多くは、古墳時代後期・終末期に築造・展開されたものである。また、遺構外から出土した遺物（第76図9）等を考慮すると、本古墳群も古墳時代後期・終末期を中心に展開しており、本墳の築造時期についても、同様の時期である可能性が高いと考えられる。

本墳の立地する丘陵の南東裾部には、鴨ノ前遺跡（本書第5章）が位置する。そこからも、古墳時代終末期の須恵器（第67図64・65）が少数出土している。鴨ノ前遺跡は平安～鎌倉時代を主体とする遺跡であり、古墳時代に位置付けできる遺構はない。よって、出土須恵器は丘陵の削平や流土・崩落に伴って、本墳から転落した遺物であると考えられることもできる。この考えが妥当であるならば、本墳は古墳時代後期～終末期に築造されたものと判断することができる。

(2) 方形周溝墓

1号周溝墓 (第74図)

残存状況は非常に悪いが、SD01とSD02がその一部であると判断できる。SD01はC-8グリッド北西部、検出面標高約53.6mに位置する。長さ3.0m以上、幅最大1.05m、深さ最大0.35m、長軸N-約38°-Wの溝状遺構である。SD02はC-7グリッド中央、検出面標高約53.6mに位置する。長さ2.5m以上、幅最大1.05m、深さ最大0.3m、長軸N-約18°-Wの溝状遺構である。いずれも泥岩礫を多く含む褐色を基調とした覆土で、自然堆積である。ともに、尾根筋に直行する溝状遺構であり、幅・深さ・断面形態・覆土に大差はない。

周溝墓は丘陵筋にあわせてつくられた、方形に復元できる。検出された2条の溝は、調査区の北西側が急斜面で下がることから、方形周溝墓の中軸よりも北西寄りの部分にあたると思われる。また、2条の溝が平行関係にないのも、北西寄りの部分にあるためと判断できる。

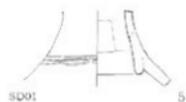
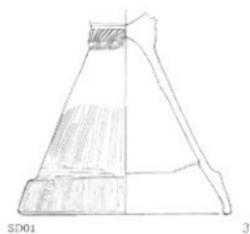
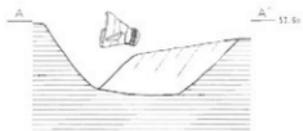
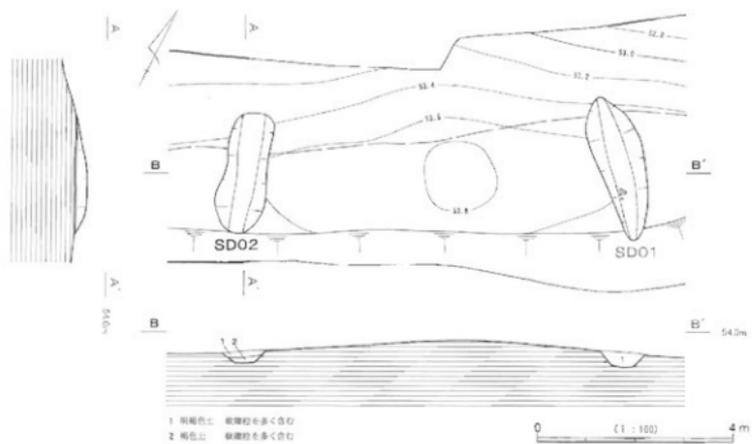
周溝墓の規模は、SD01・SD02の底面中心間で約8mを測る。南東部は明らかに破壊されているが、北西辺の周溝については、本来より丘陵斜面をもって区画としていた可能性も考えることができる。埋葬施設は、方台部やその周囲を含めて発見されていない。また、周溝の底面はほぼ平仄になっており、周溝内の施設も発見されていない。

北東周溝にあたるSD01の上層から、弥生土器が出土している。

遺物 (第74図) 3は図化した部分のほとんどが残っている。7は図化した部分の半分、5は1/3の小破片である。その他については、1/5にも満たない小破片である。

2は、高杯か壺の口縁部である。折り返した口唇部の外面下端には刻みが巡り、口唇部を含めた外面には斜め方向のハケ調整が観察できる。内面の調整は観察できないが、内面に文様が施されていないと判断することはできる。3は、高杯の脚部である。2と3はSD01から近接して出土しており、また胎土等も似ていることから、同一個体である可能性が考えられる。同一個体であるならば、2の口縁部は壺ではなく高杯であると判断できる。3の接合部には、櫛状工具による斜方向の刺突文が2段に巡っている。脚端は外面だけが明確に屈折し、内面においては明瞭な屈折をみることができない。脚部外面は縦方向のハケ調整の後、横方向にミガキを施している。しかし、ミガキは脚端の屈折部の上だけが密に施されており、他では顕著ではない。4は、高杯もしくは壺の口縁部である。折り返した口唇部外面に棒状浮文の貼付が巡るが、小破片であるため、その配置・単位はわからない。外面のハケ調整は観察できる。内面の調整・文様は観察し難いが、内面には文様を施さず、ミガキ調整も施していないと判断でき、高杯の可能性の方が高いと考えることもできる。5は、壺の頸部で、櫛状工具による横方向刺突文が2段に巡る。しかし、その上下に文様をみることはできない。6は壺の底部、7は台付甕の台部接合部である。6の壺は、胎土から5と同一個体である可能性を考えることもできる。

全て弥生時代のもので、壺・高杯の口縁部の折り返し、高杯の脚端にある屈折部の位置と屈折状況、高杯の接合部や壺の頸部～胴部にある文様等から判断すると、概ね後期中葉の菊川様式中段階（鈴木1996、中嶋1988）に比定することができる。



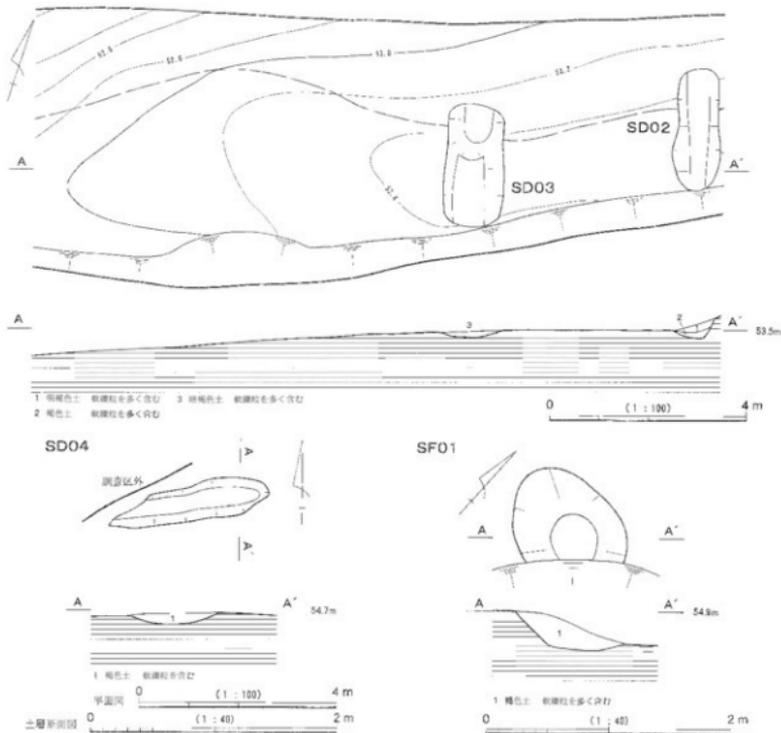
第74図 1号周溝墓および弥生時代の遺物

(3) 溝状遺構・土坑

SD03 (第75図)

C 7グリッド南西部、検出面標高約53.7mに位置する。長さ2.5m以上、幅最大1.2m、長軸N-約16°-Wの溝状遺構である。深さは、南半部では0.12m程、北半部ではさらに0.1m程深くなる。覆土は暗褐色を基調とし、軟礫を多く含む土層の自然堆積である。尾根筋に対して直行する方向にのびる溝状遺構であり、形状・覆土ともSD01やSD02と近似する。したがって、SD01・SD02と同じ弥生時代の周溝墓の溝と考えることもできる。ただし、遺物が全く出土していない。

SD03が弥生時代の周溝墓の溝であるとするならば、その周溝墓は1号周溝墓に並ぶものと判断することができる。さらに、SD03とSD02とが平行関係にあることから、1号周溝墓とSD02を共有し、SD03を南西周溝とする周溝墓を復元することもできる。しかし、そうすると約2.5m四方と極めて小規模な周溝墓になる。一方、SD03を北東周溝とし、南西辺の周溝を含めた大半が消失したと判断することもできる。いずれにしても、可能性があるというだけである。遺跡の残存状況が悪いため、どのような遺構であったのかは特定できない。



第75図 SD03・SD04・SF01

SD04 (第75図)

A-2グリッド北部中央、検出面標高約54.7mに位置する。幅最大0.82m、長さ約3.2m以上を張り、N-約82°-Eの方向を示す。深さは約0.15m、底面標高は約36.6mでほぼ一定である。覆土は軟礫を多く含む褐色土層である。遺物の出土はない。

弥生時代の周溝墓の一部、北辺にあたる周溝である可能性もある。しかし、周辺を含めて出土遺物はなく、時期を確定することもできない。また、丘筋部に対して斜方向にのびており、先述の1号周溝墓とは異なる。以上、弥生時代の周溝墓と判断するには困難な状況が目立つ。

SF01 (第75図)

A-2グリッド中央部の、検出面標高約54.8mに位置する。平面は東西に長軸をもつ楕円形で、長軸1.05m以上、短軸約0.84m、深さ約0.3mである。覆土は周辺の表土や攪乱土とは全く異なり、軟礫を多く含む褐色の自然堆積土である。しかし、出土遺物もなく、遺構の時期・性格は全く不明である。

(4) 遺構外の出土遺物

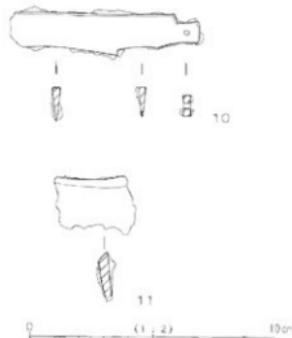
土器 (第74・77図)

確認調査の際に、I・II区間の攪乱部から土器が出土している。弥生土器も少数含まれるが、多くは古墳時代の土師器である。その中でも、甔の破片(第77図9)が多く出土している。他は小破片ばかりの出土であり、図化できたものは1点だけである(第74図8)。

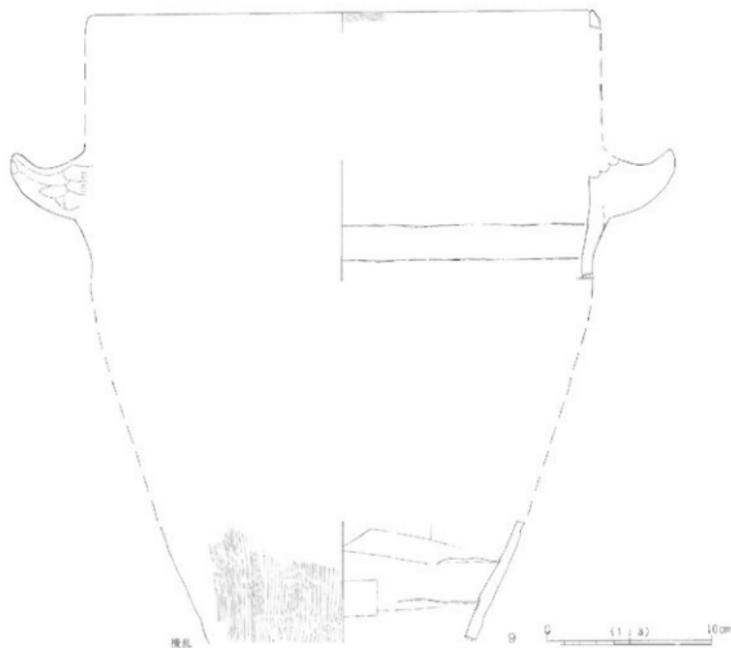
8は、甔の口縁部の小破片である。摩滅のため、口唇部の刻みの有無はわからない。胴部から口縁部へは明確に屈曲しない。外面は胴部にハケ調整が観察できる。内面には、口縁部から胴部に連続するハケ調整が観察できる。9は、土師器の甔である。完全な復元には至らなかったが、第77図のように図化することができた。単純口縁で把手付きの甔A(松井1995)であると復元することができる。ただし、図化したような胴部が張らないで下に窄まる形状ではなく、口縁部まで開く形状を呈する可能性もある。各部位の破片が小さいため、その判断は難しい。以上から、6世紀後半以降(坂尻遺跡の古墳時代土器編年(松井1995)II期-3段階以降)に位置付けることができるが、それ以上に限定することは難しい。

鉄器 (第76図)

本調査で、鉄器2点が出土している。10は、切先部が欠損した刀子である。基部は、端部側と関側で異なる幅と断面形を呈する。端部側の約3分の1は、幅約0.8cmで断面方形を呈するのに対して、関側の約3分の2は、幅広で刃部(身)と同じ断面を呈する。11の鉄器片については、何の破片か判断し難い。10・11とも、II区の北西端部の攪乱土中からの出土である。I・II区間の攪乱と近い場所であり、関連するものと判断することもできる。すなわち、古墳時代の鴨山古墳群に伴う遺物である可能性も考えることができる。



第76図 攪乱出土鉄器



第77図 攪乱出土土師器

第23表 遺物観察表 (土器)

番号	採回 番号	図版 番号	遺構 層位	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	器径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	焼成	色調	備考
1	73	32	1号墳	土師器	壺	底部	17				(7.6)	良好	外面:黄褐色 内面:明褐色	
2	74	32	SD01	弥生土器	高杯	口縁部	5		(20.0)			良好	外面:橙褐色 内面:橙褐色	
3	74	32	SD01	弥生土器	高杯	脚部	90			12.9		良好	黄褐色	
4	74	32	SD01	弥生土器	壺	口縁部	5		(18.0)			良好	暗黄褐色	
5	74	32	SD01	弥生土器	壺	頸部	30					良好	黄褐色	
6	74	32	SD01	弥生土器	壺	底部	15				(7.2)	良好	黄褐色	
7	74	32	SD01	弥生土器	合付甕	接合部	50					良好	外面:橙褐色 内面:暗黄褐色	
8	74	32	攪乱	弥生土器 か土師器	甕	口縁部	5		(15.7)			良好	外面:茶褐色 内面:暗黄褐色	
9	77	32	攪乱	土師器	甗	口縁~ 頸部	5		(32.0)	(30.0)		良好	外面:橙褐色 内面:橙褐色	

第24表 遺物観察表 (鉄器)

番号	採回 番号	図版 番号	遺構 層位	種別	器種	部位	残存率 (%)	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考
10	76	32	攪乱	鉄器	刀子	茎~刃部	70	7.5以上	刃部1.7	12.82	
11	76	32	攪乱	鉄器	不明			3.1以上	2.4以上	7.94	

第4節 まとめ

今回の調査で発見された遺構・遺物は、弥生時代と古墳時代に分けられる。ただし、いずれの時代においても、得られた情報があまりにも少ない。周辺遺跡を含めた詳細な検討も必要であろうが、今回は調査成果を確認するに留めることにする。

1 鴨山遺跡の弥生時代墓域

弥生時代に関しては、周溝墓の一部と考えられる溝状遺構が発見された（1号周溝墓のSD01・SD02）。遺跡はやせた尾根上に立地しており、少なくとも居住域・生産域であった根拠は見当たらない。1号周溝墓の他にも、SD03・SD04といった溝状遺構が散在して検出できており、本来は数基の周溝墓が並ぶ墓域であった可能性が考えられる。ただし、遺跡の残存状況が悪く、具体的にどれほどの墓が展開したのかは判断できない。

1号周溝墓からは、弥生時代後期中葉の土器が出土している。北側の丘陵上に立地する逆井遺跡でも、縄文時代の遺物とともに弥生時代後期の土器が採取されている。さらに、逆井遺跡より東の丘陵尾根に立地する藤重山遺跡では、弥生時代後期後半の土器が採取されており、土器棺を含む墓域であった可能性が考えられる。このように、本遺跡の周辺を含めた丘陵上には、弥生時代後期の遺跡が多く展開していることがわかり、その多くが墓域であったと考えられる。

一方、鴨山丘陵の東裾に立地する鴨ノ前遺跡では、弥生時代中期後半の土器棺墓が発見されている。鴨山遺跡の周溝墓と鴨ノ前遺跡の土器棺墓は、墓域の変化としてみることもできる。また、丘陵上の周溝墓と丘陵裾の土器棺墓という関係が、当時の集団構造を反映したものであるとみることできる。どちらが妥当な評価であるのかは、今回の調査（本章の鴨山遺跡および第5章の鴨ノ前遺跡）だけでは判断できない。ただ、いずれにしても両遺跡間の相違は注目されるところである。

なお、周辺の居住域の遺跡としては、南東の飯田丘陵上に立地する西平子遺跡・東平子遺跡が知られている。また、その丘陵の北裾に位置する畑ノ内遺跡では、太型蛤刃石斧が採取されており、居住域が展開している可能性も考えられる。前者は後期後半～古墳時代前期の遺跡、後者はより古い時代の遺物であると判断できる。墓域だけでなく、居住域についても時期もしくは性格によって立地を異にしている可能性を指摘することができる。

2 鴨山古墳群について

古墳群の構成 鴨山丘陵には、以前より3基の古墳が知られていた。今回の調査では、残りの悪い状態で1号墳が検出された。墳丘直径約8.4mの円墳もしくは方墳であるが、墳丘は大きく削平され、それ以上の情報は無い。埋葬施設も残っていない。一方、2・3号墳は調査対象範囲外になる丘陵南東部に位置し、直径13～15m程の円墳であるとされている（大橋1998）。

I・II区間～II区北東部からは、甕と刀子が出土している。攪乱からの出土ではあるが、遺跡の地形や他の発見遺構・遺物を考慮するならば、古墳群に伴った遺物である可能性が高い。また、攪乱が茶畑のための造成によるものならば、多量な土砂移動を伴ってはいないと考えられる。したがって、1～3号墳とは別の古墳もしくは古墳群に伴う何らかの施設が、I・II区間周辺に存在した可能性が考えられる。ただし、そこに古墳があったとしても、茶畑等の造成によって消滅した点を考えると、それほど大きな規模は望めない。

以上のように、本古墳群は小形墳を主とした構成の古墳群であると考えられる。

古墳群の時期 1号墳は、伴う出土遺物が土師器の小片だけであり、詳細な築造時期を特定することはできない。しかし、I・II区間～II区北東部から出土した甕や、本古墳群から転落してきたと考えられる鴨ノ前遺跡出土須恵器から、本古墳群の概ねの展開時期を判断することができる。前者は6世紀後半以降、後者は7～8世紀代の遺物であると判断される。したがって、本古墳群は6世紀後半代～8世紀に展開した古墳群であると考えられることができる。

本古墳群の北の丘陵上には、逆井京塚古墳が位置する。6世紀前半～中葉に築造された、単独的に立地する墳丘直径約20mの円墳である。発掘調査は行なわれていないが、鏡・馬鐸・鈴杵・鹿角装刀子・銅鏝・玉類といった豊富な副葬品が出土、墳丘・副葬品から陸奥飯田地区の最上位階層に位置付けられる(伊藤1998)。本古墳群は、この逆井京塚古墳の築造後に形成されはじめたことになる。

古墳群の特徴 本古墳群に、逆井京塚古墳のような地域の最上位階層にある古墳は認められない。

周辺地域においては、6世紀後半以降に多くの古墳群(群集墳)・横穴群が展開しはじめる。7世紀代にかけて古墳・横穴墓が多く築造され、8世紀前半には終焉を迎える。古墳群の場合、墳丘直径15m以下の小型墳が多くを占める。本古墳群も、時期や墳丘規模等から同様の古墳群であると評価できる。

しかし、本古墳群は数十基が密集するような群集墳ではない。数十の古墳築造が困難な地形である点も起因しているであろうが、横穴墓が群集して展開する地域にあることも関連すると考えられる(田村他2001)。また、本古墳群からは、古墳出土例が少ない甕が出土している。随伴品とは異なる社会的もしくは文化的側面において、本古墳群の形成背景やその特徴を甕の出土からみることができるとも考えられる。ただし、本古墳群は残存状況が非常に悪く、詳細な検討を行なうには、得られた情報が少なすぎる。よって、以上をもってまとめとする。

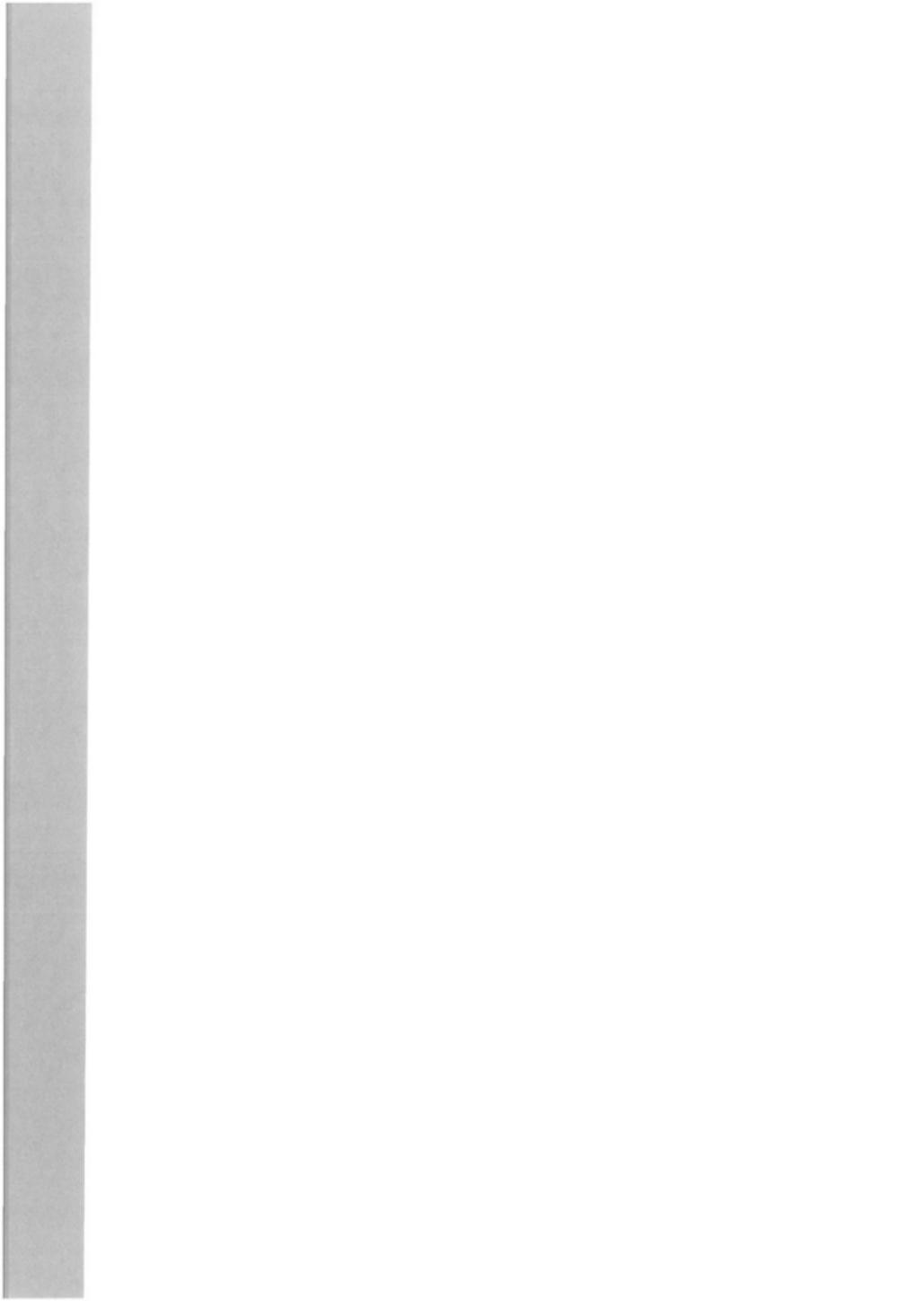
現地調査および本報告の作成に当たっては、次の方々に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

伊藤美鈴 北島恵介 柴田 稔 鈴木 有 竹内直文 廣川達麻 松井一明

参 考 文 献

- 伊藤美鈴 1998 「144 逆井京塚古墳」『森町史』資料編一考古 森町
岩本 貴 1995 「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論文集』静岡県埋蔵文化財調査研究所
大橋保夫 1998 「145 鴨山古墳群」『148 藤重山遺跡』『森町史』資料編一考古 森町
鈴木敏嗣 1996 「遠江・駿河(後期)『YAY!』 弥生土器を語る会
田村隆太郎・鈴木一有・大谷宏治・井口智博 2001 「長福寺1号墳の研究」『静岡県考古学研究会』33
中島朝夫 1988 「いわゆる『菊川式』と『飯田式』の再検討」『転機』2号
(財)浜松市文化協会 1986 「74ヶ池古墳群」
廣川達麻 1998 「143 逆井遺跡」『森町史』資料編一考古 森町
松井一明 1995 「古墳時代後半期の土器編年」『坂尻遺跡』(大和ハウス工業㈱中部工場埋蔵文化財発掘調査報告書) 袋井市教育委員会
森町教育委員会 1996 「静岡県森町 飯田の遺跡」
森町史編さん委員会 1998 『森町史』資料編一考古 森町
森町史編さん室・社会教育課文化振興係 1999 『伝説 森町史』 森町

図 版





1 北西からの遠景



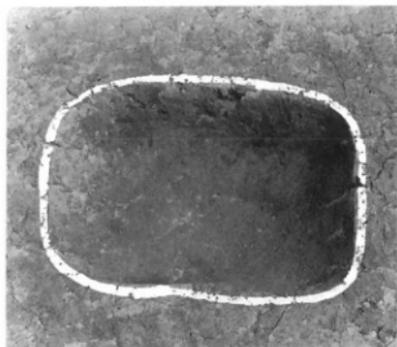
2 1区全景（西から）



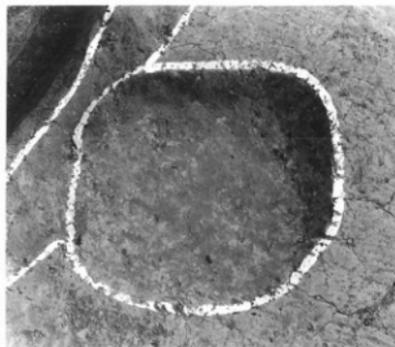
1 II区全景（東から）



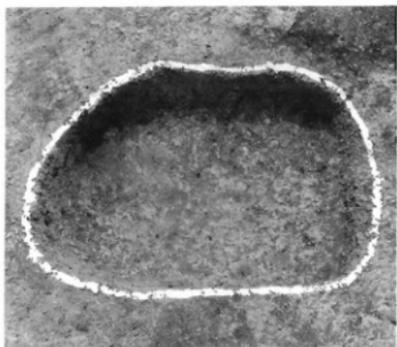
2 SF08・SF09遺物出土状況（北東から）



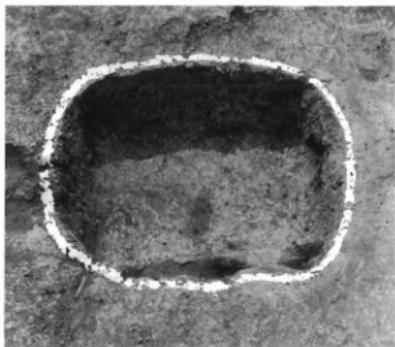
1 SF 01 (北から)



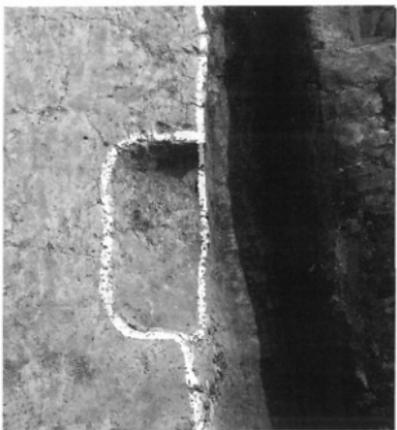
2 SF 02 (東から)



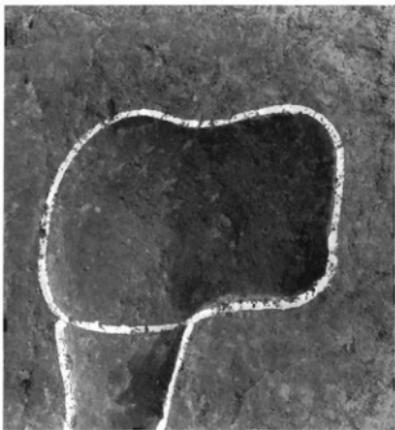
3 SF 03 (東から)



4 SF 05 (東から)



5 SF 04 (北東から)



6 SF 06 (東から)



SF09出土 碗

1



I区表採 壺

2



I区出土 かわらけ

3



I区出土 摺鉢

4



1 調査区全景（北西から）



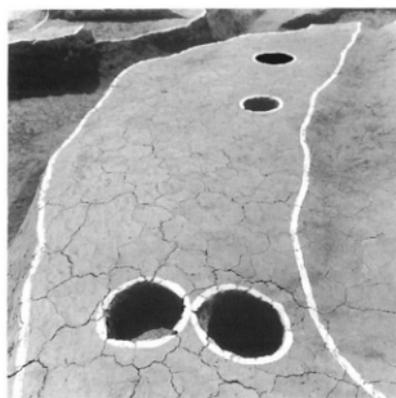
2 調査区北西部土層断面



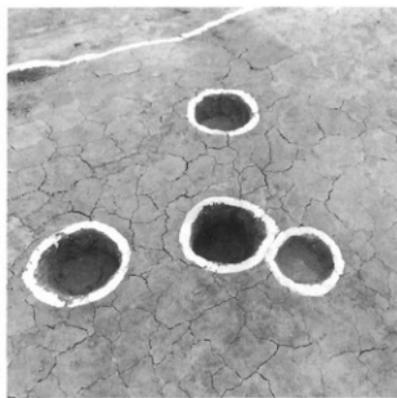
3 杭列（西から）



1 SR01~SR14 (南西から)



2 SP02~SP05 (南東から)



3 SP06~SP09 (東から)



1 SR01 遺物出土状況 (東から)



2 SR02 遺物出土状況 (北から)



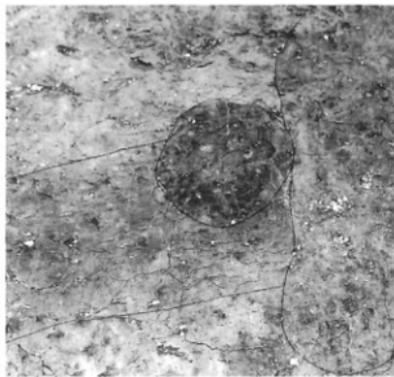
3 SR01 (東から)



4 SR02・SR03 (北西から)



5 SR15 (北西から)



6 SR08→SP01の切り合い関係



主要出土遺物



灰釉陶器・山菜碗（碗）- 1



9



12



16



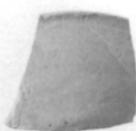
85



7



8



10



78



79



80



14



69



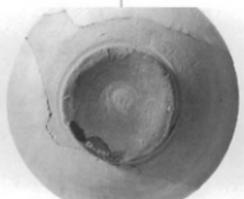
44



22



24



23



25

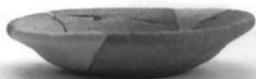


48

山茶碗 (小碗)



13

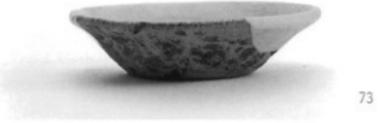


50



51

山茶碗 (墨書)

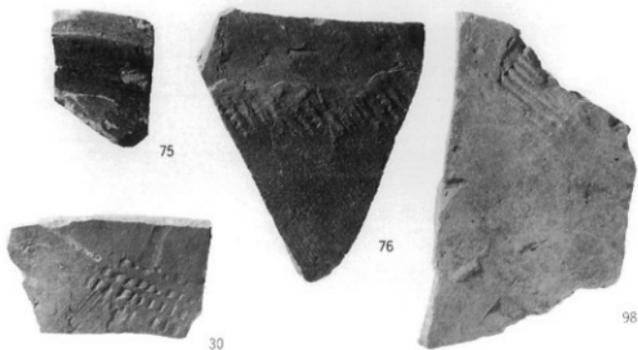


山茶碗 (小皿)

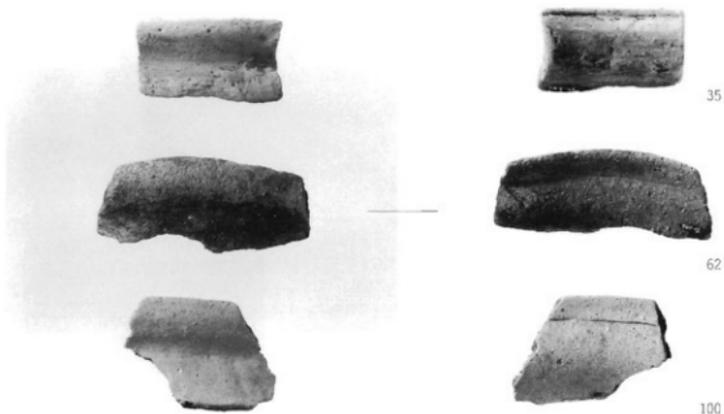


97

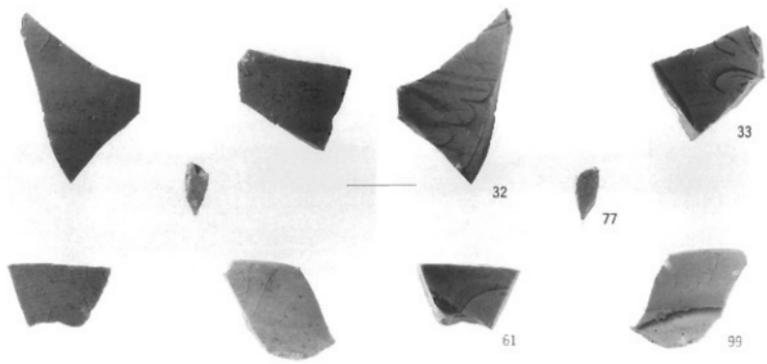
大平鉢



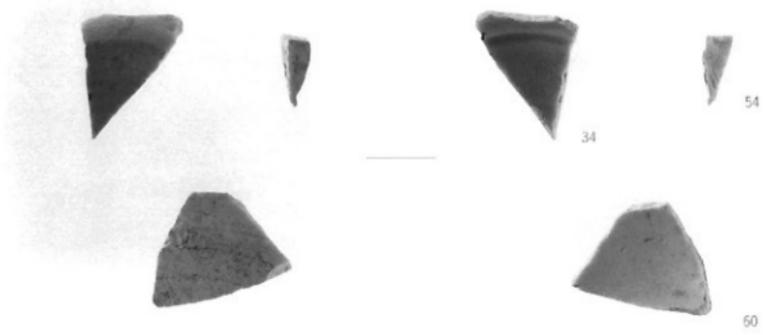
瀬美産陶器



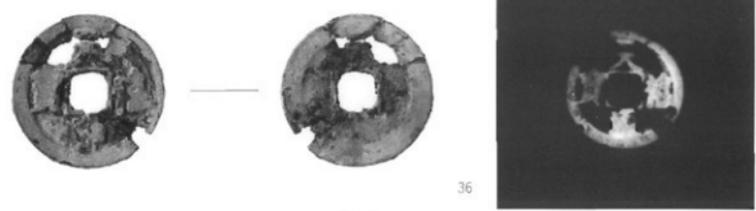
伊勢型鍋



青磁



白磁



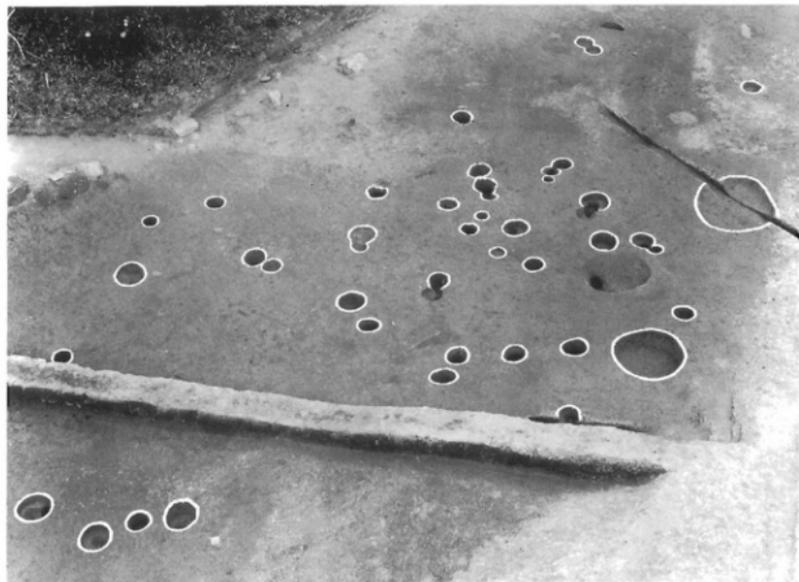
銅銭



1 北西からの遠景



2 調査区全景（北から）



1 小穴・土坑群 (北から)

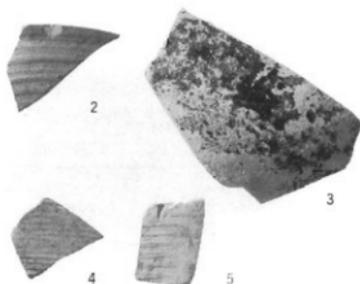


2 SR01 (北西から)



1

SP 2 3 出土遺物



2

3

4

5

SR 0 1 出土遺物



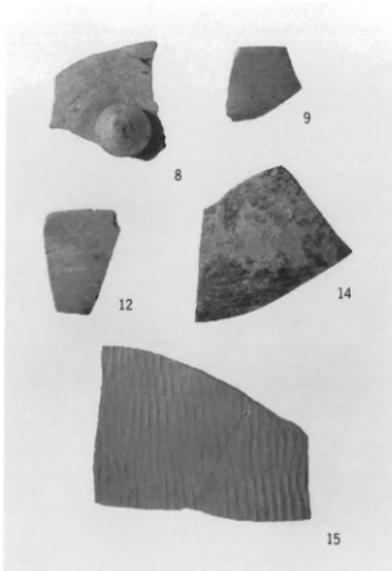
6



7



11



9

8

12

14

15

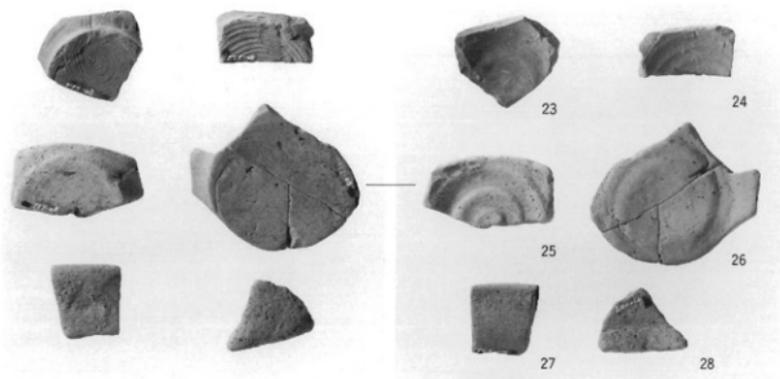
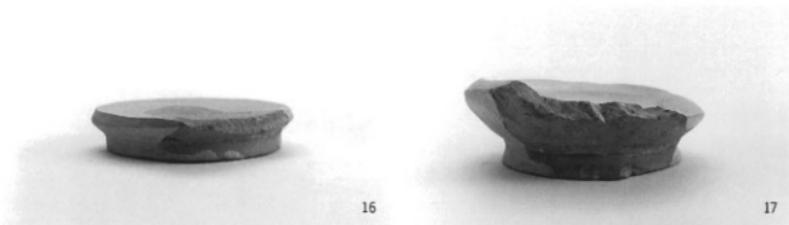


10



13

包含層出土遺物-1





1 東からの遠景



2 I区全景（北東から）



1 II区全景 (北東から)



2 SF 05 土器棺蓋検出状況 (南東横から)



3 SF 05 土器棺蓋検出状況 (南東上から)



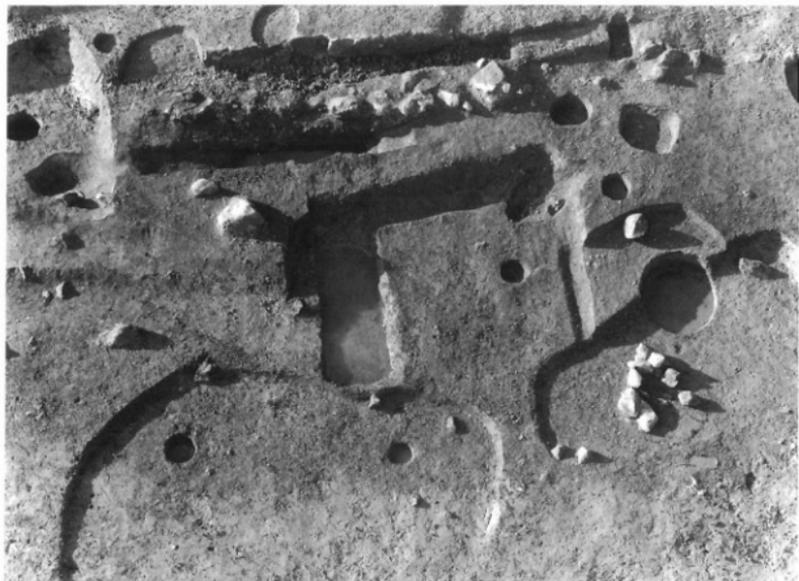
1 整穴住居跡群 (南東から)



2 SB01～SB03 (南東から)



3 SB02 踏石組 (東から)



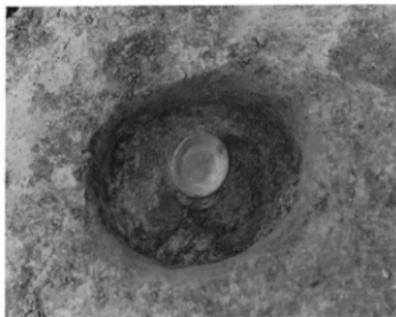
1 SB04・SB05 (南東から)



2 SB06 (東から)



1 II区南半部小穴群 (北東から)



2 SP 4 4 遺物出土状況 (南東から)



3 SP 9 3 遺物出土状況 (南西から)



1



S F 0 5 土器棺 (蓋)



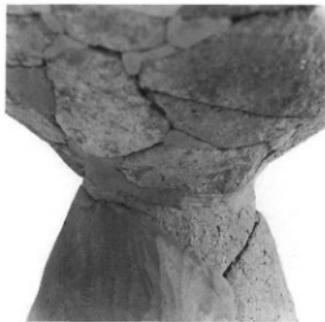
S F 0 5 出土土器片

3



2

SF05土器棺(身)



台付継接合部



包含層出土遺物

6

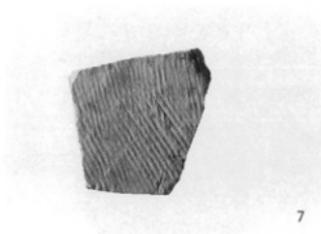


4

SD02出土土器片



8



7



9



10



11

竪穴住居跡出土遺物



12



13

14



15



16

小穴出土遺物



22



23



29



28

S X 0 3 出土遺物



36



39

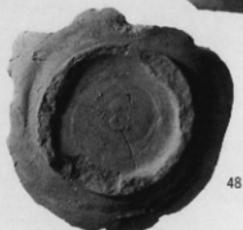


52



56

包含層出土遺物-1





1 北東上空からの遠景



2 北東からの遠景



1 調査区全景（東から）



2 I区全景（南西から）



3 II区全景（南西から）



1 1号溝 (南西から)



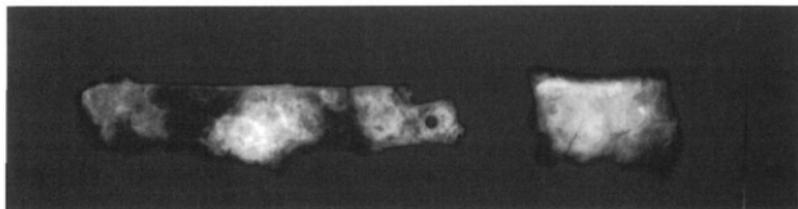
2 1号周溝墓 (南西から)



3 SD01遺物出土状況 (東から)



4 SD01遺物出土状況 (北西から)



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	もりまちむつみのいせき							
書名	森町陸奥の遺跡							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	森町-1							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第150集							
編著者名	及川 司 田村隆太郎							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261 (代)							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界緯地系)	東経 (世界経地系)	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
善正庵遺跡	静岡県 周智郡 森町 善正庵	22461		34° 49' 30"	137° 56' 24"	20000413 ～ 20000530	1,380㎡	第二東名建設事業
奥戸竈遺跡	同上 (字奥戸竈)	22461		34° 49' 26"	137° 56' 26"	20000529 ～ 20000810	770㎡	
戸崎殿ノ谷遺跡	同上 (字殿ノ谷)	22461		34° 49' 22"	137° 56' 11"	20010110 ～ 20010302	400㎡	
鴨ノ前遺跡	同上 (字鴨ノ前)	22461		34° 49' 20"	137° 55' 38"	20000113 ～ 20000204	700㎡	
鴨山古墳群 ・鴨山遺跡	同上 (字鴨山)	22461	112	34° 49' 20"	137° 55' 36"	19991201 ～ 20000111	270㎡	
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
善正庵遺跡	墓域	平安時代後期	溝状遺構5条 小穴4基 土坑9基	灰釉陶器1 かわらけ1	陶器壺1 鉢鉢1		丘陵上の平安時代の墓域	
奥戸竈遺跡	集落	江戸時代以降	板列	天目茶碗1			丘陵裾に立地する集落遺物群の出土地	
		平安時代後期 ～鎌倉時代	小穴9基 自然流路15条	山茶碗82(黒書3) 壺4 青磁5 白磁3 銅銭1 土師質土器3				
	散布地	弥生時代後期		灰釉陶器1 弥生土器1				
戸崎殿ノ谷遺跡	集落	奈良時代 その他・時期不明	自然流路1条 小穴45基 土坑2基	須恵器14 鉢1 碗1 徳利1 襦袢1 不明陶器1 山茶碗1 青磁1 かわらけ4 土師器3			谷奥立地の遺跡	
鴨ノ前遺跡	集落	平安時代後期	竪穴住居跡6軒	灰釉陶器2 須恵器4 土師器1			丘陵裾の小規模集落	
	集落	平安時代末 ～鎌倉時代	小穴100基	山茶碗51 白磁1			丘陵裾にめぐる柱穴列	
鴨山古墳群・鴨山遺跡	古墳	古墳時代	古墳1基	土師器2 鉄器2			覆せた丘陵上の墓域	
	墓域	弥生時代後期	周溝墓1～2基	弥生土器7				

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第150集

森町睦実の遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町 1

平成16年3月31日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422 8002 静岡県静岡市谷田23 20

TEL (054)262-4261 (代)

FAX (054)262-4266

印刷所 ㊤書印刷株式会社

静岡県静岡市南町6-1

TEL (054)283-7611